

---

# **ファイアーエムブレム ~テリウス動乱記~**

D . ナイト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファイアーエムブレム～テリウス動乱記～

### 【Zコード】

Z8955Q

### 【作者名】

D・ナイト

### 【あらすじ】

女神に愛されし大陸、テリウス。

この大地には、神に近い姿をした「ベオク」と、神と獣の境の姿をした「ラグズ」という、異なる2つの種族が暮らしていた。鉄の武器と英知をもつて戦う「ベオク」と、自らの姿を獣に化身させて戦う「ラグズ」。彼らは、決してお互いを認め合うことができない。

彼らは長い年月、抗争と和解を繰り返しつつも、現在は比較的穏やかな時代を迎えていた。

だが、人々の知らない所で、動乱の影が忍び寄っていた。

( この小説とは別に、「蒼炎のもとに～戦いの記録～」という小説を書いています。そちらの方は小説ではなく、この「テリウス動乱記」の登場キャラクター やアイテムなどの紹介をしていて、ゲーム設定に加え、オリジナル設定も入っていますが・・・もしよろしければ、このお話のお供にどうぞです^ ^ )

## 追憶（前書き）

大人気SRPG「ファイアーエムブレム」の、「蒼炎の軌跡」「暁の女神」のストーリーに、オリジナル要素を加えた二次創作小説です。

二次創作が苦手な方はご注意ください。

「はつ！でやあ！！」

まだ春も浅い野山に、威勢のいい声と木刀がぶつかり合う音が響く。剣の特訓のようだ。

「くああ！だあーっ！！」

小柄な方は、まだ子供時代を抜け出したかしてないかのような年頃の少年。蒼い髪と瞳に、ハチマキが特徴的だ。大きな声をあげて木刀を振りかざして相手に打ちかかるが、全く打撃が決まる様子はない。

一方の相手は、大柄な中年の男だ。明るい茶髪に整った顔、筋骨隆々とした身体から、相当戦い慣れた戦士を思わせた。蒼い髪の少年の振る木刀を、無駄のない動きで軽々と防ぐ。

「ふんっ！」

「ぐあー。」

大柄な中年の方が、攻撃の隙を見つけて突き技を決める。少年はあっさりと吹っ飛ばされてしまった。

「どうした、アイク？・・・もつ終わりか？」

そう言われて、少年は再び立ち上がり、打ちかかっていった。

この少年こそが、物語の主人公である「アイク」。そして、中年の方が彼の父親である「グレイル」である。

アイクがグレイルめがけて振り下ろした木刀はやはり、グレイルの木刀によって防がれる。

その時だ

「お父さん！お兄ちゃん！」

一人の少女が、大声で二人を呼びながらこちらに走ってきた。グレイルのものと同じ、明るい茶髪の少女である。アイクの妹でグレイルの娘である、ミストだ。

「おお、ミスト」

グレイルの顔がほころぶ。その瞬間、彼に隙ができたのを、アイクは見逃さない。

思い切り木刀を振りかざして、叩きつける。

「はあ―――つ！―――！」

だが、グレイルはあつさりとその攻撃を見切つた。体をひねつて木刀をかわし、逆に隙だらけのアイクの背中に強烈な打撃をぶつける。

「つぐああああつーー！」

うつぶせのままアイクは吹っ飛ばされる。ミストが心配して、アイクに駆け寄った。

「お兄ちゃん…お兄ちゃん…」

アイクはそのまま、氣を失つた……。

ぼんやりとした意識の中、どこか懐かしい歌声が聞こえる。

(母さんの子守唄だ……)

特徴的な旋律で、どこか神々しさもある歌。

目の前には、アイクと同じ色の髪をした女性が映つた。

(母さん……)

再び、意識があいまいになる……。

田を覚ますと、そこは花畠だつた。さつきまでグレイルと修行をしていた場所から、体を移されたらしい。

「ル～ルルルルルル～ル～ル～ル～ル……」

ミストが向こうで、鼻歌を歌いながら花を摘んでいる。その旋律は、さつき夢に出てきたアイクの母の子守唄だ。

額に置いてあつた水をしみこませた布をとりながら、アイクは声をかけた。

「ミスト、その歌は・・・」

するとミストはアイクが目覚めたのに気が付き、満面の笑顔をうかべる。

「あ、お兄ちゃん。気が付いた?」

その笑顔は、母の笑顔にそっくりだつた。

## 追憶（後書き）

次回は、「序章・傭兵」です。  
お楽しみに！

## 序章 ～傭兵～（前書き）

今回も、まだ実戦は入りません^ ^  
実戦を期待していた方、申し訳ないです~。

## 序章 ～傭兵～

「大丈夫？」

アイクに気が付いたミストは、アイクのことを見遣つ。

「あ、ああ」

まだ頭がはつきりしてない氣もあるが、そう答えた。するとノック、  
グレイルが現れた。

「気が付いたか、アイクよ」

ミストはグレイルに対し、声をあげた。

「 もうーお父さんったらやりすぎだよーー！練習用の武器だから  
って、本気で殴ることないじゃない」

「！」のくりこで音を上げてこるやつでは、傭兵として生き抜いては  
いけん」

「でもー」

一人のやり取りを聞いていたアイクが、口をはさむ。

「ミスト、親父。俺は大丈夫だ」

するとグレイルがフツと笑い、木刀を構えた。

「ふん、やつでなくてはな。・・・それ、構えりー。」

「え? やよひと・・・まだやるの?」

ミストが心配そうに「アイクに聞くが、アイクは毅然と答える。

「せめて一撃・・・親父に食らわすまでは、やめる訳にはいかない」

「いい覚悟だ。だが、今ままでは何度もやつても同じ・・・ん?」

向ひの林の中からガサガサと音が聞こえたかと思つと、中から濃い緑髪の少年が現れた。見たところ、アイクと同年代のやつだ。彼は、ボーレ。この傭兵団の少年戦士だ。

「ねむ、やつてゐやつてゐる」

ボーレの姿を見て、ミストが聞く。

「あれ? ボーレ、どうしたの?」

「どうしたも何も。団長たちを呼びに出ていたお前が戻つてしまふから、副長が見て来いつて」

ミストはすっかり自分の役目を忘れてたようだ・・・。

「あ・・・やうだつた。」めん「めん」

ボーレはそんなこと全く気にせずに、今度はアイクの方を見る。

「あ、団長にボロボロされたるアイクを笑つてやるやつかと思つて

たんだけど・・・意外と元気じゃねえか。つまんねえの

「・・・悪かったな」

アイクはそうつぶやいたが、ミストが余計な一言を言ひ。

「一足遅かったね。ついさっきまで伸びてたんだけど~」

「お~ミスト~!」

「えへへ、『めんなさい』」

そのやり取りがひと段落ついてから、グレイルはボーレに言ひ。

「ボーレ、ちょうどいいところに来た。お前がアイクの相手をしてやれ」

「え? おれがですか?」

グレイルは後ろに放つてあつた大きなカバンから、木でできた訓練用の木斧を取り出す。

「ちょうど、この訓練用の斧も持つてきているんだ。それに、まずは腕の近いものと戦つてコツをつかんだ方がいいだろう」

その間、アイクはすっかり頭もはつきりしていた。横に転がつていた木刀を拾つ。もう、平氣だ。

「分かった。ボーレ、よろしく頼む」

「へっ、腕が近いってのは気にくわねえが、仕方ねえ。相手をしてやるぜー！」

お互い、離れた位置に向かい合つて立つ。これが、グレイル傭兵团式の訓練の作法だ。

ボーレが木斧を素振りして、声を上げた。

「さあ、どうからでもいいぜ。かかってこいーー！」

「ああ。すぐそっちに行つてやる」

アイクは木刀を片手に、ボーレのもとに走つていぐ。ボーレは木斧を体の前に構えてアイクの方を向いた。  
ミストの声援が響く。

「お兄ちゃんがんばれー！ボーレなんかやつつけちゃえーーー！」

「おいおい、『なんか』はねえだろ、『なんか』は・・・」

一方のアイクは、ボーレの前までようやくたどり着く。そして、体を横に傾け、剣を相手の方に倒す特徴的な構え方をとる。

「いぐれー」

「おう！かかってこいー！」

木刀を振りかざして、ボーレの体に打ち付ける。

ブウン！バシイツ！！

「へへ・・・なかなかやるじゃねえか。けど、戦いはまだこれからだぜ！！」

ボーレはそう言つと、肩に担いだ木斧をアイクめがけて振り下ろした。

ドカッ！！

「くつ・・・」

木斧が当たった左腕が、打撲で紫色に変色する。アイクはそのまま片膝をついた。

「おれの力も、中々なもんだろ？」

「・・・ああ。だが・・・」

ボーレが得意そうに言つのに対し、アイクは冷静に答える。

「俺は、負けない！」

何とアイクは、片膝をついた状態から、あり得ない反撃をして見せた。

木刀を片手で旋回させ、ボーレの脳天に叩きつける。

ヒュン、バシイン！！

「ぐあ！？」

そのままボーレは背後の草むらに吹っ飛び、倒れ込んだ。

グレイルは今の戦いの様子を見て、思った。

(・・・以前教えた戦い方を、確かに身に付けつつあるな。最も、まだまだだが)

しばりへじへ、ボーレは草むらの中から起きあがった。

「や、やるじやねえか・・・」

「ボーレ、かつこわる〜こー！」

「ぬせ〜！〜」

ミストがはやし立てたことに、ボーレは顔を赤くして怒る。そんな様子を見て、グレイルが声をかけた。

「ボーレ、『苦労だつた。もう戻つていじぞ』

「あ、はー。・・・おこミストー待て〜ら〜ー。」

「キヤハハハ、だつて本当のひとだも〜ん」

ミストとボーレの鬼バトルを横田で追つてから、グレイルはアイクに向き直る。

「・・・ボーレの油断があつたにしろ、今の動きはまづまづだった。それを覚えておくがいい」

「分かつた」

そして、グレイルはまたバッグのところに行き、木刀を取り出す。

「さあ、次はまた俺が相手だ」

「ああ。望むところだ！」

アイクも再び木刀を構え直す。だが、グレイルは戦う前にもう一つ思い出したことがあった。

「・・・とその前に・・・ミストー！」

鬼ごっここの結果、ミストはどうやら逃げ切ったようだ。ボーレはさつきの訓練での疲労もあり、息が上がっている。

グレイルに呼ばれて、ミストは何をすればいいのかすぐに理解したみたいだ。

「あ、はーい！お兄ちゃん、はい、さすがすり。さっきの訓練で腕をぶつけたでしょ？お父さんと戦つ前に、ちゃんと使ってね？」

「ああ、分かつた」

アイクが言われたとおりにさすがすりを飲み込むのを見ながら、グレイルも一言言つ。

「小さな怪我でも、余裕があるついで治すよつ心掛け。ヤバいと思つた時には手遅れだつた・・・なんてことがないようにな

さつきのボーレ戦と同じよう、一人は離れた位置で向き合つた。準備ができ、グレイルが叫ぶ。

「全力でかかつてこい！！」

「・・・ああ」

再び、アイクは木刀片手に走り出す。そして、走る勢いそのままに、グレイルの体に打ちかかった。だが。

「・・・甘い！」

瞬時に木刀を特殊な構えで受け止めて、アイクの体に逆に打撃を与える。

ベシッ！

「ぐ・・・！」

「アイク、こちらからも行くぞ！」

グレイルはいきなり足払いを仕掛ける。予想できない動きに、アイクはそのまま地面に転がつた。

型にはまらない我流の戦い。それが、傭兵の戦い方なのだ。

「ふんっ！」

転んだアイクめがけて、容赦のない一撃が襲いかかる。

それでも、アイクは冷静だった。

「・・・でやああーー！」

アイクは渾身の力を込めて、木刀で目の前をなぎ払った。その結果グレイルの一撃は逸れ、すぐ横の地面に木刀を叩きつけることとなる。

起きあがった後、アイクは体制が崩れたグレイルに向け、思い切り木刀を叩きつけた。

「ぬんーー！」

ドカアツーーー！

「むーーー」

そのままグレイルは倒れ込んだ。

「お兄ちゃん、すつーーーーーー！」

アイクがグレイルに勝ったのを見て、ミストは歓声を上げて飛びはねる。だが、アイクは静かに言った。

「・・・親父。本気じやなかつただろう？」

「え、 そうなの？」

するとグレイルは起き上がり、 フツと笑いながら答えた。

「・・・それに気付けたなら、 お前も少しは成長したということだ」

その話を聞いて、 ボーレも言つ。

「そうね。 おれも実は本気じゃなかつた・・・」

「それはウソ」

「ちえっ」

再びあの二人は鬼ごっこを始めたようだ。 仲がいいんだか悪いんだ  
か。

アイクは真剣なまなざしになつて、 グレイルに話を切り出す。

「・・・じゃあ、 僕ももう一人前だつて認めてくれるよな?」

グレイルはアイクが言つ言葉の意味をすぐ理解した。

「仕事に出る話か?」

グレイル傭兵団。

アイクの父親であるグレイルが立ち上げた、 クリミア王国西部を拠

点とする傭兵団である。

団長であるグレイルを含め、現在団員は8人。皆、家族のよつと共に生活をし、強い団結心を持つている。その一方で、実力は様々だが、団員は皆個性豊かだ。

アイクはグレイルの息子と云ふこともあり、将来いざれ団長の座を引き継ぐことになつてゐる。

「・・・ボーレだつて危険な戦場に出てゐるんだ。俺もいい加減、見習いは卒業したい」

アイクの強い決意に、グレイルは少し考え込む。ボーレはまた調子に乗ってきた。

「そりゃあ、お前と違つておれは腕が立つからよ」

で、やはまつミストが横やりを入れるのだった。

「そつときは負けたくせに〜」

「あれはたまたまだよ。た・ま・た・ま」

しばらく考へ込んでいたグレイルは、ようやく顔を上げて答える。

「わうだな・・・まあいいだろ。お前も明日から傭兵団に参加し

る

「本当か!?」

まさかこんなにすぐに許可されるとは思っていなかつただけに、アイクは驚いた。

「ただし、無理だと思つたら、すぐに訓練に逆戻りさせるからな。せいぜい頑張ることだ」

「大丈夫だ。すぐ・・・みんなに追いついて見せる」

アイクの決意は、固かつた。その様子が、グレイルの目には好ましく映つた。

「どうだかな。さあ、そろそろ晩に戻るぞ。みんなが待つている」

帰り道の道中も、みんなと食事をとつてゐる時も、アイクは明日からのことへ落ち着いていられなかつた。

どんな日常が、待つてゐるのだろうか・・・。

## 序章 ～傭兵～（後書き）

次回は「1章：初陣」です。実戦がよつやく入ってきますよ～！

F.E.蒼炎の軌跡、および暁の女神は、どうしても話が多いため、このようにとても長くなってしまつのですへへ；これから先、もしかしたら話の部分を削つたり2部構成にしたりするかもしれませんが、どうかご理解ください。

## 1章 ～初陣～（前書き）

グレイル傭兵団の団長であるグレイルの息子、アイクは、父の背中に憧れる。見習いの傭兵である。

彼は幼いころから、傭兵として生き延びるための知恵や力をグレイルによって体に叩き込まれてきた。傭兵団の次期団長の座を、いざれ継ぐことになるからだ。

そして、ついに彼はグレイルによって、傭兵として実際に戦場に出て戦うことを許されたのだった。

## 1章 ～初陣～

### ～傭兵団の皆～

昨晩から興奮していたせいで、アイクはあまり夜眠ることができなかつた。だが、いつの間にか眠つてしまつたらしい。日が覚めたら、もうすでに外は明るくなつていた。アイクは起き上がりつた。

服を着替え、皮鎧を着込む。グレイルから18歳の誕生日祝いにもらつた赤いマントを取り、羽織つて肩に留める。最後に縁のハチマキを頭に巻く。これで、準備は完了だ。

自室のすぐ横にある階段で1階に降り、廊下を進んでいく。その先にある食堂には、グレイルと、副團長のティアマトが何か話し合つていた。

「おはようマイク。今日からあなたも、私たちの仲間入りね」

赤くて長い髪が田印の女性、ティアマトが、アイクにあいさつをする。

彼女は傭兵団の副團長で、長い間グレイルの補佐をしてきたのだ。

「ああ。よろしく頼む」

すると、グレイルが厳しい顔をして、アイクをとがめた。

「遅いぞ。他のやつはもうとっくに準備を始めている

やはり、起きるのが遅かったようだ。もつと早く寝ればよかったです。  
アイクは少し後悔した。

「すまない。次からは気を付ける。……それで？俺の任務は……」

「

アイクは謝り、任務について聞こうとした。だが、またしてもグレイルは厳しい反応をした。

「ティアマトからの報告が途中だ。ちゅうとこで待つていい

「分かった

アイクは仕方なく話が終わるのを待つこととした。

ティアマトは再びグレイルの方を向き、報告を続ける。

「では、グレイル団長。依頼の話の続きですが……」

「確か、山賊退治のことひだつたな？」

「はい。すぐ近くのカリワ村からの依頼です。調べたところ、さほどの勢力ではなさそうですので、まず、私とオスカー、ボーレの兄弟で一当たりしてみようかと考えています」

ティアマトの報告を聞き終ると、グレイルはアイクの方を向いた。

「だったら、アイクもその任務に加えよう。前の二つの依頼は、俺とシノン、ガトリー組でそれぞれ片付ける

ティアマトもその意見に賛成した。

「分かりました」

グレイルは壁に立てかけてあつた巨大な戦斧を取り、背中に背負う。この斧はグレイル自身がずっと前に自ら鍛え上げたものらしい。不思議なことに刃こぼれしないのは、彼の手入れの賜物だろう。彼はどういう訳か、剣よりも斧で戦うのを好んでいる。

グレイルは戸口のところでティアマトを振り返る。

「ティアマト。アイクのこと、お前に任せる。基本から鍛えてやつてくれ」

そして、グレイルは出発した。

「了解しました。・・・じゃあアイク、すぐに出発しますわ」

アイクはテーブルの上に置いてあつた彼の分の朝食であるパンを口に入れ、決意を新たにうなづく。

「・・・よし、いよいよ初任務だ」

「ティアマト副長。準備、完了しました。副長の騎馬も連れてきましたよ」

二人が戸口を開けると、緑の鎧をまとい鉄の槍を手にした、髪の色まで緑の青年が、2頭の馬を引き連れながらやってきた。

糸目が特徴の彼の名前はオスカー。ボーレの兄で、物静かで冷静な性格だ。

ちなみに、アベルなどと同じくFEシリーズおなじみの、「緑の騎士」である。

「さう、助かるわ。いつもながら手際がいいわね」

ティアマトがオスカーにお礼を言つてると、彼の後ろから鉄の斧を担いだボーレもやつてくる。

「おれも準備いいですよ」

「あら、ボーレ。あなたにしては珍しいわね」

ボーレはかなり嬉しそうに答える。

「へへっ当然ですよ。なんたつておれ、今日からセンパイなんすからな、アイク?」

やつぱり調子に乗ってるか……と思いつつも、確かに彼の声は、  
とには間違いない。仕方なくアイクは、

「まあ、……一応な……」

と答えておいた。

オスカーが、馬にくぐりつけておいた袋の中から、鞄の中に入っている鉄の剣を取り出してアイクに渡す。

「アイク、団長から預かってたんだけど、これが君の武器だ。……いよいよ初陣だね。緊張してるかい？」

鉄の剣を受け取つて腰に鞘を留めながら、アイクは答える。

「そうだな・・・昨日の晩の方が緊張してたな。今はわりと、落ち着いたと思うが・・・」

だが、今も少しば緊張している。オスカーはそれを見抜いたみたいだ。

「少し、肩の力を抜くといい。私たちも一緒なんだし」

「ああ、そうだな」

ティアマトがアイク達3人に声をかける。彼女はすでにオスカーが引き連れてきた白馬の方の馬にまたがり、背中には鉄と鋼、2種類の斧が背負わっていた。

「そ、みんな。そろそろ出発するわよ」

彼らは、目的地のカリワ村へ向けて、出発した。

皆の中にいたアイクの妹のミストと、オスカーとボーレの弟のヨフアが、4人に向けて声を上げる。

「お兄ちゃん！頑張ってきてね～！～！」

「オスカー兄ちゃん、ボーレ、無事に帰ってきてねー！」

オスカーは馬の上からちらりとヨフアの方を向き、返事をする。

「ヨフア、いい子で待つでいてくれよ」

ボーレはヨフアの方を振り向き、両手を振って答えた。

「任せとけって！大活躍してやるからな！」

アイクはミストを見て、軽く返事をする。

「・・・ああ」

（カリワ村）

村の入り口にたどり着いた一行は、林に隠れて様子をうかがつていた。村の中にはやはり山賊が数人、うろついているようだった。カリワ村はちゃんと領主もいるが、小さな村ゆえに大した自衛能力は持たない。そのせいで、山賊に目をつけられたという訳だ。領主館の目の前には、この山賊団の幹部が陣取っているらしい。

「（）がカリワ村。敵の数は大したことないけど・・・油断は禁物よ」

ティアマトがカリワ村の見取り図を広げて、村の北にある領主館を指差す。

「ここの領主館の入り口を押えているのが、この山賊団の幹部である『ザワナー』という男。彼を倒して領主館を奪還し、村の平和を取り戻しましょう」

次にボーレが、アイクに話しかけてきた。

「アイク！よく聞けよ？センパイのおれから、ありがた～い忠告だ。一人でいきがつて前に出たりはしねェことだ。必ず痛い目を見る」  
・・・何だか、以前そうやって痛い目に遭つたことがあるみたいなセリフだな。そう思いながらも、アイクはその忠告を頭に刻み込んだ。

オスカーも、アイクに注意を呼び掛けた。

「アイク、無理はしなくていい。危ない時は、いつでも私たちを頼つてくれ。敵の動きをよく見れば大丈夫。最初は、勉強するくらいの気持ちでね」

「ああ。オスカー、ボーレ、よろしく頼む」

アイクの緊張は、いつしか消えていた。オスカーはやんわりと、ボーレは明るくアイクに答える。

「わかったや」

「ま、おれの戯いぶりを見てろつて！」

すると、その時だ。村の入口の近くにいた山賊の一人が、一行が隠れていたのを見つけて声を上げた。

「ああ？なんかあやしいやつらがいるぜ。おい野郎ども、かれー！…！」

ティアマトがその声を聞き、3人に注意を呼び掛ける。

「気を引き締めてー、どうやら敵が気付いたわー！」

（一人でこきがって前に出ると、痛い目を見る）ことになる・・・）

さつきのボーレの言葉を思い出し、アイクは山賊たちの中心には飛びこまずに少し手前で足を止めた。

「なんだ？てめえら、村の連中が雇つたつていう傭兵だな？来ないんだつたら、こっちから行かせてもらつぜえーー！」

剣を持った山賊Aが、アイクの方へ向かってくる。

「覚悟しやがれーー！」

剣を振りかざして、アイクに向けて斬りかかってきた。だが。

ガキンッ！！

アイクは鉄の剣で山賊Aの剣を受け止める。鉄同士がぶつかり合い、火花が散った。

「ダアツーー！」

バシュ！

そのまま、山賊Aの胸を斬り裂く。膝を付いた山賊Aのもとに、オスカーが鉄の槍を突き出した。

「ヒビめだ

ズンッ！

「ぐ・・・ちくしょう・・・」

ボーレは民家の裏の茂みで、斧を持つ山賊Bと戦いをしていた。

「おひおひーかかつて来やがれ！！」

「くそ、傭兵どもめ、死ね！」

山賊Bの斧の一撃は、ボーレに命中してしまつ。

「チツ、だが、おれの方が力は上だぜ！－！」

ブウン、ズシャアア！－

ボーレは力任せに斧を2回振り回し、山賊Bを倒す。

「お、覚えていやがれ・・・」

そのころティアマトは、村の入り口にある民家を訪れていた。その民家には、領主館を追われたこのカリワ村の領主が避難していた。

「おお、傭兵団の人たちか。よく来て下された。話は聞いておりますぞ」

「あなたが、依頼を下さった領主様ですね？」

ティアマトが聞くと、領主は困ったような顔をして答える。

「全く・・・山賊どもには本当に困つておるのだ。どうか、やつらの討伐をお願いしますぞ。この鋼の剣をぜひ受け取つて下され。わしらには使えぬが、あんたらのお役には立つじやろつて」

「立派な剣を、ありがとうございます。この村の平和を取りもどすことを、お約束いたしま・・・」

と、その時だ。村の一角で火の手が上がったのは。

「村のやつらめ・・・傭兵団を雇つておれたちを追つ拵あうつたつてそうはいかねえぞ。見せしめに家をつぶしてやるーー！」

山賊の一人（山賊J）が、一つの民家に向かっていった。

山賊Jはその民家に向けて、火のついたたいまつを投げ込む。たいまつの火はまたたく間に建材に燃え移り、火災が発生した。黒煙が上がり、近くの谷からの風を受けて、炎が燃え上がる。まるで無数の赤い舌が、空を舐めるかのように。

「やあやははははー全部燃えちまえーーー！」

その様子を見て、向かいの民家から住民が避難してきた。

オスカーは即座にアイクとボーレに指示を出す。

「アイク！君は民家に火を付けた山賊を見つけて倒してくれ！ボーレは避難民の安全確保を！私は、副長に更なる指示を仰いでくる。みんな、気を付けて行動してくれ！」

「ああ、分かった！」

「オスカー兄貴、合点だぜ！…」

ボーレは避難をしている村人の誘導を始めた。

「村の入り口の方に向かってくれ！そつちはあまり風がこねえし、山賊たちも残ってねえから！」

こういう時は、ボーレの明るくて人懐っこい性格がとても役に立つ。あまりに突然の火災に茫然自失していた村人たちも、少しは落ち着きを取り戻していた。

だが、そこに山賊Dが現れる。

「へへへ・・・お前ら傭兵どものせいでおれたちの格好の獲物を逃がすなんてことはしたくなえんだ。悪いが、死んでもううぜ！！」

「くそう！何でこんな時に・・・！」

ボーレは仕方なく斧を構える。山賊Dの、斧による強烈な一撃が襲いかかってきた。

「ブン！」

間一髪でボーレは斧をかわす。そして、山賊Dの背後をとる「J」として成功した。

「食らうええええ！」

大きく斧を振りかぶり、一気に背後から山賊Dめがけて斧で斬りつける。そのあまりに強い衝撃で、山賊Dの体は、ボーレが使っていた鉄の斧とともに真っ二つになった。

「・・・ふう・・・」

手元に残った斧の柄を見て、ため息をつく。買つたばかりの斧だったのに。

でも、どうやら村人の安全を守ることは出来たみたいだ。それが何よりよかったです。

村人の中から、一人の女性が進み出る。

「危ないところを助けていただき、ありがとうございます」

「あ、いいや、おれたちは当然のことでしただけですから」

ボーレは慣れていない謙遜をするが、女性は本当に感謝している。

「いいえ、本当に、お礼をしたいです」

女性は手に持っていた薄い衣のよつたものをボーレに差し出しながら、続けた。

「これは『天使の衣』というもので、母の形見なんです。使うと体力が増えるという珍しいものなので、あなたがたの役に立てばいいのですが・・・」

「え！？ そんなに大事なものをいいんすか！？」

「はい。あなたがたに持つて行って頂きたいです。・・・どうか、平和な村を取りもどしてください！」

仕方なく、ボーレはそれを受け取った。

「分かつた。必ず、この村を平和にして見せますよー。」

一方アイクは、炎上した民家のすぐ裏手に来ていた。

「この民家に火を付けたのは、あんただな？」

目の前にいるのは、鉄の斧を担いだ山賊。さつき民家に火を投げ込んだ張本人である。

「その通りだ。だが、だつたらどうだつてことだ？」

山賊には全く悪びれる様子はない。アイクはそのことに、頭にきた。

「……」

鉄の剣を水平に構え、力をためる。そして。

「居合斬り！…」

一気に田にもとまらぬ速さで間合いを詰め、山賊Cを思い切り斬り飛ばした。

草むらの中に転がった山賊Cは、もう動かない。

その時、炎上する民家の中から子供の泣き声が聞こえた気がした。

「中に子供が……!?」

アイクは迷わなかつた。一気に炎の中に飛び込んでいく。

とんでもなく熱かつた。こうしているだけで体が溶けてしまいそうなほどに。降りかかる火の粉が体に燃え移るのを防ぎつつ、アイクは炎の中を走つて行く。

奥の部屋に、うずくまつて泣いている子供を見つける。

「'つえーん・・・あつこよう・・・あついよ・・・」

「しっかりしろ、もう、大丈夫だからな」

背中に背負い、再び来た道を戻ろうとする。しかし……。

ドスウウンー！

天井が崩壊して、逃げ道を塞がれてしまった。

「しまった・・・！」

ティアマト、オスカー、ボーレの3人は、残った敵を倒しつつ炎上する民家を目指した。

「さつき、中にアイクが入つて行くのを見ました！」

オスカーがそういったのを聞いて、ボーレがオスカーにつかみかかる。

「おい兄貴・・・ちょっと待てよ！何で止めなかつたんだよ！あんな中に入つちまつたら、『冗談抜きで焼け死ぬぜ！？』

「い、いや、ボーレ落ち着け・・・止める間もなく、中に飛び込んで行つたんだよ」

と、そこへ敵の首領である山賊団の幹部、ザワナーがやつてきた。

「へつへつへ・・・てめえら、よくもおれの部下たちをやつてくれたな。やられる準備は、出来ているだろうな？」

ティアマトは冷静な判断を下す。

「・・・ザワナーは私とオスカーが相手をするわ。ボーレ、あなたはアイクを探して、助けてきてちょうだい！絶対に彼を失う訳にはいかないの！！」

「分かりました！アイクのやつを連れてきますね！！」

ボーレは民家に走っていく。

ティアマトとオスカーは、ザワナーに向き直った。

「へへへ・・・おもしれえ。相手になつてやるぜ！」

ザワナーはオスカーめがけて斧を振り上げながら突っ込んでいった。オスカーは槍を構え、迎撃態勢をとる。

ブンッ！

ザワナーが振り下ろす斧は、オスカーの鎧に思い切り当たる。鎧の上からも結構な痛みが来た。おそらく、怪我をしただろ。

「く・・・これを食らうがいい！」

オスカーは槍を振り回してザワナーに叩きつける。だが、彼の攻撃は空を切つた。

「くそ・・・やはり斧が相手では相性が悪いか・・・。ティアマト副長、交代お願いします！」

「分かったわ、任せてちょうどい！」

ティアマトは鉄の斧を構えて一気に馬を走らせ、ザワナーに突き進む。そして、彼の目の前で田にもとまらぬ素早い攻撃を繰り出す。

「ハアアアーッ……！」

「ドカッ！…バシュッ！…！」

「ぐわあつーお、おれさまともあれつものが、こんなところ……」

ザワナーは、倒れた。

アイクは必死に脱出方法を考えていた。だが、すさまじい熱と無数の火の粉、黒煙のせいで、まともにものを考えることは出来ない。

「おにいちゃん……あついよう……」

「もう少しだから大丈夫だ！絶対に助けて見せる……」

だが、炎はもうすぐそこへ迫ってきていた。もはや万策尽きたかに見える。その時。

「おーい！アイク！聞こえるかー…！」

ボーレの声が、壁の向こうから聞こえてきた。すぐにアイクは返事を返す。

「ああ、聞こえるぞ！子供がいるんだが、逃げ道がふさがれて出ら

れない！」

すると、ボーレが答える。

「そりか・・・だつたらこの壁をぶち壊すから、そりをどいていてくれーもつ少しだから、頑張れよーー！」

一体どうあるつもりだらう・・・とその時、壁から「ズシーンズシーン」とこう音が響いてきた。体当たりをしているみたいだ。

音が何度も響いた後、唐突に壁が崩れた。奥には外の様子が見える。

「ボーレ、助かったーよし、脱出するー！」

「おう！何とか、間に合ったみてえだな・・・」

アイクが子供を背負つて民家から飛び出したその瞬間、民家が大きな音を立てて崩れ落ちた・・・。

「おにいちゃんたち、ありがとうーー！」

子供は軽いやけどでしたが、元気に助かつたみたいだ。本当によかったです。

彼を助けたアイクも、大きな怪我はしていなかつた。奇跡のようである。

ティアマトが3の方を向き、声をかける。

「これで終わったよ。アイク、大丈夫?」

「ああ、問題ない」

ティアマトはすすみれのアイクの様子を見て、感慨深そうに言つ。

「それにしても、驚いたわ。アイクがこんなに成長していたなんて」

「親父に比べたら、まだまだだけだ」

昨日の訓練の様子を思い出しながら、アイクは答えた。

「それは仕方ないわ。だって、グレイル団長は・・・」

そこまで言つて、ティアマトは口を閉じる。

「? 親父が、どうしたんだ?」

「いえ、何でもないわ」

ティアマトはグレイルの何かを知つてゐるみたいである。

「そう言わると、余計に気になる」

だが、彼女は答えなかつた。

「いずれ、分かる日が来るわ・・・」

「よ、アイク！初めての実戦にしあわせ、まあまあだつたぜ。ま、おれの方がもつと目立つてたけどなー。」

すぐ調子に乗るのが、ボーレの悪いところだ。オスカーがボーレにツツコミを入れる。

「確かに田立ちましたな。張り切りすぎて武器を壊せば、いやでも田立つく」

「兄貴っ…へんつ、余計な」と言つたので…。」

「とにかく、アイク。初任務成功おめでとう。仲間として歓迎するよ」

「ああ、俺もうまく行けてよかったです。あの子供も、助けることができましたな」

ティアマトが、全員の顔を見渡す。

「全員無事ね？では、帰還しましょう。ミスト達が、おいしい夕食を作つて待つてくれているはずよ」

こつして、アイクの初陣は無事に終了した。

ミストが作った夕食はあまり上手ではないが、それでもこの日の食

卓は、明るい笑顔で満ち溢れた。

## 1章～初陣～（後書き）

しおりばながらオリジナル要素を入れて行きました  
アイクの活躍、いかがだったでしょうか？

実際には、炎上した民家から子供を救いだすイベントはないのですが、アイデアとして思いついたので入れてみました。

次回は「2章・救出」です！お楽しみに～

## 2章 ～救出～（前書き）

アイクの初陣となつたカリワ村での山賊との戦いは、無事に勝利に終わつた。

山賊の討伐だけでなく、火災から子供を救つたエピソードをティアマトから聞かされたグレイルは、確かに息子の成長を感じていた。

（いつか、立派な戦士になれるぞ・・・）

それから4日後の出来事である。

## 2章 ジ救出

### ～傭兵団の砦～

砦の敷地内の隅、納屋の前を、一人の青年が歩いていた。白い衣装に薄い橙の髪、人のよさそうな顔が、聖職者を思わせる。ただ、その顔色はあまりよくはなく、病弱そうな雰囲気を醸し出していた。

手には手紙を持ち、辺りをきょろきょろと見回しながら彼は歩きまわっている。人を探しているようだ。と、ちょうど田目的の人物を見つけたようだ。

「あ、ティアマトさん。こちらいらっしゃしたんですね？」

ティアマトは厩舎で馬の世話をしていた。彼女の騎馬である白馬の体を拭きながら、声がした方を見る。すぐにティアマトは目を丸くした。

「・・・キルロイー起きだしたりして、大丈夫なの？」

手紙を持つてティアマトを探していた青年の名はキルロイ。この傭兵団の一員で、杖を使つた回復魔法で味方を援護する神官だ。見た目通り、心優しい性格だ。

ただ、病弱なこともあってここ一週間ほど高熱を出して、ずっと寝込んでいた。そんな彼が起きあがつていたのを見て、ティアマトは心配になつて聞く。

「はい。もう熱は下がりました」

だが、どうにもまだ顔色が悪いのはティアマトでも分かる。

「本当に何だかまだ顔色悪いわよ？それに、ふらふらして見えるけど・・・」

「それは・・・何しろ一週間も横になっていたの。きっと、そのせいです」

キルロイはそう言ったが、それでも不安はぬぐえない。

「だつたらいいけど・・・どちらにしても、本調子になるまで任務には加えないわよ。だつて私達傭兵は・・・」

「『少しの油断が、死を招く』でしちゃう？分かってます。みなさんには申し訳ないですが、あと少しだけ、療養させていただきます」

キルロイはティアマトの口べせをすっかり覚えていた。それを聞いて安心したティアマトは、首を縦に振った。

「ん、ようじい。しっかり治して、完全復帰してちょうだい。キルロイは、うちで唯一の杖使い・・・厳しい任務ほど、あなたを頼りにしているのよ」

「・・・あつがとうござります」

セヒジティアマトは、キルロイが持っている手紙に目を通した。

「ね、とにかく手に持つておるそれ、手紙じゃな

いの？私、午後から街に出かける予定だから、ついでによかつたら届けるけど？」

「あ、いえ。これはティアマトさん宛なんです。それでさつきから探してたんです」

「私に？」

キルロイは先ほど、起き上がつて気分転換に砦の周りの林の中を散歩していたのだった。その時、この手紙を渡されたらしい。

「先ほど近くを散歩していた時なんんですけど・・・見知らぬ男性から『赤毛の聖騎士様に、渡してほしい』と頼まれました」

そう言いながら、手紙を彼女に渡す。

一  
体何かしら・・・

ティアマトは封を切つて便せんを取り出した。そして、中身を読みだす。

「お礼状とかじやないですか？」

「・・・つー・・・よくも、」んな・・・」

読み始めてしばらくして、ティアマトは顔に怒りをあらわにしながら

「いや、手紙から田を離した。キルロイは驚いた。

「ティアマートさん？　どうしたんですか？　何か悪い知らせが……

「

ティアマートはそれには答へず、手紙をキルロイに突き返す。

「……キルロイー・オスカーにこの手紙を渡して、戦闘準備をして待機しておくれよ！」云々て！　私は少し、出掛けたるわ

そう言つと、彼女はわざと世話をしていた白馬の背中に鞍を置く。

「え、あ、ティアマートさん？」

あまりに突然のこと過ぎて訳が分からぬキルロイはわざと田も振らず、ティアマートは白馬に飛び乗る。

「すぐに戻るからー頼んだわよー」

そして、手綱をとつて駆け出しちまつ。あつとこづ聞こ、彼女の姿は門の向こうに消えた。

あとに残されたキルロイは、突き返された手紙を見る。

「この手紙に、一体何が……

「み、みんな！　大変だ！」

手紙の内容を読んだキルロイは、大慌てで皆の戸口を開けて駆け込む。あまり体が丈夫ではないため走るのは苦手だが、それでも彼は必死だった。

食堂で雑談をしていた留守番組のメンバーは、キルロイの姿を認めて雑談をやめる。

(この時グレイルとあと一人の実力の高い団員は、ちょうど外出していた)

「お、キルロイ。体の方は、もういいのか?」

ボーレは久々にみるキルロイに、体の心配をする。

「え、うん・・・って、それどころじゃなくて!」

もちろん体は平氣だが、今はそんな問題じやない。手紙の内容を伝えないと!

オスカーとアイクが、不安になつて聞く。

「どうしたんだ、そんなに慌てて?」

「何があつたのか?」

ようやく息が落ち着いてきたキルロイは、堰を切つたかのように話した。

「ミストとニアファが・・・、山賊団にせらわれたんだ!・!・

「はあつ!・?・

ボーレが思い切り聞き返す。

「どうじりじりとだ？」

アイクも突然のこと驚く。

「一人は朝早くから、野草摘みに出掛けているはずだが……確かに、まだ戻っていない」

オスカーが冷静に壁にかかつた時計を見ると、もうすでに時刻は昼前となっていた。

「さつき、門のところで……ティアマトさん宛の手紙を預かつたんだけど……それが、山賊団からのもので……。ビ、ビッシュよう？」

キルロイはかなり慌てている。このメンバーの中で最も年上であるオスカーが、そんなキルロイに手紙を指差して言つ。

「見せてくれ」

オスカーは手紙を読みだした。確かに、二人をさらつた旨の内容が書かれている。

キルロイは真剣に落ち込んでしまつた。

「……悪い人には見えなかつたのに……」

そんな一言を聞いて、アイクはちょっと思つた。

(おいおい、仮にも相手は山賊だろ？そんな人がよそそつな顔の

山賊だつたのか？先日戦つた連中も、『いかにも悪人』って感じの顔ばつかだつたのだが……）

手紙を読み切つたオスカーが顔を上げる。

「……なるほど。先日のカリワ村の時の報復といつことか。それでも、子供を誘拐するとは……なんて卑怯な……」

珍しくオスカーが激情をあらわにする。手紙をビリビリに破り、机に叩きつけて丸め、そのままゴミ箱に放り投げた。ゴミ箱まで結構な距離があつたが、手紙は見事に3ポイントショートが決まる。

「くそつー！」

アイクは傍らに置いてあつた鉄の剣をとり、突然戸口に向かいだした。ボーレが慌てて聞く。

「！ アイク！？ おまえ、どこ行くんだよー！？」

戸を開けながら、アイクは振り返つて答えた。

「ミスト達を助ける！」

それを聞いてキルロイは、ティアマトから言われたことを思い出した。

「あ、でも！ ティアマトさんは……すぐに戻るから、みんなは戦闘準備をして待つててって……」

だがアイクはそんなこと聞かない。

「そんなこと言つてゐる場合か！？俺は行く！－」

そう叫んで、アイクは飛び出して行ってしまった。  
そんな様子を見て、ボーレも立ちあがる。

「新米のおまえ一人が行つてなにができるんだよ！？待てよ、おれも  
行くぜ！－」

ボーレも飛び出していったのを見て、キルロイも立ちあがった。

「待つてくれ、二人とも！－・・・ぼ、僕も行くよ！－」

最後に残つたオスカー・・・・。

「おい、みんな、ちょっと待て・・・・！まったく、副長の命令を何  
だと思つてるんだ！」

そう言いつつも、彼もみんなを放つておくことができず、後を追いかけることにした。槍を手に、厩舎へ向かう。

アイクとボーレは、道が二手に分かれている場所までやつてきた。  
ボーレが、アイクに聞く。

「道がふたまだな・・・で、どっちに行けばいいんだよ？」

「俺が知る訳ないだろ？！」

何とアイクは、道も知らずに飛び出してきたみたいだ・・・。ボーレが頭を抱える。

「おまえ、もしかして知らねえで飛び出したのか！？・・・だー！ もおつー！ いきおいだけで行動すんなよ、このバカ野郎つ！」

「

「・・・なんだとー！」

アイクは頭に血が上ってボーレにつかみかかる。

「やんのか、じりつー！」

ボーレもアイクをつかむ。じぶしを固めて、アイクを殴りつとした、その時。

「ふ、二人とも、今は争っている場合では・・・」

「・・・そんなことだろ？と思つたよ」

オスカーが、キルロイを馬に乗せてやってきた。ボーレがそれを見て、アイクから手を離す。

「なんだよ。結局、オスカー兄貴たちもきたのか。命令違反なんて、おつこいつさんの一人らしくねえな。一体どんな風の吹きまわし・・・

「

ふてくされた様子のボーレに構わず、アイクは今度は、オスカーに

つかみかかった。

「オスカーなら知ってるよな！？ どっちだー？」「

アイクにゆすられながら、オスカーは答える。

「・・・山賊団の根城なら、左の道だ」

「分かつた！」

すぐにオスカーを解放すると、アイクは一目散に左の道を突っ走つていいく。その様子を見て、ボーレは呆れながら言つ。

「おれがしゃべってる途中だろ。最後まで聞け・・・」

だが、そんなボーレを無視して、キルロイが提案する。

「オスカー、僕たちも行きましょう！」

「仕方ないな」

再びオスカーはキルロイとともに馬に乗り込み、左の道へ駆け出した。

最後に残つたボーレ・・・。

「・・・っておい！おれを置いていくんじゃない〜！〜！」

## （山賊団のアジー）

山賊団のアジーは、小高い丘にあった。周りは茂みや林でおおわれており、山賊たちが身を隠しやすいようになつてている。丘の上には小屋が建てられている。そこが、本拠地のよつだ。

丘の斜面にある大岩の上に、人相の悪い、いかにも悪人面の男が立っていた。よく砥がれた鋼の斧を背負い、たどり着いたアイク達を睥睨する。

「よく来たなあ、おまえたちー。」

アイクはたつた今馬から降りたキルロイに聞きたいことがあった。

「なあキルロイ。あいつが、あんたに手紙を渡したってやつか？」

「うん。・・・いい人そつだつたのに、まさか山賊団の頭だつたなんて・・・」

「どうやら、本氣でいい人に見えてるらしい。

（なんだかな・・・どうからどう見ても悪人にしか見えないのは、俺だけ・・・じゃないよな？）

山賊の頭はそんなことは全く気にせずに、だみ声で話しだす。

「それだけの人数でここに来ると、おれら『イカナウ山賊団』もずいぶんど、舐められたもんだ。・・・ザワナーのやつを倒した、

あのクソ生意氣な赤毛女はビリじたあー?」

アイクは答える。

「ティアマトはいない。俺たちだけだ。それよつ、ミストとアフタ  
は無事かつー?」

すると、イカナウといつらしげに山賊の頭は、妙に親切に答える。

「ああもちりんだ。あっちの小屋ん中で、おとなしくしてもらひて  
るぜ。こちどり、あのガキどもには恨みはねえ。おれらの狙いはあ  
くまでも、赤毛女とその手下の・・・おまえたちだ」

ボーレがイカナウのすぐ真下まで進み出て、声を上げる。

「だつたら、わっかと解放しろー! おれたちが来たんだから、もう  
用済みだろー?」

だが、イカナウは首を縦には振らなかつた。相当、ティアマトに恨  
みを持つてゐようだ。

もしかしたら、カリワ村を襲つていた連中の首領のザワナーは、彼  
の片腕クラスの男だつたのかもしれない。

「赤毛女がまだだ。あいつがくるまで、預かつとくぜ」

「・・・くそつー」

イカナウは辺りを見渡し、鋼の斧を素振りして叫んだ。

「とりあえず、おまえたちだけでも先に始末しておくれ。おいーで

てこいや、みんなーー！」

その声が丘に響くと、あちこちの茂みやら林やら岩陰から、大量の山賊たちが姿を現した。

キルロイが、緊張した声を出す。

「す、すごい数だ・・・！ でも・・・負ける訳にはいかない！」

オスカーがそんな様子のキルロイに言う。

「キルロイ、君は下がつて！負傷者がいたら、杖で治療を頼む！」

「わかつた！」

イカナウが岩の上から、山賊たちに檄を飛ばす。

「かかれ、野郎どもーあの女騎士がいなけりや、レーヴらせただの  
雑魚だ！！」

オオ――ツ――!

一斉に山賊たちが雄たけびを上げ、丘を駆け下りてきた。ボーレとアイクが、それに答える。

「なんだといひやう……」

「そのセリフ、後悔させてやるーー！」

オスカーはすぐ近くにある岩場に向けて、馬を走らせた。3人の剣士が、鉄の剣を振りかざしてオスカーに襲いかかる。

「おらおらー歯あ食いしばりやがれ！！」

だが、3人の攻撃はむなしく、全て槍で防がれる。

「こちらからも行かせてもうひーー！」

ヒュンヒュンヒュン・・・ ドカツ！！ ズン！！ ブシャア！！

「な・・・なんて強さだ・・・」

槍を華麗に振り回し、オスカーは難なく剣士3人を屈伏させた。

アイクは茂みに紛れて、前方からやつてくる鉄の斧を持つた戦士たちの迎撃に当たる。

「ガハハ！ イカナウ山賊団の恐ろしさを、教えてやるよーー！」

しかし、戦士たちの斧は全く当たらない。

(斧を持つ相手には、剣が有効・・・さらに茂みに隠れることで、戦闘面でより有利になる・・・)

アイクはグレイルから教わった方法で戦つた。すると本当に見事なまでに、攻撃が当たらなくなる。確かに相手が斧だと、戦いやすい

のだ。

「・・・イカナウ山賊団の恐ひしきせ、この程度なのか？」

「な、何だと・・・。」

「隙があつすぎだ・・・。ぬうん！――！」

ザシャアア――！

大きく鉄の剣を振りかぶつて、田の前の戦士を叩き割る。

「よし、おれもこっちはやつてやるぜ――。」

ボーレも背中に手を回し、斧を取り出そうとした。だが・・・？

「・・・ん？・・・な、ない・・・？

何といふことだ！ボーレは武器を持つて来るのを・・・。

「し、しまつた！ 確か先日の任務でおれ、斧ぶつ壊しちまつたんだつけ・・・どうしよ・・・。」

するトイクが振り返り、ボーレを呼ぶ。とりあえずボーレはアイクがいる茂みの方に歩いていった。

「ボーレ、この鉄の剣を貸してやるから、これで戦え。俺はカリワ村の領主からティアマトがもらつたこの鋼の剣があるから」

「はあ！？・・・おいおい、冗談だろ？　だいたいおれは斧専門だぜ？　剣の扱いなんかこれっぽっちも・・・」

ボーレは突然「剣で戦え」などとアイクに言われ、困惑する。

「それでも、何もないよりはあつたほうがいいだろ？　それに、敵は斧を持つた敵が多い。剣の方が断然有利だと思つぞ！」

「あのなあ・・・仕方ねえな全く・・・」

とりあえず、鉄の剣を受け取るボーレ。柄を握った感覚が、ものすごくなじまない・・・。

だが、山賊たちは構わずに襲い掛かってくる。

「傭兵どもめ・・・カリワ村で散つた仲間たちの恨みだ、死ねえ！」

鉄の斧を振りかざした山賊が、ボーレに狙いを定めて斧を振り降ろす。

「ぐ、ぐそ・・・！」

ボーレは力任せに鉄の剣を振った。使い慣れた鉄の斧よりもはるかに軽い分、その一撃はとんでもない素早さとなる。だが。

ヒュン！ サツ！

「残念だつたな。そんな甘い攻撃、当たんねえよー。」

ドカア！！

「ぐわあー！」

「ボーレ！！」

山賊はボーレの攻撃をかわし、逆に強烈な一撃をお見舞いする。

死ねやー！！！

振り上げた斧が、ギラリと光る。ボーレは目をつぶった。だが、次の瞬間。

「はつえいっ！」

ヒュン！ グサツ！！

一  
ヰヤアア・・・

オズガリが闇一髪鉄の槍を突き出し山賊を倒した

一  
あ  
冗費  
すまねえ

ホーレ 無茶にするな ギルロイに治してもアリで

「キルロイ、治療を頼む」

ボーレは後方で待機していたキルロイのもとへ行く。

「あ、はい。ただいま！　・・・ライブ！？」

先端に赤い玉が取り付けられた杖でボーレの目の前で念じると、青白い光がボーレの体を包み込む。刹那、ボーレの傷はすっかり治っていた。

「へへ、サンキュー！」

「ボーレ、無理せずにね」

と、そこへ突然蹄鉄の音が響いてくる。音の方を向くと、ティアマトがここからやってくるのが見えた。

「待機している言つたはずなのに・・・困ったものだわ。でも・・・グレイル傭兵団副團長の名にかけて、これ以上、団員を傷つけることは許さないわ！」

ティアマトが到着して、ボーレは彼女のもとへ走つていった。

「ティアマト副團長！勝手に飛び出していく、すみませんでした！」

「その話は後。今は戦いに集中よ、ボーレ

「あ、はい！」

そこまでティアマトは、ボーレの手に持つてある鉄の剣に目を付ける。「あら？ ボーレ、何で剣で戦つてるの？」

「あ～そ、それはですね～・・・」

ボーレが事情を話すと、ティアマイアは馬鹿狂った袋から、新品の鉄の斧を渡す。

「はい。さつき街に行つて、ついでに買つてきたの。・・・今度は、大事に使うようにしてね？」

「あ、ありがとうございます。」

丘の上の小屋の中では、『アスター』が手足を縛られて閉じ込められていた。オスカーヒボーレの弟であるアーヴィアは、わざわざかりすつと泣いていた。

「ウ・・・ウウウ・・・」

そんなヨフアを、ミストは元気づける。

「かりして、ヨフア！男の子がそんなんで、どうするの？」

「だつて、怖いんだもん・・・。ミストちゃんは、平氣なの？」

正直、ミストも怖かった。  
でも、明るく答える。

「平氣じやないけど・・・かど、だいじょ「つぶーせつたい、お兄ち  
やんが助けに来てくれるもん!」

それを聞いたヨファも、泣きやんだ。

「う、うん・・・そうだよね・・・・・・・ほくのおにこちゃんたちも、  
きっと来てくれるよね？」

「そりゃーだからなかなかでがんばろう、ね？」

一方、小屋の外での戦いは、おおかた決着が付いていた。ティアマトが加勢してくれたのが、最も大きいだろ。

「くつくつくつ待つてたぜ。赤毛の姉ちゃん。てめえにや、たっぷりと痛い田を見てもらうぜ。村でやられた連中の分もな！」

ティアマトとイカナウが向き合つ。

「・・・・どんな理由があるにせよ、戦えない者を人質にとるなんて・・人として、あつてはならない」とー あなたたちに、女神の恩恵は下されないわー！」

ティアマトは騎馬を走らせてイカナウとの距離を詰める。そして、鉄の斧を素早く2回、馬上から振り下ろす。

バシュー・ザシユツー！

「ぐ・・・てめえらなんかに、負けてらんねえぜー！」

イカナウが鋼の斧を振り下ろした場所には、もうティアマトはいない。代わりにアイクが、目の前に進み出る。

「・・・一人を返してもらおうか」

「へへ・・・いいぜ、連れてけよ。ただし・・・おれに勝てたらなああーー！」

鈍く輝く鋼の刃がアイクを襲う。アイクは、その動きをよく見て、凶刃をかいぐぐる。

「でやあーー！」

すれすれの距離で、鋼の剣の切つ先を突き立てる。刃は、見事にイカナウの体を一文字に斬り裂いた。

「バ、バカな・・・おれさまが・・・」んなやつら・・・

「よしーなんとかなつたな」

鋼の剣の血を拭つて鞘に収めつつ、アイクが言つ。ボーレも相槌を打つた。

「いや、なんつーか、おれたち強えつて」「

しかし、ティアマトが怒つて反応する。

「ボーレ、いいかげんにしなさいー！」

4人の顔を見ながら、ティアマトは言った。

「あなたたちのした事は、明らかに命令違反よ。結果よしなりい」という話ではないわ」

オスカー、キルロイが口々に謝る。

「副長、申し訳ありません」

「すみませんでした・・・」

「オスカー、キルロイ。あなたたちがついていながら・・・ふう。あなたたちの処分については、団長が戻られてからにします。とりあえず、ミスト達を探すのが先決ね」

アイクは、さつきイカナウが言っていた言葉を思い出す。

「さつきの山賊の口づりでは、向いの小屋の中に・・・」

その時だ。その小屋の方から悲鳴が響いたのは。

「キャアーッ！？」

「ミストー？」

小屋の前には、ミストとミファがいた。手足が縛られたまま、生き残りの山賊に、斧を向けられて。

「は、放して！ 放してってば！」

ミストが必死に繩をほどこうとしている。だが、硬くてとても無理そうだ。アイクが駆けつけてきた。

「ミスター……」

「お兄ちゃん！ みんな！ 来てくれたのね！？」

ヨフアは泣きじゃくっている。

「ひい・・・く・・・怖いよお・・・」

オスカーが馬から降りて進み出る。

「ヨフア！」

「オスカー兄ちゃん！？ たすけてえ・・・」

ボーレも前に出た。

「ヨフア！ おれもいるぞ！」

「ボーレ・・・！ うえ・・・ひ・・・く・・・」

「泣くな！ すぐに助けてやっからー！」

「そうだ！ しっかりするんだー！」

「・・・うん！」

アイクは斧を向けている山賊を、憤怒の田にうらんだ。

「貴様、一人に何かしてみろー。絶対に許さん！ー！」

山賊はパニックに陥っていた。

「うるせえ！ うるせえつうるせえつうるせえつーーー！ こいつらの命が惜しかつたら、とつとと武器をこいつらに放りやがれ！ でないと、この娘っ子から順に・・・ー。」

「キャッ！ いやーつーーー！」

ミストに向けて山賊が斧を振り上げたのを見て、アイクは我慢できずにもう一步踏み出す。

「やめろーーーー！」

しかし、それをティアマトが止めた。

「待つてーーー！」

「ーー？」

「んん？」

ティアマトの突然の発言に、アイク、山賊双方が不思議そうにした。ティアマトは背中に背負った鉄と鋼の斧を取り出し、田の前に放り投げる。

「・・・武器を渡すわ、ほり」

「へ・・・へへついい心がけだぜ、女あ！」

「副長・・・」

オスカーが残念そうに言つたが、ティアマトは静かに返す。

「二人を助けるためよ。みんな従つてちょうどだい」

「はい・・・」

オスカーは鉄の槍を、

「くそつー！」

アイクは鉄と鋼一本の剣を、

「ちくしょうつー！」

ボーレは鉄の斧を地面に放り投げた。

だが山賊は完全におかしくなっていた。

「くくく・・・よーし、これでおまえらは丸腰だ。つまり、おれが今このガキを仕留めるのを見ていることしかできぬーってわけだあ！！！」

「何ー？」

「はははは！死ねえええ！」

山賊がヨファめがけて、斧を振り降ろし・・・・・！

「がつふつ・・・・・！？」

突然、山賊は倒れ込んだ。ヨファも。

「うーん・・・」

ミストが、心配する。

「ヨファ！？ しつかりして！」

ボーレが大急ぎでヨファのもとに駆けつける。

「ミ、ミスト！ ヨファは・・・」

「大丈夫、気絶してるだけ・・・。けがはないよ」

「ふう・・・びっくりさせんなよ・・・」

オスカーとキルロイがミストとヨファの縄をほどいている間、アイ

クは山賊の死体を調べた。

ちょうど眉間に、一発の矢が突き刺さっている。

「こいつ、死んでいるな？　この矢は一体誰が……？」

すると、聞き覚えのある声がそのアイクの問いに答えた。

「眉間に一発必中させる達人技！　オレさま以外にいねーだらうがよお？」

「その声は……！」

すぐそばの茂みから一人の男が現れた。

赤紫の髪を後ろで縛り、緑の皮鎧を身に付けた、鋭い目をした方が、シノン。ひねくれ者だが実力は確かだ、傭兵団の狙撃の達人である。「」の腕ではもちろん、作る方に関しても超一流の腕前を持っている。

ちなみに、ジョルジュやクレインなどと同じく恒例のイケメンスナイパーである。

金髪を短く刈り込み、青くて重厚な甲冑に身を包んだ方はガトリー。傭兵団の中で唯一の重歩兵で、戦いのときは前線に出て味方を守る盾となる。シノンの舍弟で、よく一緒に行動することが多い。

ちなみに、ロジャーやサウルなどと同じく恒例のナンパ野郎である。

「感謝しろよ、ガキ共」

シノンがそう言つてから、ガトリーはイヤイヤ言こながりつてき  
た。

「ひ・・・ひでえよ。副長もシノンさんも・・・。おれの鎧じゅ  
そんなんに速く、走れ、ねえってのに・・・」

「シノン、ガトリー！」

「じゃあ、ティアマトさんは・・・」

アイクとキルロイが口々に言つてこ対し、ティアマトが答える。

「もちろん、街に出ていた一人を援軍に呼びに行つてたのよ。無駄  
にならなくてよかつたわ。御苦労さま、二人とも」

シノンは満足そうに言つ。

「ま、おこしいところをいただけなんだ。急いできた甲斐はあった  
やう」

ガトリーはじつは納得できなさうだ。

「お、おれは・・・しんどかった・・・だけ・・・なんすけど・・・

」

「お兄ちやん!」

縄が解かれたミストは、アイクの方に飛び込んできた。

「ミストー、よくがんばったな。怖かっただろ?」

するとミストは、その言葉を少し肯定するが・・・。

「うふ・・・うひふー!」

すぐに対応した。

「だつて信じてたもん。お兄ちゃんとみんなが、助けに来てくれるつて。わたし、信じてたからー。だから、全然平氣!..」

「そつか・・・」

最後にティアマトが全員をまとめた。

「ああ、みんな! 皆で帰郷しましょ! まつたく・・・大変な一  
日だったわね・・・」

丘の上から見る辺りの景色は、もう夕暮れ時だった。

(俺は、傭兵团の命令違反の行動をとった。もちろん、ミスト達を思つてのことだったが、どんな理由があるにせよ、違反は違反だ。

どんな罰が下るのか・・・でも、ミストとヨーファを助けることは出来た。先日、炎上する民家から、村の子供も救い出すことができた。  
・・・俺のやったことに、後悔はしていない

## 2章 ～救出～（後書き）

予想以上に長くなってしまった><；

次回は、「3章：海賊討伐」です！今回戦いでは登場しなかったシノン、ガトリーが活躍しますので、シノン、ガトリーファンの方はお楽しみに～

ちなみに、俺はシノンファンです！！

### 3章 ～海賊討伐～（前書き）

イカナウ山賊団との戦いの翌日、アイク達命令違反を犯した団員4人は、帰還した団長グレイルに食堂に呼び集められる。

4人ともお互いをかばい合つて罰則を一人で受けようと主張したが、グレイルは厳しく全員10日間の謹慎処分を言い渡す。しかし、仕事の依頼が立て込んでいるということもあり、謹慎処分はひとまず保留となつた。

傭兵团に立て込んでいた依頼は2つ。

片方は近くの小さな港町「タルマ」での海賊討伐任務。そして、もう片方はクリミア王国西方の都市「カタオール」の街で暗躍する、盗賊団の討伐任務だ。

ティアマト、シノン、ガトリー達が先日街に出かけていたのも、盗賊団の調査のためである。

グレイルとオスカー、ボーレ、キルロイは、カタオールの盗賊団の討伐に、ティアマトとアイク、シノン、ガトリーは、港町タルマの海賊討伐任務に、それぞれ一手に分かれることになった。

### 3章 ジャングルの海賊討伐

「港町タルマ」

港町タルマは、クリミア王国北西に位置する小さな港町である。古くから漁業を主体とした一次産業を続けてきている。目の前に広がる海の眺めが美しいことで有名で、近年は観光分野にも力を伸ばし始めているらしい。港町の一角には、「街に近い・安い・サービスいい」で評判の、酒場を兼ね備えた宿屋もあつたりする。

だが、そんな美しい景観を遮るように、大きな帆船が港に停泊している。真っ黒い帆にはドクロマークが描かれ、船の上にも町の中にも、バンダナを身に付けた男たちがうろついていた。

海賊船である。

「あれが、海賊の船ですね？」

町にたどり着いたアイク達は、この町の町長に話をつかがっていた。ティアマートの質問に、老齢の町長は困り顔で答えた。

「そうじゃ。数日前からああして居座つて、嫌がらせを続けてるんじゃよ。おまえさんたちの力で、何とかあいつらを追い払ってくれんかのお・・・」

「分かりました。全力をつくします」

「すまんのぉ・・・」

ティアマートが力強く答えたのを聞いて、町長は集会所に戻つていつた。

シノンがその後ひ姿を流し田で見やり、つばを吐く。

「海賊退治なんぞ、オレにかかるひ朝飯前だ。適当にやつて、さつさと帰らうぜ」

ガトリーもかなりやる氣の様子で、ティアマートに進み出す。

「副長！作戦は例のやつですかね？」

アイクはその『例のやつ』とつものがよく分からなかつたため、ガトリーに聞く。

「例のやつ？」

「ああ。おれが体張つてあの船のはじいを塞いでいる間に、シノンさんの弓で数を減らすんだ。そして、結構減つてきたら副長とアイクが船に乗り込み、残りを叩いて敵将を討ち取る！・・・ってわけ」

「なるほど」

ティアマートもその作戦を認めた。

「そうね、特に問題ないでしょ？・・・じゃあ、準備はいいわね？グレイル傭兵団、出撃よーーー！」

その掛け声に、シノン、ガトリー、アイクは応じて、町の中にひづりつく山賊たちに攻撃を開始する。

「ブヒヒヒ、腹減ったなあ・・・」

海賊船の船室の上に、赤いバンダナを身に付けた太った男がいた。丸い腹を手でさすりつつ、手斧を砥ぐ。

彼がこの海賊団のキャプテンである、ヒブッディーという男だ。

・・・どうでもいいが、「FE 新・紋章の謎」の4章に出てきたマケドニア・バイキングのボス、「ガイル」と、ものすごく顔が似てる・・・。バンダナ付けてるし、海賊だし、太ってるし・・・。

その時、船室のドアが開き、中から桃色の髪をした少女が飛び出してきた。ヒブッディーに向け、叫ぶ。

「わ、私をだましたのね！？」

するとヒブッディーは手斧を砥ぐのを止め、少女の方を向いて笑う。

「ブヒヒヒ、だますってなあ、人聞きが悪いなあ。な、兄弟？」

ヒブッディーの横にいた海賊も、それに応じて笑う。

「やうつすね。おれたちは正直者の海賊つすからね」

少女はそんな一人に、悲しそうに泣く。

「兄さんの居場所を知つてゐるから、わざわざこの船まできたのに……」

ヒブッディとその部下は、相変わらず気持ち悪い笑いで答える。

「知つてゐたあ。しばらへこの船にして、それから……どうなつたかなあ、兄弟？」

「あの男、文無しだつたつすからね。身ぐるみ剥いで、海に放り込みましたよ。うひやひやひや」

「ひ、ひどい……！」

少女は泣きそうになりながら、声を絞り出す。だが、それに対して部下の海賊は逆上した。

「ひどいのはどっちだあ！？　てめえの兄貴はな、博打で負けたんだよ。負け分は払つてのが、道理つてモンじやねえのかい！？」

怒る部下を、ヒブッディがなだめる。

「まあ、カツカするな、兄弟」

「チツ……」

そして、桃髪の少女の方に、下卑た目線を送る。

「いづして妹が来てくれたんだ。兄貴の借金分……あんたが返し

てくれるんだろう?」

少女は怖がりつつも、気丈に返す。

「わ、私に指一本でも触れたら、ただじやすまないわ! ケダモノ・  
・・・!」

船の下では、戦闘が起きていた。

「やあーーー!」

ドカッバシュー!!

ティアマートは素早く鉄の斧を2回振り回し、アーチャーを倒す。

「ぐはあ・・・つ、つええ」

「町の連中め、余計なことしゃがつてーー!」

剣士が鉄の剣を振り上げてガトリーに斬りかかる。

ガキンッ!!

しかし、鉄の剣<sup>じ</sup>ときの一撃は、彼の重厚な甲冑には全く通じない。

「残念つすね・・・全然そんな攻撃通じないつすよー。」

ザシユツ！――！

ガトリーが繰り出す鉄の槍の攻撃で、剣士は倒れ込んだ。

「ぐおー!?」

「アイク！今がチャンスだ！――！」

「分かつた。・・・でえい！――！」

前方に鉄の剣を振り抜き、剣士を斬り裂く。

「ギヤアアア・・・・」

「・・・ほら、かかつて来いよ」

シノンは、『兵にもかかわらず前線に飛び出して敵を挑発する。やはり、挑発に乗った斧を持った戦士がシノンに襲いかつた。

「へへ・・・挑発したことを後悔しな。確か『兵は、接近されると反撃できねえんだつたなあ！――！」

ブウン！・・・サツ！――！

しかし、戦士が放った鉄の斧による一撃は全く当たらない。

攻撃をかわしたシノンは、距離をとる。そして、鉄の弓を構える。

「後悔するのは、あんたの方だぜえ？」

ヒュン！　ズシャ！

「ぐわ・・・なんてこった・・・」

「けつ、どいつもこいつも、大して強くもねえ。準備運動にもなんねえぞ・・・」

シノンは退屈しのぎに、町の一角に見つけた酒場に入る。入口には、「街に近い、安い、サービスいい！」の看板がかかっている。どうやら、宿屋も兼ね備えているみたいだ。

店内には、大勢の客でごった返していた。まさにすし詰め状態といった感じだ。

「おーおー、これはどいつもことだー!?」

「キャンセルの受付はこちりでーす！ー！」

「金返せ、このやうつー。」

「お、お客様、申し訳ありません！　ただいま海賊が・・・」

どうやら、海賊が居座っている影響で店と客たちが揉めていくようだ。シノンは面倒なことは嫌いなため、速やかに踵を返そうとする。その時、突然腕をつかまれ、聞かれた。

「君は、この町には詳しいのかな？・・・この町はずいぶんと騒が

しいね。ここに来るのは初めてなのだが、いつもこんな感じなのか  
な?」

シモンは自分をつかんだ相手を見てみた。身長はほほ回じで、このあたりではあまり見られない褐色の肌をしている。白にほんの少し青を混ぜたような色の髪で、入れ墨なのか、顔には模様が描かれている。服装から察するに、どうやら旅人のようだ。

「……あんた、だれだ?」

そう聞くと、褐色の肌の男ははぐらかす。

「……ただの旅人だよ。宿をとりたいのだが、どうにも店の対応が悪くてね……困ってるんだ」

「なるほど。あんたは知らねえみてえだなあ?たった今、この町は海賊どもが暴れまわってるんだ。きっと宿が取れないのは、そのせいだと思ひせえ?」

「ああ、そういうのだったのか」

男は合点がいったようだ。それから、シモンの背中に『矢立で、やうに皮鎧を見て、聞いてくる。

「君は見たといふ、傭兵のようだけど……もしかして、海賊退治に雇われたのかな?」

「けつ、あんな海賊ども、オレさまの相手にするなんねえぜ。確かに雇われはしたが、まあすぐにでも終わると思ひせえ?」

「やつぱみやうか

すると男は、背中に背負った袋からビンに入った薬を取り出す。中の液体は、水色に輝いていた。特効薬という薬で、飲むとどんな怪我もあつといふ間に治るといつぱいものだ。

「だつたらこれをあげるから、出来るだけ早く海賊を町から追い払ってくれないかな？宿が取れなくて困ってるんだ。・・・頼むよ」

（何なんだ、あいつは？）

妙に親切な、あの男のことを不審に思いながらも、シノンは戦場に戻つていった。

「じゃあ、やつそく例の作戦いきますね、シノンさん！」

ガトリーが槍を振り上げ、シノンを呼ぶ。もつすでに町の方は制圧が済んだため、これから船の方の攻略に乗り込むのだ。

まずガトリーが縄ばしごを登りだす。鎧も含めるとかなりの重量だが、縄ばしごは丈夫で切れなかつた。

「さあ、海賊ども！ かかるべるがいい！－」

縄ばしごを背に、ガトリーは立ちふさがつた。

手斧が飛び、矢に射掛けられ、鉄の斧がガトリーを襲う。だが。

「全然、効かないっすよーー！」

ガトリーは全ての攻撃を受け止めてみせた。そして、鉄の槍による反撃を浴びせかける。

「シノンさん、後は頼んだっすー！」

「けつ、・・・てめえら、覚悟しろよお？」「

ヒュンヒュンヒュン・・・！ ズカカカカカカーー！

「おわー！」

「ああー！」

「ひ、へじる・・・」

シノンは矢の雨を降らせば、船上の海賊を一網打尽にする。後には敵は残っていなかった。

「シノン、ガトリー。御苦勞さま。・・・じゃあアイク、早速乗り込むわよー！」

ティアマートは馬から降りて、アイクを呼ぶ。

「ああ」

アイクとティアマトも、繩ロープを登つていった。

船の上では、さつきの桃髪の少女が海賊たちに襲われていた。手にした細身の槍で、必死に海賊に対抗する。

「へへっ、姉ちゃん・・・ペガサスがいねえんだたら、本当に何もできねえんだな?」

「ペ、ペガサスがいなくても・・・私は戦えるわ!」

槍を振り回して、海賊を倒す。だが、相手の方が数では勝っていた。

「くわくわく・・・お兄さんの借金、体で払つてもうけぼー!」

「ち、近づかないで!」

そんな様子を、ガトリーが見つけた。

「!? あいつら、可憐な乙女になんてことを・・・! 待つて下さい、今助けに行くつす! !」

アイクも、それに気付く。

「海賊たちめ・・・許せん!」

ティアマト、シノンもそれに続いていった。

ガトリーが吠える。

「おい、お前らー。その子から離れるーー！」

「あ～ん？ なんだてめえは。邪魔すんじゃね・・・ぐおーー。」

いきなり海賊が倒れる。眉間に矢が突き立っていた。当然、射たのはシノンしかいない。

「見たか？ オレさまの達人技！」

「く・・・くそ！ おい、お前ら、かかれやーー！」

他の海賊たちも反撃に乗り出す。

それに対し、アイクとティアマトが応戦する。

「ええいーー！」

ブンブン・・・ドグシャア！

ティアマトは馬から降りての戦いも慣れている。無駄のない斧さばきで、海賊たちをなぎ倒す。

「・・・はあつーー！」

アイクはジャンプをして、大上段から海賊を叩き割る。最近、実戦

の口ツも何となく分かつてきた気がする。

辺りの海賊はいなくなつた。アイクとガトリーは、さつき襲われていた少女のもとに駆け寄つた。

「おい、大丈夫か？」

「しつかりするつですよ……」

少女はひどいがをして氣を失つていた。アイクとガトリーが必死に呼びかけると、ようやく目を覚ます。

「え・・・あ、あなたがたは・・・？」

すると、ガトリーが先に自己紹介を始めた。

「おれはガトリー！　町の人たちの依頼で海賊と戦つてた、無敵の傭兵つす。で、こっちがおれの後輩つす」

少女は目をぱちくりさせて、聞き返す。

「私を・・・助けてくれるんですか？」

今度は、アイクが答えた。

「当たり前だ。ここは俺達が引き受けるから・・・その隙に、あんたは逃げる！」

少女はその言葉に、とても感謝した。

「ありがとうございます……！ 私、私……なんてお礼したらいいか……」

ガトリーは話し相手を取られて、かなり残念そうしている。それには気付かず、アイクは答える。

「……いや、気にしなくていい。どうせ仕事のついでなんだし」

「でも、本当に助かったから。何か、お礼したいです！」

「……そう言われてもな。……ん？ それより、あんたひどい怪我してるだろ」

「あ、はい……」

アイクは腰みの中を探り、薬が入ったビンを取り出す。さつきシノンが謎の男からもらい受けた、特効薬だ。

「これをおんたにやる。早めに怪我は治した方がいいぞ」

「えー？ で、ですが……こんな高価なもの、いいんですか？」

「命には代えがたいだろ？ いいから、受け取ってくれ」

「本当に句かじりまで……ありがとうございます……！」

少女が特効薬を飲み込むと、あのひどい大怪我が全て瞬時に治ってしまった。特効薬はまだ余っていたが、アイクはそれを全て少女に渡す。

別れ際、少女はアイクの方を振り返った。

「じゃあ・・・またお礼伺います！　お名前を教えてください、お願いします！！」

「・・・アイク。グレイル傭兵团の一員だ」

それを聞くと、少女は嬉しそうに手を振る。

「アイクさん・・・！　私、ベグニオン聖天馬騎士団のマーシャです。覚えておいでくださいね！　では、これでー！」

マーシャと名乗った少女は、繩ばじーを降りて行った。

「・・・おー、アイク・・・」

半分泣きながら、ガトリーがアイクを呼び掛ける。

「ん？　どうしたんだガトリー？」

「『どうしたんだ』じゃねえよー！　どうしておれの出番を横取りするかなーもー！！・・・せつかくかわいい『見つけたのに・・・

「・・・」

アイクは相手にせず、その場を後にした。

「絶対あれって運命の出会いだとおも・・・ってアイクへ置いてく

なよーー！」

船の船尾では、ティアマトとシノンが海賊のボス、ヒップディーと対峙していた。

「ブヒヒヒヒーー！こいつおお笑いだ！このヒップディーをまに勝てるつもりでいるのかなあ？」

ティアマトはヒップディーに静かに囁く。

「町の住民から奪つた物を返し、ここから出て行きなやー」

だが、ヒップディーは全く聞かない。

「ブヒヒヒヒーー！やなこつたあ。ちよこと齧してやれば、金でも食いもんでも手に入るんだ。こんな楽な商売がやめられるかよー！」

「そう・・・だったら力づくでへぐらめよーーー！」

鉄の斧片手に、ティアマトはヒップディー目がけて突っ走る。そこにはヒップディーは手斧を投げつけた。

「ブヒヒヒーー！近づく前に倒しちまつてやりあーーー！」

ヒュルルル・・・ドカツーーー！」

「く・・・つーーー！」

だが、ティアマトはうまく受け流す。手斧は再びヒヅツ・ディの手に戻っていたが、ティアマトはもうすでに射程圏内に入っていた。

「やあああ！」

ブン、ザツシャ!!ドカツ!!

「ひいツ！？」

そして、離れた場所から狙いを付けていたのがいた。シノンだ。

「けつ、気分悪いぜ・・・あんたのせいでいろんな意味で、船酔いしたか、も・・・な！」

ルコウ・・・  
ズシャーー!

「 ブヒイ ・・・ 助けてくれえ ・・・ 」

シノンが射た矢はやはり、ヒヅッディの眉間に刺さる。こうして、海賊討伐任務は無事に終わった。

「海賊は全て掃討しました。これでもう、町の人に危害を加えることはないでしょう」

全員で、町長のところへ報告に行く。町長はすでに報酬金を用意し

ていたみたいだ。

「おお！ 助かったぞ。」これが、約束の報酬じや

まあ、小さな港町だからそれほど額はないのだが……。

「あつがとうござります。また、お困りのことがありますら、いつでも」依頼ぐだわこ

報酬が入った袋を受け取りながらティアマトが言ひ。町長は、先ほどの戦いを思い出して独り言を始める。

「もちろんじや。しかし、しかし、あんたらの戦いぶりは見事なもんじやつた。いやな、団長のグレイル殿が来てくれるもんじやと勝手に思い込んでおつたからな・・・あんたら若い者だけで大丈夫かと、実のところ心配しておつたのじや」

そつ言われて、ティアマトはまつとなる。依頼する側は、人を選ぶことができないといつ問題結じ。

「それは・・・申し訳あつませんでした。団長は別の仕事についておつまして・・・」

すると町長は、すぐに自分の意見の続きを言ひ。

「いやいや、どうして。いつも無事、奴らを追い払ってくれた。予想以上の活躍ぶつじやつたわい」

「お褒めに預かり、光栄ですわ」

町長は、少し思案顔になる。

「あんたらぐりの腕があれば、王宮騎士に志願しても十分通用しそうなものじや。特に団長のグレイル殿は、そいぢらの将校よつも、よつほど腕が立つ。なにゆえ海賊退治のような、地味な仕事をいておられるんじやひつな？」

「それは・・・」

ティアマトは突然の質問に、返事に困つてしまつ。

「こや。おかげでわしらは助かつとるんじやが・・・じやがな、団長殿もあんたらも、真に活躍出来る場所はクリマニア王國にてあるんじやないかと・・・わつ思つたまでの話じや」

「・・・団長も私たちも、今の生活で満足しますか？」

そうティアマトは答えたが、じつに歯切れが悪い。だが町長は、そんなこと気にしなかった。

「まつたぐ、欲のなことじや。でも、また用ができたら使いをやるでな、よろしく頼むぞ」

「ティアマト、どうかしたのか？」  
町長が去つた後も、ティアマトはまだ何か考えていた。  
アイクは気になつて声をかける。

「いえ、何でもないわ。とにかく、任務完了よ。みんな、よくやつてくれたわ」

シノンは、どうも不機嫌そうしている。

「けつ、ここの程度の仕事、暇つぶしにもなりやしねえ。わざのジ  
ジイの言い草じゃねえが、もつとオレたちにふさわしい仕事つての  
があると思つんだがねえ」

ティアマトはその言葉に、シノンをとがめる。

「シノン…」

「冗談だよ、じょーだん」

だが、しまいにはガトリーまで真剣な顔をしてシノンの意見を支持  
し出す。

「でもせ、ティアマトさん。真剣な話…おれたちの仕事つてさ、  
なんつーか、こいつ…ちよつとじょ、ほくないですか？」

「… ガトリーまで、何を言って出すの…?」

「だつてさ~おれたち本当に腕が立つし。ただの傭兵でくすぶつ  
るのつて、もつたいない逸材なんじゃないかな~つて、シノンさん  
とも、よく話してるんすよね」

ティアマトはそれを聞いて、とても残念そうに囁く。

「…・・・せう。あなたたちは、団長のやり方に不満があると…・・・  
そう言いたいわけね?」

ガトリーが慌てて弁解する。

「わわわー、いや、そのー！ 別にそんな意味じゃあ・・・」

アイクは彼らの会話をずっと聞いていたが、どうにも違和感を感じた。思い切って、ティアマトに聞いてみる。

「・・・どうしたんだ、ティアマト？」

「何が？」

やつぱり、何か変だ。ティアマトがこんな風に言ひなられて。

「そんな物の言い方、いつものあんたらしくない」

ガトリーも賛成してきた。まあ、普段から優柔不断なやつだが。

「そ、そ、うすよ。アイクの言ひとおりすー。」

ティアマトはしばらく黙っていたが、ようやく口を開いた。

「・・・わたしは、ただ・・・人の役に立つ仕事をやつしていることに、誇りを持つてほしかっただけ・・・。地位や名声を得られない仕事には価値が無いって、そう言われた気がして・・・悪かったわ

ガトリーも反省して謝る。

「いえ、おれたちも悪かったっす」

暗くなつた空氣を変えるように、ティアマトは明るく言った。

「・・・そろそろ帰還しましょう。休息も任務の一環よ。次の戦いに、疲れを残さないよ！」

ちゅうどいに感じて、ガトリーの腹が盛大な音を立てる。

「がつてん！おれ、もう腹ペコりますよ～」

ティアマトが騎馬の準備をしていて、アイクは少し言いたいことがあったので言いに行つた。

「ティアマト

ティアマトは手綱を結びつける手を止めて、蒼い髪の少年を向く。

「なこ、アイク？」

「ティアマト、誇りなは、ある

「ー。」

そう言ひアイクの姿はなぜか、たつた数日前よりも一回りたくましく見えた。

「俺は、この傭兵団の・・・親父やティアマトが守つてきた、グレイル傭兵团の一員になれたことを勝手に思つてこむ。・・・それだけだ」

そう言つと、アイクは再び歩き出してしまつた。

「アイク・・・」

「けつ、甘い奴らばつかりだぜ・・・」

シノンは、どうもこいついうメンバーと行動するのが苦手なようだ。ガトリーにはなぜかなつかれていが、他の連中のことはどうしても好きになれない。

(グレイル団長・・・)

ただ一人、グレイルだけは尊敬していた。

(あの人は、オレを救つてくれたんだ・・・)

### 3章～海賊討伐～（後書き）

今回はメンバーががらりと変わって、シノンやガトリーが仲間として戦ってくれるお話でした。オスカーとボーレもいいけど、こういったキャラの話もやはり好きです。

さて、次回ですが・・・

4章・・・ではなく、次回は完全にオリジナルストーリーが入ります

題して、「3章外伝：カタオールの街で」です！

次回の主人公はまさかのグレイル！？

どうぞ、お楽しみに！

### 3章外伝 ～カタオールの街で～ 前編（前書き）

アイクやティアマト達が港町タルマでヒブッディ海賊団と戦つていたまさに同じ時間に、グレイルら別の傭兵团のメンバーはもう一つの任務を行つていた。

クリミア王国西部の、カタオール地方。この地の中心部である都市カタオールでは近頃、凶悪な盗賊団が暗躍していた。当初はただ盗みを働くだけであった彼らは次第に勢力を拡大させ、殺人や強盗、さらには放火などまで行うようになつていた。

カタオール地方の領主であるカタオール侯は重い病気を患い、彼の一人息子であるシユロキもまだ若さゆえに政治能力は持たない。そんな背景もあってか、街を荒らす盗賊団の悪行は留まることを知らなかつた。

グレイル、オスカー、ボーレ、キルロイの4人は、カタオール侯の側近からの依頼で、盗賊団の討伐にやつってきたのであつた。

### 3章外伝 ～カタオールの街で～ 前編

～カタオールの街～

「すげえ・・・！」

ボーレが、感嘆の言葉を口から紡ぎ出す。

「これが、街ってところか～！～」

ボーレは、いわゆる大都市と呼ばれる街に足を踏み入れるのは初めてだった。

石畳で舗装された道に並ぶ、街路樹と街灯。周りを見渡せば様々な商店が店を開き、威勢のいい声が聞こえてくる。道ゆく人は皆様々な格好をした町人たちで、たまに白い鎧を身にまとったクリミア兵が見回りをしているのも見かける。

道の先には、立派な建物が見える。あれが、カタオール城らしい。

「ボーレ、街に来るのが初めてでも、そんなにはしゃぐなよ？」

オスカーが弟であるボーレに諭す。彼は元クリミア騎士ということもあり、街というものには慣れていた。

「分かつてゐるつて、兄貴」

キルロイも、街に来るのは初めてだ。さつきから落ち着かずに、あ

たつを眺めながら見回していく。

「ナビ、やつぱつすゞこなあ・・・みんな、すゞく楽しそう」

グレイルはただ、一言もしゃべらずに全員の先頭を歩き続ける。舗装された道を何度も曲がっていへりへり、彼らはとある古びた建物の前にやってきた。

グレイルはその建物の前で立ち止まり、全員に振り返って作戦の説明に入る。

「わて・・・ティアマト、シノン、ガトリーが事前に調べた情報によると、今回の討伐対象の盗賊団はこの建物の中を拠点に活動しているらしい」

オスカーが聞く。

「この建物ですか？・・・入口が見当たりませんが・・・

すると、グレイルが答えた。

「フツ、わざわざ盗賊団を名乗る連中が、正面で出入りするわけ無かりう？どうも連中は、秘密の通路を通りてこの中に入っているらしいのだ」

ボーレも首をかしげる。

「通路？ 一体そんなものが、どこ・・・

「まあ、ついてこい。」ハチだ

グレイルの言うとおり、一行は建物の横に向かつ。すると、そこにはいかにも怪しげなレバーが壁から突き出していた。キルロイが疑問に思う。

「団長、これですか？　・・・怪しすぎる気がするのですが・・・」「まあ、確かに怪しい。だが、報告によるとこれは手の込んだ仕掛けのようだ」

グレイルはポケットからメモ用紙を取り出した。

「・・・レバーをまず左いっぱいに動かし、2秒待つてから中央に。そこから2秒待つて、再び右に動かせば、入口が開く・・・か」

ティアマト達が仕入れた情報である。グレイルはその通りにレバーを操作した。

すると、レバーの横の何の変哲もなく見えた壁が、突然向こう側に開いたのだ。こうやって入口が開くように、工夫されていたらしい。

「す、じ、な、・、・、盜賊にしてはなかなか工夫している」

オスカーは感心した。それに、これくらい入口が大きければ馬に乗つたまま中に入れそうだ。

「しばらくすると入口は閉まるから、グズグズしてないで中に入るぞ！ 各自、戦闘の準備もしておけよ」

グレイルの指示で、全員武器を構えて中に入つていった・・・。

中は、とても暗かつた。少し先が全く見えない。

「索敵か、厄介だな・・・」

グレイルはそう呟いた。索敵とは、辺りが暗かつたり霧が出ていたりといった、視界が悪い環境のことを言う。敵に対してもこちらが見えにくいことは変わりないが、こちらからも当然近付かなければ相手が見えない。

なにより、今回は敵は盗賊を中心の勢力。夜目が利く盗賊側の方が、圧倒的に有利なのである。

「みんな、むやみに前に出たりするな。必ず固まって行動するようにな。特にキルロイは打たれ弱いから気を付けるんだ」

「はい！」

「分かりました」

「気をつけます！」

「お？・・・て、敵襲だーー！」

どうやら、盗賊たちがこちらに気付いたようだ。急に足音が聞こえてくる。音の大きさからすると、結構大勢のようだ。

ボーレは斧を抱きつつ、辺りを見回した。と、その時！

「死ねえーーー！」

軽器（盗賊などが戦いのときに使用するナイフの類）のナイフを逆手に持つた盗賊Aが、いきなりボーレの右側から飛びかかってきた。もちろん対処できるわけもなく、ボーレはナイフで切り傷を負う。

「ちくしょう！　いきなり襲いかかってきやがってーーー！」

ボーレは斬り裂かれた腕を見て、つばを吐きかける。そして、斧を振り下ろした。

スカツ・・・！

「そんな遅い攻撃、当たらぬわ！」

スパン！

「く・・・くそお・・・！　相手がよく見えねえ・・・」

「ボーレ、しつかりして！　・・・ライブ！ーー！」

キルロイが駆けつけてきて、杖でボーレの治療をする。

「助かつたぜ・・・！？　おい、キルロイ後ろーーー！」

「えーー？」

ボーレは、キルロイの後ろに回り込んだ盗賊Aを見つける。盗賊Aは、キルロイを今まさに斬りつけようとしていた。

「やせるかつ……」

盗賊Bを何とか倒したオスカーが、馬を走らせてキルロイのもとにはやての如くやってくる。

ヒコンヒコン・・・ザシユ！

「ぐあ・・・しまつたあ・・・」

盗賊Aの断末魔が、暗い建物の中に響いた。

キルロイはオスカーに感謝する。

「オスカー、本当に助かったよ。・・・僕は戦えないから、もっと周りを見ないといけなかつたな・・・」

「いや、とにかくキルロイが無事でよかつた」

ボーレはさつきオスカーが倒した盗賊Aを調べていた。そして、声を上げる。

「おい、こいつこんなものを持っていたぜ！」

ボーレが手に持っているのは、先端に黄色い玉が付いた杖。黄色い玉は、ほのかに光をたたえていた。

キルロイが、嬉しそうにそれを見る。

「ボーレ、これは『トーチの杖』だよ！ トーチは、光を起こして

辺りを明るく照らす魔法だ。僕なら、たぶん使えると思つから、それ貸してくれる?」

「へ～そんな魔法があるんだな～。じゃあ、この状況を何とか打開できるかもしれねえな!」

その頃、団長であるグレイルは単独行動をとつていた。

「ふんっ!…」

ブンブン・・・ザツシャアア!・!

「ぎゃあああ・・・」

巨大な戦斧がうなりを上げ、盗賊が5・6人くらいまとめて吹っ飛び。グレイルは、とんでもない強さだ・・・。

「なかなかやるな・・・だが、わが剣、見切れるかな・・・?」

グレイルの目の前に、軽装の剣士が現れる。手にした毒の剣が、紫色に輝いて見える。雰囲気からすると、かなり実力がありそうだ。この盗賊団の用心棒だろつか?

(斧では剣に対して不利・・・この戦い、勝てる・・・!)

毒の剣を持った剣士は、そう確信していた。だが・・・。

「ぬん……」

ブウン・・・ドカアア！！

「な・・・に・・・！？」

グレイルはただの一撃で、剣士を真つ一つにして見せる。戦斧を持つ雾囲気からは想像できないほど、素早い攻撃で。

「こんな賊に雇われなければ、こんな最期はなかつたかもな・・・」

そう言い残し、グレイルはさらにも先に進む。

「トーチ！！」

キルロイがそう叫ぶと、トーチの杖についた黄色い玉が力強く輝いた。辺りは、まるで昼間のような明るさに包まれる。暗闇に潜んでいた他の盗賊たちの姿も、丸見えとなつた。

「す」「いな・・・」これがトーチの魔法・・・

オスカーが感心する。

「よーしー、じゃあ、早速戦闘の続きと行こうぜーーー！」

ボーレは斧を構えた。

「ぐ・・・しまった・・・トーチが奪われたなら仕方ねえ！ 生きては帰さねえ！！」

盗賊が一斉に襲い掛かった。オスカーとボーレは狭い通路でお互いに背中にキルロイを守る形で、前後の敵に対峙した。

グレイルは、最深部の小部屋にたどり着いていた。かがり火が燃えていて、奥には玉座のようなものが置いてある。そこに、一人の男がいた。

「貴様ら、一体何者だ！ なぜこんな場所に入り込んだあー？」

男は必死の形相でグレイルを見た。グレイルは静かに答える。

「力タオール侯の側近からの依頼で、あんたたちの討伐にやつてきた、グレイル傭兵团だ。もしあんたたちが武器を捨てて盗んだ物を全て返すというのなら、命だけは助けてやろつ。・・・その場合、城に身柄を引き渡すことになるがな」

だが、男は応じなかつた。いかにも切れ味鋭そうな軽器を手に、叫ぶ。

「ぐ・・・傭兵だか何だか知らねえが、このガンドルフ様がそんな真似でもすると思つたか！」

男はガンドルフという名前らしい。

暗くてよく見えなかつたが、手にしている軽器はおそらく、今のと

ころ最新のもののようだ。確か、「ステイレット」とか言つもので、重い鎧をまとつものに對して威力を發揮するとか……。

なお、FE聖戦の系譜にも、同じ名前の敵がいるが、関係はない。あと、なんとかフォースの力を継承してたり賢者から聖剣を奪つたりしてる某魔王に名前が似てるが、全く関係ない。

「そんな大斧、あたんねえよ……」

ガンドルフが、ステイレットを逆手に持つてグレイルに襲いかかる。だが、グレイルは戦斧を持つているにもかかわらず余裕でかわす。

「な、なに……？」

「・・・・そ、うか、戦うか・・・。ならば、仕方ない。ふうん……！」

グレイルは戦斧を頭上に掲げ、力をためる。

「せめて、一撃で終わらせてやる・・・！」

グレイルの持つ斧が、徐々に赤く灼熱し出す。どこからともなく地響きが聞こえ、あたりの空気がピリピリと震える。刃は赤から黄色、さらには白い輝きを始める。風が渦巻く。

「！？ ・・・なんだ？ 一体何を・・・！？」

そしてある時、グレイルは斧を地面に振り下ろし、「それ」を放つた。

「噴火 ウルヴァン ！！」

続  
<  
!

### 3章外伝 ↗ カタオールの街で ↗ 前編（後書き）

やつぱり、オリジナルストーリーを作るのって大変ですね><；  
ぐだぐだな感じになっちゃった；；

ちょっといろいろ事情があって、今回は2部構成にさせていただきます。あと、少し予定があるので次回の更新は遅れますので、よろしくです。

では、続きををお楽しみに♪

3章外伝 カタオールの街で 後編（前書き）

グレイルとガンドルフの対決は、まだ続いていた。

### 3章外伝 カタオールの街で 後編

焦げたようなにおいが、部屋を満たす。グレイルが斧を叩きつけた床には、焼けた石材が穴を開けていた。グレイルが持つ戦斧は、いつの間にか元通りとなっている。

「あ・・・ああ・・・・・」

Gandalfは、「噴火」のあまりの威力に、腰を抜かしていた。スティレットを取り落としたことにも気付かずに。

「・・・さあ、これでも、まだ抵抗するつもりか？」

Grailは静かにGandalfに聞きながら、戦斧を再びGandalfに向ける。

「い・・・いやだ・・・死にたく・・・ないです・・・」

震えながら、Gandalfはからうじて答えた。

「よし、それなら、おとなしく捕まるがいい。カタオール侯は人情に厚いから、それほどひどくは扱わないだろう」

「・・・な、何だ？」

噴火による振動は、オスカー達のもとにも届いた。おおかた敵を倒した後だつたため、3人は音がした方を目指して移動を始める。

開けた場所に出ると、そこにグレイルがいた。グレイルは敵の首領とおぼしき男の武器を取り上げ、縛り付けている。

「団長、こちらの方のせん滅は完了しました。……その人は？」

オスカーが聞く。

「『J』の盗賊団を率いていた首領だ。討伐ではなく、あえて逮捕という形に持つてござつと思ってな」

「なるほど……確かに、その方が更生とかも期待できやうですしね」

キルロイが感心した。

「盗賊団の討伐と首領の逮捕に『J』協力いただき、ありがとうございました！」

出迎えに来たクリミア兵にガンドルフの身柄を預ける。クリミア兵は身柄を受け取り、代わりに謝礼金を渡した。大きな街を収める諸侯からの依頼ということもあり、金袋はかなりの重さだった。

「いや、俺たちは仕事でやつただけのことだ。まあ、これでこの街はまたしばらく安全になるかもな」

グレイルはそう答えた。すると、クリミア兵は何度も振り返りつつ、

城の方へ帰つていった。

「よし・・・予想以上に早く仕事が片付いた。もう日暮れのようだし、今日はこの街に泊まるとして」

グレイルは団扇にそう伝えた。ボーレは皿を輝かせてグレイルを見る。

「え、本当ですか！　じゃあ、ちょっと街を見に行つてきていっすか？」

ボーレにとって、街というのは初めてだつたからだ。

「ああ、もちろんだ。宿は街の入り口のやつだから、あまり遅くならうとうちに合流するように！」

「ありがとうございますーー！」

グレイルは珍しく、自由行動を許す。

「オスカーとキルロイも、自由に行動していいぞ。こんな経験は、なかなかできないからな

「あ、はい。ありがとうございますーー！」

「では、ボーレと一緒に行動していますね」

3人が喜びながら雑踏の中に消えていくのを横目で見てから、グレ

イルは歩きだす。そして、一人で考え方をする。

(アイク・・・まだまだ、半人前にもならない息子よ・・・)

アイクのことについて、考える。

(お前の人生の行く先は、きっと困難に満ち溢れるだらう。そしてそれは、決して逃げることは出来ない)

辺りは見る見る暗くなつていぐ。道にともされる街灯にも、灯がともり始めた。

(俺はかつて、大きな過ちを犯した。もはや、取りもじすことは出来ない・・・)

空には、星が見え始めていた。

(剣を捨てた理由、名を捨てた理由・・・そして、俺が犯した過ち。アイク、こんな重責を担わせて、本当にすまん・・・平穏な家庭に生まれた方が、幸せな一生を過ごせたかもしれないのにな・・・)

いつの間にか、グレイルは宿にたどり着いていた。

(エルナ・・・俺は・・・)

グレイルは、過去に何があつたのだろう・・・?

### 3章外伝 カタオールの街で 後編（後書き）

短めですみません><；

次回は、「4章：街道の戦い」を予定しています。とうとう、物語  
が動き始めますよ～！  
お楽しみに

## 4章 ジ街道の戦い 前編（前書き）

海賊、盜賊の討伐任務が終わつた後も、傭兵团には次々と依頼が舞い込んできていた。だが、傭兵团の実力はかなりのもので、一人の犠牲者も出さずに任務を遂行できていた。

ある、任務が無かつた久しぶりの休日となつた日のこと・・・。

## 4章 ジュニアの戦い 前編

日を追うことに、辺りは春の陽気に包まれていくを感じる。まだ春は浅いが、確かに以前より暖かくなっている。

ヒュウ・・・・・・・・

何かが風を切つて飛んでいくよつた音に続いて、それが何かに当たる音が響く。

「やつたあー！ シノンさん見てた？ ぼく、的に初めて命中したー！」

薄い緑の髪をした少年、ヨーファが訓練用の弓を片手に、喜んで飛びはねる。横にいたシノンが、答えた。

「ああ、見てたぜ。・・・だが、まだ当てたのは初めてだろ？ 連続して命中させなきゃ、意味はないってもんだ」

「分かったよ。じゃあ、もう一度当てる見せるね！」

ヨーファは再び弓を構え、離れた場所にある的に狙いを定め、弦を引く。

ヒュウ・・・・・・・

しかし、今度は的を大きく外す。

「ああ・・・やつたあは当てたのに・・・」

ヨファはガツカリと肩を落とす。シノンは縛った髪を後ろに回しながら、声をかける。

「そうだな……射る時、もつと集中しねえと外すぜ？ 一回田つまく当てたからって、気を抜くなつてことだ。弓の持ち方とかもまだ改良するべき点はあるな」

「はい、シノンさん」

「よし！ 次はこのオレさまの達人技を見せてやるとすつか。ヨファ、その弓を貸してみる」

「え、本当！？ 見たい見たい～～！」

シノンはヨファから訓練用の弓を取り上げ、なぜか上空に向けて弦を引く。そして、矢を射る。少し間をおいて、再び弓を構えて、今度はさつき射た矢に向けて狙いを定めます。

「見てろよ、オレさまの達人技をよお？」

シノンが射た2本の矢は、空中で見事に衝突。2つとももつれ合いながら、二人の目の前に落ちてきた。

ヨファが感嘆の声を上げる。

「す・・・す！」すき・・・・・！」

「ま、お前も弓のへりこ出来るよつになれば、上等つてもんだ」

「む、無理だよ・・・シノンさんにはかなわないよ」

「おいおい、勝手に決め付けんなよ。それに、ぼくも戦ってえ、強くなりてえつてオレのもとに弟子入りしたのは、お前だろーが」

そう。ヨファはあのイカナウ山賊団にさらわれた事件以来、「ぼくも戦えるようになりたい」と考え、シノンのもとに弟子入りしたのだった。

最初は渋ったシノンだが、なぜか突然ヨファの弟子入りを認める。

と、その時。木陰に見覚えのある恰好をした人物を、シノンは見つけた。黒い髪に黒い装束。厳しい表情をした、少女にも見える小柄な少年。

「ゲツ・・・あいつセネリオ・・・。何であいつがもう帰つてくるんだよ・・・」

「お兄ちゃん、聞いてよ大ニゴース！」

ミストが叫びながら、アイクの部屋に駆け込んでくる。

「騒がしいぞ。ミスト、どうした？」

アイクが聞くと、ミストは嬉しそうに答えた。

「セネリオがね、今、戻ってきたの！」

「本当か？ 予定より、ずいぶん早いな」

「だらうねえ。なんでだろ？」

セネリオとは、この傭兵团の一員である少年だ。風の魔法を得意とする魔道士で、団の参謀役も務めている。少年とは思えないほど徹底的な現実主義者で、歯に物を着せぬ話し方から、シノンなど彼を苦手に思う団員も多い。だが、アイクに対してだけはどういう訳か、絶大な信頼をしている。

「まあ、いい。直接聞けば分かることだ。今どここいる？」

よその傭兵团に参謀の修行に出ていたセネリオだが、予定ならまだ修行を続けるはずだ。アイクはそのことを彼本人に聞こうと思つたのだ。

ミストは少し考えてから、答える。

「食堂じゃないかな？ お父さんに用があるみたいだつたし」

「分かった。すぐ行く」

食堂にはグレイルとティアマトの他に、黒い装束をした黒髪の少年、セネリオがいた。グレイルはなぜか緊張した趣で、ティアマトに伝える。

「・・・直ちに全員を集めてくれ

「了解しました」

ティアマトも緊張した様子で応じ、戸口を開けて外に出ていった。グレイルはその様子を見やり、振り返ると、アイクが来ていることに気が付いた。

「アイク！ お前もまさつとしてないで、さつさと作戦室へいけ！」

唐突に、大きな声でグレイルは言つと、そのまま奥の作戦室へ歩いて行つてしまつた。

「あ、ああ・・・。なんだよ、急に・・・」

「僕が持ち帰つた情報の報告。そして、それに対する対策を練るためです」

アイクはしばし呆然としていると、セネリオが答えた。

「セネリオ！」

「お久しぶりです、アイク。今、戻りました」

無表情のまま、セネリオはアイクに言つ。

「無事で何よりだ。だが、ビーヴしたんだ？ もつじばりく修行するんじやなかつたのか？」

「それが・・・」

すると、作戦室からグレイルの声が響いてきた。

「何をしていいー、早く来い！」

セネリオはアイクを諭す。

「とりあえず行きましょう。詳しい話は後で・・・」

二人は作戦室へ向かった。

作戦室に傭兵団のメンバーがそろつたところで、グレイルは話した。

「・・・みんなも知つての通り、よその傭兵团へ修行に出ていたセネリオが、さつき戻ってきた。・・・とんでもない情報付きでな」

作戦室に集まつたメンバー達が静かに聞き入る中、アイクが聞き返す。

「どんな情報なんだ？」

すると、セネリオは少しグレイルの顔を見る。グレイルがうなずくのを見て、セネリオが答える。

「クリミアヒーディンの間で・・・戦争が始まりました」

その言葉を聞いて、みんながざわめきました。

「せ、戦争！？ つそでしょ！？」

ミストが声を上げる。いへり子供でも、「戦争」というものがどういつものなのは分かる。つまり、互いの利益のために大勢の兵隊が殺し合つということを。グレイルは全員を静める。

「それを今から詳しく聞くところだ。セネリオ、頼む」

「はい」

「IJの地図を見てください」

セネリオは壁にかかつたクリミアの詳細図を指し示す。セネリオの指は、クリミア王国の東部の、大きな街を指していた。

「ここが、クリミアの王都メリオル」

続いて、そこからずっと西の方の、なにも描かれていない場所を指す。

「我々傭兵团のあるのは・・・大体このあたりになります」

クリミア王国は、テリウス大陸の北西に位置する国だ。セネリオは続ける。

「・・・事の始まりは、3日前の昼下がりです。ちょうど調べものがあつた僕は、クリミア王都メリオルにある王立学問所の書庫にいました。突然獰猛な獣・・・おそらく飛竜の咆哮が響いたと思うと、大きな振動が建物を揺らしました。慌てて外に出た僕の目に飛び込んできたのは、王都になだれ込む騎馬部隊、それに続く重歩兵部隊、さらには空には十数の竜騎兵・・・それらは、全て黒い鎧で身を包んでいました」

セネリオが言つ出来事は、とても緊迫した話だ。グレイルが舌打ちをする。

「ディン王国軍か」

「はい」

「兆しは?」

セネリオは席に戻り、話し始める。

「」承知の通り、クリミアとディンの関係は建国以来、順調であるとは言いかねるものでした。しかし、数百年にも渡る歴史の中で、数多の小規模な戦はあれど・・・いきなり国境を越え、相手国の王城を奇襲するようなことは、今回が初めてです」

話を聞いていたティアマトが口をはさむ。

「ずいぶん、乱暴な策だものね

グレイルは腕を組んだまま、ある人物を思い浮かべながら相槌を打つ。

「それだけに、成功すれば効果的ではある。・・・『デイン現国王、アシュナードならではの奇策といつていろだな・・・その後は?』

セネリオは報告を続けた。

「王弟レーニング卿が率いるクリミア王国軍が出撃し、徹底抗戦の構えに入りました。一般人には市街地へ退避するようにとの達しがありましたので、やむなく王都を離れ、その足でここに戻りました」

グレイルは腕組みを解く。

「現在、戦況がどうなっているかは、分からんといつことか・・・

「どうせよ、この田舎にまだ戦争の第一報すら届いておらんような状況だ。よく知らせてくれたな、セネリオ」

「いえ・・・」

グレイルが礼を言つと、セネリオは静かに返した。  
ティアマトは考え込んでいた。

「『デインのクリミア侵攻・・・』の傭兵団も、無関係といつてはいかないんでしょうね・・・」

その後しばらくの間、ティアマトとセネリオは意見を戦わせた。

ティアマトは元クリニア騎士ということもあってか、クリニア軍と協力してディエン軍と戦うべきという意見、セネリオはクリニアの勝ち目が薄いことから、座してクリニアの滅亡を見るという意見である。お互い意見を戦わせていたがラチがあかないのを見て、グレイルは待ったをかけた。

「二人とも、そこまでだ。言いたいことは分かった。まずは現状を正確につかむことだ。王都メリオルを、一度偵察した方がいいだろう」

そこまで言って、グレイルはアイクを見る。

「アイク、ここはお前に任せる。偵察部隊として、何人か連れて行け」

あまりに突然のことでの、アイクは驚いた。

「！？ 僕が？」

グレイルはアイクのことなど気にせずに続ける。

「補佐としてティアマトと一緒に…」

アイクのことが嫌いなシノンも立ちあがって、グレイルに意見する。

「冗談じゃないぜ、団長！ アイクみてえなガキに何を期待して…」

・

「よし、心配ならシノン、お前も付いて行け」

意見をしたばかりに同行を命じられたシノンは、

「げ・・・」

といいながらしぶしぶ従う。

「あとは壁となるガトリー、杖使いのキルロイ、道案内としてセネリオでいいだろ?」

あつという間に反対する声を抑えて、グレイルは決定をせてしまう。アイクはそれでも反論をした。

「団長命令だ。さっさと準備を始めろ。時間の猶予はないぞ。ティアマト、俺は少し出掛けてくる。アイクの補佐は任せたぞ」

「了解しました」

「親父ー。」

もはやグレイルは、アイクの言つことなど全く聞いてくれなかつた。壁に立てかけてある戦斧を担いで、扉を開けて出て行つてしまつ。

なぜかグレイルの横顔に、不安の類のような色の表情が出てゐる気がした・・・。

「お兄ちやーん！ ちょっと待つて！」

出掛けの直前に、ミストがアイクの方に走つて来る。

「何だ？」

「はいー。これ持つてって」

ミストは、鞘に入った立派な剣をアイクに手渡す。

「この剣は……？」

「お父さんがね、お兄ちゃんに渡してって」

アイクは試しに鞘から剣を抜いてみる。曇り一つなく日光を浴びて輝く刀身が、とても美しい。

「いい剣だな……」

「『リガルソード』って言つらしよ。重い甲冑をまとう騎士や馬に乗った騎士に有効なんだつて。あ、でもこの剣はこれ一振りしかないから、大切に扱つてね！」

「分かった」

「お下がりじゃない剣つて、初めてじゃない？ よかつたね！」

「ああ」

ミストの笑顔には、いつも癒される。戸を開けて、中に入りつつも、両手を振つてミストはアイクを送り出す。

「じゃあ、気を付けてねー。お土産待ってるからーー。」

そして、すぐ心中に入ってしまった。

「別に遊びに行くわけじゃないな・・・ったく・・・」

続く！

## 4章 ～街道の戦い～ 前編～（後書き）

話をこれでも削つたなんですが、それでもかなり長くなつてしまいま  
した^\_^

例によつて、今回も前半と後半に分けさせていただきます。

次回はあの、重要人物が登場！

## 4章 シュラウドの戦い 後編（前書き）

デイン・クリミア間で開戦・・・。

他の傭兵团にて参謀の修行をしていたセネリオが帰還とともにもたらした情報は、アイク達に強い衝撃を与えた。

グレイル傭兵团は、この戦いに参加するか否かを決めるべく、王都の調査を決める。なぜか団長グレイルはその役目のリーダーを、アイクに任せたのだつた。

グレイルからもらつた新品の剣、「リガルソード」を手に、アイク達一行はクリミア王都メリオルを目指す。

（王都への道）

傭兵団の端と王都メリオルのほぼ中間地点までアイク達がたどり着いた時には、もう日が西に傾くころだった。

街道といつても、道は舗装はされていないものの、草刈りなどそれなりに整備はされている。道の両脇には延々と森林が広がり、茂みもいたるところにある。

そんな道に、無数の死体が転がっている。皆、鎧を身に付けており、兵士だということは一目で分かる。死体以外にも、剣や槍、斧が落ちていたり、矢が地面に刺さっていたりしている。

最近、ここで戦闘があつたようだ。

「これはひどいっす……」

戦い慣れしているはずのガトリーがつぶやく。確かに、気分のいいものではない。

キルロイなど、早速立ちくらみを起こして倒れそうになる。アイクはそれを支えてやった。

「大丈夫か？ 無理するな」

「あ・・・ありがとう。傭兵としての直覚はあるんだけど、まだこうこうのに慣れてなくて……」

キルロイはもともと、血や死体を見るのが大の苦手なのだ。

「ケツ、ここから全部鉄の武器かよ。鋼や銀の武器なり、高く売れたのになあ」

シノンは勝手に死んだ兵士の武器をあわててこる。そんなシノンを、セネリオとティアマトがどがめる。

「シノンー、余計なことしていなーで、向こうの方でも調べてきてくれさい。時間はないんです」

「やうよ。早く仕事終わらせて、団長に報告しないと。見たところ向こうにもたくさん死体があるみたいだから、見てきましょー」

「チツ、分かったよ。はいはい分かりましたよっと・・・」

大儀そうに向こうに歩いて行つたシノンを軽く見やつてから、セネリオはアイクを向いた。

「僕は二つの林の中を調べてきます」

ガトリーも言ひ。

「じゃあ俺はあっちの茂みを調べてくるからなー」

残されたアイクは、キルロイに聞いた。

「どうだ？ もう平氣になつたか？」

「うん、とりあえずは大丈夫。心配掛けてごめんね」

「いや、いいんだ。あんたには倒れられたくないからな」

アイクとキルロイは、道の上の死体を調べることにした。みな鎧を装備しているが、色は違う。

白い鎧はクリミア兵のもの、黒い鎧はおそらくデイン兵のものだ。数で見たところ、デイン兵の方が死体の数が多い。クリミアの方が勝っているのだろうか？

(・・・それにしても)

アイクはグレイルの態度を思い出す。

(どうして王都の視察なんていう大役を、親父は俺に任せたんだ？ いくら俺が将来団長になるからって、俺はまだ見習いを卒業したばかりの、新米傭兵なのに・・・)

「どうしたんだい、アイク？」

キルロイが呼ぶ声で、アイクは我に帰った。正直に、自分の気持ちを言つ。

「親父の真意が分からぬ。どうして新米の俺に、この場を仕切らせようとする？」

少し考えて、キルロイは言つた。

「・・・アイクは、グレイル団長を継ぐ人だからね。人を動かすことを学ばせたいんじゃないかなあ」

「俺に、そんな器があるのか？　いや、仮にあつたとしても遠い先の話じゃないか」

アイクは夕焼け色の空を見上げ、自嘲気味に吐き捨てる。

「・・・今の俺は経験も力もない・・・ただのガキだ」

「そりやか？　僕の目から見れば、とても将来有望に見えるけど？」

すっかり調子も元に戻ったらしいキルロイは、アイクの前に来る。キルロイのオレンジの髪も夕焼け色にそっくりだと、アイクは少し思つた。

「グレイル団長はすごい人だけど・・・アイクならきっと、追いつける。追いついて、それから追い越すことだってできるんじゃないかな？」

「・・・無茶を言つなよ」

「僕の勝手な想像だから、気にしなくていいよ。ただ、力が無いと思うなら、少しでも早く一人前になれるよう、努力するつてのはどうだろ？　その方がアイクらしいよ」

「そうだな・・・」

しばらくして、他のみんなも帰ってきた。おおかた調べ終わつたらしき。

「……と同じように、兵士の死体が散乱しています。結構な数ですね」

セネリオの報告に、ティアマトが聞く。

「クリミア兵のもの？」

「いいえ。鎧で見る限り、デイン兵の方が、ずっと多いみたいです」  
その答えに、アイクはさつき自分で考えたことをセネリオに質問する。

「クリミア軍が優勢なのか？」

だが、セネリオは首を横に振った。

「その反対でしょう。クリミア兵の鎧は、近衛 こねえ のものでした。国王ラモンか、王家の誰かが・・・移動中にデイン軍の攻撃を受けたと考えるのが自然です」

元クリミア騎士のティアマトは、青ざめた。

「まさか・・・王弟レーニング卿？」

「いえ、正規軍が戦っている以上、指揮を執るレーニング卿がそこにはいないとは思えません。おそらく、それ以外の・・・」

その時、ずっと話を聞いていたガトリーが声を上げて全員を注意する。

「お、おい！ ディン兵がJUFAに近付いてくるぞ。」

「…？」

そちらを見ると、黒い鎧を身にまとった集団が、街道をこちらに向かってくるのが分かった。今から隠れるのは遅すぎる。ひときわ重厚な甲冑に身を包んだ男が、兜を外して部隊に停止命令を出す。黒い甲冑を見につけた男は、アイク達に呼びかけた。

「おい貴様ら、何者だ！？ こんなところで向をしてこるー。」

ティアマートはその男に言訳をする。

「私たちは怪しいものでは……」

だが、リーダー格の甲冑男は全く聞き入れない。

「武器を所持する一団か……全員武装解除し、我らに投降すればよし。さもなくば……」

シノンも抗議をするが……

「おい、勘違いするんじゃないよ！ オレたちは別に……」

聞き入れてはくれない。

「……おとなしく従つ氣はなそつだな。全兵、攻撃態勢に入れ！ JUFAの一团を駆逐するー。」

「了解、マイジン隊長。」

マイジンといひじい甲冑男の部下のティン兵たちは一斉に武器を構え、隊列を組む。マイジンも兜をまたかぶった。

「ぐつ！ なんて乱暴な・・・！」

ティアマトは唇を噛みながら馬に乗り、斧を手に取った。セネリオもため息をつく。

「戦闘に巻き込まれると、後々、面倒なのですが・・・」

「だが、向こうは話を聞いてくれる気はないさうだ。応戦するぞー。」

アイクの手には、鉄の剣が握られていた（リガルソードは一つしかない貴重品でおいてそれと使えないから）。

シノンも『』を取り出して、アイクに詰めかかる。

「さて、アイク。お手並み拝見と行こうか？ わざわざ指示を出せよ。てめえの言つとおりに動いてやるからさ」

「分かってる、今考てるから。ちょっと待っててくれ、シノン」

「ケツ」

考えはすぐに思いついた。

「・・・すぐそこ茂みにいる奴らを倒して、そこを拠点に粘りつ。この数相手じゃ分が悪いし、街道は隠れる場所が無くて危険だから

まず動き出したのは、セネリオだ。茂みの中に紛れて、呪文詠唱を始める。対象の剣士は、まだ気が付いていない。

「・・・ウインドー！」

緑の魔道書を片手に、セネリオは叫ぶ。その声に剣士は気が付くが、時すでに遅し。セネリオの手から繰り出す風の刃に、全身を切り刻まれる。

「ぐわあ！ 何だこの風はあ！？」

剣士は全身血だらけになる。

セネリオが得意とする風属性の魔法は、強力な風を起こして敵を攻撃するものである。ドラクエで言うバギ、FFで言うエアロみたいな感じのものだ。

リンクがスマブラで使う疾風のブーメランも、これに近いと言える。

「お前か、風魔法を放つたのは！ おのれ！」

剣士は鉄の剣を構えて、茂みにいるセネリオに斬りかかるが・・・。

ガキン！！

青くて巨大なもの・・・ガトリーが間に入り込み、鎧にはじかれてしまつ。

「やつはせないっすよー やあっ！…」

ガトリーは槍を手に、剣士を思い切り突き飛ばす。剣士はもう、起き上がらなかつた。

「えーーーー！」

ドカッ！…バシュ！…

「ぐおあああ！…！」

ティアマートは鉄の槍を持したソルジャーを、鉄の斧2振りで倒す。倒した後は再び馬を走らせ、茂みの方へ駆けていく。

と、その時だ。

ヒュウッ・…・グサッ！

「…！」

ティアマートの肩に、矢が突き立つた。ティアマートはそれを引き抜くが、傷はそれなりに深くて出血がひどい。

「ティアマートさんー 今治療しますー！」

キルロイがライブの杖を手に、駆け寄ってきた。杖をかざすと、光が起こる。

「ライブ！」

傷は跡形もなく治療された。

「あいつがどつキルロイ。・・・何だか、1年前を思い出すわね・・・

」

「やつですね。あ、でも今は戦闘中ですから」

「やうね。じゃあ、また怪我をしたうひみくへね」

ティアマートはこの物語の1年前に、あるひとでキルロイで話になつたことがあったのだ。キルロイがこの団に所属するよくなつたのも、それが元となつていてる。

「ケツ、てめえらの動きなんぞ、止まつて見えるぜ！」

シノンは次々と矢を放ち、敵をものすいに勢いで減らしていく。

「ぐつ・・・何だあこつけー？　信じられないくらい強いぞ・・・

！」

「あんな奴と戦つひや駄目だ！　他のやつを狙え！」

しかし、ティーン兵の多くはシノンの挑発に乗せられて、無謀な戦いを挑んでしまつていてる。

「ぬうん！－！」

ドカアアア－－！

アイクは近付いてきた戦士を鉄の剣で叩つ切る。だが、敵はまだ多くいた。

「くそ！ でやあ－－！」

居合斬りで、敵を斬り飛ばす。その時、彼の死角からソルジャー（槍を使って戦う一般的な兵士）が、鋼の槍でアイクを狙っていることに、彼は気付かない。

「死ね！」

「－？」

しかし、ソルジャーが鋼の槍を振りかざしたその時、強烈な風が身を包んだ。ソルジャーは、風に身体を切り刻まれる。

「ぐぎやああ－－！」

風を放つたのは、セネリオだ。

「ソニックウインド－－！」

直後、セネリオはウインドを連續で叩きこむ。ソルジャーはなすべきもなく、かまいたちの餌食となつた。

「セネリオ、助かった」

「いえ、アイクが無事なら僕は・・・」

敵も順調に片付き、残るはマイジン含めて数人となつた。

「ふん、傭兵風情が我らとまともに張り合おうとはな。身の程知らずも甚だしい」

マイジンは未だに余裕そうにいる。

アイクは答えた。

「相手の話も聞かないで、一方的に仕掛けてくるのが、デイン軍人のやり方か？」

その言葉に、マイジンは怒氣を含んだ声で応じた。

「・・・小生意気な小僧だ。死して、後悔をするがいい。おい、そこのお前」

「は、はい？」

マイジンに呼ばれたアーチャーは、困惑した様子でマイジンを見る。

「あの小僧を仕留める。外したら・・・どうなるか分かっているだろ?」

「む・・・無論で!」ぞろめす。」

アーチャーは、震えながら弓を構える。ティアマートは非難の声をあげる。

「あなた、人としてそれはどうなの…？　自分の部下を、何だと思っているの…？」

マイジンは涼しく答える。

「傭兵風情が何をわめいている。戦場で戦う兵は皆指揮官の手駒にすぎぬのだ」

ティアマートはそれに対してもう、何も答えなかつた。

確かに兵士は指揮官にとっては手駒だ。

でも・・・兵士一人ひとりにも、家族が、友がいる。皆、必死に生きている。どうして、こんなことで死ななければいけないのだろう。・・・。

アーチャーはアイクめがけて矢を射た。だが、アイクはそれを反射的に剣ではじいてしまう。

アーチャーの顔は、みるみる青ざめる。

「あああ・・・す、すみません隊長…！」

「・・・貴様、外したな？　上官の命令に従わなければ死刑、とう、テイン軍規を忘れたとは言わせないぞ」

「や・・・いやだ・・・し、死にたくない・・・！」

「死ね」

グサツ！

マイジンの手にした手槍は、アーチャーの体をつらぬいた。

その瞬間、アイクの中で何かがはじける。

「あんたは・・・最低だ！！！」

気が付くとアイクは、グレイルからもつたりガルソードを抜いていた。リガルソードの刀身は、夕日を浴びて燃えるような色合いとなっている。

リガルソードを片手に、アイクは突進をする。

「小僧に何が分かる。食らえ」

マイジンは手槍をアイク目がけて投げつける。手槍は正確にアイクに向けて飛んでいく。走っている今のアイクになら、必ず当てられるマイジンは確信していた。しかし。

「せいい！」

何とアイクは、飛んでくる手槍を踏み台にして空高く大ジャンプをした。手槍はガシャンという音を立てて、地面に落ちる。

「何だと！？」

「でやああああつつ……」

リガルソードを両手に持ち、落下の勢いそのままにアイクはマイジンを斬りつけた。リガルソードの刀身は、甲冑」とマイジンを斬り裂く。

「ガツ・・・ハ・・・貴様ら・・・デインに逆らつた・・・」  
・後悔・・・」

マイジンは、倒れた。

「とにかく、ここを離れて皆に戻りつ。親父に報告をしないとな」

シノンがデイン兵の死体から鋼の槍や手槍などをいくつか頂いていたが、アイクは全員をまとめる。戦いに支障のある者は、どうやらいないみたいだ。

「こちらの道から行きましょう。森を斜めに抜けられたはず・・・」

セネリオが言いかけたが、途中でなぜか言い留まる。

「どうかしたか?」

アイクがそう聞くが、

「こえ、やはつこの道は・・・」

セネリオは「ひづり」と。

「一体何が……と思つていいと、ガサガサといふ音が聞こえた気がした。」

「アイク！ 今、あの茂みの向こうで何かが動いたみたいだ！」

キルロイがアイクに注意する。

「負傷兵か？ 行つてみよう」

キルロイが、先に茂みの中に入つていた。

「キルロイ、何か見つかったか？」

「……女人人が……」

アイクが見ると、キルロイの目の前の木の根元に、女性……という少女といふくらいの年齢と思われる人物が倒れている。

エメラルド色の髪に、色白の肌、薄いオレンジ色のドレス。きれいな顔立ちをしているが、目を固く閉じている。

「……放つておきましょう。余計なことに関わらない方がいい」

セネリオもやつてきたが、そんなセリフを言い放つ。その後に続くガトリーはひたすらわめく。

「何でだよ～セネリオ～！ こんなにかわいいゴが倒れてるのに見

捨てるなんてひどいじゃね〜か〜！」

アイクとキルロイは、そんな会話など全く気にしていない。少女が小さなうめき声をあげる。

「・・・う・・・

それを聞いて、キルロイが安心する。

「よかつた。氣絶してるだけみたいだね」

アイクも安心する。

「よし、連れて帰つて手当しよう。キルロイ、手を貸してくれないか？」

「いいよ

アイクとキルロイは、少女を連れ歸ることにした。

この出会いが彼らの人生を大きく変えていくことを、アイクはまだ知らない・・・。

## 4章 シリーズ街の戦い 後編（後書き）

ガトリー「ああ～かわいいな～あの口～ これは運命の出会いの予感が～」

シノン「つたぐ。お前な、いい加減その性格を変えたらどうだ？」

ガトリー「ああ・・・絶対これ赤い糸つすよ～」

シノン「全然聞いちやいねえか・・・」

オスカー「まあそれはさておき、次回は『5章・脱出』です」

ボーレ「おれたちも活躍するから、よろしくなー。」

## 逃避の果てに（前書き）

王都メリオルへの街道のわきで、一人の少女を助けたアイク。

この出会いが彼の人生を大きく変えていくといつとも知らず・・・。

## 逃避の果てに

（傭兵団の砦）

アイクとグレイルは、砦の広場にて剣の訓練をしていた。もちろん、手にしているのは例の訓練用の木刀である。

「だあーっー！」

バシッベシッ！

アイクの攻撃は、相変わらずグレイルには全く通らない。グレイルは無駄なく木刀でアイクの打撃を全て防ぐ。

「ふんっ」

ドカッ！！

「ぐわああっ・・・！」

グレイルの一撃で、またしてもアイクは吹っ飛ばされる。

・・・『グレイル団長は、すごい人だけど・・・アイクなら、きっと追いつける』・・・

（・・・キルロイはそう言つてくれた。だが、今の俺ではまだ全然かなわない。なら、努力するのみだ）

アイクは再び立ち上がり、木刀を構えた。

一方、階の中の一室では・・・

ミストが、一人の人物を看護していた。ベッドに横たわり目を閉じているのは、アイク達が街道で助けた“あの少女”だ。

「・・・・う・・・ん・・・・」

少女がつむき声を出す。

「あ、気が付きました?」

ミストは、彼女の額に置いてある水をしみ込ませた布を取つて、聞く。

「・・・・ニニは・・・?」

「よかつた、気が付いたみたいですね。ちょっと待つて下さいね。お父さんたちを呼んでくるから!」

ミストは元気よく、飛び出していった。

「お父さん！　お兄ちゃん！」

アイクとグレイルは、その声で訓練をやめた。声が聞こえた方を見ると、ミストがいつぞやの訓練の時のように手を振りながら、走つてきた。

「ミスト、何があつたんだ？」

アイクが聞く。

「あの女人、目が覚めたよ！」

「…」

グレイルはそれを聞いて、皆の方に歩きだす。

「よし、会いに行くか」

アイクとミストも、それに続いた。

「具合はどうだ？」

グレイルは、碧玉のような色をした髪の少女に聞く。少女はまだ警戒した様子だが、答える。

「え、あ・・・はい。大丈夫です。・・・あなたは・・・？」

「俺はグレイル。この傭兵団の長だ」

すると少女はベッドから起き上がる。

「グレイル様……私を助けてくださったのですね？　何とお礼を申し上げればよいか……」

グレイルは首を振つて、アイクを向いた。

「おつと、あんたを見つけて連れ帰つたのは、息子のアイクだ。礼ならこいつに言つてくれ」

「え、いや、俺は別に……」

アイクはそう言つが、少女は構わない。

「アイク様ですね……？　ありがとうございます」

「ああ……」（俺は別にそんな大したことしてないんだがな……）

グレイルが咳払いをして、一人の注意を引く。そして、話を切り出す。

「早速で悪いが、聞きたいことがある。……あんたは、一体何者なんだ？　なぜあんな場所に倒れていた？」

「……」

碧の髪の少女は、答えない。グレイルはまだ続ける。

「あんたを拾つたあたりは、クリニア近衛騎士とティイン軍が激しく、ぶつかり合つたところのようだ。・・・あんたは、クリニア王家ゆかりの者か？」

「・・・」

少女はまだ答えない。田までつぶつてしまつ。今度は、アイクが聞く。

「ひょっとしたら俺たちが、力になれるかもしない。話してくれないか？」

するととうとう、少女は目を開ける。澄んだ瞳が、妙に印象的だ。

「・・・私を救つてくださつた、あなた方を・・・信じます」

少女は、問い合わせる。

「私は、エリンシア・リナル・クリニア。クリニア王ラモンの、娘です」

「そう、彼女は・・・  
クリニア王国の王女なのだ。

## 逃避の果て（後書き）

とある事情で、5章の冒頭で止まってしまったみません…；

次回はやはり「5章・脱出」を予定しているので、今度はよろしくです！

## 5章 ～脱出～ 前編（前書き）

アイクが王都への道のわきで助けた少女は、クリミアの王女エリンシアを名乗った。

エリンシアは、自分は王位継承争いを避けるべく、隠されていたことをグレイルとアイクに伝える。その事実は一般には知られていないが、各国の王族には伝えられているらしい。つまり、デイン国王アシュナードは、血眼になつてエリンシアを探しているということだ。

彼女の目の前で、アシュナードは、彼女の両親を殺した。その後エリンシアは、王弟レーニング（つまりエリンシアの叔父）により脱出の手助けをされ、クリミア王国軍第5小隊を護衛に伴つて王都から逃走を図る。

だが、途中でデイン軍に追いつかれ、第5小隊はほぼ全滅した。エリンシアはその混乱のさなか、奇跡的に発見されずに済んだのだ。

エリンシアは傭兵团に、自分を南の「ガリア王国」へと送つてほしいと頼んできた。

ガリア王国は、クリミア王国とは同盟を結ぶ国である。

両親を失い、王弟レーニングの行方も知れない今、彼女には他に、頼るもののが無いのだ・・・。

～傭兵団の隊～

「クリミアの王女？ 本当に？」

アイクはティアマトに、先ほどの話の報告をした。するとティアマトは、驚いた表情を返す。

無理はない。いきなりこんな貧乏傭兵団に、王国の、しかも飄れた存在である王女がやってきたから……。

「親父は本物だと考へていてるよつたな」

「えう・・・

ティアマトは手を虚空に向け、何かを思ひ出しているかのような表情になる。

「ティアマト、どうかしたのか？」

「ううん、何でもないわよ

だが、アイクは何を考えているか、だいたい予想が付いた。

「昔、ティアマトが王宮騎士だったころのことか？」

するとティアマトは、驚く。

「！　びっくりして、それを知つてゐるの！？」

「前に、シノン達が噂してゐるのを聞いた」

ティアマトはそれを聞くと、ため息をつく。だが、なぜかどこか安堵したようなため息だった。

「もう・・・口が軽いんだから」

「秘密だつたのか？」

「やうじやないけど・・・アイクより多くの経験を積んでいる分、心配事もたくさんあるのよ」

（心配事、か・・・）「クリニア王女の」ととか？

あえてアイクは、深くはその心配事については問わなかつた。

「そう、ね。私自身は彼女のこととは知らなかつたんだけど・・・言われてみると、彼女の容姿は、国王夫妻のどちらにも・・・よく似てるわ」

「じゃあ、やつぱり本物なんだろうな。・・・親父はビックリするつもりだろ？』王女の依頼を受けるのか・・・」

アイクとしては、エリンシアを助けたいと思つていた。彼女には、頼るものがないから。

不意に、足音が響いてくる。一人が戸の方を向くと戸が開いて、薄

緑の髪の少年が息を切らせて駆け込んできた。ヨフアだ。

「ヨフア、一体どうしたんだ？」

ヨフアは呼吸を整えるのもわざわざしそう、答えた。

「た、大変だよ… 外に、兵隊がこいつぱい…」

「なんだつて…？」

傭兵团の皆は、完全に包囲された。夜のため暗くてよく分からないうが、偵察してきたセネリオによると、『トイン軍が包囲したらしく』。指揮官はダッコーワといつ重歩兵のようだ。

グレイルの命令で、全員は作戦室に集められた。

「団長、『トインの連中はなんて言つてるんだ？』

シモンの間にこ、グレイルは答える。

「…クリミア王女を直ちに引き渡し、この地を去れ。さもないと、攻撃を開始する…だそつだ」

団員はそれを聞いてざわめく。ガトリーもグレイルに聞く。

「ど、どつするんつすか？」

「それを、これから決める。ただ、連中が来たことで一つ、はつき

りしたことがある

グレイルのセリフに、セネリオが続ける。

「彼女が・・・本物のクリニア王女だとこいつですね」

グレイルは団員全員を見渡した。

「団そのものを左右する問題だ。ここにいる全員の意見を聞きたい」

ティアマトは元クリニア騎士といつともあり、やはりエリンシアをガリアに送り届けるべきという意見を出す。それに対してセネリオは、徹底的に物事を現実的に考え、『 דין』軍に引き渡した方が利になると意見を出した。

シノンはガリアという国そのものが嫌いらしく、セネリオに賛成する。ガトリーは優柔不斷な性格もあってか、全員の決定に従うという意見だ。

オスカーは王女の命を救うべく、ボーレは「助けた方がかつ」といから「こうの理由でティアマトに賛成。

キルロイは、困っている人は放つて置くべきではないという意見で、ティアマトに賛成。ミストとヨフアも、ティアマト派だ。

「最後にアイク、お前はどうだ？」

グレイルから、アイクに問い合わせる。アイクの心はすでに決まって

いた。

「……ティアマトの意見に賛成だ。王女を助け、ガリアを田舎ぞう」

「なるほど。……では、決を伝える。我々は、王女をガリアまで護衛する」

セネリオとシノンは残念そうだが、多くの他の団員は嬉しそうだ。

アイクは、一応グレイルに聞く。

「……本当に、それでいいのか？ 親父」

「ああ。どうみち、選択の余地はなくなつたようだからな」

「え？」

グレイルの言う意味がまるでよく分からるのは、アイクだけではない。そんな団員に向けて、グレイルは言う。

「耳を澄ませてみる。ほら、全員だ」

耳を澄ませたが、全く何も聞こえない。

「つつとも……」

「何も……聞こえないんすけど……」

ボーレとガトリーも疑問に思つたらし。

と、シノンが注意する。

「バカ野郎！ それが問題じゃねえか！ おかしいと思わねえか？ 四方全てから音が聞こえないなんてよ」

「ああ、そういうふうにとっすか！」

ガトリーが納得する。確かに、おかしい。

「・・・獣たちだけではなく、虫の声も聞こえない。これは、いくらなんでもおかしい。つまり・・・」

オスカーの言葉を、アイクは継いだ。

「デイン兵に囮まれた！？」

グレイルは、重々しくうなずく。ティアマトも険しい顔で言った。

「どうやら、最初から約束を守るつもりなんになかったようだ」

セネリオも、デインにヒーローシアを引き渡すことはあきらめたよう

「我々を油断させ、この船を始末とこうじておひでじゅうか」

グレイルは立ちあがる。

「だらうな。・・・だが、一いちもそれに乗つてやるほどへばへまない。全員、配置に付け！ 一気に片付けるべー！」

砦の外には、夜の闇にまぎれて大勢のデイン兵が待機していた。デイン兵たちは静かに砦の入り口を見ていると、中から傭兵团のメンバーが出てきたのを認める。

「……傭兵どもが武器を持って出てきた！ ダッコーウ将軍に報告しなければ……！」

「ダッコーウ将軍、報告します！ 傭兵どもが武装し、砦の入り口に現れました！」

さつきのデイン兵は、砦の前の坂を下りたところに立っていた甲冑の男に報告をする。この男こそが、ダッコーウだ。

「ほう……こちらの計略が気取られたか？ だとすれば、一筋縄ではいかん相手らしい」

「作戦は続行しますか？」

デイン兵が聞くと、ダッコーウは首を横に振る。

「いや、砦にはクリミア王女が匿われている。火矢を射かけさせ、いぶし出す作戦では、王女に負傷させる恐れがあつたからな。できるだけ、無傷のまま連行せよとのお達しだ」

そして、ダッコーウは手にした手槍を振り上げ、命令を下す。

「奴らが出てきたのなら、むしろ好都合。王女以外は抹殺せよ！  
攻撃、開始！！」

オオー—————！

グレイル傭兵団も、進撃準備は済んでいた。グレイルはこの正面での戦いの指揮をアイクに任せる。

「裏口は、俺が押さえておこう。アイク！　ここはまかせたぞ。敵に入口を奪われるな！」

「わかった。気をつけろよ、親父！」

「フツ、そうしよう」

グレイルが裏口に走つていったのを見て、アイクは指示を飛ばした。

「正面は、ガトリーとティアマトが押さえてくれ！　シノンはその後ろから！」で支援を！

オスカーとボーレは、西の方の入り口を塞いでくれ！　セネリオは一人の後ろから魔法を頼む！

キルロイは安全な後方で待機して、トーチの杖で暗闇を照らして、けが人が出た時の治療も頼む。

俺は、戦いの厳しい正面を手伝う。暗いから、みんなはなるべく前に出ないでくれ！

・・・じゃあ、こっちも出撃だ！』

アイクの指示に従い、団員全員は所定の位置に向かつて行った。



## 5章～脱出～ 前編（後書き）

またまた前半と後半に分かれちゃった・・・。

戦いの様子は、また次回に書きますね。

あと、新しく「蒼炎のもどり」という小説・・・じゃないけど・・・を書いています。この物語の登場人物について簡単に書いていくので、そちらの方も併せてご覧になつて頂けたらと思います。

では、また！

## 5章 ～脱出～ 後編（前書き）

傭兵団の砦を包囲したデイン軍は、傭兵団に対してヒコンシア姫の引き渡しと立ち退きを要請する。

だが団長グレイルは、デイン軍は約束を守る~~返はさうといな~~ことを見破り、団員に徹底抗戦の命令を出した。

デイン軍と傭兵団の間で、今、戦いが始まる。

## 5章 ～脱出～ 後編

（傭兵団の皆）

「トーチ！」

キルロイが杖を振りかざすと、手にしたトーチの杖からは光があふれる。皆の周囲は、昼間のような明るさとなつた。

「セネリオ、行きます」

セネリオはウイングの魔道書を片手に出撃をする。西の門から侵入を試みるディン軍のソルジャーが、セネリオに気付く。

「お？ ガキは引っ込んでオネンヌしてりや。何ならこのおれが永遠に眠らせてやるぜ？」

ソルジャーは鉄の槍を手にセネリオに襲いかかる。だがセネリオは落ち着き、ソルジャーに向けて手をかざす。

「・・・ウイング！」

セネリオの手からは、強力な風が巻き起こる。風はかまいたちとなって、ソルジャーの体を切り刻んだ。

「ぐ、ぐわあ！ な、何だこの風は！？」

傷だらけになり、ソルジャーはセネリオをにらむ。

「やりやがったな！！ 死ね！」

鉄の槍をセネリオに向けて突き出す。しかし……。

ガキン！…！

緑の鎧をまとつた騎士・・・オスカーが、セネリオの前に現れ、敵のソルジャーの槍をはじく。

「な、何だと・・・！」

「はあっ！…！」

ザシユツ！…！

オスカーは滑らかな動きで槍を操り、ソルジャーを倒した。

そんな彼らの横を、ボーレが雄たけびを上げながら突っ走つしていく。

「おれはこの傭兵团の戦士ボーレだ！ デインの野郎ども、かかつてきやがれ！…！」

すると、鋼の槍を持つたデイン兵がボーレに向かつて行つた。

「ふん、この槍のさびとなるがいい！」

だが、ソルジャーの動きが遅くてボーレにはまるで当たらぬ。どうやら、力が足りなくて鋼の槍をまともに扱えていないようである。

「へへへ、武器に振り回されたるぜー。」

ドカッ！…

「ああああーー！」

ボーレはあつせつとソルジャーを鉄の斧で倒した。

「けつ、ティインの連中め・・・れつれといひから出でよな

ヒュウ・・・グサツ！

「ぐおひー。」

シノンは正面から突入をしようとティイン軍の剣士に、必殺の一撃の矢を放つ。

しかし、そんなシノン曰がけて、ソルジャー数人が一斉に手槍を投げつけた。シノンはそれを余裕でかわす。

「そんなにこのオレをまにかまつてほしこいつか？ やれやれ、このくらこの美女に囲まれてみてえもんだぜ」

ヒュンヒュンヒュン・・・ズガガガガー！

矢の雨を降りせて、敵を一掃する。

「シノンせーん、おれの分も少しあとつておこてくだせこよー」

少し遅れて、ガトリーがやつてくれる。

「はあ？ お前の足が遅いせいだつづーの」

「無茶言わないでくださいよー！ こんな鎧身に付けてたら速く走れるわけ・・・」

「おいガトリー。前見ろよ。敵がお前を狙つてゐるぜえ？」

見ると確かに、一人の剣士がガトリーに向かつてくる。

「おー、じゃあおれも早速行きますね！ つか一燃えてきたぜー！」

張り切つてガトリーは槍を振り回す。その横を、白馬にまたがつたティアマトが走つてゆく。

「ティンの思い通りにはしないわ！ 必殺の一撃！－！」

ティアマトは鉄の斧を敵のアーチャーに向けたと思つた次の瞬間、大きく振りかぶつて斧を振りかざす。

ズッシャアアアー！！

アーチャーは一瞬で飛ばされ、もう立ち上がらなかつた。

アイクは南の門の前で、剣士と相対していた。剣士がアイクを挑発していく。

「こ」の数相手に抵抗するとは、ずいぶんと身の程知らずな傭兵团だな

「……そうかもしれない。だが、俺は傭兵团のみんなのため、依頼主のため、あんたたちに抵抗する」

アイクはそう返した。そんな彼に、橙色の髪をしたティインの剣士は続ける。

「ふふつ、なかなか威勢がよいことだ。……この俺にも、かつては家族がいた。今となつては、何も残つていながらな……」

(なんだ、こいつ？ 何を一人で言つているんだ？)

アイクは疑問に思つたが、相手はそんなアイクのことなど気にせず、に襲い掛かる。

「・・・戦いに私情は不要だ。覚悟！！」

橙色の髪の剣士は、鉄の剣を構えたままアイクに向かつて走つてきた。アイクは冷静になつて考える。

(・・・親父から教えてもらつたあの技、使ってみるか)

アイクは動かないまま、剣士を待つ。そしてある距離に達した瞬間、アイクは特殊な剣の構えで敵の剣を受け止めた。

ガキイイン！

「な、何だと・・・・・！」

「・・・・セレフ・・・・・！」

スパアーン！－

一気に鉄の剣を振り、橙色の髪の剣士を斬り飛ばす。カウンターといふ、反撃の剣技だ。

「く・・・・＝ディよ・・・・黙日な親父を許せ・・・・」

橙色の髪の剣士は、そのまま果てた・・・・。

「・・・・どうなつているー 完全に包囲したのではないのか！？」

デインの将であるダッシュ＝コーワは、報告に来たデイン兵に大声で聞き返す。

「は、はい。しかし、傭兵どもがあまりにも強く、次第に我々は押されつります・・・・！」

「くそつ・・・・おにお前ー 今すぐに援軍要請ののりじを上げろー！」

「はい、ただいまー！」

デイン兵は大急ぎで、のりじを上げに向かう。その姿を見やり、ダッシュ＝コーワは頭を抱えた。

「クリニア王女を匿つ傭兵団・・・まさかこれほどの強さとは・・・」

「

ヒュルルルル・・・ビビーーーん!!

夜空に、赤い煙が上がる。その様子をオスカーを見て、首をかしげる。

「何だ?・・・敵が上げたのろしか?」

すると、キルロイに怪我の治療をしてもらひて戦線に復帰したセネリオが、それに答えた。

「そのよつですね・・・もしかしたら敵の増援があるかもしれません。気を付けてください」

「セネリオ、分かった。私が他の団員に伝えてくるから、君はボーレと一緒にここに門を守っていてくれ」

オスカーは馬を走らせ、南門に向かつた。

「みんな、伝令だ!」

南門で戦っていたアイク達のもとに、オスカーが駆け込んでくる。

「オスカー、どうしたんだ?」

「アイク！ セネリオが、さつきののろしは敵の援軍要請かもしけないと言つていたんだ。それを伝えに来たんだ」

アイクはそれを聞いて、周りのみんなにも伝えた。

「オスカー、わざわざすまんな。・・・よし、みんな！ 敵の増援に備えて、一度門の中まで撤退してくれ！」

アイクの指示に従い、団員は皆庭まで前線を下げた。

程なくして、増援が到着する。

西門では、騎兵達が一気になだれ込んできた。ボーレとオスカーで門を塞ぎ、セネリオが魔法で援護をする。

南門は、ソルジャーたちが大挙して突撃を試みる。ガトリーとティアマトで前線を守り、シノンとアイクが時たま攻撃に参加する。

「キルロイ、また周りが暗くなってきたぜ！」

ボーレが後ろのキルロイに向かって叫ぶ。

「わ、分かった。・・・トーチー！」

トーチの魔法で、再び辺りは明るくなる。トーチによる明るさは、時間をおくとだんだんとまた暗くなってしまつ。ゆえに、たまに唱え直す必要があるので。

「ケツ、いい加減敵さんの相手には疲れてきたぜ・・・」

シノンはだんだんと疲れてきたみたいだ。シノンだけではない。

「敵が多すぎる・・・いつまで続くんだ・・・」「

アイクも、他の団員も、かなり疲労が溜まつてきていた。

「ダッコーワ将軍、報告します！ 援軍要請も行いましたが、傭兵たちは未だに一人も死者を出しておりません。このままでは、我が部隊の消耗だけが高んでしまいます！－ どうか、撤退命令を！」

報告係のデイン兵は、青ざめた様子でダッコーワに報告する。それを聞くダッコーワもまた、青ざめた顔をしていた。

「なぜだ？ どうして傭兵团の一つすらしぶせぬ・・・！？ 撤退は出来ない・・・」うなつたら、この私自ら出撃するしか・・・！

「！」

「！？ 将軍御自らですか！？ お願いです！ どうかここにとどまつて指揮を・・・」

デイン兵は必死にダッコーワを説得したが、ダッコーワは聞く耳を持たない。

「いや、私自身が行くしかなかろう・・・」

何かに取りつかれたよつた様子で、ダッシュで戻して回かけて歩き出していく・・・。

「どうやら、敵がまばらになってきたみたいね」

ティアマトは斧を振るこながら、ふと思つたことを口に出す。隣にいたガトリーに話したのかもしれないが。

「え？　あ、そういうふうみたいつすね」

後ろにいたアイクとシノンも、少し困惑した様子だった。

「どうこい」とだ?」

「オレに分かるかつての」

そんな彼らの前に、甲冑で身を包んだ男が現れる。

「傭兵ども・・・貴様らはこの私が倒す!」

アイクは思った。たぶん、こいつがセネリオが言つていた、この部隊の将であるダッシュー！ こいつを倒せば、戦いは終わる！

「おっと、敵の將軍さんがお出まじじゃねえか。・・・かかってこいよ、卑怯なディンの將軍をよお！」

「な、なんだと・・・！」

シノンの挑発に乗り、ダッコーワは手槍をシノンに投げつける。だが、シノンは余裕でそれをかわした。

「その程度の強さで将軍？ ハツ笑つちまうぜ」

ヒュツ・・・ズガツ！！

シノンが反撃で放った矢は、ダッコーワの鎧のつなぎ目に正確に突き刺さる。ダッコーワはその痛みで悲鳴を上げた。

「シノンさん、ナイスっす！ ジャあ、おれからも行かせてもらいつすよ！」

ガトリーがダッコーワの前に立ちふさがる。ガトリーの手には、鉄の槍が握られていた。

「おれの一撃を食らうっす！ ・・・やああああ！！」

ガトリーは槍を頭上で回転させ、その勢いでダッコーワに強烈な一撃を叩きこむ。

ブンブンブン・・・ズシャアアアア！！

「グハツ・・・信じられ・ん・・・一体何が起こ・・・」

こうして、ダッコーワは倒れた。その様子を見て、周りのゲイン兵たちは急に慌てだした。

「ダッコーワ將軍を失い・・・兵を失い・・・もはや、これまでか・

・・・

セツキダッシュコートに報告をしていたデイン兵は、周りの兵に大声で呼びかける。

「・・・退却だ！ 速やかに退却せよーー！」

その声が響き渡ると、デイン兵は全員、蜘蛛の子を散らすように撤退をしていく。中には武器を放り捨てて逃げていく者もいた。

当然、そういう武器に興味を示すのはシノンだ。

「おー、あいつらなかなかいい武器持つてんじゃねーか！ こっちは鉄の大剣で、こっちはハンマーか」

で、セネリオはそれをとがめるのだった。

「シノン、そんな場合じゃないでしょー！ 我々も、皆に戻りますよ」

「ちひ、いいじゃねえかよ・・・」

じつじて、皆を守り抜いたアイク達グレイル傭兵团。

彼らには今後、どのような運命が待つて居るのだろうか・・・。

## 5章～脱出～ 後編（後書き）

更新が遅れてしましましたが、何とかできました！

次回は、「炎の紋章」を予定しています。

6章の方は、また後日～！

## 炎の紋章（前書き）

クリミア王女エリンシアを狙つてグレイル傭兵団の皆を襲撃したデイン軍の一個小隊は、傭兵団の予想以上の反撃によつて撤退していった。

ダッコー・ワ将軍を討ち取つたグレイル傭兵団は、デイン軍の更なる追撃を警戒し、脱出の準備を始めるのだった。

「付近から、敵の姿がなくなりました」

セネリオがアイクにそう報告していると、そこへ裏門を守っていた団長、グレイルが戻ってきた。

## 炎の紋章

辺りに立ち込めるのは、鉄と血のにおい。先ほどの戦いの激しさを思わせる。アイクは、セネリオの報告を聞きながら、一人思った。

(これで完全に、テイン王国を敵に回したというわけだな……)

そこへ、足音が聞こえてくる。誰もが、誰の足音かすぐに分かった。グレイルが、戻ってきたのだ。

月明かりに浮かびあがつたグレイルは、着ている皮鎧やマントに多数の血が付着していた。だが、動きが全く鈍っていないのを見ると、どうやら全てが返り血らしい。あの激戦の中で、無傷とは……。

グレイルは巨大な戦斧を抱いだまま、集合した傭兵团のメンバーに向け、声を張り上げた。

「休んでいる暇はないぞ。全員、荷物をまとめろ！ 敵の増援が来ないうちに脱出する！」

「了解しました！」

すぐ近くにいたオスカーは、自分のるべき仕事を瞬時に考えて、返事をする。そして、隣できずぐすりを飲んでけがの手当をしていたボーレを呼ぶ。

「ボーレ、こっちだ！」

「あいよ、兄貴！」

オスカーとボーレが皆の中に駆け込んでいくのを見て、ミストもあわててヨファを呼んだ。

「わわっ、わたしたちも急がなきゃ！ 行こ、ヨファ！ 日持ちする食べ物、いっぱい詰め込まないと…」

「う、うん。ミストちゃん！」

ミストはヨファを半分引きずるように、倉庫の方に歩いて行った。

グレイルはティアマトを呼んだ。

「ティアマト！ お前は、シノン、ガトリーを連れて先行し、この砦から、ガリアに続く樹海までの安全路を確保してくれ」

「了解しました！ シノン、ガトリー、行きましょう

ティアマトに呼ばれて、一人が手早く準備する。

「分かったっす！」

「しようがねえ、行つてやるか

残つたのは、アイクとキルロイだ。グレイルはキルロイを手で招く。

「キルロイは、じつちだ。書棚から、必要な書類を選び分けるのを手伝ってくれ。残りは全て燃やすぞ！」

「は、はい！」

最後に残つたアイクは、キルロイを伴つて厩の中に入りつとするグレイルを呼び止めた。

「親父、俺は一体何をすればいいんだ?」

「アイク! 王女の」とお前に任せた

「分かつた」

グレイル達と入れ違いに、クロミア王女エリンシアは厩内から出てきた。

「アイク様、お怪我はございませんかー?」

「ああ、俺のことば大丈夫だ。心配しないでくれ」

「そうですか・・・」

アイクは、エリンシアの心配をよそに歩き出す。少し歩いてから振り返った。

「俺は、あなたの分の馬を用意してくれる。あなたは・・・そうだな、倉庫へ行ってくれ」

「え・・・?」

なぜ倉庫へ行くように言われたのかまるで理解できないエリンシアに対して、アイクは簡単に付けくわえた。

「ミスト達の手伝いをしてれば……ただ待ってるより、気分がまぎれるんじゃないか？」

「……はい、分かりました！」

そう言つて、エリンシアは歩きだし……すぐ戻してきた。

「ん？ エリンシア姫、どうしたんだ？」

「あ、あの……誠にお恥ずかしいんですけど……」

エリンシアは口ごもる。

「倉庫は……どちらでしょうか……？」

「ああ、やうじえは言つてなかつたな。……あの、灯りがともつてるやつだ。ミストとエフアが食料を詰めてるはずだから、そこで手伝いでもしてたらどうだ？」

「は、はい！ ありがとうございます！」

再びエリンシアがそむけた向ふを見送つて、アイクは厩舎の方に向かいだした。

倉庫の中では、ミストとエフアがひたすら、食料を袋に詰め込んでいた。エリンシアはアイクに言われたことを一人に伝えて、そここ腰を下ろす。

「全くも～お兄ちゃんつてば……。エリンシアさまに對して、何て」と言つてゐるのよ……」

ミストはアイクに對して不満を抱いたが、当のエリンシアは全くそんな無礼など氣にしていなかつた。

そのうち、オスカーとボーレが手が足りないとかでヨフアを呼びに來た。そのため、倉庫の中でミストとエリンシアの二人だけでひたすら詰め込み作業をすることとなつた。

しばらく沈黙が続いたが、ミストがその沈黙を破る。

「うーん、なんか申し訳ないなあ……エリンシアさまにまで手伝わせるなんて」

「気にしないで、ミストちゃん。それより、かえつて足手まといになつていないといいけど……」

それを聞いて、ミストは首を大きく横に振る。

「全つ然！ わたしなんかより、よつぽどテキパキしてて助かります！ でも・・・お姫様つて、こんなに何でもできるものなんですか？」

確かに、ミストよりもエリンシアの方が荷物がたくさんできあがつていた。

「ふふ、私は離宮育ちだから、普通のお姫様の生活とは違ったのかも。料理、お洗濯、お裁縫・・・何でもしたのよ」

それを聞いて、ミストは感嘆の声を上げる。

「へえ～、意外だなあ。そんな風には見えないですー。」

「そうかもね。でも他にも、乗馬や剣の稽古だつて・・・」

そこまで言いかけて、エリンシアはミストの胸元に手をやる。

「・・・あらミストちゃん。その胸元は・・・？」

ミストは慌てた。

「えー？　あ、えっと・・・！」

「？」

慌てて何かを隠そうとしたミストだったが、観念してエリンシアに向き直る。

「・・・エリンシアさまになら、見せてもいいかな。・・・」

ミストは服の内側から、首にかけたものを取り出し、手の上に乗せる。

それは、青銅のメダリオンだ。メダリオンの中心に膨らみがあり、そこから放射線状の溝が走る。形だけなら、ごく普通のものだ。

だが、それは普通ではなかつた。

なぜなら、不思議な蒼い光がメダリオンの中心から、炎のよつにあふれていたからだ。

蒼い炎。そういう形容するのが、もっとも妥当である。

「まあ・・・青銅の・・・メダリオンね？」この光は何かしら？」

エリンシアは美しい光に魅了されながらも、首をかしげた。

「お母さんの形見なんですけど・・・。うーん、何だろう、この光？今までこんなことなかつたのになあ。このあいだ突然光り出して・・・」

ミストの方も、よく分からぬらしい。

「不思議な」ともあるものね。だけど・・・とてもきれいな光」

「ほんと、なんなんでしょう？」

一人はしばらく、作業の手が止まっていた。

## （クリミア王国東部 ナドウス城）

ナドウス城は、クリミア王国に現在する城砦の中でも、最大のものである。

この城の少し北にあるピネル砦とともに、東方の勢力ににらみを利かせる、クリミア王国の国防のかなめとして建てられたものであつたが、先日のデイン軍の強襲により、現在はデイン王国の勢力のもとに、完全に占拠されてしまつてこる。

武よりも文を重んずるクリミア王国だが、この城は国防のためといふこともあり、戦いに向いた作りとなつてゐる。だがさすがはクリミアというべきか、城のいたるところには絵画が飾られたり置物があつたりし、窓もステンドガラスで美しく装飾されていた。

そんなナドウス城の奥の間から、女の声が響いてくる。

「……はあ！？ 今なんて言つたんだい？ あたしの耳はおかしくなつたのかねえ、『逃げられた』って、そう聞こえたよ」

声の主は、深い緑の髪に切れ長の目をした女だ。デイン王国軍特有の黒い装備を身に付け、薄い化粧をした顔を憎々しげに歪め、目の前のデイン兵をにらむ。かなりの豊満な体つきだが、どちらかといふと恐怖を感じさせる雰囲気が漂つてゐる。

「……どうやら、たがが傭兵だ」とひと甘く見すぎたようですが・・・

「

震えながら女に報告しているのは、グレイル傭兵団の砦を襲撃した

部隊の、ダッコーワの部下の一人である。あの、のろしを上げたり撤退命令を出したりしていたデイン兵である。

「・・・ダッコーワ將軍を討ち取るほどの、強敵に対し、我ら一兵卒では、かなうべくもなく・・・」

「で？　おめおめ尻尾巻いて敵前逃亡してきたってわけだね？」

デイン兵の報告を途中で遮つて、女は冷たく言い放つ。

「デイン軍規を忘れたとは言わせないよ。成功か失敗、生か死。  
・おい、そこのお前。こいつを連れて行きな！」

すぐ近くで控えていた別のデイン兵は、女の指示を受けて動き出す。

「はっ！.. わあ来い！..」

「うわああー！.. い、いやだ！　死にたくない・..・..！」

報告していたデイン兵は問答無用でひつ立てられ、処刑場へ連れて行かれた・..。

そんな様子を見送つて、女は独り言を言つ。

「つたぐ、どいつもこいつも、まともに使えないねえ」

デイン兵の姿が消えたのを確認し、女はすぐ横に控えていた別の女性を呼ぶ。

「イナ！　小娘と傭兵团を追うには、どうかに向かえばいいか考え

な

イナと呼ばれた女性は、浅黒い肌をした人物だつた。あまり表情の変化が無い。イナは少し考えてから、淡々と話しだした。

「・・・クリミア王都メリオルは、すでにアシュナード様の手中・・・クリミア軍残党も残りわずか・・・すなわち、王女の逃亡先は、南のガリア王国しか考えられません」

ガリア、といつ単語を聞いて、女はまた顔を憎々しく歪めた。

「ハツ、亡き国王ともども親子そろつて、あの毛だらけ“半獸”と慣れ合おつゝてわけかい。まったく、物好きにも限度があるだろつに」

女の独り言を聞いているのかいないのか、イナはまだ淡々と話す。

「ガリア領内に逃げ込まれると・・・王女を捕らえることは、困難になります。・・・護衛についた傭兵团は・・・あなどれない相手のようです。至急、情報を集めて・・・」

「その必要はない。王女追跡には、あたしが出る」

イナの話を遮つて、女は言つた。すると初めて、イナの表情が驚いたように少し変化した。

「プラハ将軍、御自り・・・ですか？」

「どうやら、この女はプラハといつ名前らしい。

「王女の行き先が分かってんなら、小細工は不要だ。追いかけて、潰せばいい」

プラハは残忍な冷たい笑みを浮かべる。

「傭兵団？ ハツ、それがどうしたってんだい。この、プラハ様が出向くんだ。どんな相手だろうと、しくじりようがないさ。ククク・・・」

このプラハという女は、一体何者なのだろうか・・・？

そして、イナとは一体・・・？

果たして、グレイル傭兵団の運命は・・・？

## 炎の紋章（後書き）

この度、更新が遅れてしまつてすみませんでした。

次回、「6章：陽動作戦」を予定しています。

震災の復興が一日も早まりますように・・・。

## 6章 ～陽動作戦～ 前編（前書き）

女神に祝福されし大陸、テリウス。

その北西に位置するクリミア王国に、グレイル傭兵团は拠点を構えていた。

だが、東の隣国デイン王国により、王都メリオルが、突如強襲される。

セネリオのもたらした報を確かめるため、アイク達は王都へと向かつた。その途上、一人の少女を助けることになる。

彼女は「エリンシア」と名乗り、自分がクリミア王の娘であること、デイン国王アシュナードの手により、両親はすでに討たれたことを語つた。

傭兵团は、王女エリンシアの依頼を請け、ガリアまで護衛することとなる。

ガリア王国・・・

クリミアの南に位置するこの国には、アイク達「人間」とは異なる種族が暮らしている。

クリミアとガリアはお互いの種族の違いを乗り越え、近年、ぎこちないながらも友好的な関係を築いていた。

アイク達傭兵团は、背後から迫るデイン王国の追撃部隊をかわし、ガリア王国へと続く樹海に足を踏み入れるのだった・・・。

（クリミア南部の樹海）

「はあつ！！」

ソルジャーのデイン兵の投げた手槍が、樹海特有の湿った空中を突き進んでくる。デイン兵の標的は、ボーレだった。  
手槍はボーレには当たらず、彼のすぐ後ろの熱帯樹の幹に突き刺さる。ボーレが体をひねるのがあと一瞬遅かったら、彼は大怪我を負っていたことだろう。

「デイン兵め、おれの一撃、覚悟しやがれええ！！」

ボーレは鉄の斧を頭上で回転させながら、デイン兵の懷に駆け込み、回転の勢いそのままに、斧を敵に叩きつける。手槍を投げつけたソルジャーは、その一撃で倒れ込んだ。

グレイル傭兵団が樹海の中に入つて程なく、デイン王国の追撃部隊に遭遇した。数はそれほど大したものではないが、見通しが悪い森林戦ではお互いに戦いが行いにくい。現在は部隊の後方を守るオスカー、ボーレの2人だけで、追撃部隊と戦っていた。

「えいつ！！」

グサツ！！

ボーレを狙おうとしていた剣士に対し、オスカーが間に入つて槍を突き出す。剣士がすかさず反撃を入れるが、敵の剣を槍で見事に防いだ。

「兄貴、助かつたぜ！」

グシャア！

「さやあ・・・」

ボーレの斧が命中し、剣士は倒れた。

「なに、お互い様だ」

オスカーは優しくボーレに笑いかけた。

「グレイル団長、大変です！　後方にて、敵部隊との接触があつた  
ようです！」

ティアマトが馬を走らせて、最前列を歩くグレイルのもとに駆け込んできた。すぐにグレイルは緊張した表情をして、ティアマトに向き直る。

「どうか、デイン軍、もつ追いついたというのか・・・。戦況はどうなつている？」

「私とともに最後尾を守っていたオスカー、ボーレの2人が、敵部隊の侵攻を食い止めている状態です。ただ、相手の勢力がどれほどか分からぬ上、2人だけでは戦いが厳しいと思われます！」

グレイルはティアマトの話を聞いてから、隣にいたセネリオに問いかける。

「セネリオ、このことに関して、どう思つ？」

セネリオは少し口を開じてから、淡々と話し始めた。

「そうですね・・・みなさんもお察しの通り、敵はティーンの追撃部隊と思われます。追撃部隊というのはおそらく、大部隊では編成はされておりません。ましてやこのような樹海内部、小隊単位で追つてくるのが普通です」

セネリオのすぐ後ろで積荷を乗せた馬車を操っていたアイクが、セネリオに自分の意見を言つ。

「じゃあ、奴らをとりあえず倒した方がよくないか？ 背後に不安を抱えたままじゃ、先に進むのは危険だと思つが・・・」

「・・・いいえ、それはできません」

セネリオはアイクの意見に、首を横に振る。

「追撃部隊は一つ一つの部隊は少人数の構成という場合が多いですが、その分散発的に襲いかかってきます。たとえ今現在の部隊を食い止めたところで、第2、第3の敵が襲いかかってくることでしょう

う。それに、それだけではありません。おそらくガリアとの国境付近でも、ディン軍の非常線が張られていることでしょうから、この樹海の中での戦いを長引かせると、そちらの駐留部隊にも居場所が見つかってしまう恐れが出てきます。そうなつてしまつたら立ちどころに挟み撃ちにされ……我々は、全滅します」

セネリオの言つことは、どこまでも真実だった。とにかく今は、逃げ切るしかないのだ。だが、後方で戦っている一人を見殺しにすることになつてしまふ……。

アイクはたまらず、グレイルに問いかけた。

「親父！ オスカーとボーレがまだ後ろで戦ってるんだ、あの二人を見殺しにして、このまま国境へ逃げ切るつていうのか！？」

するとグレイルは、少し考えた末に、一つの結論を言つ。

「……アイク、この本隊の指揮はお前が執れ。一人は、俺がシンノ、ガトリーを連れて援護に向かう。一人を救出したら本隊に合流させ、俺とシンノ、ガトリーは追撃部隊のかく乱を行う」

「どういうことだ？」

アイクはグレイルが言つてゐる意味がまるで分からなかつたが、セネリオだけは理解をしたようだ。

「なるほど、部隊を本隊と別動隊に一分し、少數精銳の別動隊が追撃部隊をかく乱。その隙に、やや戦闘力に難がある本隊が全速力で国境を越えてガリアに逃げ込む……という策ですね。悪くはないでしょう。十分、勝算があります」

戦闘力に難がある・・・といふ方はやはつきり言いすぎな気もするが・・・。

「本隊はアイクが指揮をとり、補佐としてティアマトを置く。あとはセネリオとキルロイもこちらだ。オスカー、ボーレの二人も、こちらに合流させよう。別動隊は俺とシノン、ガトリーの3人。オスカーとボーレの支援が完了したら、陽動作戦を開始する!」

「はいよつと」

「がつてん!」

シノンとガトリーは、グレイルの指令に対しても解の意を伝えた。

グレイルは全員の顔を見渡し、声を張り上げた。

「いいか、多分これが、俺たち傭兵団にとつて、これまでで最大の戦いとなるだろう。命令は一つだけだ。『誰も死ぬな』!! 血の繋がりがあるとかないとか、そんなことは、どうでもいい。俺たちは、一つの家族だと思え。家族を悲しませたくなければ、生き延びろ!!」

グレイルの言葉は、誰の胸にも強く残った。

「誰も死ぬな」・・・。

グレイル率いる別動隊が出発するとき、グレイルはアイク達を振り返つて、一言言つた。

「ガリアで会おうー!!」

「兄貴・・・」つい、結構やるみてえだな・・・

全身に傷を負つたボーレが、苦しそうにオスカーに言つ。もう、何人のデイン兵と戦つてきたのだろうか、数える気力もない。

矢を放とうとする敵アーチャーを槍で倒したオスカーも、傷だらけだ。

「予想以上に敵が多い・・・さすがに厳しいな・・・」

するとボーレはとうとう、倒れてしまう。驚いたオスカーは、慌てて馬から降りた。

「! ? おい、しつかりしろ! !

ボーレは仰向けになり、力ない目をオスカーに向け、うわごとのようになに話しだす。

「なあ、団長やアイク達、無事ガリアには入ったかな? 王女様は・・・ヨフアは・・・」

「ボーレ・・・」

ボーレの脳裏には、一人の少女が思い浮かんだ。ひたすら世話を好きで、人一倍明るく、ボーレが知る誰よりも優しい少女。兄のことを慕い、決してそばから離れようとしない。あの立派な団長から引き継いだ、明るい茶髪の少女。

「ミスト……どうか、無事でいてくれよ……」

(思えば、おれはアイクがすくへりやましかつたんだ。それは、団長の息子だからってのもある。天性の戦いの技術を持つてるのである。でも……)

だんだんと、意識が薄らいでいく。すぐ横で兄貴がなんか言つてゐるような気がするが、よく分からな。

(ミストが、あんなにアイクになつこつるのが、すくへりやましかつた。おれにも、そうやって接してほしかつたんだ。結局、そんなことはなかつたんだけどな)

茹むした、土のこせいが鼻を刺激する。

(おれは、こんなところでやられるなんて思つてなかつた。もつともつとい、強くなれるはずだつた。アイクの、先輩なんだから)

だが、常に死と隣り合わせの戦いをするのが、傭兵といつものだ。

(おれは、甘く見てたのかな……悪い奴をやつつけるかつていい戦いとか、そういうこと、望んでたのかもしれんな……)

ここまで、死を間近に感じたことはなかつた。これが、死といつやつなのか……。

(オスカー兄貴……ヨフア……ミスト……)

意識が、闇にのまれた……。

「おい、ボーレ！ しつかりしろ……」

オスカーは必死にボーレを呼ぶが、返事は全くない。幸い敵の攻撃はやんんでいるが、それもいつまでも続くものではない。いつ次の部隊がやってくるか、分からぬのだ。

究極の決断が、オスカーの目の前に迫っていた。すなわち、ボーレを連れて逃げるか、ここに置き去りにするか。

置き去りにすれば、オスカーは確実に逃げ切れる。おそらく、ガリア王国領までいけることだらう。だが、ボーレはあきらめなければならぬ。

ボーレを背負つて逃げた場合は、逃げ切れない可能性が高い。それに、ボーレはもう助からないかもしれないのだ。ボーレはまだ心臓、呼吸ともにわずかに動いているものの、蘇生できない可能性もある。逃げ切れなかつた場合は、自分自身の命も危ない。

(どうする？ 考えろオスカー。冷静に状況を判断するんだ……)

オスカーは考えた。だが、考えれば考えるほど、頭が混乱してくる。冷静になど、なれるはずがない。

本来ならば、ここは見捨てるべきだらう。血のつながりとか、仲間だとか考えず、見捨てて逃げるべきだらう。そうすることによつ

て、生き残った自分が、後で再起する「」ともできる。

(だが・・・・・)

オスカーは迷っていた。むせむせ、置き去りにして逃げる「」などできない。

気が付いたら、彼は馬を走らせていた。樹海という、足場が悪い地形にもかかわらず、馬を全速力で走らせていた。

彼の後ろには、ぐつたりとしたボーレが縛り付けてあった。まだ、かすかに心臓の鼓動を感じられる。

「ボーレ、死ぬなよ！！」

相手が聞いてるかどうかなど分からぬ。だがオスカーは叫んだ。後ろからは、『インの追撃部隊が迫ってきてることだらう。でも、振り返る余裕は彼にはなかつた。

「お前はこんなとこりで死ぬやつじやないだらう。だから、絶対生きててくれ！」

オスカーが乗る騎馬は、スタミナ切れでとても苦しそうにしていた。だんだんと、足取りが重くなつていく。それでもオスカーは、鞭をあたえた。強引にでも走らせた。

「」のまま、ガリアに行くんだろう。王女を助けるんだろう。「こんなところで死んだら、かつこわるいだらう……」

小さな小川を飛び越え、大樹の下をくぐり、茂みを突つ切る。普段の冷静沈着なオスカーは、そこにはなかつた。

「ヨフアが心配して待つてゐるぞ！　だが、死ぬんじやない……！」

オスカーは、夢中だつた。

## 6章 ～陽動作戦～ 前編（後書き）

さあ、果たしてボーレは助かるのだろうか！？ オスカーはアイク達に合流できるのだろうか！？

陽動作戦は、無事成功するのだろうか・・・

グレイル傭兵団は、より過酷な運命に立ち向かう。

## 6章 ～陽動作戦～ 後編（前書き）

ガリア王国国境付近で、デイン軍追撃部隊に追いつかれたグレイル傭兵团。隊列の最後尾を守っていたオスカー、ボーレの二人は、多勢に無勢の戦いを強いられた。

デイン兵はかなりの数で一人に襲いかかり、オスカー、ボーレともにかなりの怪我を負う。特にボーレは、生死の境をさまよう危険な状態となつた。

傭兵团長のグレイルは、セネリオの推測に基づき、部隊を2分することを決定した。

部隊を分けて、国境越えと一人の救出を同時に行つとすることである。

背後から迫る追撃部隊の、かすかな足音を聞きつつ、本隊を率いるアイクはついに、クリミア＝ガリア国境の川のほとりまでたどりついた・・。

## 6章 ～陽動作戦～ 後編

「クリミア＝ガリア国境」

「アイク、とうとう国境の川のほとりにたどりついたわ！」

先頭を行くティアマトが、アイクを振り返つてそう告げた。耳には、川のせせらぎが聞こえてくる。

「ああ、そのようだな」

アイク達が今いる場所は、国境を流れる川の北のほとりに生い茂る、葦の茂みの中だ。よく聞き耳を立てると、川のせせらぎに交じつて、人の話し声も聞こえてくる。

「・・・どうやら、結構多くの人数が国境にいるみたいだな。セネリオ、デイン軍が非常線を張つてるのか？」

やや遅れてやつてきたセネリオに聞くと、彼も耳をすませる。

「ええ、おそらくデイン王国軍の待ち伏せでしょう。僕が様子を見に行つてきますので、アイク達はここで待っていてください」

「分かった、気をつけろよ」

セネリオが行つたのを確認し、アイクは後ろから来た馬のところに行く。

馬には、エリンシアが乗っていた。ミストがその馬を引っ張つており、ヨファとキルロイはその後ろから、大量の物資を載せた馬車を操っていた。

「エリンシア姫、セネリオが偵察から戻るまで、しばし休息だ。長旅、大丈夫だったか？」

アイクに手伝つてもらいながら、エリンシアはゆっくりと馬から降りる。

「ええ、私は平氣ですが・・・アイク様こそ、大丈夫でしょうか？」

「ああ、俺も問題はない」

「そうですか、それはよかったです」

キルロイが近くで水がわき出している場所を見つけ、水を汲んできてくれた。あらかじめ作つておいた魚の干物や乾パン、ソーセージといった保存食を取り出し、自然と休憩時間となる。

本当なら火をおこして野ウサギなどを焼きたいところなのだが、そんなことをしたらティーン軍にばれてしまう。

水が入つたマグカップを手に、キルロイが隣に座つた。

「「」の戦い、どうなるんだろ？ね・・・」

水を飲みながら、そつそつと歩く。

「・・・ もあな」

アイクはそれだけを答えて、ソーセージにがつつく。アイクは肉が大好きなのだ。

ソーセージを食べながらも、アイクは独り言を呟つ。

「親父はまたしても、俺をこんな大役に任せた・・・ やっぱり、よく分からんな」

偵察部隊の隊長に始まり、拠点防衛の指揮官、さらには国境突破の本隊の指揮・・・。どんどん、役目が重くなつていいく気がする。

「俺はそんなに強くない。強くなる努力はしてるが、力不足だつてことくらい分かつてる。親父はどうして、あんなにあせってるんだ・・・?」

ソーセージを水で流しこむと、隣にいたキルロイが答える。

「僕も、よく分からぬいけど・・・きっと、それが団長のやり方じやないのかな?」

「そりなのかな・・・でも・・・」(なんか、釈然としないんだよな・・・)

そこへ、偵察を終えたセネリオが戻ってきた。

「報告します。国境付近に『ディン』軍一個小隊を確認、国境の待ち伏せ部隊と思われます。騎馬兵、重歩兵の姿も確認できました」

「やつぱり、待ち伏せしてたのね・・・」

セネリオの報告にて、ティアマトは苦い顔をする。

「セネリオ、何とか安全に突破できそうな方法はありますか?」

アイクの問に、セネリオは頭をつぶつて考える。

「・・・今われわれがいる場所の付近には、橋が2つかつています。そして、葦の茂みはここから西・・・下流側の橋のたもとまで茂っています。このまま茂みに紛れたまま、橋のたもとまで行き、一気に奇襲を仕掛けて下流の橋を制圧。そこを拠点に回り込み、上流側の橋も制圧するのが最善の策と思われます」

「分かつた、そこからが陽動作戦だな」

「はい。あと、戦えない王女、子供たちは別の方面からガリア入りさせるといいでしょう。ここよりもさらに下流にも、もう一本の橋がかかっていました。そちらこは、『ディン』軍の姿も確認されていません」

それを聞いて、ヒリンシア、ミスト、ヨファがやってきて、口々にアイクに言つ。

「アイク様、みなさん、どうかご無事で」

「お兄ちゃん、がんばってね! また後で!」

「大丈夫、かくれんぼなら、得意だから・・・」

アイクはそれを聞いて、3人に言つ。

「ガリアで会おう。絶対に見つかるなよ！！」

3人の姿が見えなくなつてから、アイク達4人は行動を開始する。  
「橋のたもとまで、このまま茂みに紛れたまま近付こう。物音をたてんように、慎重に行動してくれ」

4人の影は、ゆっくりと橋に近付いてゆく。その気配に、茂みのそばで居眠りしていたデインの剣士が気付くことはなかつた。そしてその1分後、彼の眠りは永遠のものとなつた。

（クリミア南部の樹海）

一方、グレイル達別動隊は・・・

オスカートボーレを樹海の中で探していたのだが、どこにもその気配がみあたらず、焦りが募つていた。

「シノン、ガトリー！ そつちの様子はどうだ？」

グレイルの問いかけに、別の場所を探していた二人は顔を上げ、答

える。

「団長、ソロモンもあつてゐる痕跡は見当たらねえぜ」

「さうです。一人とも、ゼリ行つちやつたんでしようか……」

自分たちが来た道をちゃんとたどつてこるはずなのに、見つからない。一体どうことなのだろうか。

「まあか、敵の捕虜にでもなつてしまつたとか……」

シノンが不安なことを口にする。グレイルも苦い顔をして、重くうなづく。

「ありつむだらうな……俺たちはテインことひては、敵国の王女を匿つてるんだ。捕虜にとりえて情報を洗いざらし吐かされ……」

「最後には、処刑つか……？」

「ああ……おわりは」

ガトリーが継いだ言葉に、グレイルは再びうなづく。

と、その時だ。グレイル目がけて矢が飛んできたのは。

「……」

反射的にグレイルは、背負つた戦斧を前に構え、矢をはじく。

「お、敵さんのお出ましだぜー。」

『いつわらや、シノンはすぐ『』を取り出し、狙いを矢を放つたディン兵のアーチャーに向ける。

グググ・・・ヒュウ・・・・グサツ！

「くつ・・・応援を・・・求む・・・ぐふつ」

「なにイ、味方がやられた！ 急増援要請をせよーー。」

ディン兵の一人がほり笛を吹き鳴らすと、岩の陰や木の上、茂みの中から、つきつきとディン兵たちが現れ出てきた。

「うわわ、たくさん出てきたっすね。団長、応戦しますか？」

ガトリーもすでに、鋼の槍を手にしている。

「ああ、戦うとしよう。ただし、無理はするな！ 僕たちの目的はあくまで、敵部隊のかく乱だ。まじまじのところで、撤退するよつい！」

グレイルは、戦斧を手に敵中へと突撃していった。

～クリミア＝ガリア国境、傭兵团サイド～

「ウインドーー！」

ビュウウウ・・・・ズバアツ！！

「ぐはあ・・・・」

ザッパーん・・・

セネリオが放つたウインドの魔法をまともに受けたディンのアーマーナイトは、そのまま橋の下の川に転落する。盛大に水しぶきを上げたアーマーナイトは、どんどん沈む。あんな鎧身に付けてたら、浮かんでこれないだろ？

「よし、これで下流の橋は制圧完了だな」

アイクはそう安心する。だが・・・。

「国境、ディン軍サイドへ

「むむ・・・傭兵団ども、なかなかやるではないか・・・」

国境を守る待ち伏せ部隊の司令官は、傭兵団のあまりの強さにあせりの顔色を見せ始めていた。手にしたショートスピア（手槍の改良版。軽量化と威力向上の両立を実現させた直間両用の投げ槍）を、落ち着きなさそうにもてあそぶ。

そこへ、騎馬にまたがったディン兵の一人が伝令にやつてきた。

「ヒマコウ隊長、報告いたします！」こよ下流へ下った川の対

岸地點に、怪しげな人影を撃したとの報告を受けましたー。」

「なんだと・・・ビのよひなやつらだー?」

Hマコウと呼ばれた司令官が聞き返すと、伝令の騎兵は報告を続ける。

「情報によりますと、人影は3人。そのうち2人が子供とみられ、もう一人の外見が・・・」

「まさか・・・クリミア王女かもしれないのか!?!?」

「はい。Hメラルド色の髪が特徴的で、間違いないと思われますー。」

Hマコウは、田を輝かせる。

「ふははっ、ぢりやうじのじのじもシキが回つってきたようだ  
な」

「隊長、いかがいたしましたよ~?」

「ふつ、案するな。実はな、今傭兵团のやつらが乗つている橋には、仕掛けがしてあるのだよ。おい、工作兵、いるか!!--」

Hマコウの呼び声に、斧を手にしたディーン軍の戦士がせつてくる。

「六一四」

「例の仕掛けを動かせ。あの橋を落とし、傭兵どもを川に落とすの  
だ!」

「かしこまりました」

ヒマコウの命令の通り、戦士はアイク達がいる橋のところへ向かっていく……。

（国境、傭兵团サイド）

制圧した橋の上で、アイク達は次なる攻撃の準備をしていた。

「ライブ！」

キルロイのライブで、アイクの怪我がみるみる消えてゆく。

「助かった。キルロイ、ありがとうな」

「いえいえ、無理しないでね」

そんな二人の横で、セネリオは何かを見つめていた。

「・・・」

「セネリオ、どうしたの？　さつきから何を見てるの？」

ティアマトか聞くと、セネリオは顔を向けずに答えた。

「対岸にいるあの戦士・・・拳動不審ではありますか？」

セネリオに言われて、他の3人もそちらを見る。

すると、戦士もこちらを見て声を上げる。

「傭兵団どもめ、これで終わりだな！」

「！？」

戦士はそう言って、橋の横に置いてあったタルに斧を振り下ろす。すると次の瞬間・・・！！

ベキベキベキ・・・ドッカーン！－！

「うわああーっ！－？」

タルが爆発を起こしたのと同時に、その爆発が次々と橋の方にも伝わり、最後には橋そのものが爆発を起こしたのだ！おそらく、タルの中には大量の火薬が詰められており、さらに橋にも爆弾のようなものが設置してあつたのだろう。

ティアマートは運よく橋には乗っていなかつたため爆風には巻き込まれず、セネリオとキルロイも爆風に吹き飛ばされたが、川には落ちなかつた。

だが・・・。

「アイクっ！！」

セネリオが叫ぶ先には、アイクが川に流されていた。聴こえているのかいないのか、アイクは返事をしない。そのまま、流されてゆく。セネリオも爆風に巻き込まれてかなりの怪我を負っていた。だが、セネリオはそれにかまわずアイクを呼ぶ。

「アイク！ しっかりしてください！！ アイクー！！」

だが、セネリオの叫びも届かぬうちに、アイクの姿は見えなくなつた・・・。

そしてその直後、敵将エマコウによる、デイン軍総攻撃の命令が下り、敵が一気に上流側の橋から、生き残った3人に向かつて突撃を始めた。

続く！

## 6章（陽動作戦）後編（後書き）

絶体絶命のアイクとボーレ。彼らは無事に、生還できるのだろうか？

そして、傭兵団のメンバーの戦いの結末は・・・！？

次回は、「6章外伝：噴火の大斧」を予定しています。

## 6章外伝 ～噴火の大斧～ 前編（前書き）

アイク率いるグレイル傭兵団本隊は、ガリア国境にてデイン軍の敵将エマコウの罠にかかる。

橋の爆破により、アイクは川に転落、セネリオとキルロイも、大きな負傷を負った。さらに、別ルートからガリア入りをすべく行動していたエリンシア達の居場所も、デイン軍すでに発見されてしまった。

オスカー、ボーレとの合流もいまだなされていない状況のところへ、デインの待ち伏せ部隊が一斉に襲い掛かる。

一方、再び樹海の中に舞い戻った、グレイル率いる傭兵団の別動隊は、デインの追撃部隊を相手に、決死のゲリラ戦を繰り広げていた。

クリミア南部の樹海

襲い来るデイン兵を相手に、時にはやり過ごし、時には戦う・・・を繰り返すグレイル一行。戦い慣れた3人ではあつたが、徐々に疲労が溜まりつつあった。

「くたばりやがれやーー！」

「シノンさん、危ないっ！」

ガキイン！！

デインの戦士が、斧を振りかざしてシノンに斬りかかる。その間にすれすれで、ガトリーが割り込み、斧を防ぐ。

「ふーっ・・・危なかつたっす・・・」

「けつ、助けを呼んだ覚えはねえのに・・・」

ヒュン・・・グサッ！

「ぐつ・・・」

シノンの放った矢で動きが止まつた戦士めがけて、ガトリーが槍を突き出す。

「えいっ！」

ズシャッ！

「がはつ・・・デイン王国に・・・栄光あれ・・・」

戦士は、倒れた。

「ぬおあーー！」

ズシャアアーー！

グレイルの斧一振りで、彼の周囲を囲んでいたソルジャーがまとめて四方に吹っ飛ばされる。断末魔も、あまり長くは聞こえなかつた。グレイルは、ただ戦つていた。一言も話さず、ひたすら斧を振るい、敵を倒すのみだつた。

そんな彼の様子を見て、シノンがふと思つ。

(団長は・・・変わつたな。普段から厳しい人だったが、デインとクリミアの戦争が始まつて、妙にピリピリする雰囲気を出すようになつた・・・)

思いながらも、シノンはちゃんと敵に正確に矢を送り込む。だが、ときおりグレイルの方をちらちらと見る。

（オレの尊敬するグレイル団長・・・あんたは一体何をあせつてるんだ？ いきなりアイクの小僧に大役を任せたりして）

考えだと、そのことが気になつて他のことを考えられなくなる。シノンのくせだった。

（以前、金に困つて山賊の用心棒をやつてたオレを、あんたは快く傭兵团に迎え入れてくれた。相変わらず裕福とはいえない生活だが、それでもオレは嬉しかったんだ）

すぐ隣で、ガトリーが敵の剣士を倒した瞬間、彼の鉄の槍が真つ二つに折れる。彼はあわてて背中に背負つた鋼の槍を取り出し、再び向かつてくるソルジャーに向き直つた。

（『』と斧、全く戦い方が異なる2つの武器だったが、一騎討ちでオレを負かしたのはあんたが初めてだった。重傷を負つたものの、オレのことを連れて帰つてくれたのはあんただつて聞いている。目が覚めたオレの顔をのぞいたあんたの目は、すごく優しいそつだつた）

ガトリーが攻撃したアーチャーを、シノンが撃ち抜く。その先では、グレイルが果敢に斧を振り回し、5・6人を相手に戦つているのが見えた。

（オレはその時、心に決めたんだ。グレイル団長に、ついて行くことを。オレが今まで、心から尊敬したやつは、グレイル団長ただ一人だけだ・・・）

追撃部隊の襲撃が収まつたのを見て、グレイルがシノンとガトリーに向き直る。

「敵部隊の掃討はあらかた完了した。引き続き、オスカーとボーレの搜索を開始する。一人とも、怪我をしているようならすぐに治すように。あと、新たな敵部隊との遭遇については、厳重な警戒をすることだ」

「了解っす！」

「分かつたぜ」

3人は、バラバラの方向に散つて搜索を始めた。

一方、エリンシア達は・・・

（クリミア＝ガリア国境）

エリンシア、ミスト、ヨファの3人は、国境を流れる川の北岸（クリミア側）を、ひたすら西の下流に向かつて進んでいた。道中は葦が背高く生い茂り、進むのは困難を極める。まあ、逆に考えれば敵の目をあざむくこともできるのだが・・・。

もつたといないが、馬車はすでに捨て、それぞれ必要なものは袋に入れて背負っている。体力があまりない3人にとっては厳しいことだつたが、仕方がない。

「ミストちゃん、ヨファくん、こんな大変な目にあわせてしまつて

「めんね。私のせいなのに……」「

エリンシアは申し訳なさそうに一人に謝る。すると、先頭を行くミストが振り返った。

「エリンシアさま、気にしないでくださいよ。それに私たちの方こそ、王女様なのにこんな危ない」とさせてしまつて……」「

「ミストちゃん……」

少し進むと、茂みがだんだんと開けてきた。見ると向こうに、橋が見える。

「あ！ セネリオが言つた通り、橋だ！」

「まあ、本当ね。これを渡ればガリアへ……」

敵もいない様子だ。2人は茂みから出て、橋へと行く。ヨフアもそれを追いかけようとして……立ち止まり、叫んだ。

「二人とも、危ないいつ……！」

「！？」

次の瞬間、ミストの体のすぐ横を、矢が掠めた。矢はすぐ足元の地面に突き刺さる。

「矢……！？」

ミストが茫然としていると、橋のすぐわきの立ち木の上から、大きな声が聞こえた。

「チツ、外したか……仕方あるまい、ものどもかかれ……」

立ち木の上からはティイン軍のアーチャーが飛び降りたと思った瞬間、その背後の茂みから斧を持つた戦士たちが一斉に3人に向かつて襲いかかってきたのだ！

「エリンシアさま、逃げてえっ！」

ミストはエリンシアに向けて、そう言った。だが、エリンシアは逃げることができなかつた。

「そんな……無理よ……」

目の前には子供が2人。そんな状況で、エリンシアが逃げられるわけがなかつた。ここで逃げたら、二人は助からない。自分が逃げたことで、一人を見殺しになどできない。

「……ぼく……戦うよ……」

ヨファが、そういう。見ると、手には棒きれに弦を取り付けたようなものを持っている。

「ヨファ！？ ヨファが戦えるわけないでしょ！」

ミストがヨファに反論する。

「た……戦えるもん！ シモンさんから、『』を教えてもらつたも

ん！！

「『』？ それが『』だつて言つの？」

ミストが言つとおり、ヨーファが持つてゐるものはどつ見ても『』といふような代物ではない。袋から取り出して背中に背負つてゐる矢こそは本格的ではあるものの、とてもではないが戦えるよつた装備ではなかつた。

「『』だよー。ぼくががんばつて作つてみたんだ。戦えるから・・・ミストちゃんはエリンシアさまを連れて、逃げて！」

それでも、一人は逃げない。

「逃げられるわけ・・・ないじゃない。震えて、泣いてる男の子を放つて・・・逃げられるわけないじゃない！！」

ヨーファは、泣いていた。本当は、ものすゞく怖いのだ。それに、3人を目がけて襲いかかる戦士はざつと5、6人。戦い慣れていないヨーファにとっては、とても互角に渡り合えないだろう。

その時だ・・・。

すぐ横を流れる川から、盛大な水音が聞こえたのは。

「くつ・・・はあつ・・・はあつ・・・」

川から這い上がつてきた人物は、体を振つて軽く水を吹き飛ばす。

そして、田の前の光景を田にした。

「Hリンシア姫、ミスト、ヨフア・・・今助けるからな」

彼は腰に佩いた鉄の剣を抜き、走り出した。

ディンの戦士たちは、もつかなり近くの位置にいた。

（シノンさんだつて危険な戦場に出て戦つてるんだ。ぼくだつて、やれる！）

ヨフアはかなり緊張して、弦を引く。

「ははっそんなおもちやの！」で何ができるつーんだ？」

戦士の一人が斧を振りかざして、ヨフアを狙う。

「ぼくだつて、やれる！――」

ヨフアは弦から手を離し、矢を放つ。だが、矢はまるで見当違いの方向へと飛んでいった。しかも、その一回かぎりで、ヨフア手作りの「」は真つ二つに折れてしまった。

「ひやはは、バカなガキだぜ！」

「や、そんな・・・」

「さあ、ガキはそろそろ寝る時間だぜえ！――」

戦士はその勢いで、ヨファめがけて斧を掲げ、振り下ろす・・・その瞬間！！

「でもねー！」

スパン！！

突然、ヨファの目の前を何者かが通り過ぎたと思った直後、ヨファを襲おうとしていた戦士は茂みの中へ吹っ飛ばされた。

۱۰

ヨファの目の前で、蒼い髪にハチマキ、赤いマントをはおった人物は、剣を持った右手をまっすぐ、横に伸ばす。

「…3人には、手は出せん」

「アイク……様……？」

「お兄ちゃん・・・？」

「アイクさん……どうして？」

アイクは振り返らず、答える。

「話は後だ。俺はこいつらを片づけるから、あんたたちは危害が及ばないよう、茂みに隠れていてくれ」

3人は、近くの茂みに逃げる。『デインのアーチャー』がヨフアを目がけて矢を放つたが、アイクはそれを剣ではじいた。

『デイン兵のアーチャー』は、驚く。

「なんてやつだ・・・おいお前ら、やつを仕留めろー！」

一斉に、5人の戦士がアイクに襲いかかってきた。

「ぬうん！－」

アイクは戦士の一人を、剣で思い切りたたき割る。続いて、次に襲いかかってきた戦士を切り上げた。

「ぐふつ・・・強すぎる・・・」

「やられただ・・・」

3人目の戦士が斧を振り下ろすが、アイクはすでにバック宙で距離をとつていた。そこから、居合斬りを決める。

「ぎゃああ・・・・」

さらに後ろから別の戦士が手斧を投げつけるが、アイクはそれを前転で回避しつつ、距離を詰めて懷に入る。反応できない戦士をつかみ、上に放り投げたのちに川の中へ斬り飛ばす。

最後の戦士の鋼の斧の一撃は、剣をカウンターの構えで受け止める。

ガキイン！

「甘いっ……！」

シャキイン！

「ぐはつ……」

「うひて、アイクはあつという間に戦士たちをせん滅してしまった。

「な……嘘……だろ……？」「うなつたら……逃げるつ！」

事の様子を見守っていたティンのアーチャー（どうやら様子からして、この部隊のリーダーらしい）は、一目散に密林の中へと逃げていった……。

「お兄ちゃん、無事だつたんだね！」

ミストはアイクのもとへと駆け込んできた。

「ああ、俺は何とか無事だ」

「アイク様……」無事でよかつたです

ホーンシアも、アイクの無事を安堵していた。

「エリンシア姫、あんたを危険な目にあわせて、すまなかつたな」

「いいえ、こうして助けに来ていただいて、うれしかつたです」

そこへ、辺りの様子を見に行つていたヨファが戻ってきた。

「この辺りにはもう敵はいないみたいだよ！」

「そうか、それはよかつた」

そこでヨファは、気になつていたことをアイクに聞く。

「ねえアイクさん・・・どうしてアイクさんがここにいるの？」

アイクは3人に、事情を話す。するとミストが声を上げた。

「えつ・・・じゃあセネリオやティアマトさん、キルロイの3人は、今すぐ危ないってことー？」

アイクは川の上流の方を向き、答えた。

「・・・ああ。あの3人相手に、デイン軍は攻撃を開始していると思つ」

「そう・・・か」

戦い慣れているティアマトがいるとはいえ、セネリオとキルロイと

いう、体力が低い団員を守りながらの戦いは、困難を極めるだろ？

今度はヨファが口を開いた。

「でも、オスカー兄ちゃんやボーレが合流できれば、きっと何とかなるよね？」

「それが・・・俺が知る限り、まだ一人とは連絡が取れていない」

「そんな・・・」

ヨファの一人の兄は、まだ樹海の中にいるということなのだろうか・・・。

やがてアイク達は、橋を渡つてガリア領へたどり着いた。

「お兄ちゃん、私たちガリアに着いたんだよね？ なんか・・・実感ないかも」

ミストが語つとおり、どうも実感がわかない。ただ橋を渡つただけで、隣の国に着くといつことが・・・。

「オスカー兄ちゃん、ボーレ・・・死んじゃいや・・・だよ・・・」

ヨファは元気がない。

「ヨファくん、元気出して。きっと一人とも、元気だから」

「エリンシアさま・・・」

「さつきの様子を見た限りでは、エリンシア姫の位置が敵にバレている可能性も考えられる。俺も、あんたと一緒に行こう」

アイクはそう言った。ティアマート達のことも心配だが、こればかりは仕方ない。

アイクはエリンシアの前に立ち、先頭を進む。

「アイク様・・・ありがとうございます」

エリンシアが頬をわずかに赤く染めたことに、アイクは気が付かなかつた。

## 6章外伝 「噴火の大斧」 前編（後書き）

アイクは無事だったが、オスカーとボーレは大丈夫なのだろうか・・・？

次回はちょっと早めに、あのキャラが登場！

## 6章外伝 「噴火の大斧」 後編（前書き）

アイクは無事に生還したが、グレイル傭兵団の本隊は非常に危険な状況だつた。

アイク達は本隊を助けるべく、当初の国境突破地点へと向かう。

一方グレイル達別動隊は、いまだにオスカー、ボーレとは合流ができずにいた。焦りばかりが募る・・・。

## 6章外伝 『噴火の大斧』 後編

クリミア南部の樹海、別動隊サイドへ

「団長・・・全然見つからないすね・・・」

全身に大汗をかいだガトリーが振り返る。

「・・・ああ。もしかしたら・・・すでに捕虜として捕らえられたかもしれん・・・」

グレイルもそう答えた。さつきからデインの追撃部隊とも戦いつつだが、全く一人の手掛かりが見つからないのだ。

その時、シノンがグレイルの注意を引いた。

「おい団長！ 見てみろよ。デインの連中が・・・」

シノンが指差した方を見ると、少し開けた場所で、多くのデイン兵がたくさんの人を長いロープでつなぎ、たくさんの収容用の馬車の中に載せているところだ。捕らえられている人々は、みな皮鎧を身に附けている。

「団長、何なんでしょうあれは？」

近くの茂みに身をひそめ、ガトリーが首をかしげる。グレイルは答えた。

「おそらく・・・捕まつてゐる彼らはクリニアの傭兵だらう。このあたりで戦闘があつて、勝ち田が無くて投降した・・・といった感じだろうな」

「そりっすか・・・」

武器は全て取り上げられてゐるようだ。丸腰のまま、馬車へ次々乗せられていぐ。

「・・・団長、もしかしたらこの傭兵たちに紛れて、あの一人が捕まつてゐるかもしないっすよね?」

ガトリーがそう聞く。

「確かに、俺もそりゃ考へた。それに彼らは同じクリニアの臣・・・幸い敵の戦力はさほどはなれそりだし、ソシには追撃部隊は来ないだろ?」

グレイルは斧を取り出す。

「お、じゃあ早速奇襲でもかけるか?」

シノンも矢を一本取り出した。

「おれも賛成っす。いつでも行けるつすよ」

ガトリーもうなずいた。

グレイルは一人の方を向き、考へた策を話す。

「よし、そつと決まれば早速動き出すや。まず、俺が敵の渦中に飛び出して注意を引くから、ガトリーはその隙に馬車から捕虜を順々に解放しろ。シノンは遊撃で敵をかく乱してくれ。いいか、くれぐれも捕虜に危害を加えるんじゃないぞ」

「けつ任せでかけつて」

「分かったっす！」

ガトリーは馬車の横まで茂みに紛れながら移動し、シノンは近くの木の上に登った。

「じゃあ、作戦開始だ！」

グレイルは立ち上がり、敵中へ飛び出していった。

「なつ・・・？ 敵襲！－ 敵襲だあーー！」

グレイルの雄たけびに気が付いたティン兵は、そう叫ぶ。

「ふんつー！」

ズシャアアーー！

「ぎゃあ・・・！」

ティン兵の一人は剣を振り上げる間もなく、グレイルの戦斧の餌食

となつた。

「なんて強さだ・・・よくも仲間を・・・!.. かかれ!..」

この部隊のリーダーと思われるアクスナイト（斧を使って戦う騎兵）が、ショートアクス（手斧の改良版、威力などが向上した直間両用の投げ斧）を振り回しながら部下に命令を下す。

「はつフォッセル隊長!..」

「どいつやうじいの部隊の隊長は、フォッセルとこう名前らしい。

フォッセルの命令を聞き、その場にいたデイン兵たちはすぐに隊列を組み、グレイルを囲む。

「どいの誰か知らねえが、生きて帰さね・・・ぐつ!..?」

威勢よく叫んだデインのソルジャーは、突然言葉を詰まらせ、倒れ込む。見ると、そのソルジャーの眉間に矢が一本突き立つていた。他のデイン兵たちは慌てだす。

「！」の矢は一体・・・!..?」

「見たか？ オレさまの達人技!..」

「な、何者だ!..」

デイン兵の声に答えるように、シノンが木の上から飛び降りてきた。空中で一回転をしつつ、スタッフと着地を決める。

「グレイル傭兵団のシノンだ。死ぬ前までは少なくとも、覚えてい  
るよな？」

同じころ、ガトリーは一つの馬車に取り付き、守っていたティーン兵  
を槍で倒していた。見るとティーン兵は、扉の鍵を持っていた。おそ  
らく、この馬車を開ける鍵だろう。

「さてと……じゃあ早速、捕虜を解放するとするか！」

馬車の最後尾にあつた鍵付きの扉をさつき奪い取った扉の鍵で開け  
ると、中から捕虜たちの歓声が上がった。

「誰だか知らねえが、助かつたぜ！」

捕虜たちのロープをほどいていく。すると一番前には、藍色の長い  
髪に白いハチマキをしてオレンジの服に皮鎧を身に付けた少女がつ  
ながつっていた。

「あ、あたしたちを助けてくれるの？ ありがとう！」

「はははっ、当然っすよ！ 何てつたって俺は無敵の傭兵ガトリー  
っすから～」（うわ～かわいいコだな～！）これは絶対運命の出  
会い・・・（

ガトリーが運命の出会い（？）を感じることには全く気付かず、  
少女はガトリーに話しかける。

「あたしワゴンで戻つんだ！ クリミア軍に雇われた傭兵なんだけど、ドジって捕まっちゃってね・・・ガトリーさん、ありがとうね！」

「いやいや、全然大したことないですよ～！ このおれにしてみれば、この程度のことなんて楽勝です。」

ガトリーはワゴンのロープをほどく。

「あ、ガトリーさん！ できたらお願ひがあるんだけど・・・先頭の馬車を守る敵をやつつけてくれない？ その馬車に、あたしたちから取り上げた武器が積んであるはずだから！」

「がつてんっす！ つおー燃えてきたぜーーー！」

ガトリーは、一気に先頭の馬車まで走っていく。途中の馬車を守つていた兵士も、全て撃破してしまった。

「このつとこの中の口にいい所見せて、おれのポイント稼いでおかんとな！」

動機が不純な気もするが、何はともあれ普段よりも彼は調子がよかつた。あつという間に先頭の馬車もたつた一人で制圧し、馬車を解放。

捕虜としてとらわれていたワゴンを始めとするクリミア傭兵たちは、自分の得物を手にメイン兵たちへ反乱を起こしたのだつた。

青ざめた様子のデインの重歩兵が、フォッセルのところへ駆け込む。

「フォッセル隊長、大変です！　捕虜どもが脱走し、武器を手に我らに反乱を！！」

「な、なんだと…？　馬車の警備はどうなつていた…？」

「そ、それが…。青い甲冑の何者かに襲われて、警備兵はみな…。」

・

「く・・・く・・・！　よし、お前らは反乱を鎮圧せよ！　捕虜どもは全員斬り捨てて構わん！　私はこいつらと戦つから、全員で捕虜どもとその青甲冑とやらを皆殺しにしろー！」

「はっ」

デインの重歩兵が去つていいくのを見て、シノンがグレイルに向つ。なお、二人はすでに近くのデイン兵は全員倒していた。

「ガトリーのやつ、うまくやつたようだな？」

「そのようだな…。よしシノン。お前はガトリーや捕虜たちの支援をしてこい。フォッセルの相手は、俺がする」

「了解！」

シノンはやつ言つと、戦いが起きている馬車群の方へと走つていった。

「さてと・・・あんたがこの部隊の隊長だな？」

グレイルは戦斧を構える。

「そうだ！ デイン王国軍第13小隊隊長のフォッセルとは、私のことだ！ 貴様らは何者だ！？」

フォッセルもショートアクスを構える。

「グレイル傭兵团、団長のグレイルだ」

「一傭兵团」ときに・・・我々の任務が潰されるとは・・・！  
かくなる上は貴様らも道連れだ！ 食らえ！！

フォッセルはショートアクスを振りかぶり、グレイルめがけて投げつけた。ショートアクスは弧を描く軌道でグレイルを襲う。だがグレイルは全く動かない。ショートアクスの軌道は確実にグレイルをとらえていたため、動かなければグレイルに命中してしまう。

(・・・当たつた！)

フォッセルはそう確信した。だが・・・。

そこにグレイルはいなかつた。

「消えた！？」

何にも当たらずに戻ってきたショートアクセスをうまく受け止めたフォッセルは、目を疑う。慌てて周囲を見渡すが、グレイルの姿が確認できない。

「ど、どこに行つたんだ！？」

「上を見てみる、ここだ」

「……？」

すぐ上を見ると、グレイルが木の枝に片手でつかまっていた。

「何・・・だと・・・！ 速すぎると・・・！」

慌ててフォッセルがショートアクセスを再び投げるが、今度は見当違いな方向へと飛んでしまう。ショートアクセスは、うまく手元に帰つてこなかつた。

「しまつた！」

愕然としたフォッセルの目の前に、グレイルは飛び降りた。

「これで、終わりにしてやる・・・」

グレイルは斧を大きく振りかぶる。すると、急に辺り一面がすさまじい熱氣を帯びてきた。

「な、何をするんだ・・・？」

グレイルが持つ戦斧が、白く灼熱する。足元がゆがみ、周囲の空気が渦巻く。以前の、カタオールを荒らす盗賊の首領を前にしたときと同じだ。まるで、火山だ。

「噴火 ウルヴァン !!!」

そして、それは解き放たれた。

捕虜とデインン兵との戦いは、さつきまではこう着状態が続いていた。だが、シノンが加勢してから、徐々に捕虜側が優勢となつていった。

「必殺の一撃だ」

ヒュツ・・・グサツ！！

「ぐえあ・・・・・」

シノンが放つた必殺の一撃の矢で、デインン兵が倒れる。その向こうでは、ガトリーがちらちらワコの様子を見ながらも、鋼の槍を片手に勇敢に敵と渡り合つていた。

「グレイル傭兵団つて・・・強いんだな〜！ ようし、あたしもがんばるか〜！！」

ワコは細身の剣を手に、近くの戦士に向き合つ。

「へへ・・・女の細腕で何ができるってんだ？」このアマーラ

戦士は鉄の斧を振りかざしてワコに襲いかかるが・・・

「あははっ遅い遅い～！」

「なに？～！」

スパン！

ワコは思わずまじめ速さで、先手の一撃を繰り出したのだ。

「先手必勝！ 待ち伏せの極意、がんばって身に付けた甲斐があつた」

「ぐくぐく～！」

戦士が振り下ろした鉄の斧は、むなしく空を切る。

「そんな力任せの一撃なんか、当たらな～～」

シャキン！

「は、速すぎる～～・・・・

「よし、だいたいこっちの方は片付いたみたいだね

ワコは汗をぬぐいながら、横にいたガトリーに話しかける。

「あ、そうですね！ まあ、おれに任せたければこんな朝飯前で  
……」

「あははっ、でもグレイル傭兵団って本当に強いんだね～！ あた  
しちょっと尊敬しちゃった！」

「アリヤあ強いつすよ～ まあ、おれはその中でもかなり上の方  
つすけどね～」

さりげなくガトリーは、自分を売り込む。だが、ワコの興味は別な  
所にあった。

「ねえ、そのグレイル傭兵団の団長さんって何してるの？ あた  
し、お礼言いたくって！」

「あ、団長っすか？ ほら、今敵の隊長と相対してる人っすよ。も  
のすごく強い人っす。で、おれは団長の次に強いくらいの男で～・  
・」

「ありがとう～、じゃあ、行つてくるね～！～」

ワコはやつぱり、グレイルのところへ走つていってしまった。

「あ、ワコさん・・・」（なかなか手こわいな・・・でも、絶対あ  
きらめないもんね！ そのうち振り返らせて見せるぞー！）

そこへ、シノンが戻ってきた。

「あ、シノンさん… もつ終わったつか？」

「ああ、」Jの程度の敵なんぞ、相手になりやしねえな。・・・それよりガトリー。お前な、いい加減その軽い性格何とかしたらどうだ？」

「え、何の」とつか？」「

きょとんとするガトリーに、シノンは言葉を補つ。

「今度は、あの女を口説いてただろ？　いい加減、そういうのやめろつてんだよ」

「ああ、あのことつか！　シノンさんも分かつてないなー、いいつか？　おれは彼女との出合いは絶対に運命だと思つてるつす！　赤い糸で結ばれるんすよー！」

得意げに熱くなつて話すガトリーに、シノンは田頭を押される。

「・・・お前の『運命の出会』とやらは、一体いくつあるんだよ。・・オレの記憶が正しければ、もう2回の出会のはずだが・・・」

「わあ～・・・あの人格レイルさんか～！」

ワコは駆け込もうとした。だが、今は敵将と相対してくる。とりあえず、危くない場所で様子を見ることにした。

敵将がショートアクスを投げつけるが、グレイルは動かない。

(危ないっ！！)

ワユはそう思ったが、ショートアクスが当たると思った瞬間にグレイルは、瞬時に姿勢を低くする。そして斧をかわし、反動で大きく跳躍。頭上の枝にぶら下がったのだった。

「す、すごい・・・！」

再び敵将がショートアクスを投げつけるが、今度は大きく外れ、手元には戻つてこなかつた。

グレイルが飛び降り、敵将の目の前に降り立つ。

そして、大きく戦斧を振りかぶると、突然周囲に熱気が満ちた。戦斧が、白く灼熱する。辺りの空気が渦巻き、景色が歪んだ錯覚まで起こる。

(な、何をするの・・・何が起こるの・・・?)

そして次の瞬間、グレイルは叫んだ。

「噴火 ウルヴァン !！」

灼熱、轟音、閃光。渾然一体となつた圧倒的な破壊の奔流が、斧を振り下ろした地面からあふれる。破壊の奔流は火柱のようなものを形成し、フォッセルを馬ごと飲み込んだ。

時間 자체は短いはずだが、奔流が収まつた時には、フォッセルの体は残つていなかつた。目の前には、ただ焦げた地面が残るのみ。

「ハアツ・・・ハアツ・・・」

『噴火』という技は、グレイル自身の体力も大幅に消耗する。その反面、絶大な破壊力を生み出す奥義だつた。

あえてこんな大技を用いて敵を倒したのは、苦しみが残らないようにするという、彼なりの心遣いなのかもしれない。

パチパチパチ・・・

どこからか拍手が聞こえたため、グレイルはそちらを見る。すると、一人の少女剣士、ワユが拍手をしていた。

「すゞ・・・グレイルさんすゞ・よ〜〜!〜!

「あなたは・・・?」

「なるほど、話は分かつた」

「ワゴの話を聞いて、グレイルはすぐに理解する。

「グレイル傭兵团に助けられて、本当によかつたよ。ありがとうー。」

「なに、俺はただ戦いの指示を出しただけだ」

「ううん、あたしグレイルさんのこと尊敬しちゃった。なんて言つ  
か~『これぞ男!』みたいに」

「そうか、そう思つてくれて結構だ」

そこで、グレイルはあることを思い出した。

「なあ、あんたと一緒にとらわれてた傭兵たちの中に、騎兵と戦士  
の二人組はいなかつたか? どっちも髪が緑色で、片方は糸目、も  
う片方はガタイがいいやつで・・・」

ワゴはちょっと考えて、首を横に振る。

「うーん・・・あたしは見てないな。捕まつてた傭兵たちはみんな  
あたしと一緒に戦つてて、全員顔はだいたい知つてるけど・・・そ  
んな二人は見てない」

「そうか・・・」(ここにもオスカーボーレはいないのか・・・)

その後、傭兵团別動隊の3人は、捕らえられていた捕虜たちと別れ

を告げ、再び樹海の中へと入つていった。捕虜になつていていた傭兵たちは、それぞれ今後の方針を考えていた。

「いづして無事だったのも女神のお導きだ。俺は最後までテインに戦つぜ！」「

といづ傭兵もいれば、

「せつかく助かつた命・・・無駄には出来ないから僕は傭兵やめて故郷に帰るよ」

といった意見もあった。

自然と、意見が出てきて、結果的には全員、好きなように行動しうということで落ち着いた。家に帰るもの、戦いに生きるもの・・・。

「なあ、あなたはどうするんだ？」

一人の傭兵が、ワコに聞く。ワコはほんの少し考えて、答えた。

「あたしは・・・もつと強い相手と戦つてみたい。いつか出会う宿命のライバルに負けないよう、もつともつと強くなりたい。だから、あたしはまだ戦うよ」

「じゃあ、俺たちと一緒に来るか？　まとまつてた方が、いいと思うぜ？」

だが、ワコは首を横に振る。

「せっかくだけど……あたしは、一人で行くよ。行くあとがあるんだ」

すると話相手の傭兵は、顔をほころばせた。

「おお～それはいいことだな。女とはいえ、あなたの太刀筋はなかなかのものだ。きっと、うまく行けるだろうな」

「……うん」

「じゃあな、ワゴ！　今度会う時は、できたらあんたとは戦いたくねえな。そくなれることを祈ってるぜ！」

傭兵たちが森の中に見えなくなつてから、ワゴは歩きだした。

（占いで聞いた、いつか出会ひ宿命のライバル……あたしは、絶対に負けない）

彼女は、頭にある人物を思い描いていた。

グレイル……彼の戦う姿は、まるで恐ろしかつた。鬼のような強さだった。

（あんな人に、あたしはなりたいな……）

話は変わって・・・

「クリミア＝ガリア国境へ

ティアマトは、圧倒的窮地に立たれていた。

彼女の背後には、怪我をしたセネリオとキルロイ。キルロイは氣絶しており、彼が目覚めなければ、回復魔法「ライブ」は使えない。

「ぐつ・・・敵の数が多くなる・・・」

馬上で斧を振り回し、次々と向かってくるティイン兵と戦う。いくらティアマトがパラディンであろうと、戦いはかなり厳しかった。

すると、川向いの防衛地點から、敵将、エマコウの笑い声が聞こえてきた。

「まつ傭兵団どもよ、我らドイツ軍の前に手も足もでんと一つものよーー。」

その声に、ティアマトは顔をゆがめる。

「つ・・・こんなところで・・・私たちほーー。」

その時だった。

「・・・動くな」

「ー?・・・」

Hマコウは突然体を押さえられ、喉元に剣を突き付けられた。

「少しでも怪しい動きをすれば、あなたの命はない」

アイクである。

死角からHマコウに近付いていたのだ。デイン兵の誰もが、気が付かなかつた。

「なつ・・・貴様、何者だ!?

「Hマコウ将軍から離れろ!」

気が付いたデイン兵が、アイクのそばに行つて口々に叫び。そんな彼らに、アイクは静かに話しかける。

「取引をしてほしい。俺は、なるべくお互いの損傷を抑えた決着を望んでいる。そこで、停戦しないか?」

「なにを・・・!?

ディン兵たちに動搖が走った。もちろん、ティアマトもアイクに気が付いた。

「ここに、エリンシア姫はいない。俺たちと戦つても、まるで無意味だと想つのだが?」

アイクが言つことは、実は本当のことである。エリンシア、ミスト、ヨファの3人とは少し前すでに別れ、後々また合流することにしていたのだ。

「よ・・・・傭兵の言つことなど信じられるかー!」

「信じる、信じないは自由だが、俺は本当のことを言つて居る。俺たちはただの、ガリアを目指す旅の一団だ。クリミア王女を匿う傭兵団ではない」

もちろん、ここは嘘である。

「嘘に決まっているー!」

「どうしてそう思つんだ? 信じないというなら、仕方ない。俺たちはこの指揮官を倒し、その間にガリアへ逃げ込むのみだ。それに、こうしている間にも、クリミア王女エリンシア姫は、別のどこかでガリア入りしようとしてるかも知れないんだぞ。俺たちにかまつている暇が、果たしてあるのか?」

「ぐ・・ぐそ・・・・!」

アイクはどひめの一言を言ひや。

「ああ、どうするんだ？俺たちを通すか、指揮官の命を差し出してしまったのか・・・」

アイクがとっさに行つた出ませの説得は、うまくいった。グレイル傭兵団本隊は、無事ガリア王国領内へとたどりついたのだ。

別ルートで行動していたエリンシアとも無事に合流し、セネリオ、キルロイの治療もエリンシアに手伝つてもらつて事なきを得た。

だが、オスカー、ボーレとの合流は未だになされていない・・・。  
果たして、どうなるのだろうか？

## 6章外伝 ～噴火の大斧～ 後編（後書き）

アイク達は見事ガリア王国へと入ったが、グレイル達別動隊やオスカー、ボーレはまだ本隊に追いついていない。

彼らとの合流は無事なされるのだろうか？

最後の方、何だかかなり無理やりな設定になってしまったような・・・

・（汗）

## 7章 ～漆黒の魔手～ 前編（前書き）

どうにか国境を突破したグレイル傭兵团本隊だが、別動隊やオスカーボーレとは連絡が付いていない。

そこでアイクは、一つの考えを出した。

「エリンシア姫、一度俺たちと別れよう。あんたとミスト、ヨファは、先に行つていってくれ。俺たちは、他の団員と合流して、すぐ追いつくから」

敵の増援が来る前に、すばやく合流しなければならない。アイク達は、来た道を戻つていく。

そんな彼らを、エリンシアは心配そうに見送る。

「女神アスターよ・・・どうか彼らに加護を・・・」

その頃、国境線の別の地点にあるティン軍の陣営では・・・

## 7章 ジ漆黒の魔手／前編

クリミア＝ガリア国境、デイン軍陣営へ

陣営の中心にあるひときわ大きな天幕の中で、偵察役のデイン兵がある人物に報告をしていた。

「……報告は以上です」

「『』苦労、下がつてよし」

「はつ、ではこれにて……」

報告を受けていた人物は、そう言ひて兵士を払う。緑の髪に切れ長の目をした女、プラハである。

プラハは椅子の背もたれにもたれかかって、独り言を話しだした。

「クリミア王女一行は、ガリアを日指し、樹海を南下中……と」

そして、すぐ横で控えていた褐色の肌の女性、イナの方に顔を向けた。

「イナ！ おまえの予想通りに動いて正解だった。よくやったね、ほめてやるよ！」

そう言ひのプラハは、實にうれしそうだった。それに対してイナは、

表情を全く変えずに礼を言ひ。

「あつがとうござります・・・」

プラハはイナに笑いかける。機嫌がいいようだ。

「陛下から賜つた軍師がおまえのような小娘だつたと分かつた時は、どうしたもんかと思ったが・・・意外に悪くない。これからも頼むよ」

「はい・・・」

プラハは立ち上がり、すぐ横に立てかけてあつた紅の槍を手に取つた。その瞬間、その槍はより燃えるかのような紅蓮の色合いに変化し、熱気を放つた。

プラハにとつては、心地よい感覚だ。現在のテイン王国国王、アシユナードにこの槍を授けられたのは、自分の実力が認められ、四駿しそんと呼ばれるテインの誇る四人の名将の一角を任された時だ。

フレイムランスといふ名を持つこの槍は、歯向かう者を全て焼き尽くす、絶大な魔力を宿していた。

「さてと・・・楽しい狩りの、始まりだ」

フレイムランスを背中に収めたプラハは、天幕の外へと出でいった。・・。

一方、再びクリニア王国領へ戻ったアイクは、合流できていない他の団員達の捜索をしていた・・・

「・・・」にもいか

深い森の中にひっそりとたたずむ古い時代の砦。その近くの森で、アイク達は他の団員を捜索していた。だが、彼らとの合流は出来ずにいた。

セネリオが、アイクのところへ駆けこんでくる。

「アイク、これ以上の追跡は危険です。一度、ガリア領へ戻りましょ。別動隊も、違うルートからガリア入りを果たしている可能性も・・・全くないわけではありませんし」

少し考えて、アイクは返事をする。

「そりだな・・・別動隊に合流できないまま、やられては本末転倒だ・・・無事を信じて、一度退くしかないか」

その時、横にいたティアマトが、古い砦の方を指さして叫んだ。

「アイク！ あの砦のところに今一瞬・・・人影が見えた気がしたけど・・・行つてみる？」

「本当か！？ よし、確かめよう！」

（メリテネ砦）

「メリテネ砦」と書かれた入口の看板は、コケに覆われていて文字は擦り切れ、読みにくくなっていた。一応付近に警戒をしつつ、アイク達は慎重に砦の中へ足を踏み入れる。

「ここは・・・長く使われていなうですね」

セネリオが言うとおり、中は静かだった。樹海特有の蒸し暑い空気は砦の中まで満たしている。床や壁はあちこち崩れ、植物の根のようなものも生えていた。

「ここを探しても見つからなければ・・・」旦、ガリア領へ戻るつ

「やうね・・・」

アイクの提案に、ティアマトはうなずく。

その時だった。

「いたぞ！ クロミアの傭兵どもだ、囮めつーー！」

「ーーー」

黒い鎧をまとったティインの兵士が、砦の別の部屋から飛び出し、アイク達を見つけたのだ。

次々と、ティイン兵たちが集まってくる。

「しまつた！ みんな、こっちだ！」

アイクは走り出す。「なんといひでテイン兵たたかひりあわせにほ  
いかない！」

だが、通路を走り続けて角を左に曲がった途端、そこにはテイン兵  
がたくさん待ち伏せていたのだった。

「逃がさないぞ、覚悟ー！」

「くつ、仕方ない・・・みんな、応戦するぞー！」

アイクは剣を抜き、

「ええ、分かったわー！」

ティアマトは馬上で斧を構え、

「分かりました」

セネリオはウインドの魔道書を手に取り、

「怪我したら、僕が治すよ。みんな、無理しないで」

キルロイはライブの杖を取り出した。

前から来る敵はアイク、左から来る敵はティアマトで食い止め、そ  
れぞれの後ろからセネリオはウインドの魔法で援護する。

「えいっー。」

「バシュッシュドカツ！」

「ぐはつ・・・」

ティアマトの斧の連続攻撃で、鋼の槍を持ったティインのソルジャーは倒れる。

「いのせひつー。」

その後ろにいたティイン兵が、手槍をティアマトめがけて投げつけた。手槍はティアマトの腕に当たり、彼女は怪我を負う。

「ぐ・・・やあつー。」

「ザシコーンー。」

「せ、せ、せられた・・・。」

何とかティアマトは敵を倒す。そして、キルロイのもとへ。

「ティアマトさん、今治しますから動かず・・・・・ライブー。」

ティアマトが負っていた怪我は、ライブの杖であつていつ間に治つた。

「あつがとうキルロイ。また何かあつたらひこへね

再びティアマトは、襲い来る敵を食い止める。

「ウインディー」

ビュウウ・・・・・スパン！

「何た！」の風はある！？

セネリオが放つたウインドの魔法は、デインの戦士に大きな怪我を負わせる。

「アイク、今です！」

「ああ、任せろー！」「あつー！」

ズシャアア！

一  
れ、連携攻撃かよ・・・」

アイクとセネリオの息の合った連携攻撃で、デイン兵の戦士は倒れた。

「おい、あの女はどういつた！」

その頃、メリテネ砦の外では・・・

「確かにここに逃げ込んだはずなのに……逃げ足の速いやつめ  
！」

「デイン兵たちがあわただしく、砦の外の森の中をうろついていた。

「おれはもう一度あっちの方を調べてくる。お前たちとは向こうの方  
を調べてくれ！」

「了解……」

ザツザツザ……

デイン兵の足音が遠のいた時、茂みがガサガサとゆれ、中から少女  
が出てきた。

「ふ~何とかバレずに済んだ~……」

ワコである。

「……それにしても、グレイルさん達どこに行ひちゃったんだろう  
？ 何とかあたしも仲間に入れてもう一つ、頼みたいんだけど……  
・」

ワコは茂みから出で、辺りを見渡す。

「……でも、こんな場所にいたらまたデイン兵に見つかっちゃう  
かもね……どうか隠れるところないかな？」

だが、見渡してみても隠れられそうな場所は、目の前に立っている

古こ監しかなれりだつた。

「仕方ない、」の監の中へ隠れて、ほとぼりが冷めたりまたグレイルさん探せり、「

ワゴは、メリテネ砦の東側の小さな出入口に入つてこつた。その中で、アイク達が『テイン軍と戦つてこら』となべつゆ知らずにて・・・。

ワゴはとりあえず、中に入つてこつた。すると中には、すうい数の『テイン兵』がいた。

「・・・・・ヒヒ、」の『テイン兵』がついにやじりこるよ。えへつと呪口せつと・・・」

ワゴはあわてて引き返そうとしたが、なぜか『テイン兵』の様子がおかしい。よく見ると、大勢の『テイン兵』が数人の男女を相手に、戦つていゐるやうだ。

「あれ？ なんで戦いが起つてるんだ？」

状況が読めないワゴのといふく、『テインのソルジャー』が襲いかかる。

「あめえもやつらの仲間だな！ 死ね！――」

「えー？ いや何のことだか・・・そもそもあたし状況が・・・

「うおやうおやうおやうせえ！ 覚悟しやがれ！」

ソルジャーはワゴの話など全く聞かず、鉄の槍を突き出す。

「あ～もう一」

シャキン！

「！？」

ワゴは反射的に、先手を取つてデイン兵を細身の剣で斬りつけた。

「こいつ、抵抗しやがって！」

ソルジャーは手傷を負いながらも鉄の槍を突き出す。ワゴはよけきれずに槍に当たってしまう。

「痛つ・・・」

「へへへ、これで終わりだぜ！」

デイン兵がどごめとばかりに鉄の槍をワゴめがけて突き出した、その時。

「でいやああ―――！」

ドカアツ！！

「ぐばあつ！」

アイクは、ワコを攻撃しようとしていたソルジャーを、居合切りで思い切り斬り飛ばす。

すぐにアイクは、横に倒れていたワコのところに駆け寄った。

「おいあんた、大丈夫か？」

「え・・・あ、助けてくれてありがとう！」

「いや、礼なんかいいんだ。それより、あんた怪我してるな？ 今杖使いを呼ぶから・・・おいキルロイ、ちょっと来ててくれ！」

キルロイは、アイクに呼ばれてやつてきた。

「アイク、どうしたの？」

「こいつの怪我を治してやつてくれ」

「分かったよ。・・・ライブ！」

ライブの杖の赤い玉から出た光で、ワコの怪我は全できれいに治つた。

「二人とも、ありがとー！」

「それより、こじは危険だ。すぐに外に逃げた方が・・・

アイクがそこまで言いかけた時、ワコが口を開いた。

「ねえ、あんたたちもしかして、グレイルさんの仲間?」

アイクは、ワコが言つた言葉に耳を疑つ。

「親父を知つてゐるのか!?」

今度はワコの方が驚いた。

「え、あんたグレイルさんの子供なのー?」

「あ、ああ・・・それより、親父たちとビリード会つたんだ?」

ワコは少し考へて、アイクに言つた。

「エリックよつちよつと北に行つたといだよ。あたしはクロニアの傭兵なんだけど、ドジつてディンの収容所に送られそうだったといふを、グレイルさんに助けられたんだ」

「やうか・・・無事だつたんだな」

アイクはグレイルの無事に安堵する。そんなアイクに、ワコは聞いた。

「ねえ、あんたとグレイルの息子、アイクだ」

「ああ。俺は団長グレイルの息子、アイクだ」

「へえ～そりだつたのー。つてことは、あんたたちもグレイル傭兵団のメンバーつてことだよね?」

「ああ、確かに」セツだが・・・

ワゴが言つた言葉の意味が分からず、アイクは不思議そうな顔をする。ワゴはそんなアイクに言つ。

「『』の戦い、あたしも加勢をせてもいいよー。いいでしょ?」

「それは構わないが・・・俺の一存では、手当てが出せないかもしれないぞ?」

「細かいことは気にしない!」

ワゴは給料のことなど全く気にしていないことによつた。

「せうか、じゃあいいだろ?。とにかく、あなたの名前は?」

「あたしはワゴー。じゃ、そういうことで、よろしく、大将!――!」

「ああ、よろしく頼む」

そこへ、新たな敵がどんどん押し寄せてきた。アイク達は気を取り直し、迎撃体制の隊列を組む。

ティアマトとアイクを先頭に通路を切り開き、後ろからはヤネリオとキルロイ、ワゴが援護する・・・といった姿勢だ。

階の中にあつた一室を辛くも制圧し、そこを拠点に防戦の構えをとる。

「ウイング!」

ビュウウ・・・ズバツ！

「やあっ！」

シャキン！

セネリオがウインドで弱らせた戦士を、ワユが倒す。

「ふう何とか倒した～・・・あれ？　この戦士・・・」

ワユはデインの戦士が腰に結び付けていた鍵をとる。

「大将～！　この戦士こんな鍵持つてたよ～！」

アイクがワユから鍵を受け取る。

「これは・・・何の鍵だろうな？」

キルロイも見てみる。

「アイク、もしかしたらこの向こうにある宝箱の鍵じゃないの？  
この戦士、宝箱の前に立つてたし」

「確かにそうかもな。・・・よし、ティアマト、見ててくれ」

「ええ、分かったわ」

ティアマトは鍵を受け取り、馬から降りて部屋の奥に行つた。

部屋の奥にあつた宝箱に、ティアマトは鍵を差し込む。みごとに鍵は合つた。

宝箱の中からは、分厚くてギザギザの刃を持つ、かなりの重量がある剣が見つかった。まるでのこぎりのよつなその剣を見て、ティアマトはうなずく。

「ティアマト！ 何か見つかったか？」

アイクの声が聞こえたため、ティアマトは戻つてアイクに見せた。

「この剣は？」

「アーマーキラード」

「アーマーキラー？」

アイクの疑問に、ティアマトは答えた。

「重歩兵やジエネラルといった、重厚な甲冑を叩き割るために造られた剣よ。そう言った相手に強いから、アイクかワコのどっちかが持つていて」

「ああ、分かった。・・・俺にはリガルソードがあるから、この剣はワコにやろ！」

「分かつた！ ありがとう大将！」

そんな彼らを、キルロイが呼んだ。

「みんな、大変だ！　じつち！－！」

「どうしたんだキルロイ？」

アイクは、キルロイが手招きしている方へ行つてみる。

「・・・敵の増援か？」

「いいえ、違つようですが」

セネリオが隣で答える。

「あひらうを見てください」

セネリオは、皆の奥の方を指差した。そこには・・・

「くくく・・・見つけたよ。思つたよりは楽しめたね」

女の声が聞こえた。アイクは聞き返す。

「誰だつ！」

通路の奥には、緑の髪に切れ長の目をし、黒い鎧を身に付けた女が、馬にまたがっていた。

「そう、プラハである。

プラハはアイク達の方に向かつて、声を上げた。

「自分たちの不運を嘆くがいい、傭兵ども！」このプラハ将軍が来たことで、お前たちは、万に一つも生き延びるチャンスがなくなつちまつたんだからねえ！」

その声を聞いたセネリオが、アイクの隣で息をのむ。

「プラハ・・・四駿の・・・？」

「知ってるのか？ セネリオ」

アイクの質問に、セネリオは答える。

「おそらく、デイン王の腹心たる四将軍の一人です。あの女の武器、『フレイムランス』は、高位の炎魔法を繰り出すとか・・・」

「何だと・・・そんなやつが、俺たちの目の前に・・・！」

## 7章 ～漆黒の魔手～ 前編（後書き）

デイン王国が誇る四将軍、四駿の一人、プラハと遭遇したアイク達。

果たして、彼らの命運やいかに！？

## 7章 ～漆黒の魔手～ 後編（前書き）

ガリアとの国境付近にある、メリテネ砦。その砦の中で、アイク達は「デイン軍に発見されてしまう。

偶然出会ったクリミアの傭兵ワコを仲間に加えたアイク達だったが、デイン兵たちは容赦なくアイク達に襲いかかった。アイク達はそんな彼らに対し、抵抗の姿勢を示す。

その時、砦の奥から姿を現したのは、「デイン王国が誇る国王の腹心たる四将軍」、「四駿」の一人であるプラハ。アイク達の運命やいかに？

「メリテネ皆」

セネリオの説明で、アイクは驚いた。まさか、四駿などといつ敵の大幹部が、自分たちの前に現れるとは……。

四駿の一人であるプラハは、得意げに言つ。

「くくく・・・あたしを知つてゐるなら、話は早い。さ、おとなしく王女を渡しな。お前達と一緒に王女を焼いてしまつたら、首級くびを陛下にささげられないからねえ！」

それに対し、アイクはなるべく冷静に答えた。

「・・・残念だが、王女はここにいない。とっくにガリア領内に入つた」

「なん・・・だつてえ・・・!？」

プラハはわが耳を疑う。さつきまでの得意げな表情は、どこかへ消えてしまったようだ。

「そんなことが信じられるか！ 鷹が傭兵ふぜいが、このプラハ様の部隊を出しぬけるはずが・・・」

「その過ぎた自信が、しくじりを誘発するところだ」

「…？」

プラハの言葉を、何者かがさえぎる。アイク達は、思わず顔を見合させた。聞き覚えがある声だつたからだ。

「え・・・その声もしかして・・・」

「グレイル団長・・・？」

次の瞬間、アイク達から見てプラハの左側の壁の向こうから、一人のデイン兵が吹つ飛ばされてきた。デインのソルジャーは、鎧ごと体を縦に真つ二つにされている。

「親父つ！」

他のデイン兵たちが驚いて立ち往生しているところを、アイクは駆けだした。案の定、グレイルは皆の西側の出入り口から、シノンとガトリーを引き連れてやつてきていた。

グレイルはアイクの姿を認めるなり、怒りをあらわにした表情でアイクを怒鳴りつけた。

「・・・なぜ戻ってきた！　このバカ者め…！」

どうやらグレイルは、アイク達は任務を放り出して戻ってきたと思っているようだ。アイクは誤解を解くべく、大声で返す。

「姫は無事、ガリア領へ入った！　親父たちやオスカー達が合流してくれれば、任務は完了だ…！」

それを聞いて、グレイルはフツと笑う。

「仕方のないやつだ。だが、よくやった。ほめてやろ？」

アイクは続いて、グレイルにオスカーとボーレがどうなつたかも聞こうとした。だが、おとなしくしていたプラハが、それをさえぎる。

「くつ・・・！　あたしを無視するとは、いい度胸じゃないか」

プラハはグレイルを見やる。

「察するこ、お前が団長だね？　へえ・・・どんな偉丈夫かと思えば、その辺の傭兵と変わらないじやないか」

「・・・？」

グレイルは、プラハの言つことに首をかしげる。プラハは少しの間グレイルの様子を見てから、言い放つた。

「フフ・・・お前の身柄、このプラハがもらい受けれるよ！　陛下は、それはそれは強い男がお好きだからねえ、お前を捕らえて、土産にしようか。おとなしくしなよ？　生け捕りじやなきや、価値がないんだから」

グレイルはプラハの言つことを理解したようだ。あまり表情を動かさず、静かに言つ。

「・・・狂王　きょうおう　アシュナードの悪趣味は、うわさ通りとこつことか」

「シノンさん、アシュナードの悪趣味って何のじとつすかね？」

グレイルの後ろで、話の意味が分かつていなガトリーは、隣にいたシノンに聞く。

「・・・デイン王は、大陸中から強い野郎を集めて、たがいに潰し合わせるつて話だ。そこで勝ち残ったものは素性がどうであれ、側近に取り立てるつてうわさだが・・・ビームが真実かは、じんと分からねえな」

シノンの説明に、ガトリーは頭をかいた。

「うひ・・・・・団長も変な目に見込まれつけられたなあ・・・」

そうこうしていると、グレイルは一人を振り返つて言った。

「シノン、ガトリー！ あの女は俺が引き受けろ。お前たちは、アイク達と一緒にここを抜け出せ！」

「了解！」

シノンは素直に応じたが、ガトリーは不安そうに聞き返す。

「だけど、団長！ 一人じゃさすがに危なくないつすか！？」

だが、そんなガトリーをシノンは引っ張つた。

「バカ野郎！ 団長なら、あのくらいいの女なんかどつてことねえよ。ほら、いくぞ！」

それでもまだ渋るガトリーに、グレイルは言い募つた。

「急げ、ガリアで落ち合おう！」

その言葉で、二人は動き出した。プラハはその様子を見て、グレイルに言ひ。

「逃がさないよ！ あんたも、あんたの部下たちもね！」

グレイルは、静かに応じた。

「プラハ、と言つたか？ パラティン（戦い慣れた騎兵のこと）のお前は、ここでは全力は出せまい。場所を移すぞ、ついてこい！」

どうやら、グレイルはやる気のようだ。だがプラハは、それに渋る。

「あたしが、そんな手に応じるとお思いかい？」

グレイルは、フツと笑つて答えた。一見笑つてゐるが、目は明らかに戦う氣だ。それは、プラハでも分かつた。

「お互ひ、他とは実力を隔する者なんだ。めつたに会えるものでもない。邪魔の入らぬところで、存分に殺り合いたいのだが？」

グレイルの、宣戦布告だ。一騎討ちを望んでいた。プラハも、分かつたと言わんばかりに笑つて見せる。やはり目を見れば、戦う氣だ。

「フフン、意外に女の扱いを心得ているじゃないか……いいだろう、乗つてやるよ」

フレイムランスが熱を帯びるのを、プラハは感じた。フレイムランスは、所有者の意思を反映し、武器自体を共鳴させる。

グレイルは、手招きして皆の奥へ駆けだした。

「じつちだー！」

プラハは横にいたロープの男に言ひ。

「バルマ、後は任せた！ クリニアのネズミどもを一匹たりとも迷がすんじゃないよ！ いいね、あたしが戻るまでに、潰しておくんだ！」

「はっ、プラハ様、お任せ下さい。クリニアの雑魚どもなど、我がエルファイアの魔法で焼き尽くしてくれましょう」

バルマと呼ばれた男がそう返事したのを聞いて、プラハはグレイルを追つて皆の奥へと馬を駆けていった。

アイクは再びみんなのところへ戻り、剣を抜いた。

「シノン達と合流し、ここを突破する！ みんな、遅れるな！」

傭兵团のメンバーは、ディエン兵たちに攻撃を開始した。

その頃、メリテネ砦の南西にある階段の下で・・・

「へへっ、兄貴見てくだせえ。ティンの連中とクリニアの残党どもが、派手に戦つていやすぜ！ やつぱり兄貴が言つたことは、本当だつたでやんすね！」

茶色い外套をまとい、ナイフを手にした盗賊が、階段の上から姿を見せた。その後ろから、同じく茶色い外套をまとい、ダガー（ナイフより強力な軽器）を持った盗賊が現れる。

「ゲハハ、当然だろ。やれティンだやれクリニアだと、偉い連中は大変なご時世だ。いつの間にか、おれたち盗賊の稼ぎ時つてモンよー。ゲハハ！」

盗賊の二人組はティンの兵士たちに紛れて、戦場となつたメリテネ砦へやってくる。

「さひと、じゃあ早速仕事といいくか！ ゲハハ！」

「兄貴、じこまでも付いて行くでやんすよー！」

アイク達は、アーマーキラーがあつた部屋の出入り口を塞ぎ、そこで徹底抗戦をした。黒い甲冑をまつた、多くの重歩兵たちが押し

寄せてくる。

「えいっー。」

ガキン！

「クックック、そんなぬるい攻撃など、通用するものか！」

ワゴの攻撃を受け止めた重歩兵は、手にした鋼の槍でワゴを突く。

「あやつ……」

「ワゴさん、大丈夫！？ 今治すからね、ライブ！」

ワゴが受けた傷は、キルロイの杖で治った。

ワゴの隣で斧を振るうトライアマートは、ワゴに言った。

「あなた、さつきのアーマーキラーはどうしたの？ あれがないと  
なかなか、ダメージは通らないわよ？」

「あ、あの剣……今のあたしには重すぎて、つかうと……」

「そうなの、じゃあ仕方ないわね

そこへ、セネリオが魔道書を持ってやってくる。

「重歩兵は物理防御に優れる半面、魔法には弱いはずです。僕に任せ  
てください……・・・ウイングー。」

かまいたちが巻き起つ、敵の重歩兵を巻き込む。

「ぐわあ、魔法は・・・防ぎきれ・・・ん・・・」

相対していた重歩兵は、それによつて倒された。

「よし、じゃあ俺も行くぞ！」

アイクはリガルソードを手に、別の重歩兵に向き直る。

「何だ、その蛮族のような構えは？」

敵の重歩兵がそう言つようになり、アイクの剣の構え方はかなり変わつてゐる。剣先を相手に向け、体を傾ける姿勢のまま、アイクは答えた。

「これが、俺の構え方だ。覚悟しろ」

スパン！

「な、に・・・！」

アイクはその姿勢から、敵を斬りつけた。予想外の速さに、重歩兵は反応できない。

槍を突き出すものの、全くアイクには当たらぬ。

「とびぬめだ！」

ズバアッ！

「ぐふつ・・・強い・・・」

「何とか倒したな

そう安心するアイク。だが・・・

「ファイアー！」

そんな彼目がけて、炎の弾が飛んできた。

「！？」

炎の弾がアイクにぶつかった途端、アイクは炎に包まれた。

「熱つ！ 何だ一体！？」

炎 자체は一瞬で消え去つたものの、アイクは火傷を負つ。

「アイク、気を付けてください。敵に魔道士がいます」

キルロイのライブを受けていたアイクに、セネリオは言った。

「魔道士は離れていても近くても攻撃が可能です。接近戦で、一気に勝負を付けるべきでしょう」

「分かった

「じゃあ、あたしの出番だね！」

ワユは鉄の剣を手に、魔道士に斬りかかっていった。

「愚かなクリニアの残党よ、燃え尽きてしまつがいい・・・ファイ  
アー！」

魔道士はファイアーの魔法を唱えるが・・・

「やあつー・」

シャキイン！

ワゴの攻撃の方がわずかに速かった。その直後に敵のファイアーが発動するが、ワゴはそれをすれすれでかわす。

「なに、しまつた・・・」

ザシユツ！

魔道士は、倒れた。

「やあつたー！ 何とか勝つた！」

どうやら、この辺りの敵はあらかた倒したようだ。アイクは先頭に立つ。

「よし、そのままシノン達と合流するぞ、急げ！」

「クリニアの傭兵ども・・・祖国はもはや絶望的状況だといふのこ、

「どうが、どうんな力が出てくるのだ？」

手槍を持ったティーンのソルジャーは、シノンに聞く。

「けつ、オレにもよく分かんねえけどよ……オレが戦う理由は一つ。団長が命じた、任務だからだ」

ヒコツ……グサツ！

「なる……ほど……」

倒れたソルジャーの後ろから、剣士がシノン田がけて斬りかかる。

「！」の野郎、よくも先輩を……！ 覚悟おーー！」

剣士がシノンを斬る寸前で、ガトリーが前に出て盾となる。

ガキイン！

「くつ……！」

「もしかして、この人は君の先輩だったっすか？」

ガトリーはティーンの剣士に聞く。

「ああ……おれの、信頼できる先輩だった……。戦いの仕方から、人生相談まで、おれのすごく信頼できる先輩だったんだ！ それを、お前たちが……！」

「やうすか・・・」

ガトリーは槍を降ろそうとしたが・・・再び構える。

「おれにとつてもね、このシノンさんは信頼できる先輩なんすよ。シノンさんを斬ろうとするやつからな、おれが守るんす」

「・・・」

ガトリーは少し悲しい顔をして、槍を突き出す予備動作をする。

「悪く思わないでほしいうす。これが・・・戦争っていうもんなんす」

ズシャアツ！！

「うぐっ・・・先輩・・・今行きます・・・」

デインの剣士は、倒れた・・・。

「へへっ、兄貴、この部屋に宝箱がありますぜ」

盗賊二人組の弟分の方は、兄貴分の方を手招きする。

「ゲハハ、本当じゃねえか。じゃあ頂くとしようぜ」

「分かつたでやんす！」

盗賊の二人は、部屋の宝箱に取り付く。ふたが開き、二人は歓声を上げた。

「おおっ 兄貴見てくださいせえ！ なんか、紫色した杖が入っていたですよ！」

「見せてみる・・・おおっ こりゃあ『マジックシールド』とかいう魔法の杖じゃねえか！ こりゃあ高く売れるぜ、ゲハハ！」

「兄貴の方の宝箱の、その本みたいなのは何でやんすか？」

「こいつか？ これは多分『祈りの書』とかってやつじゃねえかな？ これ読むと不思議な能力に目覚めるとか・・・まあ、どっちにしろ高く売れそうだぜ、ゲハハ！」

盗賊二人組は満足して、来た道を引き返す。だが・・・

「こりは通さないわよ！」

ティアマトが、出口を塞ぐ。

「な、なにい・・・」

別の方から出ようと、盗賊たちはさらに踵を返す。だが・・・

「けつ、逃げられるなんて思つなよ？」

そつちはシノンが塞いだ。

「へ、へんう・・・!」

盗賊たちはそれに襲いかかる。だが、かなうわけがなかつた。

あつといつ間に盗賊たちは、成敗された。

「お、こいつ変な杖なんか持つてゐるぜ?」

シノンは盗賊からマジックシールドの杖を取り上げる。キルロイはその杖を見てみた。

「シノンさん、これはおそらく『マジックシールド』の杖ですよ。魔法に対する抵抗力を高める魔法が使えるんです。きっと、僕なら使えると思いますよ」

一方ティアマートは、祈りの書を拾い上げた。

「これは、『祈りの書』ね。使えば女神への祈りが通じて、たまに敵に確実にやられる攻撃受けても、ギリギリ生き残ることができるようになるみたいだけど・・・今はこれを使つてる場合じゃないわよね」

アイクは、シノンとガトリーに会いに行く。

「シノン、ガトリー、無事だつたか

それを聞くと、シノンは床につばを吐きかけて言つた。

「あこにぐ、いひしてピンパンしてゐせえ。くたばつてなくて、残念だつたなあ？」

「・・・（やつぱり、シノンはあまり俺のことをよく思つてないみたいだな・・・）

シノンはさつと背を向けてしまひ。

「さあてと、氣を引き締めて続きといくか。何せ、また足手まといと一緒になつちまつたんだからなあ。オレが一人分戦つてやんねえと」

シノンはそう言つと、敵の中へ行つて矢を放ち始めた。それと入れ替わりになる形で、今度はガトリーがアイクに話しかけてきた。

「アイク、ちゃんと王女をガリア入りさせたんだつて？ よくやつた！ 大したものだ！」

ガトリーは明るい顔をしてアイクに話しかけてきたが、ふと真顔になる。

「・・・あれ？ でもさ、だつたらどうしておまえがここにいるんだ？」

アイクはちょっと間をおいて答える。

「・・・余計なことだとは思つたが、あんたたちが心配だつた

ガトリーはそれを聞いて、笑顔になる。アイクに手を回し、肩を組んだ。

「ぐう～つ泣かせるじゃねえか、じんちくじゅう一 よ～しょー。今夜は特別に、このおれが一杯、ねいひでやつからな。」

「あ、ああ」

ソレでガトリーは、傭兵团のメンバーの中のワゴがいるのを見つける。

「おおお～、ワゴわいやん、君もいよいよいたんすかー。？」

「え？ あ、ガトリーさん！」

ガトリーは重い甲冑など意も介さず、ワゴのところへ行く。

「おれの」と覚えてくれたんすね…。いや～まさか想にまた会えるとは…。とにかく、どうしてワゴわいやんがここに…。」

ワゴはアイクの方をちらりと見て、答えた。

「大将に頼みこんで、この傭兵团の一員にさせられましたの」

「やうだつたんすか～。じゃあ、これからもおれと一緒に戦えるつてことですね！ よろしくっすー。」

「うふ、じつあらはよろしくね、ガトリーさん。」

「じーんと出せじましこづか～。」（いや、やつぱり運命つすよね～。）

シノン達と合流したアイク達は、敵を順調に片付けてゆく。最後には、バルマだけとなつた。

頭にサークレットをはめ、黒いローブをまとつたバルマは、赤い魔道書を手にアイク達の前に立ちはだかる。

「貴様うのような雑魚など、プラハ様の手を煩わせる必要すらない・

・・

そう言つと、バルマは魔道書を開く。

「魔道の使い手か・・・・」

「そのようですね。アイク、この者に戦いを挑む場合は、魔法防御を高める必要があるかもしません」

セネリオはアイクにそう助言する。

「分かつた・・・キルロイ、俺にマジックシールドをかけてくれ!」

「あ、うん」

キルロイは、わざと盗賊から取り上げたマジックシールドの杖を取り出す。

「・・・マジックシールド!」

紫の光があふれた途端、アイクの体を光の膜のようなものが覆った。

「よし、行くぞー！」

アイクはバルマに向けて走り出した。

「雑魚が・・・焼き死んでくれるぞー！ エルファイアーーー！」

バルマは両手を上げ、魔法を叫ぶ。すると、強烈な熱が発生した。アイクの周囲を炎が渦巻き、アイクを飲み込む。

「くつ・・・なかなかやる」

だが、アイクはそれほど大きな火傷は受けなかつた。マジックシールドのおかげというべきか。

炎が収まつた途端、バルマは驚く。

「何だとー！ 我がエルファイアーを受けて、なぜそこまで無事でいられるのだ・・・」

「それは、マジックシールドのおかげだ」

「マジックシールド・・・だと・・・ー！」

言われてみれば、アイクの周囲を紫の光がうつすりと包んでいる。

「今度は二つから行くぞー！」

アイクは一気にふところまで入り込み、斬りつける・・・と見せかけて、剣を持たない左手でバルマを殴りつけた。

ボカツ！

「うぐっ」

間髪いれずに、アイクは足払いをかける。バルマは反応が遅れ、足払いに引っ掛けつつ床へ転がる。

「これで、終わりだ！」

アイクはそのまま剣を振り下ろし、バルマを斬り伏せる。

「ぐ・・・」こんな雑魚ごときこ・・・プラハ様、お許しくださ・・・

「

バルマは、倒れた。

「親父を探さないと・・・どこだ！？」

アイク達は手分けして、グレイルとプラハが行つた部屋を探すことにした。早く見つけないと、グレイルがやられてしまうかも知れない・・・。

## 7章 ～漆黒の魔手～ 後編（後書き）

どうにか合流を果たしたアイク達。だが、プラハとグレイルは一騎打ちを始めてしまう。

何とかアイク達は一人を探すが・・・？

続く！

クリニアの落日、そして・・・（前書き）

デインの誇る四駿の一人、「プラハ」の登場によって一気に窮地に追い込まれたかに見えたアイク達だったが、グレイル達の加勢によつてどうにか窮地を脱することに成功する。

グレイルはプラハに一騎討ちを申し出て、プラハもそれに応じる。二人はメリテネ砦の別の部屋へ行ってしまった。

プラハの手下である炎魔法の賢者バルマを撃破したアイク達は、グレイル達を探すべく全員で砦の中を各2人ずつで捜索することとする。

クリードの落日、そして・・・

（メリテネ皆）

アイクは、セネリオと一緒に行動していた。

「親父・・・一体どこに行つたんだ！？」

アイクは、ややあせりながら皆の通路を走る。そんなアイクに、セネリオは忠告した。

「アイク、あせりすぎてはいけません。この皆のどこかに、まだティン兵が隠れている可能性がありますから」

「ああ、分かつたよ・・・」

だが、見つからないとあせってしまうのは仕方ないのかもしない。そんな時アイクは、セネリオに聞きたいことがあることを思い出した。

「セネリオ、前お前は、『ガリアは半獣の国だ』って言つたよな？俺は半獣というものを見たことがないんだが、お前は何か知つてるか？」

するとセネリオは、アイクの顔を向いて答える。なぜかそのセネリオの顔は、どこか不快そうな表情をしていた。

「・・・はい。半獣といつものは、自らの体を他の動物の姿に一時的に化粧することができる者を言います。半獣には、『獸牙族 ジゅうがぞく』、『鳥翼族 ちょうよくぞく』、そして『龍鱗族 じゆうりんぞく』・・・この3種類に大きく分けられます」

「なるほど、そういうやつのことを半獣といつのか・・・」

「ええ。ガリア王国に住んでこる半獣は、猫や虎に化粧をする獸牙族ですね。鳥翼族ははるか西南の島々に、竜鱗族はガリアのさらご南、ゴルdeaux王国という場所に住むと言います」

セネリオは見た目は子供だが、かなりの知識を持ち合わせている。アイクの頼れる相談役だった。

「ありがとうございます。俺はそつ言つ知識はさっぱりだから、助かった」

「いえ・・・」

アイクとセネリオは、再び捜索を進める。

シノンとガトリーは、2階部分を捜索していた。所々の床には穴が開いており、慎重な捜索を要求された。

「シノンさん・・・」の聲ついでいつ頃作られたもんなんでしょうね？」

ガトリーがふと、シノンに質問する。先を行くシノンは、振り返ら

ずに答えた。

「さあな。けど、建材の傷み具合から考えて・・・多分100年前  
くらいまで使つてたんじゃねえか？」

「100年！　ずいぶん古いんですね・・・」

「そうだな」

言われてみれば、皆の傷み方はかなりひどい状況だった。

「一体、何のためにこんな皆作つたんすかね？」

「オレに聞くなよ。おおかた、半獣どもがクリミアに入つてくるの  
を防ぐためとかじやねえのか？」

「あ、なるほど〜！　シノンさん頭いい〜」

「けつ、お前がバカなだけだつづーの」

ガトリーを軽く小突き、シノンはさつと先へ進んでしまう。

「シノンさん〜待つて下さ〜よ〜！」

ガトリーは重い鎧を鳴らしながら、シノンを追つた。

ワゴとキルロイは、3階部分を捜索する。2階よりも更に足元が不

安定なため、身軽な一人がこの階層の捜査を買って出たのだ。

「よつ・・・・とー。」

ワコはキルロイよりもどんどん先を進み、多少大きめの穴でも身軽に飛び越えてしまう。

「キルロイさん、早く早く～！」

そのずっと後ろを、キルロイはこわごわ恐る恐る進んでいた。

「ワコさん・・・・ちょっと待って・・・・」

ビリビリがキルロイは追いつく。

「ワコさん、その・・・・できたらもつと慎重に進めないかな？ 怪我したりするかもしないし・・・・」

「そんなの平氣だよー！ この程度のことで怪我なんかしないって！ それに、もし怪我してもキルロイさんが治してくれるし」

キルロイの心配をよそに、ワコはどんどん先へ進んでいく。

「ワコさん・・・・本当に大丈夫かな・・・・」

ティアマトは一人で、地下の探索をしていた。

「グレイル団長、一体どうした・・・」

ふと、遠くから音が聞こえてきた。わずかに声も聞こえる。グレイルと、プラハの声だ。

「団長、今行きます！」

メリテネ階地下の広間で、グレイルとプラハは向かい合っていた。今まさに、お互いが戦っている。

「なん！」

グレイルが振るつ戰斧が、プラハを襲つ。

「ぐつ・・・！」

プラハはギリギリのところで騎馬を後退をせぬが、腕に切り傷を負う。

「やるじゃないか！」

後ろへ下がつてグレイルとの距離を取つたプラハは、そこからフレイムランスを振り回し、投げつける。フレイムランスは激しい炎をその身にまとい、グレイルを畳がけて空中を突き進む。

「当たるか

グレイルは余裕で身をひねり、フレイムランスをかわす。

プラハはフレイムランスを拾つたために馬を走らせるが・・・

「隙だらけだ！」

グレイルはその場から飛びあがり、プラハを蹴りつつ反対側へ着地する。

(さすがね・・・)

ティアマートは広間の入り口で、戦いの様子を見守っていた。グレイルは明らかに、手を抜いている。プラハが本気でかかっているのに、だ。グレイルは、まるで子供の相手でもするかのような戦い方だ。

「ティアマート！ 親父は・・・！」

そこへ、アイク達がやつてきた。上の階を探したが見つからず、地下へとやってきたというわけだ。

アイク達の姿を認めるなり、ティアマートは言つ。

「大丈夫、グレイル団長が優勢よ」

アイクも広間の様子を見ると、プラハがわめいていた。

「何なんだい、お前は！？ 一介の傭兵(ふぜい)が、どうじてこいつまで戦える！？」

するとグレイルは、フツと笑いかける。

「どうした、もう終わりか?」

プラハは愕然とした。

「負ける……? このあたしが……そんなバカな……」

その時だった。ビンからか足音が響いてきたのは。

4つある広間の出入り口の一つから、トイン兵の大群ががなだれ込んだのだ。

「いたぞ、こっちだ!」

「プラハ様をお守りしる、傭兵どもは皆殺しだ!..」

アイクはその様子を見て、グレイルを呼んだ。

「まことに、敵の増援だ! 親父、退け! すうい数だ……!..」

「……仕方あるまい」

グレイルは残念そうにうつぶやめ、別の出口へ向かう。だが……

ザツザツザ・・・

「一」

その出口からも、ものすうい数のティイン兵が現れたのだ。ならばさ

らに別の・・・と思ひきや、残り二つの出入口からも「トイン兵」が大勢出てきた。

アイク達は、完全に包囲された・・・。

「くくく・・・形勢逆転だねえ」

さつきまで絶望的な表情をしていたプラハは、嬉々とした表情でアイク達を睥睨する。

「・・・全軍、突撃！ あいつらを殺せ！・・・」

プラハがフレイムランスをアイク達に向け、テイン兵に命じると、テインの無数のソルジャーたちは一斉に突撃体制をとる。

「万事休す・・・か・・・」

グレイルは力なく言つ

「親父っ！」

アイクがそう励ますと、グレイルは斧を担いだ。

「・・・生き残るぞ、アイク。何がなんでも、こんなところでくたばる訳にはいかん。覚悟はいいな！」

「ああ！」

グレイルの言葉に、団員は全員従つた。各々が武器を取り出し、テイン兵たちに向き直る。

プラハは、笑いながら言葉を浴びせる。

「もう逃げ場はないよ。お前たちを見放した、神を呪うがいいさー。」

と、その時・・・

「グオアアアア！――！」

大きなうなり声のようなものが、広間を反響した。

「な、なんだ？」

アイクは驚いたが、それ以上に『デイン兵たちも狼狽し始める。

「グオアアアア！――！」

さつきよりも近いところからうなり声が響く。『デイン兵たちは明らかにパニックとなっていた。

「け、獣だ・・・ガリアの獣兵だ・・・！――！」

「に、逃げろ！――食い殺される！――！」

数人の『デイン兵』が逃げ出すと、それに続いて他の『デイン兵』も我先に

と逃走を開始する。プラハはあわてて、兵士たちの中心に行き、フレイムランスを掲げた。フレイムランスは再び、紅蓮に輝きだす。

「ま、待ちなつ！　お前たちつ、うろたえるな！　敵に背を向けたやつはこの場であたしが黒焦げにするよーー！」

「ひいっー！」

プラハは兵士たちの逃走を食い止めようと叫んだつもりだったが、どうやら逆効果だったようだ。恐怖に駆られたデイン兵は、一人残らず逃走してしまう。

「くつ、どいつもこいつも、腰抜けばかりだ」

残されたプラハは、そうつぶやいた。

その後すぐ、出入り口の一つからデイン兵たちは戻ってきた。完全に、自制があかしくなっている様子だ。

「け、け、け・・・獸・・・」

デイン兵たちの後ろから広間にまだれ込んできた者達の姿に、アイク達は驚かされた。なぜなら、彼らは猫や虎だったからだ。

さりに驚くことに、そんな彼らを率いる先頭の水色の猫が、ピンク色の煙を出しつつ、みるみる水色の髪をした人の姿へ変わつていったのだ。これにはただ、驚くしかなかった。

「デイン軍に告ぐー！　直ちにこの場から立ち去れ！　さもなくば、

我々ガリア軍が相手となるぞ！！」

さつきまで水色の猫だった人物が、そうデイン軍に告げる。一見若い男のようだが、彼は人型に戻つてもなお、猫の特徴を持った耳を持ち、尻尾を生やしている。

「……そう言われて、『はい』と返事ができるもんか

プラハは開き直る。

「どのみち、陛下のもとに戻れば処刑されるんだ。ここで戦つて死ぬ方がまし……」

「退け、プラハ将軍」

「…」

プラハの言葉を、何者かがさえぎる。若い男の声だが、妙に威厳がある声だ。プラハ含めた全員が、声のした方を向く。

声がした方の出入り口から現れた人物は、漆黒の甲冑に身を包んだ人物。顔も含め、全身くまなく甲冑で覆っているため、相手がどういう表情をしているのか全く分からぬ。背には深紅のマントをたなびかせ、腰には金と銀、2本の大剣を帯びている。

「漆黒の騎士……！？」

プラハは、そうつぶやいた。漆黒の騎士、と呼ばれた黒甲冑の人物は、構わずに話を続ける。

「王には、私がとりなしてやるつ。」  
「兵を退くがいい

プラハは悔しそうな表情を浮かべたが、

「チツ・・・全軍、退却！」

退却命令を下す。

プラハ以外の兵士は、逃げるようにして広間から出でていった。

プラハが去つていった後、黒甲冑の男は何も言わず、その場にたたずんだ。

「・・・」

グレイルは、そんな彼を見て、不思議そうな顔をした。

「・・・？」

何となくアイクには、グレイルと漆黒の騎士が、お互にを見つめて  
いるような気がした。

「親父を・・・見てくるようだな？」

「ああ・・・」

謎の沈黙が流れる。その沈黙を破つたのは、獸兵たちを率いてきて  
いた水色の髪をした青年だ。

「・・・おこつ！ 一人でやるつもりか！？ デイン兵！」

「・・・」

漆黒の騎士はそれに応じず、静かに背を向け、出入口から立ち去つていく・・・。

そして、グレイルは漆黒の騎士の姿が見えなくなるまで、その後ろ姿をただ、見つめていた。

「・・・」

「親父・・・?」

アイクが聞いても、しばらくグレイルは心を奪われたように、棒立ちとなつていた・・・。

「お兄ちゃん、お父さん!」

夕暮れのメリテネ階から出てきたアイク達を最初に出迎えたのは、ミストの声だった。

「おーい、アイク! !」

「アイクも無事だったか、よかつた・・・」

さらに、ボーレやオスカーの声も聞こえた。

「オスカー、ボーレ! 生きてたんだな?」

アイクが一人に聞くと、ボーレは得意そうに言った。

「おう、当たり前だぜ！　何てつたつておれは、お前の先輩だからな！」

「せうやつてまた調子に乗る・・・」

オスカーはボーレに横やりを入れ、言葉を継ぎ足した。

「ディンの追撃部隊と戦つてたとき、ボーレは一度死にかけたんだ。私はボーレを背負つてどうにか国境を突破したのだが、私自身かなりの痛手を負つていてね・・・国境を越えたところで私も意識を失つてしまつたんだ」

オスカーは、自分が体験したことをアイクに話す。

「気を失つていた私たちを、偶然エリンシア姫が見つけてくださつたんだ。それで、彼女の回復魔法で私たちは九死に一生を得たといふわけだよ」

「そりだつたのか・・・何にせよ、あんたたちが生きていてよかつた」

アイクが見渡すと、ミストやヨフア、エリンシアだけでなく、合流できずにいたボーレ、オスカーの姿も見えた。そして、5人を守っているのは、ガリアの獣兵たちである。

「アイク様、グレイル様・・・」無事でよかつた・・・

エリンシアが安心した様子でそう言つたが、アイクはエリンシアに聞く。

「エリンシア姫、どうして戻ってきたんだ？」

すると、獸兵たちを率いている様子の水色の髪の猫青年が、エリンシアに代わつて説明する。

「王女は、あんたたち傭兵团の救助をガリア軍に要請してきた。だから、オレたちが来たつてわけだ」

そう説明する青年に、アイクは聞きたいことがあつた。先ほどセネリオから聞いた話では、『いっぽは半獸……とこう』ことになる。

「お前は、ガリアの……半獸か……？」

アイクは青年に聞く。すると、青年は不快そうな顔をした。青年だけではなく、周りの獸兵たちも。

「“半獸”？ ハッ、思い上がつた呼び名だよな？ お前たちから見れば、オレたち『ラグズ』は半端者の“半獸”だつてのかい？」

どうやら、猫青年は怒っているようだ。あまり怒りを表面に出してはいよいよ見えるが、目が笑っていない。

「……他に呼び方を知らなかつた。気に障つたのなら、すまん。あんたたちのことは、『ラグズ』……そう呼べばいいのか？」

アイクはとりあえず謝つておく。すると、ラグズの猫青年は怒りを

収めたようだ。

「へえ？ 礼は通すってのか、気に入ったよ。で、お前さんは・・・ええっと？」

猫青年は、どうも人懐こい性格のようだ・・・と、アイクは思った。

「アイクだ。グレイル傭兵団のアイク」

「アイクか。オレはガリアの戦士ライ。よろしくな」

「ああ」

簡単に自己紹介を済ませると、ライはエリンシアの方を向いて話しだす。

「それにしても・・・突然、ガリア領内に駆けこんでくるやつらがいるから、何かと思えば・・・クリミアの王女だつて言ひじゃないか・・・驚いたよ。二日前にクリミア王都メリオルのクリミア王城でテインが出した勝利宣言で、王族は全て殺害されたと思っていたからな」

ライが言った言葉は、アイク達に強い衝撃を与えた。アイクは愕然となり、思わず聞き返す。

「勝利宣言・・・？ ジゃあ、クリミアはもう・・・？」

ライはその質問に対し、何も答えない。だが、答えないこと自体がすでに、返事であることは明らかだった。

クリニア王国はディーン王国に敗戦。

テリウス大陸の地図上から、「クリニア王国」という国名が、一日前に消えたのだ……。

エリンシアはうつむく。

「……私も……先ほどライ様から伺いました……私が……逃げ出した直後に……レーニング叔父様は……もう……」

エリンシアの目から、涙があふれる。

「私は……本当に、たった……一人に……」

「エリンシア姫……」

アイクは、エリンシアに何もすることことができなかつた。

重くなつた空気を変えるためか、ライが再び話しだす。

「……それがあつたからこそ、我が王は、念のため国境の警備を強化されていた。オレの部隊が救援に来れたのは、偶然じやないつてわけさ」

「そりか……」「

「とりあえず、エリンシア姫を王の元へ」案内する。アイク、あんたたちには、上の指示を仰いでみるから、ガリア領にある古城で待機してくれ。悪いが、こんなに大勢の他国者を、いきなり王宮に連れていくわけにはいかなくてね

ライの提案は、アイク達にとつてもいい話だった。自分たちよりもまずは、エリンシアの安全を確保する必要があるからだ。

「分かった。それで問題ないよな、親父？」

アイクはすぐ横に立っていたグレイルに、意見を求める。だが、なぜかグレイルは上の空になつており、アイクに気付かない。

「親父？」

「……！ 何だ？」

ようやくグレイルは気付く。

「どうしたんだ、ぼうつとして。……らしくないな

「ちょっとした考え方だ。それより、どうなつたって？」

どうやらグレイルは、今までのやり取りをずっと聞き流していたようだ。

アイクは手短に、要点だけ説明することとする。

「エリンシア姫だけ、先に王宮へ向かうこととなつた。俺たちは、

ガリア領内の古城を借りて待機だ。場所は・・・どちらの方だ、ライ?」

「部下に案内させよ。おい、誰か・・・」

「無用だ。ここから遠くないなら、国境を越えて西の・・・ゲバル城だらう?」

ライは部下を呼ぼうとしたが、グレイルがさえぎる。

「場所は分かる。あんたたちは、一刻も早く王女をカイネギス殿に対面させてやつてくれ」

グレイルが言ったことは、まさにライが言おうとしていたことである。ライは少しの間固まっていたが、すぐに入懐こい笑顔を浮かべた。

「・・・ずいぶん、気の利くお客様なんだ。じゃあ、失礼しよう。迷惑でなければ、後で食料なんかを届けるように手配するけど?」

「やうしてもらえるなら、助かる」

グレイルはそう答えた。

「では、参りましょ。ウリンシア姫

ライはそつ、ウリンシアを呼んだ。ウリンシアはだいぶ、落ち着いたようだ。

「それでは、みなさん・・・また後ほど。・・・すぐにお会いできますね？」

「ああ

グレイルはそうとだけ答える。

「気を付けてな」

アイクは、エリンシアにそつと戻った。

「はい、アイク様たちも、どうかお気をつけで・・・」

エリンシアを連れたライ率いるガリア兵たちは、もつすっかり日が落ち、暗闇となつた樹海の中へ消えていった・・・。

### →クリミア＝ガリア国境へ

（親父・・・一体どうしたんだ？ プラハと戦つた後あたりから、様子がおかしいぞ）

クリミアとガリアの国境を流れる川。その川にかかる橋を、グレイル傭兵团一行は渡つていた。

グレイルは終始、無言状態だ。何かを深く考えているようだ。

（親父は考え方をしていると、眉間にしわが寄るからな。何を考え

ているんだ……（

だが、聞きだすことは出来なかつた。

「団長、ゲバル城つてのはどっちの道行くと着くんですか？」

分かれ道があり、ボーレが聞く。だが、

「・・・」

グレイルは気が付かない。

「団長!」

「親父、ボーレが呼んでるぞ?」

アイクは軽く、グレイルをつつぐ。

「・・・・・ ん、ボーレ、どうしたんだ?」

よつやくグレイルは気が付いた。

「ゲバル城に行くには、どうで行けばいいんですか?」

「ああ、分かれ道か。その道は右だ」

グレイルはそうだけ答えると、再び眉間にしわを寄せた。

（親父・・・）

西の空をつつすら明るくさせていた名残惜しそうな太陽の光も、すっかり消えた。辺りは真っ暗な夜である。

闇が支配する刻限が、やつてきたのだ。

東の空には真円を描く満月が昇りだす。月明かりは、かなり明るめだった。

そんな月明かりに照らされる古城が、見えてきた。あれがゲバル城であろう。

古い城だが、堅牢な作りである。この城ももしかしたら、メリテネ砦と同じ時代に、全く同じ何らかの理由で造られたのかもしない。

古城の中に必要な物資を運び込み、使用する部屋の中を掃除する。簡単な食事も済ませ、早めの就寝に着くことになった。

アイクは、なぜか寝付けなかつた。

(親父・・・何考えてんだよ・・・)

クリスマスの落日、そして・・・（後書き）

グレイルの様子がおかしい・・・一体どうしたところのだろう？

ただ、これだけは言つておきます。

次回の話は重要な話です・・・

## 運命の一夜（前書き）

ライが率いるガリア軍の救援のおかげで、グレイル傭兵団は九死に一生を得た。謎の黒甲冑の男、「漆黒の騎士」の指示で、プラハを始めとするデイン兵たちは全員、メリテネ砦から撤退をする。

ライの口から出た衝撃の事実・・・クリミアの敗戦・・・その事実に打ちひしがれるエリンシア。ライは彼女を、ガリア王宮へ先に案内し、傭兵団にはガリア領内の古城、ゲバル城にて待機するよう告げた。

グレイル傭兵団がゲバル城に着いた、その夜のこと・・・

## 運命の一夜

（ゲバル城）

アイクは、眠れずにいた。疲れてるはずなのに、全く眠れなかつた。早く寝よつ寝よつと思つと余計に眠れないといつのは、本当のことだ。

体の右側を上に横になつてみたが、どうにも居心地が悪い。そつと今度は、左側を上にしてみると、やはり違和感がする。仰向けになつたり、うつぶせになつたり、枕を取り払つたり、寝る体の方向を変えてみたり・・・いろいろ試してみたが、どれも居心地が悪かつた。

（ああ・・・くそー）

アイクは起き上がり、窓の外をぼんやりと眺めた。満月が照らす夜の熱帯雨林の中から、動物の鳴き声がときおり聞こえてくる。

眠気は、全く訪れない。アイクは半ば、眠るのをあきらめた。

ガリア王国はクリミアの南という位置関係から、気候はクリミアと大きく異なる。温暖で過ごしやすいクリミアと比べ、ガリアは熱帯と言つていいく氣候だ。じつとしているだけで、汗をかく熱気だ。

まだ確か、春真っ盛りのころだったはずだ。だがここガリアは、と

つくりに夏が到来している。

あるいは・・・一年中が夏なのかもしれないが。

外を見ていたアイクは、ふと気付いた。黄色い服を身に付けて巨大な戦斧を背負った明るい茶髪の男が、城を抜け出そうとしているのに。

「親父・・・？」

アイクは迷わず、すぐに服を着替える。皮鎧を身に付け、赤いマントを羽織り、新緑色のハチマキを頭に巻く。鋼の剣とリガルソード、2本の剣を納めた鞘をそれぞれ、腰のベルトに留める。最後に、鏡の前で確認をして、アイクは部屋を飛び出した。

「少しでも拠点を離れる時があつたら、絶対に安全と言える場所以外では必ず装備を怠るな」

・・・グレイルがアイクに教えた、生き延びるための知識の一つである。

「親父っ！」

ゲバル城の正面の城門を出たところで、アイクはグレイルに追いついた。

「・・・アイク！？ お前、起きていたのか？」

グレイルは驚いた様子で息子を見つめる。

「ああ、どうにも寝付けなくて、ほんやり外を眺めてたら、親父が城を抜け出しが見えた。こんな時間に一体、どこへ行くんだ？」

アイクはそう父に聞いたが、グレイルは渋る。

「・・・お前には関係ないことだ。城に戻つて寝ろ」

だがアイクは食い下がらない。

「いい加減子供扱いはやめてくれ。どうじょうが、俺の勝手だらう？」

するとグレイルは、少し考えてから笑う。

「・・・フツ、頑固なやつだ。少し、歩きながら話すか？」

「・・・ああ」

夜の熱帯雨林を、二人の親子は静かに歩く。空には満天の星空が広がり、クリミアでは見えないような星座も見えた。  
満月は、かなりの高さまで昇っていた。

「どうだ。少しばかり傭兵团の戦いつてものがつかめてきたか？」

グレイルはアイクを見ず、まっすぐ前を見つめたまま話しかけた。

「戦いには・・・少しばかり慣れた気がする。だが、親父がどうして新米の俺に団のことを任せようとするのかは、理解ができない」

アイクも、前を見たままそう言った。

「いやに突っかかるじゃないか。反抗期つてやつか？」

ぽかした返事をしたグレイル。それに対して、アイクは今度はグレイルの方を向いて言つた。

「ちゃんと答えるよ。俺はまだ、傭兵としての仕事もまともにこなせてないんだ。人を動かすのは無理だ」

それを聞いて、グレイルは立ち止つた。少し何かを考えて、アイクを向いた。

「・・・一緒に覚えていけばいい。どちらも経験を積めば、様になるさ」

グレイルはそう答えたが、アイクはまだ納得がいかなかつた。

「だが・・・ついこの間まで・・・親父は絶対、そんなことは言わなかつた」

「・・・」

アイクは、父に聞きたかったことを問つた。

「何があつたんだ？ 親父。何をそんなんに、あせつてるんだ？」

「・・・」

少し沈黙が流れたが、グレイルは口を開いた。どこか、悲しそうな表情を浮かべて。

「・・・アイク、お前、母さんのことを少しでも憶えているか?」

「な、なんだよ、いきなり・・・」

「どうなんだ?」

いきなり、母のことを聞くグレイル。アイクはそんな父親に困惑したが、少し考えてみる。

(俺の記憶の中では・・・母さんはあまりよく覚えてないな。でも・・・)

「そうだな・・・優しい人だつた、気がする。でもよく覚えてない。親父は何も話してくれないし」

「そりが・・・」

その後、再び微妙な沈黙が流れる。一人は一言もかわさず、ただ歩く。

・・・と、突然グレイルは立ち止まつた。

「親父？　どうしたんだ？」

アイクは不審そうなグレイルに聞くと、返事が返ってきた。

「……」今までだ。俺のこととは放つておいて、お前は城に戻れ

「なんだよ、いきなり！？」

訳が分からずアイクは聞き返したが、グレイルは険しい表情をして重ねる。

「団長命令だ！　城に戻れ！…」

グレイルはアイクを向き、黄色いマントをひるがえし、城の方へ手を向ける。

「わ、分かったよ・・・」

仕方なく、アイクはそれに従つた。

「・・・」

おずおずと来た道を引き返すアイクを、グレイルはずつと見張つていた。ちゃんと城に帰るか、見届けるかのように。

やがてアイクの姿が森の木に隠れてしまうのを見届けてから、グレイルは歩きだす。

(・・・城だ)

アイクは、ゲバル城に帰ってきた。振り返るとやつをまで父と歩いた、熱帯雨林が広がっている。

(・・・親父・・・一体何をしようとしてるんだ? いの、森の中で・・・)

城に帰れ、と言われたが、アイクは城の中に入る気分になれなかつた。しばらく、熱帯雨林を見つめる。

(何だらう、胸騒ぎがする。嫌な予感がしてきた・・・)

無性に、アイクは心臓の鼓動が高まるのを感じた。緊張というか、恐怖というか・・・そんな感情が沸き起つる。

(親父・・・)

気が付くとアイクは、走っていた。夜の熱帯雨林の中を通る、やつきグレイルと歩いていた道を。

「はあっ・・・はあっ・・・

満月は、最も高い位置に差し掛かろうとしている。

「くそつ・・・ほつとける訳ないだろ、親父のやつー。」

森の中を、ひたすら走ると・・・何か、金属がぶつかり合いつような音が響いてきた。

「ふんっ」

ガキイン!!

夜空の頂点へ達した月の真下で、巨大な戦斧と黄金に輝く大剣が激しくぶつかり合いつ。お互いの武器はぶつかった途端、火花を散らした。

戦斧を持った人物は、他ならぬグレイルだった。

「ぬおうあーーー！」

戦斧を振りかざし、戦っている相手に向かつて突撃する。そしてぶつかると見えた途端、グレイルは戦斧を振り下ろした。

だが、グレイルが使う戦斧は、相手の大剣によつてあっさり受け止められる。

黄金に輝く大剣操る人物は、全身黒甲冑に身を包んで深紅のマントをはためかせる男。メリテネ砦で見かけた、あの漆黒の騎士だつた。

アイクは、森の中の少し開けた空間に出た。そこで、彼は見る。

「…！」

グレイルが、漆黒の騎士と一緒に討ちで戦っている場面を。

グレイルと漆黒の騎士は、激しくつばぜり合いをしていた。

ギギギ・・・

だが、グレイルが少しづつ、押されている。漆黒の騎士はゆっくりと剣で斧を押し返し、最後には思い切り、グレイルごと戦斧を吹き飛ばした。

シャキン！

「ぐつ・・・」

グレイルは、後ろにあつた倒木より、さらに後ろまで飛ばされる。隣に、戦斧が転がった。

何が起こってるか分かっていないアイクは、思わず駆けだした。

「親父っ…！」

「アイク！？」

その声に、グレイルは驚き、すぐに大声で返す。

「来るなつ！――」

「――」

アイクは、反射的に足を止める。すると漆黒の騎士は、ちらりとアイクを見てから、再びグレイルに向き直った。

「……」の剣を使われよ」

そう言つて、さっきまで自分が使つていた黄金の大剣を、グレイルの方へ放つた。大剣はグレイルの目の前に転がつて倒木に突き刺さる。

「……何のつもりだ？」

グレイルは立ち上がりつつ、漆黒の騎士に聞いた。

すると漆黒の騎士は、腰からもつ一本の剣、白銀に輝く大剣を抜く。「貴殿との戦いを楽しみにしていた。まともな武器で、全力をつくしていただこう！」

白銀の大剣をグレイルの前に降り降ろし、付け加える。

「……神騎将、ガウェインよ」

グレイルはそれを聞いて、静かに答えつつ、足で倒木を転がして剣を倒木から引き抜いた。

「昔・・・そんな名で呼ばれたこともあつたな。だが・・・」

引き抜いた剣を、再び漆黒の騎士の手の前に投げ返す。剣は漆黒の騎士の前の地面に突き刺さった。

「との昔に、その名と剣を捨てた。今の相棒は、これだ」

傍らに転がっていた戦斧を構え、得意げな表情をグレイルは浮かべる。すると漆黒の騎士は、独り言でも言つかのようにつぶやいた。

「死ぬ気ですか・・・?」

漆黒の騎士のつぶやきは、グレイルにも聞こえたようだ。グレイルが口を開く。

「その声・・・覚えているぞ。たつた十数年で、師であるこの俺を追い抜いたつもりか? ふん、若造が・・・」

グレイルは表情を改め、叫ぶ。

「これでも、食らうがいい!」

その叫びとともに、再び漆黒の騎士に向かって突撃していく。同じように、漆黒の騎士もそれに応じた。

斧と剣が、何度もぶつかり合いつ。

だが、今度の勝負は・・・

すぐに決まつた。

グレイルの背中から突き出た白銀の刃が、月の光を反射させて輝く。

二〇一

その間、漆黒の騎士はまた静かに独り言を言った。

「……………だんだんと……………？」

グレイルの体を貫いた白銀の大剣を、引き抜く。グレイルはよろけ、戦斧を取り落とした。

「親父——！」

アイクは、もうじつとせずに飛び出した。一騎討ちの最中だとか、敵が目の前にいるだとか、そんなこと構つていられなかつた。体を貫いた剣が引き抜かれるとともに、よろけたグレイルを支える。

だが、支えきれずにアイクはグレイルともども地面に倒れる。

そんな親子の様子を、漆黒の騎士は静かに見ていた・・・。

「親父、親父つ・・・！おやじいいい――――――――――

夜空の頂点に浮かぶ満月に、いつしか雲がかかり始めていた・・・。

「・・・信じられんな。これが我が師の、なれの果てだといつのか・・・」

漆黒の騎士のつぶやきなど、アイクの耳には入らなかつた。

「親父つ・・・親父つ・・・！」

必死にグレイルに呼びかけるアイク。すると、グレイルはわずかに目を開く。

「アイ・・・ク・・・・」

「しつかりしる・・・」

グレイルを励ますアイクをよそに、漆黒の騎士が歩み寄る。

「・・・さあ、渡してもらいましょうか」

グレイルは、漆黒の騎士の方を向いて弱々しく返事をする。

「あ・・・れは・・・もつ・・・捨てた・・・」

それを聞いて、漆黒の騎士は笑つたよつた声で、答える。

「フツ、あれがどんなものか最もよく知るはずのあなたが、あれを捨てたなどと・・・もつ少し、まともな言い訳を期待しましたが?」

「く・・・話は・・・終わりだ・・・」

グレイルはそつまご残し、口を開じる。しかし漆黒の騎士は、話を終わらせない。

「どうあっても、口は割らぬ、と? 確かに、死人に口はなし・・・だが・・・まだしばし時がある」

そう言つて、漆黒の騎士はアイクを見る。

「・・・息子の死に顔を見て、なお同じセリフが言えるか・・・試してみるのもいいでしょ?」

「・・・」

アイクは漆黒の騎士に立ち、立ち上がる。腰からリガルソードを引き抜き、構えた。

「やめろー、アイク!..」

グレイルがそんなアイクを見て、そう言つた。だが、頭に血が昇つていたアイクに、そんな言葉は届かなかつた。

「でやあつーー！」

アイクはリガルソードを水平に構え、漆黒の騎士に向かつて居合斬りを繰り出す。だが、漆黒の騎士はその重そうな装甲とは裏腹に、信じられないほど速い動きで居合斬りをかわした。

「ー」

「・・・」

背後を取つた漆黒の騎士は、剣を持つていない方の手で、アイクを殴り飛ばす。その信じられないほどの力で、アイクは近くに生えていた木に叩きつけられた。

「・・・つ・・・・ー」

「アイクつー！」

グレイルが身じろぎするが、痛みのせいか再び倒れ込む。漆黒の騎士が、アイクの方へ歩み寄る。アイクに向けて虚空へ大剣を振り下ろし、静かに言った。

「次は、外さん」

続いて、グレイルを振り返つた。

「・・・例のものを渡せ。おとなしく従うならば、息子の命だけは保障しよう」

「やめ……る……！」息子に……手を出さな……」

その時、どこかですさまじい遠吠えが響き渡った。それは、昼間に聞いたメリテネ砦でのガリア兵たちのものとは比べられないほど、威厳に満ちた咆哮だった。

「これは……『獅子王』しそう『か……』

漆黒の騎士はその咆哮を聞くなり、一人でそうつぶやいてからドロカへ去つていこうとした。

「やむを得ん、ここは一度退くか……」

漆黒の騎士の脚が、急に重くなつた気がした。漆黒の騎士は足元を見てみると、アイクが脚をつかんでいる。

「逃がすものか……つ……」

怒りの形相で自分を睨む少年に対し、漆黒の騎士は静かに語りかける。

「……お前も、父と同じ愚か者か？」

グレイルが、それを聞いて呻く。苦しそうだった。アイクはあわてて漆黒の騎士の脚を離し、グレイルの元へ駆けよつた。

「親父……！」

グレイルは苦しそうにアイクに言ひ。

「・・・やめる。お前の勝てる相手じゃない・・・」

「しかし・・・」

「アイクっ！」

二人の様子を見て、漆黒の騎士はアイクに聞く。

「・・・来ないのか？ ならば、」ちらから・・・

そこまで言った時、再び威厳のある咆哮が熱帯雨林の中で響き渡つた。やつきよりも大きくなっている。

「近いな・・・今、やつらと事を構える訳にはいかん。フツ、命拾いしたな小僧」

漆黒の騎士は一人に背を向け、粉のようなものを地面にまく。すると彼の足もとに模様のようなものが現れ、彼の体を光が包む。

光が収まった時、そこにはもう誰もいなかつた・・・。

ポツリポツリと、水が落ちてくる。どうやら、雨のようだ。音はあつという間に激しくなり、辺りは熱帯特有の雨、スコールとなつた。

「・・・全く。しょうがないやつだな・・・、もつとも、そんな風に、育てたのは・・・この・・お・・れ・・・」

雨に混ざつて、グレイルの弱々しい声が聞こえた。アイクはグレイルを見る。

グレイルは、目を閉じていた。

「・・・親父・・・？ 親父！？ しつかりしりー！こじや何もできない・・・し、城に・・・戻らないと！」

「・・・」

アイクはグレイルを背負つ。本来アイクよりも重いはずだが、アイクはそんな重さなど分からなかつた。というより、感覚があいまいになつていた。

とにかく、グレイルを城まで運んで手当てしないといけない！

「アイ・・・ク・・・・」

アイクの背中で、グレイルの声がわずかに聞こえた。まだ、生きてる！

「親父！？ 気が付いたか？」

アイクはそう聞く。するとグレイルは、消えそつた声でアイクに話しだす。

「お前に・・・・・話つておく・・・・事が・・・・ある・・・・」

アイクは断る。

「……後で聞く。今は城に戻る方が先だ」

だが、グレイルはアイクの断りなど全く聞かず、話し続ける。

「……仇を討とう……などと思つた……あの……騎士の事は……忘れる……」

「な……んだって？」

グレイルが言つたこと、アイクは耳を疑つた。さらにグレイルは話を続ける。

「ガリア王……を……頼り……」で……平和に……暮らせ……」

「親父！ しゃべるな！！ 体力が奪われる！！ 頼むから……！」

静かに話すグレイルは、まるで遺言でも残すかのような話しかだつた。アイクはじらえきれずに、グレイルに怒鳴る。

しかし……

「……後の……」とは……すべて……お前に……まかせたぞ……みんなを……ミストを……」

「待て……ダメだ、そんなこと言つな……もうすぐ、灯りが見える……」

そこで、アイクは倒れてしまう。だがそれでも、再び起き上がり、グレイルを背負つ。雨の音も、雷の音も、アイクにはもう聞こえなかつた。

前には、ゲバル城の灯りがほんのり見えてきた気がした。

だが、アイクは意識があいまいになつてきていた。自分が何を言つているかすら、自分で分かつていなかつた。

視界が、暗転する。

「あと少しつ・・・！　あと少しどつ・・・！…！」

グレイル・・・。

## 父の面影（前書き）

運命の夜から、一夜明けた日。

昨夜から降り続けていた雨は夜明け前にやみ、見渡す限りの晴天となつた。

だが、傭兵団のメンバーは、みな深い悲しみに包まれていた。

その日の夕方・・・。

『何だ、もう終わりか？ ほら来い！ その程度じゃあこの俺には届かんぞ！』

俺がガキだったころから、親父は俺に生きるために技術を叩きこんできた。

戦闘訓練では、ガキの俺を木刀で容赦なく転がせてたつけ……。  
いや、だが今思い起こすと、親父は思い切り手を抜いていたことくらい分かる。でも、あの頃は本気でボコボコにされているんだって、思っていたが……。

何度も倒されても、俺は起き上がり、親父に木刀を振りかざした。

『……やれやれ、頑固な所まで、俺に似たのか？』

物心ついたころから、俺は親父に憧れていた。親父を超えることが、俺の目標になっていた。

ティアマトと傭兵团を立ち上げ、セネリオ、シノン、ガトリー、キルロイ、オスカー、ボーレ、ヨフア、そしてワゴ……同じように親父を慕うやつが、親父の元に集つた。

戦いの技術だけでなく、知識も深く、人望もある親父……頑固で

厳しかつたが、俺はあんたを超えたかった。

・・・結局、それは出来なくなつちまつたがな・・・。

『アイク！　早く大きくなれ。・・・お前はきっと、いい戦士になるぞ』

「親父・・・これは・・・夢じやないんだな・・・現実・・・なんだ・・・な・・・」

グレイルが使つていた戦斧が、森の入口に突き立つてゐる。斧の根元には白と黄色の花が束になつて添えられていた。

この斧の下に、グレイルが眠つてゐる。昨日まで生きていた・・・アイクとミストの実の父親が・・・。

夕焼け色に染まるグレイルの墓標。その前で、アイクは呆然と立ち尽くしていた。その横で、アイクの妹ミストは座り込み、顔を手で覆う。

「・・・」

「日が暮れて……冷えてきた……中に戻るぞ、ミスト」

「……」

ミストは、動じない。

「ミスト……」

泣いていた。

「・・・っく、ひ・・・っく・・・」

「ミスト・・・」

「・・・」

アイクは、ミストに言葉をかける。

「俺は、側にいたのに親父を守れなかつた。すまん……」

「・・・ひ・・・っく・・・」

「……」

それ以上、妹に言つべき言葉が、見つからなかつた。妹を見下ろし、兄は黙り込む。

すると、今度はミストが口を開く。

「・・・お父さん・・・いなくなつて・・・、ひっく・・・わ・・わたし・・・もひ・・・びりしていいか・・・わかん・・ない・・」

それは、ミストの心の本音だった。父になついていた娘の、本音だつた。

アイクはそれを聞いて、ミストの隣に腰を下ろす。

「・・・俺がいる」

ミストは顔を上げる。涙で濡らした顔を、兄に向ける。

「お兄・・・ちやん・・・」

ミストが本音を言ったように、アイクは自分の決意を打ち明ける。

「俺が、団長を継ぐ。親父の代わりに・・・お前も、傭兵団のみんなも守つてみせる」

それを聞いて、ミストは思わずアイクに顔をうずめ、声を上げて泣き出した。

「・・・う・・・う・・・お兄ちやん・・・お兄ちやん・・・お兄ちやん・・・」

「・・・」

アイクは、優しくミストの頭をなでた。するとミストは、幾分落ち着いたようだ。まだ、顔をうずめたままだが、声を絞り出すよつと言つ。

「・・・いやだからね・・・お兄ちゃんまで・・・何にも言わづ・・・いなくなっちゃつたりしたら・・・いやだからね・・・」

ミストの、たつた一人の肉親に対する、願いだ。

「ああ、約束だ・・・」

アイクの返事は小さな声だったが・・・力強い声だった。

再び泣きだした妹を、兄は何も言わずに見守つた。

やがて太陽は西の地平線へ沈みだし・・・昨夜よりもほんのわずかに欠けた十六夜 いざよい の月が、東から姿を出し始めた。

父の面影（後書き）

アイク、ミスト・・・そして傭兵団が失ったかけがえのない存在。

それは、あまりにも大きすぎるものだった・・・

**Greil's Mercenaries**（前書き）

団長グレイルを失った傭兵团。

グレイルの息子アイクは、団長を引き継ぐことを決心する。だが・・・アイク達がいない間、ゲバル城の中では・・・新たな問題が起きていた。

「ゲバル城」

「うざけんじやねええ！！！」

怒鳴りながら「ぶしをテーブルに叩きつけたのは、シノンだ。

シノンは完全にキレた様子で立ち上がり、向かいの席に座ったティアマトに言つ。

「グレイル団長が興したこの傭兵团を、アイクみてえなガキに任せるだあ！？ あんなやつに、何ができるってんだよー！ 寝言は寝てから言えよなあつ！…」

それに対し、ティアマトは静かに諭す。

「シノン・・・どうか分かつてちょうだい。もともと、グレイル団長の跡を継ぐのはアイクだつて決まっていたのよ？ 確かにあなたから言わせれば半人前でしょうけど・・・でも、彼もだいぶ成長したわ」

だが、シノンは認めない。

「あの新米ヒヨックのガキの、どこが成長したってんだ！！ グレイル団長の息子だからって、ひいきにも程があるぜ！ 最も実力が高えやつが団長になる方が、絶対正しいと思うがねえ！？」

そして、シノンは隣に座っていたガトリーを見下ろす。

ガトリーは一瞬ビクッ と震えたが、シノンは再びティアマト他団のメンバー（アイク、ミスト、エフア、キルロイは今いない）をさも嫌そうににじみつけ、言い放った。

「オレはこんな頭の固くやつらどつるむなぐや、まっぴらだぜ。オレはオレの好きなよしだせてもひつ・・・」じんなクソ集団とは、今日限りでおわりばだな！――」

シノンの言葉を聞いて、それまで黙っていたオスカーとボーレが身を乗り出した。

「シノン、何を言い出すんだ！」

「団を抜けるってことか！？」

わざらわしそうに、シノンが答える。

「さつさから、やつてんだらうが！――」

そう言つて、隣に置いてあつた荷物と弓矢を背負い。

新参者のワゴが何も言えずに、ただ事の様子を見守つていた横で、ティアマトがもう一度シノンの説得をする。

「あなた、本当に団を抜けるの？ グレイル団長にあつた恩義は・・・じつかぬの！」

シノンの手が、止まつた。  
だが、すぐに動き出す。

「・・・団長には、恩はあるや。けどな・・・次期団長がアイクつてのが、オレは気にくわねえんだ！」

そう言つて、荷物袋のほうを手で払つ。

そんなシノンの横で、ガトリーはオロオロしていた。

「シノンさん・・・本当に出て行つちやうんすか？ お、おれは・・・どうなつちやうんすか？」

シノンはガトリーを見る。ガトリーはシノンに言い募る。

「おれは・・・シノンさんのこと尊敬してゐます！ でも・・・シノンさんが団を離れちやつたら・・・おれは・・・」

「・・・ガトリー」

「？」

シノンはガトリーに不意に話しかける。

「お前は勝手にしろ。オレは、出て行くからな」

そして、荷物を背負つて勝手口に立つ。

「あばよ」

シノンはやつぱり、出て行ってしまった。

「え？ ええ！？ し、シノンさん！？」

残されたガトリーはうろたえる。優柔不斷な性格の彼は、勝手口と団のメンバーを互いに見合わせ、あわてた。

「・・・」

ガトリーはじぱりそのままいたが・・・立ち上がる。

「シノンさん待って！ オ、おれもいくすよ～！～！」

荷物など何も持たず、ガトリーは勝手口を開け、シノンの後を追つて出て行ってしまった。

「そんな・・・ガトリーまで・・・」

ティアマートは頭を抱えた。そんな彼女の前で、オスカーとボーレが立ち上がる。

「副長、私とボーレで、何とか一人を説得してきます。ボーレ、行くぞ」

「分かったぜー」

ティアマトは、頭を押さえながら、言った。

「うん・・・お願ひね・・・」

ワコは一人で部屋まで戻り、ベッドの上に腰かけた。

「グレイルさん・・・」

ワコは今でも信じられなかつた。あんなに強い人が・・・突然帰らぬ人となつたことが。

（あたしを助けてくれたあの人・・・死んじやつたんだ・・・）

ふと、窓の外を見てみると、夕焼けはいつの間にか夜の帳に包まれつづあつた。空には星が輝きだしている。

（昨日まで・・・生きてたんだよね・・・）

ほんの僅かに欠けた月が、東の空に昇つっていた。

（団のみんながバラバラになっちゃつて・・・この先どうなつちやうんだろうね・・・）

「ふう・・・どうしてこう・・・次から次へと・・・」

食堂に残つたのは、ティアマトとセネリオだ。ティアマトは頭を抱

え、セネリオは静かにその様子を見る。

と、そこへアイクが戻ってきたこと、セネリオは気付く。

「…………アイク…………」

ティアマートはそれを聞いて、戸口の方を向く。蒼い髪に新緑のハチマキを巻いた少年が、そこに立っていた。

ティアマートはあわてて顔を上げ、努めて平静を取り繕つた。

「あ、アイク…………ミストは？」

「部屋で休ませた。キルロイとニアファが見てくれている」

普段から無愛想なアイクだが、今日はいつもにもまして表情が堅い。どうやらミストは、相当ショックが大きいやうだ。  
無理もない……。

ティアマートはほつとする。

「そう。よかつた……あのままじゃ、あの子までまこうちやうもの。あなたも無理しなくていいのよ、アイク」

ティアマートの気遣いに、アイクは答える。

「俺はもう大丈夫だ。どんなに嘆いたところで……親父が生き返るわけでもない……。それより、世話をかけたなティアマート。セネリオも」

「いえ・・・」

「いいのよ、そんな」と・・・

セネリオとティアマトの返事を聞いてから、アイクは食堂を見渡してから一人に聞く。

「それで・・・みんなは?」

アイクの問いに、ティアマトが口を開く。

「アイク、実はね・・・」

言いかけたところで、食堂の脇にあつた勝手口が開き、オスカーとボーレが入ってきた。オスカーがティアマトに報告に行く。

「オスカー、ボーレ、戻りました」

「どうだった?」

ティアマトが一人に聞くと、ボーレは不愉快そうな顔で答える。

「振り返りもせず行つちまいましたよー まったく、薄情なやつらだぜ!」

「ボーレ、どうしたんだ?」

状況が読めないアイクは、ボーレに事情を聞く。ボーレはアイクに驚いた。

「アイク！　おまえ、もういいのか？」

「ああ。それより、何があつたのか、説明してくれ」  
ボーレは口ごもる。今アイクにあのことを、言わない方がいいと思つたからだ。

「え、あ、その・・・なんだな。え、つと・・・」

「シノン、ガトリーが出て行きました」

だが、セネリオがはつきりと言つてしまつた。ボーレはセネリオを非難する。

「セネリオ！」

だが、セネリオは目を閉じてもつともな答えを言つ。

「隠す必要もないでしょ」

アイクはそれを聞いて、少し驚いた。

「二人が出て行つた？　理由は？」

アイクはそう聞きかけたが・・・すぐに思い当たつた。

「いや・・・そつか。俺のせいだな？」

まさにアイクが言った通りの理由だったため、ティアマト達はうな

ずくしかなかつた。

「アイク・・・」

一応説明にと、ボーレが口を開く。

「・・・ティアマトさんが、次の団長をアイクにするつゝて。それにシノンがキレて、ガトリーと一緒にさつき出て行つたんだ」

オスカーも、口を添える。

「後を追つて説得してみたが、無駄だつたよ」

さつきから黙つて成り行きを聞いていたセネリオが、自分の考えを言つ。

「元々、グレイル団長の後を継ぐのはアイクだと、決まつていたじゃないですか。それが予定より少しそまつただけのこと。納得できないというものを、無理に引きとめる必要はありません。戦力の低下は、新団員を募つて補えばよいでしょう」

そのどじまでも徹底した現実主義の発言に、ボーレは反論する。

「やこままで言つなよ。ずっと一緒に戦つてきた仲間じゃねえか

「じめんなさいね、アイク。私の力が及ばなかつたばかりに・・・」

セネリオとボーレの議論を横目に、ティアマトはアイクに申し訳な

れをひたすら。アイクは首を横に振った。

「・・・ティアマトのせいじやない。シノン達の行動は当然だ。こんな新米が団長じゃ、命がいくつあっても足りないからな」

真顔で答えるアイクに、ティアマトは少し怒りめの声で返す。

「アイク！　自分のことをそんな風に言わないで！」

だが、アイクはそんなつもりではなかった。

「卑下して言つていいんじゃない。これは事実だ。今の俺なんかよりも、シノンやガトリーの方がずっと実力は上だ」

そこまで言つて、アイクはやや語氣に力を込めつつ続ける。

「だが、俺は・・・それでも、この団を守る役目を自分から放棄する気はない」

それを聞くと、ティアマトは顔を上げる。

「アイク！　じゃあ・・・？」

「親父の遺志を継いで団長になる。ここにいる皆が認めてくれるなら、そうしたい」

アイクのその声に、傭兵团のメンバーは全員納得した。

「 もちろんだわ！」

副団長のティアマトは顔を輝かせ、

「 元より、そのつもりだよ」

先輩のオスカーは当然の如くうなずき、

「 こきなり差が付くつてのはしゃくだけどな。まあ、認めてやるぜ、  
新米団長！」

一応先輩のボーレは、アイクの肩に手を置いて、喜んだ。

そこへ、キルロイの声が聞こえてくる。

「 僕も、賛成です」

戸口の方を見ると、キルロイが立っていた。アイクはキルロイに駆け寄る。

「 キルロイ！」

キルロイはさじうやひ、少し前にすでにここに来ていたようだった。

「 ミストは眠つたよ。今はヨフアが付き添つてる。それで、ここに来たんだけれど・・・話はだいたい分かつた。新団長はアイク。うん、しつくつくるよ」

一人、何も言つていの人物がいた。セネリオである。アイクはセネリオのところにも行き、聞いてみる。

「セネリオは？」

するとセネリオは、少し不安そうな顔でアイクを見上げた。

「……アイク。僕は、あなたの力になれますか？　あなたの傭兵团に……僕の居場所はありますか？」

アイクは、珍しく少し笑顔を見せつつ答える。

「……変なやつだな。俺はいつでも、お前を頼りにしている。これからも助けてくれるんだろう？　セネリオ」

セネリオもまた珍しく、嬉しそうにうなずいた。

「はい……！　お側で、お守りします」

最後にアイクは、そこにいる全員を見渡して言った。

「みんな、ありがとう。頼りない団長だが、当分は大目に見てくれ

アイクは、この団の名前は変えなかつた。

『グレイル傭兵团』・・・

アイクは、最も尊敬する人物を旗印に、団長となつたのだ。

その後、アイクは廻のティアマトから、団としてやるべき仕事を聞く。

団の経費の收支の把握や、団員全員の装備をそろえること・・・  
団員の能力を知ったり、対人関係を頭に入れたりといった、情報収集のこと・・・

クリミアから逃げてきた行商隊が、この傭兵団と行動を共にしてようと申し出ていること・・・などなど。

ティアマトは次々とアイクに囁つたが・・・

「ティアマトー!」

「なに?」

アイクはティアマトの話を止める。

「確かに何でも言ってくれとは言つたが・・・いつぶんにまくし立てられても訳が分からん。とりあえず、やりながら覚えて行きたいんだがそれで構わないか?」

アイクに言われて、ティアマトは反省する。

「あ・・・え、ええ。そうね。」めんなさい、私ったら

「・・・」からは俺に任せで、あんたも少し休んでくれ

「私なら平気・・・」

だが、ティアマトが無理しているのはアイクでもすぐ分かった。

「無理しないでいい。俺なりにだが、精いっぱいやるから」

「アイク・・・」

戸口から廊下の方へ出て行ったアイクの後ろ姿を見ながら、ティアマトはため息をつく。

「・・・つ・・・つ・・・う・・・う・・・」

ティアマトは、涙を流し出す。

「・・・グレ・・・イル・・・つ・・・」

そのままふらふらと、勝手口から外へ出て行った・・・。

その頃アイクは、ゲバル城の玄関で・・・。

「あら・・・もしかして、あなたが傭兵团の団長さん? ふふ、本

「当にまだ若いのね」

黒い髪に薄い紗をかぶつた、濃い化粧の女性が、アイクに話しかける。アイクがそちらに目をやると、4人の男女が玄関に立っていた。

「あんたたちが、ティアマトの言つていた商人たちか？ 僕たちと一緒に行動したいつていつ・・・」

アイクの問には、ひげ面で坊主・・・といつかハゲ頭の大男が答えた。どうやら、この行商隊のリーダーのようだ。

「ああ、そうだ。こうして出会えたのも、何かの縁だと思ってね。あんたらが、わしらの安全を守ってくれるなら・・・わしらは、あんたらの望む物資を調達しよう。どちらにとつても、損のない取引だと思つが・・・どうかね？」

アイクは、純粹にその好意を受ける。

「それは・・・確かに願つてもない」

するとひげの大男は、右手を差し出した。

「じゃあ、これで契約成立だ。わしは武器商人ム斯顿。あんたらの好みの武器を仕入れてくるよ」

アイクはその右手を受け取り、握手を交わす。続いて、濃い化粧に黒髪の女性が自己紹介をする。

「わたしは、道具売りのララベルよ。色々な装具を用意してお待ちしているわ」

「うひ」、後ろに並んでいたよく似ている一人の青年のうひ、金髪を後ろで束ねている方が血口紹介する。

「おれは、ジョージ。古物屋をやつしてんだ。いらない武器や道具があつたら買い取るぜ」

そして、もう片方の茶髪を束ねた青年が血口紹介する。

「ほくは、ダニール。武器の鍊成をやつして。お惣さんの方の」希望通りの品を作り出すよ」

何でも、ジョージとダニールは双子の兄弟らしい。よく似ててるわけである。

一通り自己紹介が終わつたところで、武器商人のムストンがもう一つ提案する。

「それから・・・もし信頼してくれるなら、傭兵団の補給部隊として輸送隊も兼ねてい」と思つところがね。どうしようか?」

断る理由はない。それどころか、ものが増えてきててそろそろ困りだしていただけに、うれしい提案だった。

「ありがたい申し出だ。ぜひ、利用させてもらひ

「やうか。じゃあ、これからもよろしく頼むぞ」

「ああ」

アイクは、行商人の4人を空き部屋に案内した。アイクがいるこの場所は古くても城のため、部屋は余るほどたくさんあるのが救いだつた。

4人と別れ、アイクはふと、もう一度グレイルの墓に行こうと思いつた。

城の外に出たら、もう夜もかなり遅い時間だった。わずかに欠けた月が、夜空の頂点にさしかかっている。

昨日の今とほぼ同じ時間に・・・グレイルは殺されたのだ・・・。

アイクは、熱帯雨林の入り口に突き立っているグレイルの戦斧を目指した。

・・・と。

「・・・人の声・・・こっちか・・・?」

わずかに、人の声が聞こえてきた。一応アイクは警戒し、茂みに身を隠す。

茂みからは、ちょうどグレイルの墓が見えた。その墓の前にひざまついているのは、赤い髪を一本のみつみにし、白い鎧をまとった人物。

「ティアマト……？」

ティアマトは、泣いていた。グレイルの墓の前で。

「・・・つ・・・く・・・つ・・・・、グレ・・・イル・・・・ど・・・して・・・  
・・・ビ・・・・して・・・・」

アイクは、少し変に思った。

(いつもティアマトは・・・親父のことを「団長」と呼んでいたはずだ。どうして、呼び捨てなんだ・・・?)

だが、そんなことアイクに分かるはずもなかつた。

そのままじけんじげんして、ティアマトは立ち上がり、城の方へ帰つて行つた。アイクは茂みから立ち上がり、グレイルの墓に向かい合つた。

「親父・・・」

たつた今から24時間前に、グレイルは逝つたのだ。

使いこまれた戦斧だ。グレイルが、自作したものである。

そこで、アイクは柄に刻まれた文字に気が付いた。

「『カルヴァン』……？」

さういって、その下には読めない文字が刻まれてあつた。アイクはその

文字は読めなかつたものの、見覚えはあつた。

(セネリオが前言つてた・・・『古代語』だろうか?)

古代語とは、テリウス大陸ではるか昔に使われていた言語のことである。非常に難解だつたため、古代語はやがてあまり使われなくなり、現在では「現代語」という言語が一般的だ。

魔道士が使う魔道書は現在でも古代語で書かれているため、魔法の知識がある者ならある程度は読めるらしいが・・・。

(セネリオも、きっと疲れてるだろ?。無理させない方がいいだろうな)

アイクはそう思い、墓を後にした。

城に帰つたアイクは、ミストの様子を見るために妹の部屋へ行く。すると、その部屋からヨフアが、静かに出てきた。

「・・・」

「ヨフア?」

アイクが呼ぶと、ヨフアはこちらを見てアイクに気付く。

「あ・・・アイクさ。ミストちゃんなり、わざわざ見にきたよ

「わづか・・・面倒をかけたな」

「ハハん・・・」

まだ子供なヨフアにも、疲労感が漂つて居るよつに見えた。

「もう時間も遅い。お前も寝た方がいい

「・・・・」

ヨフアは、何か言いたそうに下を向く。

「どうしたんだ?」

アイクは、ヨフアに聞いてみた。するとヨフアは、アイクを見上げて答える。

「・・・ミストちゃんは、だいじょうぶだよ

「?」

ヨフアが言つことによく分からぬアイクに、ヨフアは付け加える。

「アイクさんがいるから・・・だから、だいじょうぶだよ

「・・・」

それを聞いて、アイクははつとなつた。ヨフアは、リストの気持ち  
が分かっている。

最後にヨフアは、明るい顔をした。

「それだけ！　じゃあね、おやすみなさい」

そして、自分の部屋へ帰つて行つた。

「ヨフア・・・ありがとな」

部屋へ戻るヨフアの後ろ姿に、アイクはそつそつとやいた。

「よつ新米団長！　早速仕事か？　おれにできるひとあつたら、何  
でも言えよな」

廊下でそれ違つたボーレは、アイクに笑いかける。そんなボーレに、  
アイクは聞きたかったことを聞いてみた。

「・・・ボーレ。お前な、本当のところはどうなんだ？」

「なにが？」

「俺が団長を継ぐつてこと・・・前はあんなに嫌がつてただろ?  
だから、本音はどうなのか聞いておきたい」

ボーレは、少し考える。

「・・・やうだな。お前の今の実力を知つてりや・・・危なつかしくて下になつきたくないねえかもな。けど・・・アイクが次期団長になるのは・・・グレイル団長が望んでたことだから・・・おれはなんとしても、叶えてえんだ」

「・・・」

静かに聞くアイクに、ボーレは続ける。

「・・・団長は兄貴だけじゃなく、おれも団員として雇ってくれた。親父が死んで・・・小さいヨフアを抱えて・・・おれは途方に暮れた。・・・オスカー兄貴が騎士団を除隊して、戻つてくれたけど・・・生活は苦しくってな」

ボーレの境遇はアイクはすでに知つていたことだったが、改めて聞くと、とても苦しい生活だったといふことがとても伝わる。

「そんな、おれたちに・・・寝る場所と満足な食事・・・それから、仕事をくれたのは、団長だった」

今度は、アイクが口を開く。

「・・・お前たち兄弟は、団の一員として十分働いていたんだ。そこまで恩に着る必要はないと思つが?」

ボーレは首を横に振る。

「恩だけじゃないぜ。団長は、おれたちのことも家族だつて言つてくれただろ? その家族を守るために・・・おれはお前に協力する」

「そうか……」

アイクが納得すると、ボーレはいきなりアイクの右肩にこぶしをぶつけた。もちろん、本気ではないが。

「……そういひつた。だから、遠慮なんかすんじやねえぞ。分かつたな！」

アイクも、ボーレの右肩にこぶしをぶつける。アイクはまた、珍しく笑顔を見せた。

「ああ、はりきつて使わせてもらひつ」

「お、おう・・・！ 男に一言ほねえ。ビーンと来い！」

城の中には、教会の跡地のような部屋で、キルロイは一人、ひざまづいていた。

組んだ手にライブの杖を持ち、頭を垂れる。すっかり朽ち果てた、女神像に。

そして、ゆっくり立ち上がり、教会を後にしようとしたとき・・・。ひさくを持つたアイクと鉢合わせになつた。

「・・・キルロイ？」

「アイク・・・」

アイクは、もうすぐ近くの長椅子の上に置いた。

「何をしてたんだ？」

「……祈つてた」

「親父のために……？」

「もう……団長の……」

もうすぐの明かりに照らされたキルロイの顔は、涙に濡れていた。

「キルロイ……」

キルロイは堰を切ったかのよう、泣きだす。

「……『め・つ・・・・君の方が・・・辛いはず・・・なの・・・に・・・』

少しの間、キルロイは泣き続ける。そんなキルロイに、アイクは言う。

「……ずいぶん昔・・・親父に聞いた話なんだが・・・死者は・・・そいつのために流された涙の分だけ、女神から安らぎが与えられる・・・らしい」

アイクは、静かに教会の女神像の前まで歩いて行く。そこで、キルロイを振り返る。

「俺は・・・なんでだか・・・泣けないみたいだからな。・・・キ

ルロイが、俺の分まで泣いてくれるのなら……ありがたい

「…………ア・・・イク・・・」

「…………ありがとな。親父のために……ありがとな……キルロ  
イ・・・」

教会跡の朽ちた女神像は、割れた窓からの月光を浴びて、美しく輝  
いていた。キルロイの涙に、答えるかのように「…………。

## G re i l , s M ercen a r i e s (後書き)

話中心ですみません><；

アイクを団長として再出発したグレイル傭兵团。この先、彼らに待ち受けの運命は？

## 8章 ～絶望～して希望～ 前編（前書き）

グレイルがこの世から去了ったのち、アイクはグレイル傭兵团の団長を継ぐことを決意する。

しかし、それをよしと思わぬシノンは、後輩であるガトリーを引き連れて団を抜けてしまった。

それから、もう二日後のこと・・・。

「ジエバル城」

窓の外から見える景色は、どんよりとした雨模様。ときおり稻光が走り、雷鳴が轟く。

アイクは着替えながら、静かに窓の外を眺めていた。激しい雨が、たまに窓の中に降り込んでくる。それもそのはず、窓にはガラスの類はなく、完全な吹きさらしだからだ。

（蒸し暑い……）

熱帯雨林特有の蒸し暑さは、この豪雨の中でも全く和らぐ気配はない。

ふと、窓の外の景色を見て、3日前の夜を思い出した。

（あの夜は……親父がこの城を抜け出したんだったな。ここからちょうど、その様子が見えて……）

再び、雷鳴が響き渡る。

（……そして、あの騎士の手にかかったんだ……）

着替え終わったアイクは、階段を下りる途中でオスカーに会う。アイクを見つけたオスカーは、こちらに走ってきた。

「アイク、おはよう。今、城の玄関にラグズが来てたよ。食料届けにね」

「オスカー、おはよう。そうか・・・すぐ行く」

玄関に行くと、3人のラグズが控えていた。

リーダーと思われる真ん中のラグズが、アイクの方を向いて礼をする。灰色の髪をして、真面目そうな雰囲気の大柄の男だ。

「おはようございます。傭兵団の代表の方でしょうか？」

「ああ、そうだ。あんたたちは、食料届けに来てくれたのか？」

アイクの問いに、灰色髪のラグズはうなづく。

「はい。ライ隊長の命令で、2日分ほどの食料を届けて参りました。・・・あなたたち、持つて来なさい」

「はっ、キサ班長！」

キサ・・・といつららしい灰色髪のラグズは、部下と思われる後ろの2人にそう告げる。すると、部下2人は共に猫に化身し、一旦外に

出た。

アイクは、キサに礼を述べる。

「助かつた。そろそろ食料が底をついていたんだ。こんな雨の中、ありがとう」

「いえ、ライ隊長の、命令ですか？」

すぐに、キサの部下のラグズ達が戻ってきた。どちらの猫も、背中にたくさん荷物を載せている。

「、」苦労だつたわね。もう、戻つてよろしい

人型に戻つた2人は、荷物を玄関の脇に積む。だが、露骨にアイクに対して嫌そうな目線を送っていた。  
そんな彼らに、キサはたまに戒めるような目を向ける。すると、2人はしぶしぶ作業を続けた。

アイクはそんな2人に気付かず、別の気になつたことをキサに質問した。

「なあ、ライの話によると・・・そのうちガリア王宮から連絡が来るらしいが・・・あなたたちは、聞いていいか？」

「その」としたら、ライ隊長がおっしゃつておりました。我が王は近いうちに、連絡をされるおつもりのようです。どうか、今しばらくお待ち願います」

食料をボーレと一緒に倉庫へ運び込んでから、傭兵团の団員全員は朝食のために食堂へ集まつた。

「おはよー、アイク。調子はどう?」「まくやれそ!」

田玉焼きをナイフとフォークで切りながら、ティアマトはアイクに聞いてきた。

「ティアマト。もういいのか?」

ソーセージにがつつきながら、アイクは逆に聞き返す。するとティアマトは一瞬考えたが、気丈に振る舞つた。

「ええ、もうしつかり元氣」

だが、アイクはティアマトが無理してゐようとして見えた。

ハムをのせた食パンを口に入れつつ、アイクは思つ。

(ティアマト・・・あんたは、過去親父と、何があつたんだ? あんたは、毎晩親父の墓に行つて泣いてるみたいだが・・・一体、何が・・・)

だがその思いは、アイクの口から出ることなかつた。食パンと一緒に、腹の中にしまい込むことにした。

朝食も終わり、団員全員はテーブルの周りを囲つように座る。

「さあ、バリバリ働くわよ！ まずは新団員の募集を・・・いえ、ガリア王との謁見が先ね。アイク、ガリア王宮からの連絡はあった？」

聞かれたアイクは、ティアマトが無理してるように見えながらも、答える。

「いや、まだだ。食料を届けてくれたラグズの話では、近い附近に連絡をくれる手はずなんだが・・・」

その時だ、窓際に座っていたセネリオが声を上げた。

「・・・アイク、大変です！ 窓の外を見てください！！」

「・・・」

アイクが窓の外を見ると、無数の黒い鎧の兵士たちが、城を包囲しているのが見えた。

一見見ただけでも、すごい量だ。アイクは緊張した様子で、震える声を出す。

「あれは・・・！」

「げ、幻影でなければ・・・デイン王国軍一個小隊かな・・・こん

な時に、来なくても……」「

隣にいたキルロイも、血の気が引いた顔で、声を絞り出す。

「おい、おい！ ここはガリア王国領内だぜ！？ こんなところまで追つてくるなんて、正気かよ、あいつら……」「

ボーレは、信じられないという様子で騒ぐ。オスカーが、冷静に言う。

「ここまで入り込んで来るからには、決死隊とこいつことだろつな

「どうにかして、逃げられないかな……」

ワゴも珍しく、弱氣を言ひ。

そこへ、周囲を偵察に行つていたセネリオが戻ってきた。

「……駄目です。完全に囮されました。……逃げ出すことは不可能です」

それを聞いて、ティアマトは唇をかむ。

「この戦力での人数とやり合つなんて……最初から負けが見えてるわ」

アイクは、窓の外を睨む。

「それでも……やるしかない。全員、戦闘準備を！」

「・・・了解！」

「すぐに対策案を用意します」

傭兵団員は、それぞれ戦支度にとりかかる。武器や道具が不足している者は先日避難してきた行商隊から買い、またそれぞれの持ち物も必要に応じて交換をした。

アイクは、部屋できずぐずりなどの道具を整理していた。その時だ。

「・・・ん？」この本は・・・

持ち物入れの奥に、古びた本が入っていたことに気付く。本には、「祈りの書」と書かれていた。

「これは・・・確かメリテネ砦の宝箱にあった・・・

興味本位で本を開くと、なぜか一文字も書かれていない。一体どういうことだらう？

だが、本を全部のページをめくり終わった後、祈りの書の裏表紙に唐突に文字が浮かび上がってきたのだ。

『死の淵に瀕した時こそ、女神へ祈るがよい。女神による、生死の審判が下されよう・・・』

そして、祈りの書から緑色の光があふれ、アイクを包み込み、アイ

クに吸収されるかの形で光は消え去った。

そして、祈りの書は・・・まるで役目を終えたかの「」とく、ボロボロに崩れ、あつという間になくなつたのだ・・・。

「何だつたんだ、今の・・・?」

呆然とするアイク。だが、すぐに気を取り直して準備に取り掛かる。余計なことを考えている余裕は、今はない。

そこへ、ミストの声がした。

「お、お兄ちゃん!」

見ると、部屋の入口の戸のところで、ミストが震えていた。

「ミストー、お前はヨフアと一緒に奥に隠れていろ!」

「でも、お兄ちゃん・・・つー!」

アイクに言われても動じないとしたミスト。アイクは、もう一度ミストに詰つ。

「早くするんだ!!　・・・大丈夫だから、な?」

安心させるように、アイクはそつ押した。ミストも、少し落ち着いたようだ。

「う、うん・・・氣を付けてね・・・」

アイクは荷物の整理が終わり、走り出す。戦場へ・・・。

ミストは、そんな兄の様子を見送っていた。その時、あることに気が付く。

「・・・あ・・・・！　また・・・メダリオンが光ってる・・・」

ミストはそっと服の中からメダリオンを取り出し、両手のひらの上に置く。

以前、Hリンシアに見せた時と同様、メダリオンの中心から、蒼い炎のような光があふれていた。

心を落ち着かせるようで・・・また、心を奮い立たせるかのようなく、不思議な・・・だが、見る者を魅了させる美しい光・・・。

「お母さん・・・お父さん・・・もし、わたしの声が聞こえるなら、お兄ちゃんたちを守つて・・・！　お願ひ。お願ひだから・・・」

メダリオンを握りしめ、ミストはそう願う。握りしめた指の間から、蒼い光があふれていた・・・。

「みんな・・・準備はいいな?」

グレイル傭兵団の団員たちは、玄関で陣陣を組んでいた。

「ええ、こつでも戦えるわ!」

「何としても、この状況を打破しましょ!」

「デイン軍など、簡単に負ける気はない!」

「おひ、おれたちの力を思い知らせてやるひばーん!」

「みんな、支援なら僕に任せてね

「よーし、こつちゅやつちゅやつじゅん!」

みんなの心は、決まっていた。お互がお互いを奮い立たせ、デインに徹底抗戦をすると。

勝ち目の薄い戦いだらう。むしろ、勝つ方がおかしくらい、敗色濃厚な戦いだ。

それでも、アイク達は戦う道を選ぶ。

このゲバル城には、クリミア王女エリンシアはない。エリンシアの安全は、ガリア王宮が守っている。だから、アイク達が負けても、

クロニア再興は可能であろう。

アイク達にとって、この戦いは雇い主 クライアント との契約を果たす戦いではない。

「生を勝ち取るため、生き残るため」の戦いだ。

「グレイル傭兵团、出撃だつ……」

オオー――――!

新団長、アイクの出撃命令とともに、団員たちは武装し、戦場へと飛び出していく。

## 8章 ～絶望～して希望～ 前編（後書き）

「ディン軍に完全に包囲されたアイク達・・・果たして、彼らは生き延びることができるのだろうか？」

ゲバル城をめぐる戦いの火ぶたが、今斬つて落とされる！

## 8章 ジー絶望として希望へ 後編（前書き）

デイン王国軍の決死隊が、グレイル傭兵团が待機するゲバル城を突破強襲する。

新団長アイクの命令で、団はこれを迎え撃つことを決定。非常に勝ち田の薄い戦いだが、戦うしかない。

団員全員の命をかけた壮絶な戦いが、ここに幕を開ける。

「ゲバル城へ

「カムラ隊長、報告します！ 傭兵どもが武器を持ち、姿を現しました！！」

激しい雷雨が降り続けるゲバル城近くの熱帯雨林。

デイン兵の一人が、決死隊の隊長であるカムラに報告を行っていた。重厚な甲冑に身を包んだカムラは、報告を聞いて兵に指示を飛ばす。

「そうか、やつらが現れたか・・・。よし、騎兵部隊は正面からの突撃を試みよ！！ 重歩兵部隊は東の石段から進撃し、アーチャーと魔道士は援護を！！ ソルジャー部隊は西から奇襲をかける！！ 全方位から、傭兵どもをかく乱するのだ！！」

カムラの指示に従い、デイン兵たちはあわただしく持ち場に着く。

ゲバル城の西側では、大勢のソルジャーたちが待機をしていた。正面からの騎兵隊が突入を開始し始めたら、ソルジャー部隊も一気に攻め込む手はずだからだ。

そんなソルジャーたちの中に一人、少女の魔道士が紛れ込んでいた。

「・・・」

薄い紫の髪を二つに束ね、魔道士風の軽い衣装を身にまとっている。雨のせいかもしれないが、顔色があまりよくない。

その時彼女は、他のソルジャーの一人と肩がぶつかってしまった。

「おいら、どこ見てんだ？」

ソルジャーは因縁をつけ、少女につかみかかった。

「す、すみません・・・よ、見てなかつたので・・・」

そう言つたが、ソルジャーは聞かない。

「見てなかつた、じゃねえだらうがよー てめえのせいで肩の骨が折れちまつたらどうしてくれんだあー！」

「す・・・すみません・・・」

「あのな、謝つてすめばおれたち兵隊なんぞこいらねえんだよー クリミア人のくせによ、おれたちティイン人様に喧嘩売ろうつてか？」

そんな時、ゲバル城の正面の方で、ホラ貝の音と怒声が響いてきた。騎兵隊が、攻撃を開始したのだろう。

「突撃だーー！」

「オオーー！」

騎兵隊の突撃に合わせて、ソルジャー隊も奇襲を仕掛けるべく突撃

命令が下る。

「ちつ、もう突撃か・・・おい、クリニアの女。後で覚えていろよー。」

少女魔道士に因縁つけていたソルジャーは、そう言って突撃に加わる。仕方なさそうに、少女も周りに合わせてゲバル城の西にある階段へ走つていった。

「ティアマトは正面から来る騎兵を抑えてくれ！ ボーレとセネリオは東の通路を塞げ！ オスカーヒワコは俺とともに、西側の通路で戦う！ キルロイ、援護は任せたぞ！」

アイクの指示通り、団員は襲い来るティイン兵と戦いだした。

「騎兵隊、突入だーー！」

かなりの数のティインの騎兵たちが突入を試みる正面。ティアマトは、そこに立ちふさがる。

「そこをどけーー！」

「ブン！ シャキンーー！」

「誰がどくもんですか！」

ズシャアア！！

「デイン王国万歳・・・ぐふつ」

だが、倒しても倒しても次々と、騎兵は襲いかかってくる。

「これじゃキリがないわ……！」

「食らえ、おれの力ああーー！」

ガシャアーン！！

「ぐせつ」

ボーレはハンマーを振り回し、重歩兵の一人に殴りかかる。重歩兵やジエネラルに有効なこの武器は重い上に命中もさせにくいが、重厚な甲冑を瞬時に打ち碎くことが可能だ。

「よし、何とか倒したぜ・・・」

だが。

「隙あり！ ファイアーリー！」

ボボボツ！

「ぐ  
熱つ！」

重歩兵の後ろに控えていた魔道士が放つたファイアーを、ボーレはまともに食らってしまった。

「くそ・・・これでも食らえ！」

ボーレは武器を手斧に持ちかえ、魔道士に向けて投げる。手斧に当たった魔道士は、そのまま倒れた。

それから、重歩兵が続く。

「重歩兵には魔法が有効・・・ウインドー！」

セネリオはウインドを連続で唱え、後ろの重歩兵をかまいたちで斬り刻む。

だが重歩兵は倒せたものの・・・。

「―― ウィンドの魔道書が・・・」

そう。今ので、ウィンドの書の魔力を全て使いつぶしてしまったのだ。魔道書は、あつとう間に崩れかかる。

「セネリオ、ここつを使え！」

ボーレが、さつき倒した魔道士から何かを拾い上げる。赤い魔道書・・・ファイアーの書だ。

「ボーレ、助かりました」

「いいじてことよー がんばろうぜー！」

2人は再び、敵に向かい合つ。

「はあつー！」

ズシャー！

「うぐ！」

オスカーは滑らかな動きで鉄の槍を操り、ソルジャーの一人にダメージを『える。

「ワユ、今だ！」

「任せて！ えいつ！」

スパン！

「・・・我が生涯に・・・後悔はない・・・」

ワユの攻撃で、ソルジャーは倒れた。オスカーがそんな彼女を見て、一言言つ。

「思ったよりも、いい動きをしてるな」

「え、そうだった？ ありがとう！」

「いえいえ。・・・生き残るためにも、がんばり!」

「うん！ オスカーさんもね！」

そんな時、近くで鉄の剣を振るつていたアイクが、オスカーに注意を呼び掛ける。

「・・・おいオスカー！ ポールアクスだぞ、気をつけろ！…」

「なにっ！？」

アイクが言った方を見ると、そちらには柄の部分をかなり長くした形の斧を担いだ戦士が、オスカーを狙っていた。

「へへへ・・・騎兵なんてオレ様の相手じゃねえ！！」

戦士はそう叫ぶと、ポールアクスと言つ斧を振りかぶり、オスカーに振り下ろしたのだ。オスカーはよけきれず、まともに食らう。

「ぐはああ！…！」

「オスカー！…！」

オスカーは、ものすごい重傷を負つていた。今にも、やられそうなほどに。

「アイ・・・ク・・・・」

「オスカー、無理するな！ 後方でキルロイに治してももうきて来い！」

「すまないな・・・」

オスカーはそう言つて、後方へ撤退した。

ポールアクスとは、騎兵と戦うことに特化した性能を持つ斧のことである。普通に使うこともできるが、馬に乗つて戦う相手に対しては、威力が跳ね上がるのだ。

「覚悟しろ・・・！」

アイクは、ポールアクスを持った戦士に向き直り、剣を振り上げる。そしてそのまま、戦士に走つていった。

「でいつ！」

アイクは、ジャンプしたままの勢いで頭上から剣を振り下ろす。しかし。

ガキイン！

その攻撃は、あつたりとポールアクスで防がれた。

「へへ・・・そんな攻撃など当たらんぞ・・・つー？」

だが、それはアイクの作戦の一つにすぎなかつた。

剣をはじかれた反動を逆に使い、アイクはそのまま一回転をして背後をとる。

「し、しまつ・・・・・！」

シャキィイン！－

「ぐお・・・・」

アイクは、戦士の胴を一文字に斬り裂いた。戦士は、倒れ込む。

「よし、何とかなったな・・・・

が・・・・。

「うぐぐ・・・まだだ・・・まだ終わってねえ！－！」

「－－？」

何といふことだらう！ 戦士は起き上がり、ポールアクスをアイクの頭上に振り下ろしたのだ。

「お前も道連れだああつ－－！」

ズバアツ！－

「が・・・ふ・・・」

ポールアクスを持った戦士は、突然倒れた。

「大将、油断しちゃダメだよ！」

倒したのは、ワゴだった。

「・・・ああ。これからも気を付ける

ひたすら敵を倒し続ける傭兵团。だが、敵の数は一向に減らない。城を囲う熱帯雨林の中から、次々と増援が送り込まれているからだ。

「・・・いつまで戦えばいいの・・・」

ティアマトは、ただひたすら斧を振るつ。倒した敵の数を数えるのは、もうやめた。

「・・・あんた、誰だ・・・？」

雨の中、とりあえず敵の一波をしのぎ切ったアイクは、一人の少女に気が付いた。

薄い紫の髪に、魔道士風の服。小柄といつよりも、華奢な少女だ。

周囲の敵は皆こちらに突撃してきたのだが、彼女だけが動かないのが不思議に思えたからだ。

「……私は旅の魔道士で……イレースと言います……この城に……あつ……」

そこまで言つて、少女はよろける。アイクはあわてて、支えてやつた。

「お、おい大丈夫か?」

「すみません……雨が……冷たくて……さ、寒い……」

見ると、イレースと書つらじい少女は震えている。どうも、顔色も良くないようだ。

「……顔色が悪いぞ。どこか悪いのか?」

イレースはそれを聞いて、少しだけアイクに笑いかける。

「……優しいんですね……」

「あなたは、どう見てもデイン兵には見えないからな。……奴らに協力しているのは、何か事情があるんじゃないかな?」

アイクの問いに、イレースは素直に答えた。

「一緒に旅をしていた商人たちと……はぐれてしまつて……雨宿りしようと思つて……ここに来たら黒い鎧の兵たちが……私のこと、クリミアの残党だろうって……」

「一。」

アイクには、思い当たることがあった。先日この城を訪ねてきたあの、行商隊だ。もしかしたら……。

イレースの話は、まだ続く。

「違うって言つても……信じてもらえなくて……だから……あの人たちの仲間になつて……あなたたちに攻撃を……しました……。『めんなさい……』

申し訳なさそうに、イレースはつづむぐ。アイクは首を横に振り、答えた。

「いや、誰だつて命は惜しいだろう。それより、商人の一団ならこの城の中に入いる。確かに武器屋がムストン、道具屋がララベルって名乗つてたが……」

アイクがそつと口を呑み、イレースは急に顔を輝かせた。

「その人たちです！ よかつた……無事だつたんですね

「俺たち傭兵団と商人たちは契約を結んでいる。あんたがあの連中の連れならもう、戦う必要はないんじゃないかな？」

「もちろんです。私も、あなたがたの仲間にしてくれ下さい」

アイクは、うなづく。

「分かった、イレース。そろそろ敵の第一波がやってきそうだし、ここは危険だ。あんたは城の中で隠れていてくれ。外の敵は、俺たちが防ぐ」

しかし、イレースはそうしない。

「いえ・・・私も戦います」

「だが、あんた体が・・・」

まだ、イレースはふらついている感じがする。アイクはそれを心配した。

イレースは、熱帯雨林の方を向いて答える。

「・・・デイン兵は、今見えている数だけではありません。森の中にもまだ・・・伏兵がいます・・・ですから・・・」

イレースが言うには、デイン兵の数はこんなもんではないというのだ。今でさえ厳しい状況のため、アイクは少し考える。

そして、結論を出した。

「・・・そつか。じゃあ悪いが頼む」

「はい・・・」

一方ワゴンは、城の通路の一角で、一人のソルジャーと戦っていた。

「クリニアの女」とか、「遅れをとるオレ様じゃねえよ」

グサッ！

「痛つ・・・あたしだってー。」

シャキイン！

「くつ、女がなめた口きいてんじゃねえぞ！」

ワコは、かなり苦戦していた。槍に對して剣は不利といつのもあるが、ワコの場合非力なのだ。鎧をまとったソルジャーにも、あまり大きなダメージは与えられない。

「あたし・・・」となどでやられちゃうのかな・・・

と、その時だ。敵ソルジャーの頭上で、黄色い光が炸裂したのは。

「サンダーーー！」

ピシヤアーンーー！

「ぐおああーー！」

ソルジャーは突如頭上からの落雷のようなものを食らひ、その場にひざまづく。

「い、今のは一体・・・？」

ワユが声がした方を見ると、そこには薄紫の髪をした少女・・・イ  
レースが、黄色い魔道書を片手に立っていた。

「・・・大丈夫でしたか？」

「あ、うん。あたしは平氣だよ。助けてくれてありがとうねー。」

「いえ・・・」

「ぐ・・・ぐそ・・・」

サンダーの魔法を食らって倒れたソルジャーは、憤怒の田でイレー  
スを睨む。

「やつぱり、裏切りやがったな・・・クリミアの女め・・・！」

そして、手にした手槍をイレースめがけて投げつける。しかし・・・

「えいっ！」

キン！ カランカラン・・・

アイクが、その手槍を剣で叩き落とした。

「・・・」

「な、なにい・・・」

アイクの後ろで、イレースは再び魔道書を開く。

「これで、終わらせます……サンダー！」

アーティスト・アーティスト・アーティスト・アーティスト

「それもあんなの……。」

先ほどイレースに因縁を付けていたソルジャーは、そのイレースによつて倒されたのだった。

その後も何度も戦つたが、数は一向に減らない。アイク達傭兵团にも、疲労が溜まつてきていた。

「リライブ！」

キルロイは、青い宝玉がはめられた杖をワユにかざす。すると、ライブよりも大きな光がワユの体を包み込み、かなり深い傷が一瞬で消え去ったのだ。

リライブとは、ライブよりも一段上をゆく回復魔法だ。強力な癒しの力により、怪我を大幅に回復させることができる。

リライブの杖は、キルロイがエリンシアからもらい受けたものである。

「キルロイさん、ありがとー。」

「いいえ、ワゴセとも、無理しないでね」

「ちくしょうつ・・・なんて敵の数なんだよーー！」

ボーレは、東側で苦戦していた。重歩兵たちの後ろから、アーチャーや魔道士が攻撃をしてくる。ボーレは手持ちのきずぐすりで怪我を治すので、手一杯だ。

「敵の数がどのくらいか・・・全く見当がつきません・・・」

セネリオも、疲れた顔でそりつぶやく。

「はあつはあつ・・・つ・・・まだ兵がいるのか・・・！」

アイクは、辺りを見渡してみる。無数のティン兵が、次々との城に乗り込んでくる様子が分かつた。

「のままではまずいー！

「ハアツ・・・全員、城内に戻れ！ 繰り返す！ 一旦、城内へ戻るんだーー！」

もはや、これほどの数では辺りに分散して戦つても厳しい。城の正面玄関に全兵力を集中し、敵を抑えるしか方法はない。

アイクの命令を聞き、全員が玄関の中へと退避していく。

「みんな・・・よく聞いてくれ。俺たちは今、全滅の危機にひんじている。このまま打つて出でていっては、確実にやられるだろう・・・。それを避けるためにも、ここで一丸となつてとにかく、玄関を守るんだ」

全員の輪の中心で、アイクはそつ全員に告げる。

「もはや、後はない。何が何でも、ここを守り切るんだ。絶対に敵を、中に入れるなーー！」

## 8章 ～絶望をしても希望～ 後編（後書き）

追い詰められた傭兵団・・・

彼らの運命やいかに！

なお、次回は他のFE作品より、ちょっとしたゲストが登場予定です、お楽しみに

## 西方からの旅人（前書き）

グレイル傭兵団が待機するゲバル城に、突如テイン王国軍の決死隊が襲いかかる。

アイク達は一致団結して抗戦するが、テイン軍の圧倒的な戦力の前に戦線の後退を余儀なくされていた。

その頃、ガリア王国の西に広がるレグス海に、テリウス大陸を目指す一隻の密航船があつた。

## 西方からの旅人

「レグス海」

昇る太陽をバックに輝く鏡のような海面に、一隻の帆船が浮かんでいた。

旗は全く掲げておらず、どこにも国名などは書かれててもいない。密航船である。

密航船が進んでいる進路は、ガリア王国の西海岸を目指していた。

「ふ〜、今日もいい天気だな！」

一人の男が、船室から出でてくる。

青い髪をツンツンに立たせ、頭にひもを巻き、切れ長の目をした人物だ。体格はそれほど大柄ではないが、戦士らしい雰囲気を醸し出している。

「全く・・・この地方は暑いぜ」

そつぼやきながらも、どこか嬉しそうである。男は甲板に立ち、一人で体操始めた。

そこへ、今度は女が船室から出でてくる。髪から服から全てが赤い、小柄な女だ。

「ジョイクー！」飯できたわよ！』

ジョイクと呼ばれた青い髪の男は振り返るや否や、すぐに手を振る。

「そりゃ、アンナ、今すぐ行くからなー！」

そして、2人は再び船室の中へ入つていった。

「アンナ、いつもうまい飯ありがとうなー！」

アンナが作る食事は、ジョイクにとって何事にも代えがたいおいしさだ。

「そんな・・・あなたが喜んでくれるなら私もうれしいよ？」

「ははっ、参ったぜ！」つや

そして、2人で笑い合つ。平和なひとときだ。

2人は、世界中を旅する恋人同士だ。様々な大陸を旅してまわっている。

テリウス大陸のはるか西方、アカネイア大陸から、2人はやつてきたのだ。

アカネイア大陸の盟主である神聖アカネイア帝国の、ノルダの町出身のアンナと、グルニア王国の元戦車兵、ジェイク。ひょんなことで出会った2人は、アカネイア大陸で巻き起こった二度の戦争が終したのち、世界各地を回る旅に出ることを決めたのだった。

「なあアンナ、俺たちが旅に出てから、どのくらい経ったんだろうな？」

おいしそうに朝食をとりながら、ジェイクはアンナに尋ねる。するとアンナは、右の人差し指をあごに当てる考える。

「うーん……2ヶ月くらいじゃないかな？ ほら、英雄戦争が終わつたのが2月の中頃だつたじゃない？」

「なるほど、もうそんなになるんだな」

ジェイクは、船室の隅に積んである、木と鉄を組み合わせ、車輪をつけた機械のようなものを見る。

「俺の相棒も、乗れなくなつちまつたしな……これから行くテリウス大陸には、油がとれる木の実があればいいんだが」

この機械は暗黒戦争の折、ジェイクがグルニア軍に志願した時から使っていた「シユーター」と呼ばれる戦車のような機械である。暗

黒戦争ではグルニア軍だった時も、マルス王子率いるアカネイア同盟軍に寝返った後も、このショーターを使って大活躍したのだった。

だが、英雄戦争が勃発してから、ショーターの車輪を動かすための油がとれる木の実が、全く成らなくなってしまったのだった。そのため、ショーターは動かせず、動けないただの砲台と化した。

ジェイクは泣く泣くショーターをあきらめ、斧と弓を手にすることにしたのだった。恋人のアンナは大陸各地で店を開きつつ木の実を手に入れようとがんばってくれたが、それもかなわなかつた。

「アンナ・・・お前にはいつも苦労をかけてすまなかつたな」

食事を終えて、ジェイクはそう言ひ。

「そんなこと言わないでよ。私はいつも、ジェイクの味方よ？」

アンナは明るく答える。その明るさが、ジェイクの元気のもとであつた。

「ところで俺たちは、テリウス大陸のどこに着く予定になつてるんだ？」

ジェイクが聞くと、アンナは世界地図を広げる。この地図は本来普通のルートでは手に入らないものだ。秘密の店を開いていたアンナだからこそ、手に入れられたのだ。

「そうね～・・・今いる場所は、ガリア王国つて国の西側のこの・・・レグス海のこの辺りのはずよ。このまま行けば、ガリア王国の西海岸に上陸できるわ」

「そりか、分かったよ。今度の大陸でこそ、いい商売できるといよいな。秘密を守りつつ繁盛・・・難しいな、参ったぜ」

「そうね。秘密の店、繁盛させたいし・・・油がとれる木の実も、見つかるといいわね！」

「ああ、こいつは俺の相棒だからな！」

そう言いつつシユーターを見るジェイクに、アンナは横目を使う。「え～シヨック～・・・私のを差し置いてシユーターの方が大事だなんて・・・」

ジェイクはあわてて首を横に振る。

「うわわ、もちろん君の方が大事に決まってるさーーー！」

「本当・・・？」

「ああ、大好きだよ」

アンナは顔を赤く染め、うなづく。

「私も・・・大好き！」

一組の恋人を乗せた密航船は、ガリアの西海岸を目指して順調に航海を続ける・・・。

## 西方からの旅人（後書き）

「F.E新・紋章の謎」より、ジェイクとアンナを登場させました  
2人のことによく知らないという方は、カミューさんの小説「新・紋  
章の謎 本編」を参考にどうぞ

## ガリアの戦士達（前書き）

ゲバル城を強襲した、カムラ率いる『テイン王國軍の決死隊。

アイク達は彼らに応戦するものの、負けはすでに見えていた。グレイル傭兵団は一旦城の玄関まで戦線を後退させ、そこで彼らと戦うこととした。

だが・・・もはや彼らの命運は、ぬきかけていた・・・。

## ガリアの戦士達

「ゲバル城」

「……ハアツ……ハアツ……畜生！ まだやられてたまるか・  
・・・！」

豪雨の中、アイクはたった一人で玄関前に立ち、ひたすら剣を振るつていた。

アイク以外の団員は全員重傷を負い、現在城の中に避難している。もはやまともに戦えるのは、アイクしか残っていなかつた。

「弱小国の取るに足らぬ傭兵团など、これでおしまいだ！」

ヒュン！ サツ！

「ぐつ・・・・こんなところでやられる訳には・・・・」

ザシユ！ - !

戦士が振るう鋼の斧をすれすれでかわし、剣の切つ先を胸に突き立てる。

「背後が隙だらけだぜえ！ - !」

グサツ――

「つぐつ・・・?」

アイクが背を向けた隙に、重歩兵が鋼の槍でアイクの左肩を突き刺したのだ。肩から大量の血液が流れ出し、足元に雨と混ざった血だまりができる。

「畜生・・・!」

動かなくなつた左腕をあきらめ、リガルソードを右手に重歩兵に斬りかかる。リガルソードは重歩兵のまとう甲冑を斬り裂き、重歩兵は倒れた。

「お兄ちやん――」

敵の波を何とかしのいだ時だった。アイクのすぐ後ろ、玄関の中から、ミストの声が聞こえる。アイクは驚いて振り返った。

「ミストー・出でくるんじやな・・・」

「いやつ――」

アイクの注意をとぎり、ミストはアイクの腰に抱きつく。

「ミスト・・・?」

「・・・もう、逃げられないんでしょ? わたしたち・・・」

・・死ぬんでしょ？」

アイクは首を横に振る。

「バカを言つた！ どんなことをしても、お前とヨファだけは逃がしてやるーー！」こを抜けだしたら、2人でガリア王宮にいるエリンシア姫を頼つて……」

「わたし、どこにも行かない。お兄ちゃんとみんなと一緒に残る」

「・・・」

再びミストは、兄の言葉をわざわざ。そして、雨に濡れ、傷だらけの兄の顔を見上げる。

「いっしょに死ぬのは、怖くないよ？ お母さんと・・・お父さんにも・・・命えるし。だから・・・」

ミストは、泣いていなかつた。笑顔でもなかつた。

「だから・・・お願ひだから・・・逃げるだなんて言わないで・・・ね？」

ミストからの、切実な願いだ。妹の純粋な瞳を見て、アイクは少し考える。そして、結論を言い渡す。

「・・・分かった。だったら、ここにこい」

それを聞いて、ミストは初めて表情を動かす。心から嬉しそうに、喜ぶ。

「ありがと、お兄ちゃん」

しかし・・・アイクの出した結論にはまだ続きがあった。

「・・・けどな、母さんたまには会えないぞ」

「え?」

不思議そうに首をかしげる妹に、理由を言い渡す。

「お前は俺が守る。絶対に、死なせはせん」

「そう、アイクは・・・

『・・・後の・・・』とは・・・すべて・・・お前に・・・まかせたぞ・・・』

あの夜・・・

『・・・みんなを・・・//ストを・・・』

父と、約束したのだ。

『待て・・・ダメだ、そんなこと言つなーー。もつすぐ、灯りが見える・・・』

傭兵团の団長として、仲間を・・・そして、//ストの命を守る」とを。

『あと少し・・・！　あと少しで・・・・・・』

誰も、死なせてはいけないんだ・・・。もう、こんな悲しみを繰り返してはならない。

「親父と・・・約束したんだ」

そう言って、アイクは再び戦場を向く。

「お兄ちゃん……」

「ハアツ・・・ハアツ・・・」

左腕が動かないアイクは、それでもリガルソードを手にデイン兵を何人も倒し続ける。そんな彼の目の前に、重厚な黒甲冑に身を包み、ショートスピアを手にした男が立っていた。

決死隊の隊長、カムラである。

「・・・たつたこれだけの人数でここまで耐え抜くとは・・・敵ながら見事。だか・・・それももつ终わりだ」

「くつ・・・」

アイクはふらふらになりつつ、剣を構える。そんな彼に対し、カムラはショートスピアを振り上げ、命令を下す。

「全員、かれ！ 傭兵団長を討伐せよーー！」

命令とともに、アイクを包囲していたティン兵たちは、その包囲円を崩して一斉にアイクに襲いかかる。

だが、それでもアイクは逃げず、抵抗する。

(こんなところで・・・負けてたまるか・・・！)

そう思った。いや、思つたのではない。そう、叫んでいたのだ。

狂つたように、アイクはリガルソードを振り続ける。居合斬りで戦士を斬り飛ばし、斬りかかってきた剣士にはカウンターで反撃し、ソルジヤーを鎧ごと叩き割り、魔道士をまとめてなぎ払う。

だが、デイン兵の圧倒的な戦力の前に、アイクは押されてきていた。

（俺は・・・負けない！俺がやられたら、城に侵入されてみんな殺される・・・そんなこと、絶対させん！！）

だ。  
 気合いや根性で、アイクは戦い続ける。疲労などとつぐに限界を超  
 え、全身の傷も深く、命の危険があるほどなのは誰の目にも明らか

それでも、倒れない！

（俺が戦うのは、みんなのためだ。傷ついたみんなが、城の中にいる・・・だったら俺は、守るべきもののために・・・戦うだけだ！）

その時だった。戦線の後方から、悲鳴が響き渡つたのは。

「ぐ、ぐわああつーーー？」

「な、何だ・・・一体・・・・？」

カムラは、困惑して周囲を見渡す。周りのデイン兵も、アイクへの攻撃そつちのけとなつた。

「ぐえあーーー！」

「は、半獸・・・・」

悲鳴は、次々とこじりこじりに近付きつつ聞こえてくる。地面を疾走する足音のよつなものも聞こえる。

突如、アイクを包囲していたデイン兵の一人が、背後から水色の毛並みをした虎に襲われる。さらに、その横にいたデイン兵は、オレンジ色で首にリボンを付けた猫に襲われた。

それからは、あつという間だった。猫と虎、2頭の牙獸は、またたく間にカムラ以外のデイン兵を掃討してしまつたのだ。

「・・・ガリアの半獸・・・つー？　なんと・・・なんと圧倒的な力・・・」

カムラは、そうつぶやく。

「これが・・・これがラグズの力が・・・」

アイクもまた、ラグズの2人の力に驚いていた。

カムラの田の前に、オレンジ色の猫が立つ。カムラは震えながらシヨートスピアを突き出すが、猫は難なくそれを避けて見せる。

「フー――ツ！！」

猫は尻尾を立たせ、カムラを威嚇するかのようなしぐさをした直後・

バリバリバリ！――ザツシャ――！

カムラの甲冑に取り付き、甲冑ごとズタズタに切り裂いてしまった。

「・・・・ぐ・・・・は・・・・化け物め・・・・」

そして、カムラは倒れた・・・。

カムラが倒れたのち、猫と虎、2人のラグズをゲバル城に招き入れる。

瀕死の重傷を負っていたアイクはそのままキルロイに治療をされたが、キルロイ自身精神力を使いはたしていたため、治癒力はあまりなかった。仕方なくアイクは、応急処置で済ませることにした。

だが、左腕はうまく動かなくなっていた。障害が残ってしまったのだ。

「さつそくだが、あんたたちが王宮からの使いか?」

全身包帯でぐるぐる巻きになつたアイクは、杖をつきつつふらふらと玄関に現れる。そんないでたちでも、口調ははつきりしていた。

「ソうだ。ガリアの戦士モウディだ。蒼い髪の、オまえがアイク、ソうだろ?」

先ほど水色の虎に化身していた、大柄で水色の髪をしたラグズが、そう返す。発音があまり上手ではないが、言葉は通じていた。

「確かに俺がアイクだ。さつきは、助かつた。礼を言ひ

アイクがそう答えると、モウディは嬉しそうな表情になる。

「ライは言った。アイクは悪くない男ぞ者だと。モウディたちは、キツと仲良くなるだろ?」

しかし、不機嫌そうにしていた者がいた。モウディの後ろにいた人物 先ほどオレンジ色の毛並みをした猫に化身していた、オレンジ髪の小柄な少女のラグズである。

「・・・そんなこと、まだ分からない。こいつら【ベオク】は、表と裏、2つの顔を使い分けるよつだからな」

それを聞いてモウ「トイは、少女を戒めるよつて呼ぶ。

「レテー。」

ビーハーリの少女は、レテヒトヒハリヒ。アイクは、レテに聞く。

「ベオク……？ 何の」とだ？』

するヒレテは、相変わらず不機嫌ヒツヒ答える。

「お前たちのことだ。我々、力ある者を【ワグズ】、お前たち能なしを【ベオク】と呼ぶ」

「……何だと？」

アイクの問いかに答える前に、モウ「トイがレテに反論した。

「レテ！ オまえがヨクない。王は禁じている。ベオクとの争いを！」

しかし、レテも食い下がらない。

「だが、ほとんどのベオクは我らをあの侮辱的な名前で呼び、蔑んだ目で見る！ それが友好を築こうとする態度か！？」

そのやり取りを聞いていて、アイクは思つたことがあった。

以前、ライのことを「半獣」と呼んだ時の、彼の反応である。おや、『半獣』という呼び方はラグズに対する差別用語なのだろう。

知らなかつたとはいへ、ライにはつらい思いをさせてしまったのだ。  
・・。

「・・・確かに俺たちは、『』く普通にその呼び名を使つていた。それがよくない言葉などと、少し考えれば分かりそうなものなのに・・・それ以外の呼び名を知らなかつたんだ。すまん」

アイクはそう謝つたが、レテの憤りは全く収まらない。

「知らなかつた？・・・バカにされたものだ。我らに隸属を強いたお前たちは、そうやって安易に忘れる。だが、我らは忘れない。お前たちに受けた仕打ちを・・・王が何とおっしゃうつとも、私はお前たちを信用しない」

どうやら、過去にはベオクが、ラグズに対してひどい仕打ちをしてきたようだ。そして、それを忘れられないほどに、彼らの心にトラウマを植え付けてしまったのだ。

それを乗り越えてお互いが信頼しあえるようになるのは、とても難しいことなのかもしない・・・。

「・・・で？ そういう恨み事を聞かせるために来たんですか？  
ハハツ、半獣の考え方などだ」

突然、先ほどまで黙つていたセネリオが、口を開いたのだ。ラグズ

の2人に向かって、暴言を。

「貴様つ！ その呼び名を使う者は、我々ガリアの敵だ！！」

「ハ、ハ、ハ、半獸・・・敵・・・『いつ、敵・・・！』

当然ながら、ラグズ達はセネリオに怒りを覚える。しかしセネリオは、それを涼しい顔で受け止める。

「自尊心だけは人間並み。そうでしょう？ 毛だらけの醜い半獣ども！！」

「グワオオオオオオ！！」

怒りに駆られたモウディは、全身からピンクの光を出す。光が収まつた時、そこには一頭の水色の毛並みの虎が立っていた。

「モウディ、やってしまえ！！」

レテが、モウディに指示を出す。セネリオは、静かにその場に立っていた。

「グワオオオオオオ！！！」

セネリオにモウディの鋭い爪が襲いかかるとした、その時。

何と、アイクがセネリオの前に立ち、攻撃を代わりに受け止めたのだ。傷だらけの体で。

「つ・・！」

「！！」

「ア・・・イク・・・」

これには、獸牙族の2人も驚いた。モウディはすぐに化身を解き、アイクの元に駆け寄る。

「・・・・・アイク、スマない・・・・・オまえに怪我をさせて・・・モウディは・・・」

心配するモウディに、アイクは弱々しく答える。

「モウディ、こんな怪我、大したことはない。大丈夫だ・・・」

しかし、アイクの後ろでセネリオは、怒りの形相に顔を歪めていた。

「獣の分際で・・・！ ファイア・・・」

「やめろ！ セネリオ！！」

セネリオがファイアを唱えようとしていたのを、アイクは止める。

セネリオは、アイクに抗議をする。

「どうして止めるんですか！？ こいつは、あなたを傷つけた！ 許すわけにはいかな・・・」

「お前が挑発しなければ、いつまならなかつた。違つか？」

抗議をせえぎつて、アイクは最もなことを言つ。アイクに諭されたセネリオは、急におとなしくなる。

「……すみません……」

アイクは杖につかまりながら立ちあがり、獣牙族の2人に向き合つ。

「モウディ、レテ。団員の無礼は謝る。セネリオを許してやつてくれ

れ」

すると、モウディとレテも、怒りをすつかり静めたよつだ。

「アイクはモウディを許した。だからモウディも、セネリオを許す。誰も怒つてはイない」

「……こちらも、非礼は詫びよつ。自分たちの使命を忘れるとは。  
…とんだ失態だ」

「使命……？」

レテの言つた使命と言つものが何かと、アイクは疑問に思つ。

「王が、傭兵団を招かれた。我らは、お前たちをガリア王宮に案内するため来たんだ」

一方、話は変わって・・・

「レグス海」

ジェイクとアンナを乗せた密航船は、順調にガリア王国西海岸を曰指していた。

ある日の曇下がり、見張り台に昇っていたアンナが、歓声を上げる。

「り、陸だーー！ ジェイク、陸が見えたよーー！」

それを聞いて、船室からジェイクが飛び出してくる。

「本当か！？ すぐそっちに行くからー！」

ジェイクはいそいそと見張り台に上り、望遠鏡をのぞきこむ。

「つお、本当じゃないか！ テリウス大陸に、無事到着だなー！」

「うん！ 明日の午前には、海岸に着くはずよ」

2人は興奮した様子で、陸を何度も見る。

無理もない。2ヶ月間もずっと、船の上だったから。

「よし、そつと決まれば下船準備だ！ 今から始めるぜー！」

「あ～ジエイクつてば～、まだ早いよ～！」

2人は大急ぎで、船室に入つていったのだった・・・。

## ガリアの戦士達（後書き）

どうにかデイン軍を退けたアイク達。

彼らの前に、獣牙族の戦士レテとモウティはやつてきた。

とうとう、ガリア王宮から許しが出たのだ。

果たしてガリア王国は、クリミア再興に力を貸してくれるのか？

そして、アイクの左腕は、無事に治るのだろうか・・・。

## 9章 ～ガリアにて～ 前編（前書き）

ゲバル城でテイン軍をしのいだアイク達だったが、アイクはかなりの重傷を負ってしまった。

左手が、動かなくなってしまったのだ。今後の戦いに支障をきたすほどの負傷である。

グレイル傭兵团は、ガリアの戦士であるレテ、モウディとともに、ガリア王宮を目指すべく、ガリア王国の西海岸沿いの道を進むこととなつた。

一方、アカネイア大陸からの密航者であるジョイクとアンナは、いよいよガリアに上陸する段階まできていた。

「タタナ海岸」

「ジョイク、この辺りに接岸すればいいんじゃないかな？ 海岸だし」

「そうだな。だが、ここはちょっと潮の流れが急だ。別の場所の方がいいと思うぜ」

2人は、接岸の準備に取り掛かっていた。もつすでに、陸に下りても大丈夫な装備をしている。

見知らぬ土地に上陸するのだ。当然、戦える装備である。

そんな彼らの船の後ろに、海賊船が停泊している。海賊船の首領は、2人の乗る船を見て陽気な声を上げる。

「俺たちや海の、ならずもの～ おいおい、野郎ども！ あの船を襲つてやるうぜ～！」

「了解しやした、ネダタの兄い！」

海賊船からは次々と小型ボートが出され、たくさん海賊たちが2人の乗る船を目指す。

「うひほひほ～」

「ひやつほつほ～」

「俺たちや海の、なりすもの～」

「獣の国でも何のもの～」

「斧を振るつてひと稼ぎ～」

海賊たちの陽気な歌が、海上を不気味に渡る・・・。

2人にも、沖合から聞こえてくる海賊たちの歌声が聞こえてきた。ふとそちらを見ると、ものすごい数のボートが、海賊たちを乗せてこちらにやってきている。

「あれは・・・海賊!~?」

「まことにアンナ・・・あれば確実に、俺たちのことを狙っている

「-」

今から接岸して逃げようとも、もう時間がない。すぐそこまで、迫つてきているのだ。

「くそつ、もう間に合わないか! アンナ、俺はあいつらを食こ止めるから、お前は船室に・・・」

「こやつ!-!」

アンナは、ジェイクにすがりつく。

「私も、戦える。だから、一緒に居させて・・・」

「・・・分かった。それなら、ここにいてくれ」

大急ぎでジェイクは、船室からシューターを引っ張り出してきた。車輪を動かす燃料の油はないが、矢を撃ちだすことは出来る。

「来たな、海賊・・・久々にこいつの力、見せてやるぜ！ 食らえ、ファイアーガン！！」

シューターの弦に巨大な火矢ファイアーガンをあてがい、一艘のボートに狙いを付けながら弦をレバーで引き・・・一気にファイアーガンを放つ。

ブッショーン！！

ファイアーガンは潮風を切りつつ、正確に敵のボートに命中する。ボートが、炎上する。

「よつしゃ！ いつちょ上がり！」

ジェイクはそう言つと、次のファイアーガンを弦にあてがつた。

「私も・・・戦えるわ！」

アンナも後部甲板にやってきて、一冊の魔道書を取り出す。取り出

したのは、黒い魔道書。

「闇よ・・・理を飲み込み、無に帰せよ・・・フェンリル!—」

アンナが叫びながら手を突き出すと、先ほどとは別のボートの周辺の空間が、突如歪む。

歪んだ空間は闇に包まれ、その闇が消えると・・・ボートの上に乗っていた海賊は、そのまま倒れてしまった。

「アンナ、お前もなかなかやるぜ。まあ、最初お前が『闇魔法を勉強する』って言つた時は、さすがに心配したけどな」

「大丈夫よ。私は仕事柄、いろいろなこと経験してるもの

闇魔法とは、光魔法や自然の力を操る理魔法とは異なる種類の魔法である。

「闇」という、人間にとつて害悪となる力を魔力に乗せ、相手の生命力を奪う魔法だ。だが当然、その害悪は使用者にも及ぶ。きわめて危険な種類の魔法である。

闇に取り込まれてしまつた者も、アンナは知つてゐる。アカネイア大陸で起こつた二度の戦争の元凶であるガーネフ、そのガーネフにそそのかされたハーディン・・・ビシリも、心中にできた隙を、闇に飲まれたのだ。

そのため、使用できる人間はごくわずかな者に限られる。すなわち生まれが元々特別か、強い精神力を持つ者のみだ。

アンナはアカネイア大陸で、闇魔法について独自に研究していたのである。

ちょうど同じころ、海岸でも戦闘が起っていた。アイク達グレイル傭兵団と、ガリア領内に潜伏していた別のティン軍決死隊の戦いである。

「アイク、左腕を負傷していますが、戦うことは出来ますか？」

セネリオが、不安そうにアイクの左腕を見ながら聞く。

「ああ、動きにぐくはなつてているが利き腕ではないし、問題はない」

アイクはそう答えたが、セネリオはまだ不安そうだ。

「・・・無理をしないでくださいね？ あなたにもしものことがあたら、僕は・・・」

「セネリオ、俺は大丈夫だ。無茶はしない」

「そうですか・・・分かりました」

そして、セネリオは近付いてきた敵ソルジャーに向かってウインドを飛ばす。傷ついたソルジャーは、アイクがきつちりとどめを刺した。

近くの敵兵をせん滅してから、アイクは団員に進軍停止命令をかける。

「みんな、待ってくれ。レテが言つたのはこの先、道は砂浜部分と林間道の二つに分かれらるらしい。そこで、部隊を一分したい」

「砂浜は騎馬系や重歩兵は脚を取りられやすく、行動に支障が出る。敵もそのことを考慮し、重歩兵を林間道に多く配置しているようだ」

レテが、アイクの言葉を付け足す。ティアマートはそれを元に、考えをまとめた。

「だったら、私とオスカーは騎馬系だから、林間道を進んだ方がいいわよね。敵に重歩兵がいるなら、魔道士も一人くらいは必要なはず・・・」

すると、団員の方から、か細い声が聞こえた。イレースだ。

「あ・・・でしたら、私がそちらの方の部隊に加わります・・・。雷の魔法、使えますから・・・」

イレースはムストンら行商団の一員だが、彼らの中では唯一戦うことができる。そのため、傭兵团と一緒に実戦の方にも加わっているのだ。

「よし、なら林間道を進む部隊はこの3人でいいな。残りは全員、海岸線を進むんだ！ レテ、モウディも、こっちを頼む

「了解だ」

「ま力してくれ、アイク！」

・・・とその時だった。傭兵団の後方、行商団の方から、ミストの声が聞こえてきたのは。

「お兄ちゃん！！」

「ミストー、お前とヨフアは下がつている。絶対、前に出るなよー。」

アイクは、ミストにそう注意する。これから戦いが始まるのだ。危険があつてはならない。

だがミストは、下がらない。

「ね、お兄ちゃん！ 私も・・・一緒に戦う」

アイクは、耳を疑つた。

「何!? そんなのダメに決まつてゐだらうー、それに、お前は何の武器も使えないんだし」

「これがあるもん!」

アイクの言葉をさえぎつてミストが取り出したのは、赤い玉が取り付けられた杖。

「ライブの杖・・・?」

「キルロイに無理を言つて、教えてもらつてたの。ちよびつとだけ  
ど傷の回復、できるよ」

アイクを始めとする団員全員が、一斉にキルロイの方を向く。キル  
ロイはばつが悪そうにうなづいた。

「『めんねアイク。ミストがどうしてもつて言つて……それで…  
・』

アイクは、ため息をつく。そして、ミストにもう一度説得を試みた。  
「……ちよびつと程度で戦場に出す訳にはいか……ん？」

また、後方からもう一人が飛び出してきた。薄縁の髪の少年、ヨフ  
アだ。ボーレがそれを見て、駆けつける。

「いい加減にしろ、このチビ！」

ボーレはヨフアをつかもうとしたが、ヨフアはそれをよけた。

「ぼくも、いつしょに戦う！『』が使えるもん！」

そう言つて、こちらは普通よりもかなり小さめのサイズの『』を取り  
出し、ボーレに見せる。だがボーレは、全く信用しない。

「ほつ、それは初耳だなあ？ 嘘も休み休み言えよーーー！」

「つそじやないー！」

喧嘩に発展しそうな兄弟の間に、ミストの声が流れる。

「うそ、うそじゃない」

ボーレとアイクは、驚いた。

「ミストー？」

「どうこうことだ？」

ミストは、ヨーファの持つ弓を見ながら話しかける。ヨーファも顔を明るくした。

「ヨーファ、いつも弓の練習してたけど、結構、うまいやね？」

「だよね？」

アイクは、不思議に思った。

「この間に弓の扱いなんて覚えたんだ？」

アイクたち傭兵団のメンバーはみんな知らないことだが、ヨーファはシノンに弓の扱いを教えてもらつべく、弟子入りしていたのだ。

ヨーファが持つていてる弓も、シノンがヨーファの体格にぴったり合つよう、オーダーメイドで作った特注品である。名付けて『ヨーファの弓』。名前はあまりにもそのままだが、ひねくれ者のシノンが考えた、彼ららしい名前ともいえる。

アイクに聞かれ、ヨファはしどりもどりになる。

「え、えーっと……あの、自然にできるよ!になつて……」

シノンは、「絶対に、このオレが『』を教えただなんて言つなよ?『』のことは、秘密だからな?」と、ヨファに約束していたのだった。だから、そのことを言えるわけがない。

ボーレはそれを聞き、再び怒った。

「嘘ついてんじゃねーぞ、このくそチビ! 武器つてのはな、基本も教えてもらわずに使えるもんじゃねーんだよ!」

「だつたら、ぼく天才だもん! 一人でできるよ!になつたもん!」

「――の……」

ヨファのハッタリに、ボーレは「ぶしを固め、殴りかかる!とする。だが。

「ボーレの分からずや……」

「分からずや……」

ミストとヨファは、大声でボーレをののしる。泣きやうな顔で。

「……」

何も言い返せなくなつたボーレに代わり、アイクが口を出した。

「お前たち、いい加減に……」

「もう、嫌なんだもん……」

「……？」

ミストが、アイクの言葉をうなぎく。ミストは泣いていた。

「・・・ヨフアと2人で・・・お兄ちゃん達のこと心配しながら、待ってるだけなんて・・・それなら、一緒にいる方がいい！」

「……」

アイクは、考え込んでしまう。ボーレも、ヨフアに聞く。

「お前も、そうなのか？」

「うん、絶対、いつしょに行く！」

「はあ・・・どうする?」新団長

聞かれたアイクは、もう考えをまとめたようだ。

「・・・分かった。2人とも連れて行こう。側にいた方が、守りやすいくて利点もあるからな」

さつきまで泣いていたミストとヨフアは、もつまんで顔を明るくしていた。

「ほんとー?」

「ぼく、がんばるねー!」

ボーレは、困り顔で頭をかく。

「つたく、しうがねーな。ヨフア、なるべくおれの傍らから離れるなよ?」

「うんー。」

「あ、やけに、いい返事じやねえか。どうこう風の吹き回しだ?」

ヨフアは、とても嬉しそうに答える。

「ぼくが近くにいて、ボーレを守るからね。だから安心していいよ」

「・・・いや、そりゃ逆だつてー!」

ミストとヨフアが戦闘部隊に加わったことで、もう一度進撃の作戦の変更をするアイク。そこへ、海岸の方の偵察に出でていたワユが戻ってきた。

「大将ー! 海岸線の向こうの方に、民家が一軒建つてたよー。それと、沖合の方でも戦いが起ころてるみたい」

「何、クリニアヒトインの、海戦が起ころてこるのか?」

「うん。見た感じ、海賊船と密航船の戦いみたいだよ。あと、この海岸にもその海賊船から海賊が向かってきてるみたい」

アイクと一緒に話を聞いていたセネリオが、それに関して口を開く。

「密航船と海賊船……どちらにせよ、関わり合いにならない方がいいかもしれません……しかし、海賊がこちらに向かってきているのでしたら、向こうにあると云う一軒の民家が襲われるかもしれませんね」

アイクは、結論を出す。

「分かった……なら、これより傭兵团を、海岸制圧部隊と林間進撃部隊に一分する。海岸制圧部隊に当たつた者は、全速力で民家の防衛、及び海賊の撃破を優先してくれ！ 林間進撃部隊は、ただちにこの先のタタナ砦を攻め、デイン軍決死隊のせん滅を頼む！」

海岸制圧部隊に配置されたのは、ボーレ、ワゴ、ヨファ、セネリオ、ミストの5人に、ガリアの戦士レテ、モウディを加えた7人。

林間進撃部隊は、アイク、ティアマト、オスカー、イレース、キルロイの5人。

互いに別行動をとり、一気にタタナ海岸及びタタナ砦を制圧する作戦である。

「じゃあ、準備はいいな？ ……グレイル傭兵团、出撃！？」

## 9章 ～ガリアにて～ 前編（後書き）

更新、大変長らくお待たせいたしました。

読者の方が不評でした、「下書き中」というものは、なるべくなくすようにしていきたいと考えています。

どうか、これからもよろしくお願ひします。

## 9章 ～ガリアにて～ 後編（前書き）

ガリア王国の西に広がるタタナ海岸。

その沖合で、アンナとジョイクの2人は海賊に襲われてしまう。彼らは武器を手に、海賊に対して徹底抗戦の構えを取った。

一方アイク達グレイル傭兵団も、タタナ海岸にあるタタナ砦の前でデイン軍決死隊と遭遇。ミストとヨフアの2人も戦闘部隊に加わり、デイン軍との戦闘に入する。

南国の美しい砂浜は戦場となり、無残にも血で染められていくのだ  
つた・・・。

タタナ海岸・林間

グレイル傭兵団の突撃に、待ち伏せしていたデイン軍決死隊も応戦する。先陣を切つて飛び出したのは、緑の騎士オスカーだ。

「デイン軍の蛮行を、私は許さない！ 私の槍の鎧となれ！」

オスカーは、鉄の槍を手に、こちらに向かってきたソルジャーを攻撃する。

「ぐつ・・・！」

ソルジャーも手にした槍で反撃するが、オスカーはすぐに馬を後退させてよける。そこへ、間を割つて入ってきたのはアイクだ。

「今は、負ける気がしない！！」

アイクは動かない左腕をかばいつつも、ソルジャーに止めを刺す。

「よくもやりやがったな！」

倒したソルジャーの後ろから、手槍を投げつけようとする別のソルジャーがいた。しかし・・・。

「サンダー！」

「ピシャーンー！」

「ぐげえ！？」

手槍を投げつける寸前に、イレースが雷魔法のサンダーを放つ。サンダーが命中したソルジャーは、体が痺れて動けない。そこを見計らって、ティアマトが斧を構えつつソルジャーに向かう。

「とびめよ！」

ズシャアアツ！！

ソルジャーは、倒れた。

「タタナ砦」

決死隊が制圧しているタタナ砦では、この決死隊の隊長であるコタフが、戦況の報告を受けていた。

「コタフ隊長、報告します！先日ゲバル城にて、カムラ隊長を討ち取ったと思われる傭兵団と、ここから東の地点で戦闘が始まりました。敵は作戦地点に入つた模様です！また、傭兵団は部隊を二分し、一方は海岸方面、もう一方はこの砦に続く林道へ進めているようです」

「やつが、『苦労だつた

初老のハルバー・ディアであるコタフは、手に持つたナイトキラーといつ、騎馬系に有効な槍を取り出しつつ、部下に指示を出す。

「ならば、事前に配置した通りに兵を出撃させよ！ 林間へは重歩兵、騎兵、アーチャーの混成軍を、海岸へは剣士、戦士、魔道士を中心に入りだすのだ！」

「了解しました！」

伝令の兵士は、のろしを上げに走っていく。コタフはその様子を見送つてから、ナイトキラーを振り回し、隊員たちに檄を飛ばした。

「全兵に告げ、戦いの時は来た！！ 奴らは何としても、ここで仕留めるぞ！ デインに逆らつた傭兵どもに死を！ 奴らに辱められたり同胞たちの恥をそそぐのは、我らだ！！」

（タタナ海岸・砂浜）

空は抜けるような蒼さ。鏡のような水平線のかなたには、南国を思わせる入道雲。そんな美しい海岸線を、剣や斧で武装したデイン兵たちが一ひきに襲つてくる。

「いい加減にあきらめろよ、デインの連中めーー！」

ボーレは鉄の斧を抱きつつ、砂浜を駆けていく。

「あきらめられるか！ カムラ様の部隊に参加していたおれの友を殺したお前たちを倒すのは、このおれだ！！」

向かってくるデインの戦士も、ボーレに立ち向かってくる。

ガキーン！！

斧同士が激しくぶつかり合い、火花が散る。何度か斧がぶつかり合った後、ボーレの振り降ろしが敵の戦士の脳天をかち割った。

「さあ、次にかかるのは、どいつだ！ どちらでも来い！」

「ファイアー！！」

セネリオは、前の戦いで入手したファイアーオの魔道書を開いて魔力を解放する。真っ赤に燃え盛る火球が、こちらに向かってきていた剣士に命中。

「熱つ・・・このガキ！」

セネリオに斬りかかるとした剣士の前に、ワユが立ちふさがつた。

「あなたの相手は、このあたしがしてあげるー！」

「くっ、なめんな女！！」

剣士はワコに斬りかかるつとしたが・・・

「・・・秘技、待ち伏せ！！」

スパン！

「！？」

ワコは先手を取つて剣士を切り裂く。それだけで、勝負がついてしまつた。

「・・・ワコ、助かりました。ありがとうございます」

セネリオは、少し小さい声で礼を言つ。

「いえいえ あたし、速さなら誰にも負ける気しないからー！」

しかし、そういうワコが言つた瞬間に彼女のすぐ横を、田代もとまらぬ速さで駆け抜けていく、オレンジの影があつた。  
猫に化身した、レテである。

「デイン兵、覚悟！」

レテは砂浜を疾走し、敵の魔道士に襲いかかる。魔道士は顔を恐怖に染めた。

「ひつ・・・半獸だあつー！ も、サンダー！」

デインの魔道士がサンダーを放つと、レテのすぐ頭上から電撃が襲いかかる。しかし、電撃が落ちたところにはもう、レテはない。

「その程度の魔法、当たらん！」

バリバリバリ！――

一気に魔道士に接近し、鋭い爪で無慈悲にも引き裂く。

「・・・すげー・・・これが、ラグズの実力ってやつか！」

ボーレはそれを見て、すっかり心を奪われてぼーっとしていた。だが、その時。

「隙あり！ 食らえ、手斧！」

「！？」

いつの間にか近付いていたデインの戦士が、手斧をボーレに投げつけたのだ。当然ボーレはよけることなどできず、怪我を負つて砂浜に倒れ込む。

「くそ・・・いたた・・・

「どじめだあつ――」

一気に近付いて、手斧を振り降ろそうとした、その瞬間！

ヒュツ・・・グサツ！

「うつ・・・！？」

戦士の腕に、矢が突き立つたのだ。戦士は、矢が飛んできた方を向くと・・・

「や、やつた・・・当たつてくれた・・・」

ヨーファが震えつつも、弓を構えていたのだ。その後ろからは、ミストがライブの杖を手にボーレに駆け付ける。

「ボーレ、今治すからね・・・ライブ！」

赤い玉から青い光があふれだし、ボーレの傷は癒された。

「助かつたぜ、ミスト、ヨーファ」

「このガキい〜！！」

ボーレを襲っていた戦士は、ヨーファを見るや否や手斧を構えた。投げつけるつもりだ。

「ひつ・・・！」

「死ねーーー！」

しかし・・・

ドカアツ！！

立ち上がりつたボーレが、背後から斧を振り降ろしたのだ。戦士はたまらず、倒れ込む。

「今だヨフア！ 矢を当てるやれ！」

「あ、うんボーレ！」

グサッ！！

「くそ・・・連携攻撃かよ・・・」

ボーレとヨフアの連携攻撃で、見事戦士は倒れた。

「ボーレ、ちゃんと注意してなきゃダメじゃないのー。」

「ああ・・・すまなかつたなミスト」

ミストの注意を、ボーレは耳が痛そうに聞く。ヨフアまで、ボーレに口を出す。

「やつぱり、ぼくが近くでボーレを守つてあげないとね」

「つぐ・・・」

ボーレは、何も言ひ返せなかつた。

「タタナ海岸・林間」

敵を倒しつつ徐々に戦線を上げてきている林間部隊。現在は、敵の重歩兵たちと戦っているところだ。

「重歩兵には魔法やハンマーが有効・・・ティアマト、イレース、頼めるか?」

「アイク、任せて!」

「がんばります・・・」

ガシャガシャと音を立ててこちらに向かってくる重歩兵に少し距離を置いて、イレースは魔道書を開く。

「デインになんか、負けてたまるもんですか!」

ガシャーン!!

ティアマトは、馬上からハンマーを振り、手槍を持つ重歩兵を鎧ごと打ち碎く。

「イレース、手槍を持った重歩兵は倒したから、安心してちょうだい」

「感謝します・・・では私も・・・サンダー!!」

ピッシャアアン！－

サンダーの魔道書を開いたイレースは、稻妻で別の重歩兵を倒す。

重歩兵をあらかた倒し終えた時、オスカーが不意に空を見上げた。アイクは不思議に思つて問い合わせる。

「オスカー、どうしたんだ？」

「あ、アイク……空からペガサスナイトが……」

見てみると、ピンク色の髪をした少女を乗せた天馬が、こちらに向かってきているのが分かった。

「アイクさん！」

天馬に乗ったピンクの髪の少女は、アイクを見るなり手を振りつつ、こちらに下りてきた。

アイクは、確かに彼女に見覚えがあつた。

「あなたは確か……以前海賊にとらわれてた……」

そう言つと、少女は嬉しそうに答える。

「はい、マーシャです！ 約束通り、『恩返しに来ました。仲間に入れさせてください！』

マーシャは、頭を下げる。

「アイク、この人は？」

ティアマトが尋ねると、アイクは簡単に答える。

「・・・以前、港町タルマの海賊討伐をした時、海賊に襲われていたんだ。怪我をしてたから、もらった薬で治してやったんだ」

「そうだったの・・・」

その時のエピソードについて詳しく知りたい方は、「3章～海賊討伐～」をご覧ください。

ティアマトに説明をして、アイクは再びマーシャに向かい合つ。一つ、思い出したことがあったからだ。

「でも、あなたはベグニオンの天馬騎士団にいたと・・・」

「やめてきちやこました！だから、この傭兵団に入れてもうえませんか？お願いします！」

アイクはそれを聞いて、少し呆れつつ聞く。

「そんな簡単に・・・いいか、はっきり言つがうちは貧乏傭兵団だぞ？給金一つとっても、正式な騎士団とは比べ物には・・・」

「ダメですか？」

アイクが言い終わらないうちに、マーシャはさう聞く。アイクは再

びため息をついた。

「あんたが損をするつて話をだな・・・」

「全然、損なんかしません！　一生懸命働きますから、入団をせてくれださい！　お願いしますつーーー！」

マーシャは、天馬から降りて深々と頭を下げる。アイクはティアマトと田舎を合わせたが、ティアマトは別に問題なさそうな感じでアイコンタクトを返した。

「そこまで言ひなら・・・とりあえず、やつてみるか？　一いちも人手不足だからな、いきなり忙しい」と思つが

「はいー、まつかせといへくださいーーー！」

ペガサスナイトのマーシャが、仲間に加わった。

（タタナ海岸・沖合）

一方こちらは海の上。海賊たちとジェイクたちとの戦いは、いまだに続いていた。

「キラー ボウを食らえー！」

「ミーハーーー！」

海賊たちはすでに船に乗り込んでおり、完全に制圧されてしまつた。時間の問題だった。

「アンナ、このままじゃまずいんだ……こいつなつたら、この船を捨てて逃げるしか……」

敵の波をしき切つた時、ジョイクはそつとぶやく。

「そつみたいね……ジョイク、ビツセツで脱出するの?」

「ははっ、聞いて驚け! 僕はな、この船にある仕掛けをしておいたんだ。絶対に安全に脱出できるものをな!」

「え、本当! ? ジョイクす! こ! 」

ジョイクは扉に鍵をして、船室へとアンナを案内する。

船室の物置の中には、さつきしまい込んだジョイクのシューターやら、その他必要なものや大事なものがたくさん積んであつた。

「ジョイク、この物置に何があるの?」

アンナが尋ねると、ジョイクは自信満々に答えた。

「あのな、実はこの物置自体が、緊急時に離脱できるように改造してあるんだよ。向こうの方には、ある程度操作ができるように操舵輪とかも取り付けてある。これに乗り込んじゃえば、ひとまず安心

つてわけ！」

「うわ～よくこんなのは作ったわね！　たすが機械のプロ…」

「あはは、そんなに褒めんなよ～」

とその時、背後から大きな音が響いた。おそらく、船室の扉が破られたのだろう。大勢の海賊が襲いかかってくる気配が感じられる。

「おっと、じゃあアンナ、乗り込んでくれ！　忘れ物とかしないようにな～？」

「うん、私は大丈夫。ジョイク、いつでも出発できるよ～。」

「よししゃ、じゃあ行くぜーーー！」

物置のドアを閉め、ジョイクは奥に垂れ下がっていたひもを引っ張る。すると、物置がそのまま船から分離したのだ！

浮力を失った船は、沈没を始める。大勢の海賊たちを、巻き添えにして。

「よし、脱出成功！」

「よかつたね！　あのままじゃ危なかった・・・といひで、これから先どこに向かうの？」

アンナは、操舵輪を握るジョイクに聞く。

「そうだな……ひとまず、今水面に出たら危険だ。あと数時間はこの緊急ポッドの中の空気は持つはずだから、それから浮上しよう。その後、もう一度上陸を手配すんだ！」

「分かったわ」

海上では、大混乱の極みだった。突如、船が沈没してしまったからだ。

「おこおこ、これはビビりこいつことだあ？」

海賊のボス、ネダタは、驚愕の表情を浮かべる。部下が、口を出した。

「ふ、船が沈没しちまつて、仲間はかなりやられちまつたみたいですよ、ネダタの兄い……」

「ちくしょう……だったら仕方ねえ、陸の上にあつたつてる家を襲つてやろうぜえー！」

「おーそれは名案ー サイレク襲つてやりやしじー！」

「うつほつほー」

「ひやつほつほー」

「俺たちも海の、なりす者へ」

「タタナ海岸・砂浜へ

ネダタ達海賊は、民家のすぐ近くの波打ち際に上陸を果たした。

「ひやつほつほ～ 早速襲つてやるぜ～！」

その様子を、ワゴンは遠田に見る。

「あ、あれは海賊！！ 大変、急がないと・・・！」

だが、セネリオが引きとめて首を横に振る。

「いいえ・・・今から行つても間に合いません・・・」

「そんなん・・・」

その時だった。海岸の左手、林の方から、ペガサスナイトが一騎飛び立つていったのは。

マーシャである。

「海賊め！ 家は襲わせませんよーーー！」

マーシャは細身の槍を手に、今までに家を壊そうとしていた海賊に突っ込む。

「必殺の一撃！……」

細身の槍を振り回しつつ、海賊を一撃で倒すマーシャ。それを見ていたネダタは、驚きの声を上げた。

「なんだなんだあ？　いきなり女が俺の仲間を……けど、お前なんかにや負けないぜ～！」

ネダタは小舟から飛び降り、波打ち際に降り立つ。手には紫色に変色した、毒を仕込んだ斧を持つ。そして、マーシャに襲いかかったが……

「ガルアツ！……」

空色の虎に化身したモウディが、猛烈な勢いでネダタに突進を仕掛けたのだ。ネダタは吹っ飛ばされ、毒の斧を取り落としてしまう。

「獣まで襲つて来やがつたか～、でも、ここで逃げたら笑い者、男の生き様、見せてやらねえとな～！」

ネダタは素手でモウディに殴りかかる。だが、そんなのが通用するはずがない。

「ガルルルアツ！……」

牙を突き立て、ネダタを噛み碎く。ネダタはもう、起き上がりない。

後からやつてきたボーレやワゴンに簡単に血口紹介したマーシャは、手前の方の民家を訪ねた。

しかし、中から獣牙族の女性が出てきたと悟った瞬間……。

「……………？」

扉を開けた獣牙族は、絶叫したと思こやすぐに倒れてしまった。

「え……あの、どうかされました……？」

マーシャは不安になつて聞き返すと、じぱりとして獣牙族が起きあがつた。明らかに、その田は怒つている。

「…………もつ、まつたく！ 非常識よ、あんた！ こつちは死んだふりしてゐんだから、あきらめでどうかへ行つてくれなくぢやー！」

「え、どうですか？」

話がよく分かつていなマーシャが、そう聞き返すと。

「え、だつて……母さんが、ニンゲンに会つたら、いじつひつて……」

「？？？」

マーシャが困惑していると、獣牙族の女性は再び怒った表情になつた。傍らから、何かを取り出す。

「・・・フン、だ！ 分かつてたわよ、そんなの！ ジャあせ・・・  
これ、あげるからさつさと、どつか行つちやつてよー。あたし、ニ  
ンゲンなんて大嫌いなんだから！ ホントは、口もききたくないん  
だから！」

そつ言つて手にした何かをマーシャに半ば押しつけるようにして渡す。

縁の玉が取り付けられた杖だ。確かに、レストの杖というものである。対象の毒や睡眠、沈黙と言つた、状態異常を治療することができるものである。

「フーンっだーー！」

獣牙族の女性は、『バターンーー』と扉を閉めてしまった。後には鍵をかける音まで聞こえた。

(ガリア王国の嫌ベオク思想は、本当みたい・・・)

マーシャはそつ思いつつ、団員の元へ戻つていった。

一方もう片方の家は、ボーレが訪問をしていた。

「クリミアの方々ですね？ 私は獣牙族の戦士です。あなたがたのことば、ライ殿から伺つております」

中から出てきたのは、虎に化身すると思われる獣牙族の青年。静かな雰囲気を出しており、丁寧な口調でボーレに話しかける。

「ライ殿……ああ、確かにメリテネ砦で世話をなつたあの水色の猫か。あの時は、助かりましたよ」

「そうですか。こちら側も救助が間に合って、よかったです」

そこまで言つて、獣牙の戦士は南のタタナ砦の方に目線を送る。

「……すでにお気づきでしょうが……南にあるタタナ砦は、現在『ティン軍』によつて占拠されてい您的です。やつらには、くれぐれもお気をつけください。やつかいな魔道士もいたはずですから……」

・

獣牙族の青年が言つには、獣牙族は魔法……特に、炎属性の魔法は脅威となるらしい。

「私は、仲間との連絡のためこの家を離れる訳には行きませんが……対魔道士用の備えとして、これを差し上げます。これを使えば、魔法を防御する力が増すはずです」

青年がボーレに手渡したのは、紫色の刺繡が施された、お守りのようなもの。これを服などに縫い付けると、魔法に対しても抵抗力がつくらしい。

「ありがとうございます。絶対、タタナ砦を落としてきますね！」

「どうか、お気をつけて……」

手を振りながら家を後にするボーレー、獸牙の青年は静かに祈りをむさぼっていた。

「タタナ誓へ

敵をほぼ全て倒し切ったグレイル傭兵団は、タタナ誓の前に集結した。

残るは、誓の前に陣取るコタフと、魔道士2名のみである。

コタフはアイクを見て、唇をかむ。

「お前が、傭兵团の新しい長か……。一体、どんな卑怯な手を用いて、我らの同胞を手にかけたのだ……！？ そうでなくては……・デインの正規兵たちがお前たち」とセヒ、やられぬはずはないのだ」

コタフのその言葉に、アイクは少しうぶやつしつつ、まっすぐ前を見て答える。

「……お前たちは、そつやつて最初から俺たちを見下してくる。いい加減、気付いたりどうだ？ そこに隙ができるから俺たちじいじに、勝てないんだって」

アイクが言ったことに、コタフは激怒し、ナイトキラーを手にアイ

クに襲いかかった。

「黙れ！ 黙れ！ この小童が！！ おい魔道士、こいつを始末してやれ！！！」

「はい、・・・ファイアー！」

「ウイング！」

二種類の異なる魔法が、アイクに襲いかかる。アイクはそれらをよけ、コタフのナイトキラーを剣で受け止めた。

「！」こつこつ・・・片腕を怪我しているのじびつして・・・！？」

そつ、アイクは左腕が今、うまく動かないのだ。それにもかかわらず攻撃を受け止めたことを、コタフは驚いた。

「だから・・・やうこつのを『見下している』って言つんだ」

アイクはやう言ひ放ち、コタフと距離を取る。

「オスカーとマーシャは、魔道士を頼む！ 僕は、コタフの相手をするーー！」

「やあーー！」

ザシュー！

「えいっー！」

グサツ！

魔道士が2人にやられたのを見て、アイクはコタフに問いかける。

「さあ、残るはお前だけだ。これでも、まだ俺たちを見下すつもりか？」

「ぐ・・・ぐぬぬ・・・！ そんな、我らディーンが、こんな傭兵どもに・・・！」

コタフは、ナイトキラーでアイクをひたすら攻撃する。だが、アイクには全く攻撃は当たらない。

「これで、終わらせてやる！」

アイクは足払いをかけ、コタフの体制が崩れたところに、胸の鎧の隙間を狙って突きを繰り出した。アイクの剣はコタフの心臓を貫通する。

「ぐつ・・・ぐぐ・・・ぐ・・・ 祖国のために・・・汚名を・・・そそがねば・・・」

コタフは、絶命した。

タタナ皆の制圧を無事完了させたグレイル傭兵团は、互いの無事を確認し合っていた。

「とにかく指揮官は倒したが……奴らの目的は一体何なんだ？」

「……ヒリンシア姫を追ついでだけが、目的ではなさそうね」

ティアマトが言つておひだつた。ガリア王国にまで決死隊を送り込むと言つことは、かなり大きな目的があるということである。単純にヒリンシアを捕まえるだけなら、ガリアに逃げ込まれた地点であきらめるはずだ。

「……いずれにせよ、デインが国境を侵したことで、ガリアとディンは、いつ開戦してもおかしくない状態になつたと言えます」

「また、戦争になるのか……」

セネリオの意見に、アイクは考え込む。ティアマトも真剣に腕を組んだ。

「ベオク対ラグズの戦いになるなら……他の国も、当然黙つていなのはず……。デインは、大陸中に火の粉をまき散らす気だとでも言つのかしら……」

ティアマトの意見は、最悪のケースである。だが、もし本当に、ディン国王アシュナードが、そう考えていたら……？

アイクがそう考へていると、セネリオが口を出した。

「いざれにせよ、我々の動向を決めなくてはいけませんね。どちらに味方するのかを」

それを聞いたティアマトが声を上げる。

「『じゅりひり』て・・・『ディン』に味方するわけ、ないでしょ？」

「・・・と、いつて、人間である僕らが半じゅ・・・『ラグズ』と組んで人間と戦うなんて・・・それこそ、考えられませんが？」

ティアマトとセネリオの議論を尻目に、アイクは歩きだす。

「ベオクか、ラグズか・・・」

アイクがふらふらと辺りを歩きながら考えていると、レテとモウティがやってきた。レテはセネリオとティアマトの方を見やつづつ言う。

「・・・まだ、起きてもない戦のことを諭じ合ひつか。ベオクは・・・よほど気が小さいのだな」

「レテ！ ソんな言い方をシてはいけない・・・」

モウティがそう戒めるが、レテは聞き流す。アイクはそんな2人に、思つていたことを聞いてみた。

「・・・あんたたちは、どうだ？ 戦になると戻つか？」

するとレテは、まるで答えを用意してあつたかのような早さで毅然と答える。

「『ディン』がガリアの領土を荒らすなら、我々は戦うことを辞さない。

王が「決意なされば、すぐに戦になるだ！」

反対にモウティは、やや考えてから悲しそうな顔をして答える。

「モウティはいやだ……戦いは……沢山の悲しみをうみだす……」

「……（確かに、レテが言つことも最もだが、モウティが言うことも正しい……）

そうアイクが考へていると、レテが呼びかけた。

「……とにかく、王宮へ急ぐぞ。予定外に時間をとってしまった。日暮れまでに、今夜寝る場所にたどり着かなくては……」

「王宮へは、まだ遠いのか？」

「ベオクの足なら、まだ遠い。や、急ぐぞ」

再び出発してからしばらへして、ティアマトが口を開いた。

「もう言えぱ・・・・アイクにはまだ言つてなかつたつけ。私ね、昔ガリアに行つたことがあるのよ。少しの間だつたけど・・・・

「そつだつたのか？・・・・ああ、それでラグズを見ても、そんなに驚かなかつたんだな？」

アイクは、メリテネ砦でライ達が救助に来てくれた時のことを思い出した。

「ええ。ガリア王国との交換武官に志願してね、それでガリアの王宮にお世話をなったの」

それを聞いてアイクは、一つ思い出したことがあった。

「・・・そう言えば親父も、古城の場所を知っていたり・・・ガリアに来たことがあるようなそぶりだったな？」

ティアマートは、一瞬悲しそうな顔をしたが、すぐに表情を改めて答えた。

「ええ、団長だけではなく・・・あなたもね、アイク」

「え、俺も？ そんな記憶全くないが・・・」

突然ティアマートの口から、そのような言葉が出てきたため、アイクは驚いた。だが、聞き返してもティアマートははつきりとは言わない。

「・・・」の話の続きは、ガリアの王宮にたどり着いてからにしま  
「うわー」

「あ、ああ・・・」

## 9章 ～ガリアにて～ 後編（後書き）

ガリア王国に潜伏していたデイン軍の部隊を撃破したグレイル傭兵团。

以前助けたマーシャを仲間に加えた彼らは、ガリアの王宮を目指して進み続ける。

ティアマトが言っていた、「アイクはガリアにいたことがある」とは、どういうことなのだろうか？

そして、ガリアの獅子王カイネギスは、クリミア再興に力を貸してくれるのだろうか？

次号を待て！！

## 獅子王カイネギス（前書き）

ゲバル城を立つてから3週間ほどして、グレイル傭兵团はようやくガリア王国の王宮にたどり着いた。

ガリア王宮は、熱帯雨林の中にひっそりとまぎれるように建つていた。湿気に強い建材を用い、荒々しいが頑丈そうな城である。クリニアで見慣れていた建築様式とは、だいぶ異なっているのが印象的だ。

エリンシア姫はライ達が、もうすでにこの城に送り届けられているはずである。

城門前の見張りにレテが指示をすると、重そうな城門がゆっくりと開く。レテとモウティは、そのままアイク達を獅子王カイネギスとの謁見場所へと案内した。

## 獅子王カイネギス

「ガリア王宮・謁見の間」

「アイク様！ みなさま！」

謁見の間には、すでにエリンシアも来ていたようだ。アイク達の姿を見て、感嘆の声を上げる。

「エリンシア姫」

アイクはそれを認めて、エリンシアの方へ歩み寄る。エリンシアはアイクに対し、どこか申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「あの・・・グレイル様のこと・・・伺いました。・・・あの・・・私、何と言えばよいか・・・」

どうやらグレイルの死は、もうすでに連絡係のガリア兵を通じて、ここ王宮にも伝わっていたらしい。

アイクは、エリンシアに首を横に振つて見せる。

「氣を使わないでくれ。大丈夫だ。俺たちは、何とかやつている」

「・・・アイク様・・・その、腕のお怪我は・・・？」

ふと、エリンシアはアイクがつるしている左腕を見て聞く。

「？・・・ああ、これが？ テイン兵とやり合つた時、傷めてしまった。だが、この程度は問題はない。心配はしないでくれ」

「そうですか・・・」

しばらくして、場の空気が突如変わつた。先ほどまでは話しが聞こえていた謁見の間は、急に厳肅な雰囲気になつたのだ。

「王がお見えになりました」

一人のガリア兵が、アイクにそう伝える。それを聞いて、アイクは目の前の玉座を見た。

玉座の脇のカーテンの裏から出てきたのは、たてがみを思わせる赤い髪やひげを生やした大男だ。威厳のある顔つきに、筋骨隆々とした体つき。ただ者ではない雰囲気を、醸し出していた。

「・・・！」

アイクもヒリンシアも、その後ろにいた団員たちも、みな一様に緊張する。そうしているうちに、玉座に座つたその大男は口を開いた。

「ガリア王宮へよく来てくれた。わしがガリア国王カイネギスだ」

カイネギスの威儀のある言葉に少し緊張しつつ、アイクも名乗る。

「・・・グレイル傭兵团、団長のアイクだ」

名乗り終えたところで、カイネギスの表情がわずかに変化した。懐かしいものを見るような、そんな表情に。

「・・・たくましく育つたな。見違えたぞ、アイクよ

「...?」

まさか獅子王の口から、そのよつしや言葉が出るとは思わなかつたアイクは、激しく動搖した。

その後ろで、ティアマトが口を添える。

「...にいた時は、まだ、小さな子どもでしたから」

カイネギスは、今度はティアマトの方を見る。

「ティアマトか。よく来てくれた」

「お久しぶりです、カイネギス殿」

2人のやり取りを、アイクは不思議そうな目で見る。

「2人は知り合いなのか？ 王は・・・俺のことも知っているのか？」

するとカイネギスは、アイクにつなぎいた。

「つむ。グレイルについて、お前に話しておくれべきことがある。・・・レテ、モウディ、お前たちは席を外してくれ。傭兵团の方々がゆっくり休めるよう、部屋を用意して差し上げるのだ」

「はつー！」

レテとモウティは、獅子王の命令を受けて退室していった。それに続き、他のガリア兵たちも出ていった。  
それを見て、エリンシアもおずおずと聞く。

「あの・・・私も、失礼したほうがよろしいですか？」

カイネギスは、首を横に振った。

「いや、王女にもいでもらいたい。後、この者もな」

そう言つてカイネギスが視線を送つた先には、部屋の隅にて静かにたたずむ、これまた筋骨隆々な大男がいた。こちらは獅子王とは異なり、黒い髪、ひげを生やしている。

「こやつはジフカと言つて、わしの影だ。空氣のよつなものと思つてくれればよい」

ピクリとも動かさずにじりとじりを見やるジフカを少し見てから、アイクも答えた。

「分かつた。こちらも、ティアマトとセネリオをこのまま同席させてほしい」

「・・・」

セネリオは不快そうだったが、あえてそれを口には出さなかつた。  
カイネギスは、アイクにつなづきかける。

「いいだろ。さて、何から話したのか。ティアマト。グレイルは、どこまで息子に話していたのだ？」

話を振られたティアマトが答える。

「アイクは、ガリアのことを何も知らずに育ちました。ここにいた記憶もありません」

カイネギスは、腕を組む。筋肉が、また盛り上がったようになに見えた。  
「そうか・・・では、わしの知る全てを話した方がよいだろ。な。  
・・最も、あまり多くはないのだが」

それを聞いて、アイクが身を乗り出した。

「いや、どんな小さなことでも構わない。親父のことを聞かせてく  
れ」

身を乗り出したアイクを、カイネギスはまた懐かしそうに見る。グ  
レイルと、重ねてみているのだろうか。

「・・・父親と同じ、いい顔をしているな」

**獅子王カイネギス（後書き）**

ガリア王国の国王カイネギス。

「獅子王」の異名を持つ彼は、クリミア復興に協力をしてくれるの  
だろうか？

そして、グレイルの過去とは・・・？

## 決意（前書き）

ガリア王宮に招かれたアイクは、そこでエリンシアとの再会を果たす。

ガリア王国の王、獅子王カイネギスとの謁見をとり行つ彼ら。

獅子王の口から、グレイルとアイクの過去が語られる・・・。

## 決意

「ガリア王宮・謁見の間」

「グレイルは昔・・・ガリアの傭兵として働いていたことがあってな。浅からぬ縁がある」

アイクの目を見つめ、カイネギスは話しだした。アイク達はみな、耳を傾ける。

「わしは、まだベオクを信用しきってはおらん。だが、お前の父グレイルと・・・エリンシア姫の父ラモン殿、そして王弟レニング殿・・・この3人だけは別だ。どの者も、傑出した人物で、信頼に足る男たちだつた。・・・おつとティアマト、そなたも別格だつたぞ。ベオクの女では、唯一な」

「恐れ入ります」

カイネギスに言われて、ティアマトは一步進んで頭を下げた。

「親父がガリアの傭兵・・・」

アイクがそつそつと、カイネギスもうなずいた。

「そうだ。お前と妹が生まれたのも、このガリアなのだ。ほんの短い間ではあつたが、お前たちは、この土地で育つた

「・・・そうか・・・何も覚えてはいないが・・・俺とミストは・・・  
・」の地で生まれたのか・・・」

奇妙な感覚を覚えるアイクに、カイネギスは話を続けた。

「お前の両親は、何か重大な秘密を抱えているようだつた。そして、  
その秘密ゆえ、何者かに追われていた。十数年前・・・お前の母親  
が追っ手に殺され、グレイルがガリアを去る時・・・わしは、あや  
つに何もかも打ち明けるよう迫つた。『なぜ、追われているのか?』  
『このわしが力になれることはないのか?』と。しかし、何も聞き  
だすことは出来なかつた・・・」

獅子王の田は、とても残念そう、悲しそうな色をしていた。

「・・・あやつが再び、ガリアに現れたと聞いて・・・わしは今度  
こそと思ったのだがな・・・あのようなことになつて残念だ・・・  
もう少し早く、駆けつけておればと・・・悔やまれてならん・・・」

それを聞いてアイクははつとなつた。グレイルが漆黒の騎士との一  
騎討ちに敗れた際、響き渡つた、雄々しく威厳のある歯牙族の咆哮  
だ。

確かあの時漆黒の騎士は、「これは『獅子王』か・・・」と言つた  
はずだ・・・。

「・ そうか、あの時の声は・・・あんただつたのか・・・」

カイネギスはその問いにうなづく。

「あの傷では助かるまいと分かつたのでな・・・残されたわずかな

時間を邪魔するまいと思い・・・姿を現さないでおいた

そこまで言つてから、カイネギスはアイクに手招きをした。それに応じると、カイネギスは周囲を見渡してから、アイクに耳打ちで質問したのだ。

「アイクよ・・・あの黒鎧の騎士の正体を、お前は知っているのか？」

カイネギスは、アイクがあの騎士のことについて他の誰にも話していないことを見抜き、わざわざ耳打ちしてくれたのだ。アイクはそんな彼に感謝しつつ、答えた。

「・・・騎士の正体は・・・分からん。だが、よく通る声をしていて、静かで堂々としている印象だった。剣の腕は、すさまじいもので・・・あんなに頑丈そうな鎧を着ているのに、信じられないほど素早かつた・・・気がする」

「ふむ、そうか・・・」

アイクの話を聞いて、獅子王は耳打ちをやめる。今度は、普通に質問をしてきた。

「アイクよ、あやつは最期に・・・お前に何と告げた？」

アイクは思い出した。あの嵐の、満月の夜を。

「・・・親父は・・・俺に傭兵团を任せると・・・カイネギス殿を頼り、このガリアの地で、平和に暮らせと・・・言った。全てを忘れて・・・」

カイネギスはそれを聞いて、それに対する答えをすぐに言つ。

「……そうか。では、わしができることをしよう。お前たち傭兵団がここでの暮らしを望むのであれば、わしはそれを許そう。住まいと、土地を与える」

カイネギスの発案に、後ろで控えていたティアマトとセネリオが驚きの声を上げた。

いくらアイクの父であるグレイルと縁があるとはいえ、一国の王が、外国人の一介の傭兵に土地と住まいを無償で提供すると云つのだ。破格の待遇である。

だがアイクは、それを受け入れない。

「……王の気持ちはありがたい……だが、俺はこのまま、ここで安穏と生きる気にはなれない。俺は、親父の仇を討ちたい。このまま、忘れるなんてできない……」

後ろにいたティアマトが、思わずアイクに声を上げる。

「でもアイク！ それは……」

アイクはその声に、振り返った。

「分かつて。今の俺には……力がない。親父ですら勝てない相手に、かなうわけがないんだ……」

再び、カイネギスの方に向き直る。

「……だから、今は強くなることに専念する。親父の残した傭兵团をまとめながら、いつか来る機会に備えるつもりだ！」

その強い意志を田の前の蒼髪少年の瞳に見たカイネギスは、少し口元をほころばせて賞賛した。

「賢明な判断だ。もつと直情的に動くより見えるが……さすが、グレイルの血は争えんな」

ティアマトも、賛成してくれたようだ。

「ふふ、成長したわね、アイク。ついこの間までは、ほんの子供だと思っていたのに」

「ティアマト……」

ふと、カイネギスはまた顔を思案顔に改め、アイクに話しかけた。

「……そこで、提案したいことがある。アイクよ、お前の傭兵团の力……このエリンシア姫に貸してやつはくれぬか？」

「!？」

「カイネギス様！？」

カイネギスの提案は、アイクとエリンシアに強い衝撃を与えた。なぜここで、グレイル傭兵团がエリンシアにまた、力を貸すことになるのだろうか？

その答えを、カイネギスは静かに話しだした。

「確かに、ガリアとクコニアの間には同盟が結ばれている。だがな、それは王族間のもので民間こは、ほとんど浸透しておらん」

カイネギスが困り顔でそう言つて、ティアマトはアイクにフォローを入れる。

「クリミアでガリア人を見ることなんてないでしょ？・・・同盟国であつても、ラグズに対する理解はほとんどない。“半獸”なんて言葉がまかり通るよつにね」

言われてみればその通りだ。アイクは実際つい最近まで、「ラグズ」という言葉すら知らなかつたのだから。

エリンシアも、話の輪に入る。

「・・・父は、そのことで心を痛めていました。歴代の王とは比べ物にならないほど、ガリア王国との国交を深めることに心血を注ぎ・・・そして・・・」

そこまで言つて、彼女は自分がまた泣いていた。ハンカチを取り出し、嗚咽を漏らす。

「・・・それゆえ、反ラグズ運動の強いティンに狙われたのかもしれん」

獅子王はエリンシアの様子を見ながら、ため息とともにそう言つた。

「・・・」

アイクも、エリンシアの方を見ながら、この先のことについて考える。そんな時、カイネギスは話の続きを始めた。

「わし個人の心情で言えば、ガリアがエリンシア姫の後見となり、クリミア再興に尽力したいところだ。しかし、我がガリアにおいてもまた、反ベオク感情が高いのも事実なのだ。この度、クリミア王女を我が国が保護したことが、デインがガリアを攻撃するための絶好な口実を与えたのではないかと・・・危ぶむ重臣も多い・・・」

カイネギスはなるべく遠まわしにして言つてゐるのだと思つたが、アイクは彼が何を言おうとしているのかは、分かつてゐた。

「つまり・・・ガリアは、エリンシア姫の力にはなれない・・・そ  
う言つことなんだな?」

「残念ながら、そうだ・・・」

獅子王は、とても申し訳なさそうな顔をしてゐる。

ガリアが無理なら、どこに助けてもらえばいいのだろう?

カイネギスとの謁見が終わり、謁見の間から出たところで、エリンシアがアイクに話しかけてきた。

「アイク様。カイネギス様は、クリミア再興を目指すのであれば、ベグニオン帝国を頼るべきだと助言をくださいました。宗主国であるベグニオン帝国に正式に申し立てをして、後ろ盾してもらひべきだと・・・」

「ベグニオン帝国？」

アイクが疑問に思つと、セネリオが簡単に説明する。

「アイク。ベグニオン帝国はこのテリウス大陸の中で、最も長い歴史と大きな版図を誇る大国です。クリミア王国も、ティエン王国も、元はそのベグニオン帝国から独立したものなんです」

「そうなのか・・・」

アイクが納得すると、今度はティアマトが思案顔になつた。

「ベグニオンまでは、海路で数ヶ月の旅になるわ。確かに護衛が必要ね・・・」

その意見に、アイクもうなずいた。

「・・・俺たちも、まつとうに傭兵团として動けるほどの人員がない。もし、姫の護衛として雇つてもらえるなら、それは願つてもないところだな。ティアマト！ セネリオ！ 俺は王の申し出を受けたいと思うが、構わないか？」

すると、ティアマトは嬉しそうな顔で答える。

「団長の決めたことでしょ？ 私たちは、信じて付いて行くだけよ

セネリオも、賛成してくれた。

「あなたの望むまま・・・進んでください。僕は、その道が確かな

ものになるよう、全力をつくすのみです

2人の賛成で、アイクの心はきまつた。

「分かった。では、グレイル傭兵団はこれより、クリニア王女護衛の任務を請ける」

続いて、ヒリンシアの方を向く。

「ヒリンシア姫、これから長い付き合いになりそうだな。よろしく頼む」

アイクは、ヒリンシアに右手を差し出した。ヒリンシアは一瞬その意味が分からなかつたが、すぐに理解をした。

アイクは、握手を求めているのだと。

「あ、ありがとうございます。こちらこそ、よろしくお願ひします・・・」

ヒリンシアは緊張した様子で、自分の右手を田の前の少年の右手に合わせようとすると。すると、アイクが自分からヒリンシアの手を捕まえ、ギュッと握つたのだ。

「つー？」

たちまち、ヒリンシアは真っ赤になる。だが、アイクはヒリンシア

の様子の変化には気づかない。

アイクはエリンシアに別れを告げ、自分の部屋へと去っていく。

その後ろ姿を、エリンシアはいつまでも見ていた。蒼髪の彼の姿が廊下の角に消えても、まだ動けなかつた。

・・・たつた、数秒の出来事だった。だが、彼と握手をしたと言つだけなのに、エリンシアはそれがものすごく長い時間に感じられた。

熱帯の気候のせいか、それとも自分の体温が上がっているせいか、ひどく体感温度が高く感じられる。なぜか鼓動が鳴り響く自分の胸に、彼女はつっさつき握手を交わした、右手をそつと当てるみる。

まだ、彼の手の感覚が残っている。エリンシアはその感覚を忘れないよう、そつと左手も右手に合わせる。

しばらく、その場を動くことは出来なかつた。

## 決意（後書き）

ガリア王国は、クリミア再興に力を貸せないらしい。

カイネギスの助言を受け、グレイル傭兵团はエリンシア姫を、ベグニオン帝国まで護衛することになった。

クリミア再興は、無事実現するのだろうか？

## 新たなる旅立ちの日（前書き）

ガリアの国王カイネギスがアイクに伝えた話は、グレイルの過去に深く結び付くものだつた。そして、それは幼いころのアイクにも、直接関係してくる。

獅子王はエリンシアに、残念ながらガリア王国はクリミア再興には力添えができるないと返答をする。ラグズとベオク・・・両者の対立は、このような場所にも現れていた。

獅子王の助言に従い、やむなくクリミアの宗主国、ベグニオン帝国を目指すことになったグレイル傭兵団一行。エリンシア護衛の任務は、さらに厳しいものとなるのであつた。

## 新たなる旅立ちの日

「ガリア王宮」

ガリア王宮に来て、5田田の朝のことである。この日に、とうとうグレイル傭兵団は、ガリア王宮を立つことになっていた。

「でやあっ！！」

アイクは、たった一人でガリア王宮の中庭で、剣の特訓を行つていた。敵に囮まれた状況を想定し、それを突破するという訓練である。

（俺は、親父の仇をこの手で討つ！ それまでに少しでも、強くなつてやる！）

アイクは、漆黒の騎士のことを思い浮かべつつ、ひたすら木刀を振るつた。

そんなアイクの様子を、そつと見ている者がいた。エリンシアだった。

（アイク様・・・）

ガリアでアイクと再会してから毎日、彼女はアイクの剣の特訓を見ていた。自分でもなぜかはよく分からぬが、アイクのことがとても気になるのだった。

再会した日・・・アイクとの初めての握手・・・。その時に感じた彼の手の感触を、エリンシアは忘れられなかつた。なぜかその日の夜は、全く眠れなかつた。アイクのことを考えるたびに、居ても立つても居られない、胸が苦しくなるような感覚に襲われるのだ。

まだ時間は朝なのに、辺りの気温はかなり高い。だが、それはここが熱帯だからとこゝだけではないかもしれない。

しばらくして、アイクは特訓を終えたようだ。木刀を入れ物にしまい、歩き出した。そこで彼は、エリンシアに気が付いた。

「あっ・・・」

ついアイクに気が行き過ぎていて、エリンシアはその場を離れるのがやや遅れた。アイクの訓練をずっと見ていたことが、彼に気が付かれてしまった。

不自然に背中を向けて駆けだそうとしたが、もう遅い。

「エリンシア姫、どうしたんだ、こんなところで？」

アイクにそう呼びかけられ、エリンシアは観念して振り返つた。

「あ、アイク様おはよひござります・・・。えっと・・・朝早いです・・・」

緊張で、言葉がどぎれどぎれになつてしまつ。

「朝早く？ もう、朝食を食べた後だからそれほど早くもないと困るが……それより、メシの時も会つたと思うぞ？」

そう指摘され、Hリンシアは恥ずかしさのあまり顔を赤くする。

「え、あ、そうでしたね。ごめんなさい私つたら……」

「？ まあいいが……」

その時だ。2人の背後から唐突に、陽気な声が聞こえたのは。

「よお、アイク！ 聞いたぜ、ベグニオンに行くんだってな？」

「！？」

Hリンシアはその声に、じとじと驚く。だがアイクは、じく普通に反応した。

そこに立っていたのは、水色の髪をした猫の民の獣牙族。メリテネ階でアイク達を救つたガリア王国国境警備隊隊長の、ライである。

「ライか。お前には礼を言おうと思つていたんだ。旅立つ前に会えてよかつた」

アイクがそう言つと、ライは感心した表情を浮かべて笑いかける。

「義理堅いね～。そういうやお前、じこの生まれなんだつてな？ おかしいと思ったんだよ。ベオクにしてはいやに懷っこいな～つて。つと、ベオクつてのはだな……」

「知つてゐる。俺たち人間のことだらう?」

アイクは、レテが以前言つていたことを思い出す。

「お、知つてたか。じゃあついでに教えとくと、オレたちが“ニンゲン”つて言葉を使うときは、お前たちの言つ“半獣”つてのと同じ意味だと思って間違いないぜ」

「そつなのか? “人間”と“ニンゲン”……知らなければ、何も気付かないだらうな」

ライが言つには、“ニンゲン”という言葉はラグズが奴隸時代だったころ、ベオクに隸属を強いられていたラグズ達がベオクに対し、使い始めたのが始まりらしい。

発音が“人間”とほぼ同じなため、バレることはないとのことだ。

「……もし、その言葉を使つラグズに出会つたら気をつけろよ? 絶対、敵意があるからな」

ライの忠告に、アイクは感謝した。

「分かつた、ありがとう。肝に銘じておく

「さて、じゃあ本題と行くか」

「?」

ライが突如話を打ち切つたのでアイクが疑問に思つと、ライは今度はエリンシアの方を向く。

「エリンシア姫、少しそうじいですか？」

「は、はい！」

エリンシアが返事をすると、ライは持つてきていた大きな皮袋をエリンシアに差し出す。

「我が王より、姫への贈り物です。どうぞお納めください」

エリンシアがその袋を受け取ると、ジャラッと言つ音が鳴った。硬貨があ互ごこすれ合ひ音に違いない。

「… これは…」

驚いた表情を浮かべる彼女に、ライは説明を加える。

「その皮袋には、ベオクの共通硬貨で2万ゴールドが入っています」

エリンシアは、困惑する。

「お気持ちはありがたいのですが… こんなに高額のゴールドを軽々しく受け取る訳にはまいりません。カイネギス様には、もう十分よくしていただきました。ですから…」

そつまつて皮袋をライに返そうとするが、ライはその手を押しどぐめる。

「……王は、自らがあなたの後ろ盾となれないことを、申し訳なく思つておられるのです。それを、どうか察しつかせんか？」

「でも……」

「……なら、いかにいのはどうでしょ？？」

「え？」

ライは名案を思い付いた顔をし、アイクの方を向いた。

「『クリミア王女をガリアまで無事に送り届けた分の報酬』として、このゴーレドは全て、姫のお手からアイクの傭兵団へ支払われる。」

「あ……」

エリンシアは納得がいった様子だが、アイクはその意見に、疑問を示す。

「おい、ライ。いくらなんでも、報酬としては高すぎないか？」

グレイル傭兵団が今まで遂行してきた任務の報酬は、せいぜい500～1000ゴーレドほどである。以前グレイルが自ら行った、力タオールの街での盗賊団討伐任務の時は諸侯からの依頼と言つてもあってかなり高額だったが、それでもせいぜい5000ゴーレドほどだつたはずだ。

今まで、こんな大金を手にしたこととは、アイクはない。

だがライは、アイクの疑問に首を横に振つた。

「いや、むしろ安すぎるへりいだ。一国の王女の命は、こんな金額で買えるものじやない。それに・・・傭兵団が失った命のことを考えたら・・・この数十倍、数百倍もいらつてもおかしくはない」

「・・・」

アイクが考へていて、エリンシアが手を小さく挙げた。

「私・・・やっぱり、」厚意をお受けします。そしてこれは、アイク様に・・・。アイク様、受け取つていただけますね？」

エリンシアは、ライから受け取つた皮袋をアイクに差し出す。アイクは、エリンシアに向き直つた。

「・・・分かつた。ありがたくもうおつかれ」

「はい」

エリンシアから差し出された皮袋を、アイクが受け取る。ジャラリと硬貨が擦れ合つ音がし、皮袋の重さが腕に伝わつた。

「さて、丸く収まつたところで次だな。我がガリア王国は、あいにく船を所持していない。となると・・・ディン軍がうようよいるクリミアに戻り、ベグーオンに行くための船を用立てるほか手段はない」

ライは腕組みをし、そう言つ。

「・・・他に方法がないなら、仕方ないか」

正直、アイクはクリミアには戻りたくはなかつたが、仕方なくライの意見に従うこととした。

「デイン軍の裏をかくにしても、いくらかの戦闘は免れないだらうから・・・それは覚悟しておいてくれ」

「分かっている。それでも・・・行くしかない。戦力不足はいまさらどうしようもないが、旅立ち前の戦支度は念入りにやつておくつもりだ」

アイクがそう言つと、ライが顔を上げた。

「戦力については、わずかながらも提供しよう。レテ！ モウディ！」

ライが呼ぶと、中庭の向こうで話をしていたレテとモウディがこちらにやってきた。モウディがアイクに笑いかける。

「アイク。モウディは、オまえたちと行くぞ」

「モウディ！ レテも・・・いいのか、2人とも？」

アイクがやつてきた2人に聞くと、今度はレテが、かなり不機嫌そな表情で答えた。

「・・・他の者は皆、ベオクと行くのを嫌がつたんだ。私だって、ベグニオンに行くのは震えが来るほど嫌だが・・・王のご命令とあらば、従うほかあるまい」

レテは嫌だろうが、アイクは2人が協力してくれたことに素直に感謝した。

「それでも、助かる。獣牙族の戦闘能力の高さは、何度も見せてもらつたからな」

「マかせておけ！」

モウディは元気に答えた。だが、レテはシンとした表情で、アイクを指差す。

「フン！ 慣れ合いつもりはない。心しておけ！…」

そして、モウディを連れて再び戻つて行つてしまつた。ライはその後ろ姿を見て、やれやれと肩をすくめた。

「まあ、あいつの憎まれ口は許してやつてくれ。オレは、王に報告を済ませて戻つてくる。アイク達は、それまでに出発の準備を完了しといてくれるか？」

「分かつた」

ライやエリンシアと別れ、アイクはひとまず自室に戻ることにした。荷物の整理を行うためだ。

だが、途中で自室がどこだったか、分からなくなってしまった。

「しまった…道に迷つたようだな。えつといこは…」

「ソニのベオク！ 貴様、ソニで何をシている！？」

アイクが周囲を見渡していると、城の見回りをしていたらしいガリアの獸牙兵がアイクを呼んだ。駆けつてくるガリア兵に、アイクは事情を説明する。

「部屋に戻ろうとして迷った。どっちの方が教えてくれないか？」

「・・・」

だが、ガリア兵の後に続いてアイクが歩き出すと、突然ガリア兵は大声で叫んだ。

「あーーー 近寄るな！！ もつと離れて歩いてくれ」

「ーーー」

アイクが思わず離れると、ガリア兵ははつとなつてアイクに頭を下げる。

「・・・スマン。王の命令で・・・ベオクとは親しく接しなければいけないのだが・・・まだ・・・慣れんのだ。本能で覚えてくるんだろう・・・先祖が・・・ベオクによつて奴隸とシテ虐げられていた時代の記憶が・・・血に刃つて受け継がれてくるんだ・・・」

ラグズがかつて、ベオクに虐げられていたことは、ライからすでに聞かされている。だが、まさかその記憶が遺伝されているほどにひどいものだったとは・・・。

アイクは、しばらく言葉を失ってしまった。

「・・・分かつた。離れて付いて行く」

「・・・テは、行こ」「

アイクは、ガリア兵よりもかなり後ろの方を付いて行くことにした。ラグズとベオク・・・この距離が縮まる時が、いつか来るのだろうか・・・。

部屋での準備もすぐに終え、アイクはひとまず他の団員の様子を見に行くことにした。だが、多くの団員はまだ準備に時間がかかりそうだった。

とつあえず、外に出たアイクは、中庭の一角にいた天馬を見つける。純白の天馬の傍らには、ピンクの髪をしたペガサスナイト、マーシャが、天馬に様々な装具を付けていた。

「これを乗せて、完了!」

最後に天馬の背中に鞍を乗せて縛り付ける。そこにアイクは、歩み寄つて声をかけた。

「準備がか?」

その声に気付いたマーシャは、アイクに頭を下げた。

「あ、アイクさん! はい、準備完了です!」

「思ったよりも、手際がいいんだな。・・・違うか、ミストがどんぐさこだけか？」

さつきミストの部屋に行つたらものすゞい剣幕で「お兄ちゃんつ！勝手に入つてこないで！！」と怒鳴られ、枕を投げつけられたのを思い出し、アイクは少し笑つ。おそらく、着替え中に誤つて入ってしまったのだろう。カギくらいかけておけばいいのに。

そうしてみると、マーシャが口を開いた。

「私、聖天馬騎士団で・・・支度は迅速にやるようになつて、訓練を受けてますから。だから、他の女の子より早くて当然ですよ」

「そうだつたな。しかし・・・あんたも義理堅いな。ベグニオンの聖天馬騎士団を辞めてまで来てくれるとは・・・」

すると、マーシャは不安な表情でアイクに聞く。

「やつぱり、迷惑でしたか！？」

だが、アイクは首を横に振つた。

「いや、ありがたい限りだ。前にも言つたが、見かけどおりの人員不足だからな」

「よかつた・・・えつと・・・アイクさん、私が騎士団を辞めたことなんですけど・・・気にしないでくださいね？ 辞めた理由は・・・アイクさんにお礼がしたかつただけじゃないから・・・」

「他にも理由があるのか？」

マーシャは、目を伏せる。

「はい。私・・・行方不明になつた兄を探しているんです。どうしようもない人なんですけど・・・2人きりの兄妹ですから。・・・あの時、海賊船でアイクさんに助けてもらつた時も、兄の消息を追つてたんです。でも、私一人だと・・・やつかい事に巻き込まれるばかりで」

「確かに。それで、傭兵团に入りたかった訳か。納得した」

「・・・呆れましたか？」

マーシャが上目づかいに聞いたが、アイクはそんなことはなかつた。マーシャの兄の行方を、彼なりに心配していたのだ。

「いいや。それより・・・兄さんが、早く見つかるといいな」

「はい、ありがとうございます」

ガリア王宮の正面玄関の前には、レテとモウティがすでに控えていた。2人ともとつぐに、準備を終えたらしい。アイクも、彼らのところに行つた。

「・・・」

レテは、目をつぶつて背中を柱に預け、貧乏ゆすりをしている。

「・・・憂鬱そうだな」

アイクが声をかけるとレテは目を開け、不機嫌そうな表情になる。  
「当たり前だろ？ くだらないことを聞くな。・・・遅い。みんな  
まだ揃わないのか？」

見渡した限りでも、まだ集まっているのはアイク以外に3、4人ほど。アイクはそれを見て、レテに謝る。

「悪いな。あんたたちみたいに、身一つで動ければ楽なんだろうが。  
・・武器の用意なんかは、結構手間取るんだ」

するとまた、レテは不機嫌そうになる。と言つた、レテの表情はこんな感じのものしか、アイクは見ていない気がする。

「『鉄』の武器か。ベオクは軟弱だ。あれがないと、まともに戦えないのだからな」

それを聞いてアイクは、レテの足の横に付けてある小さなものを見た。

「・・・だが、レテ。あんたも短刀を持つてるじゃないか。その足に付けてるのは、鞘だろ？？」

「これは・・・戦い用じゃない」

「なに用なんだ？」

「・・・肉を食べる時、小骨をとつたり・・・果実を口に入れる大  
きさにしたり・・・なかなか重宝するんだ」

「・・・」

アイクはそれを聞きつつ、レテの顔をじっと見る。レテは、思わず声を上げた。

「何だ!? 言いたことがあるなら、はつきり言え!」

「ベオクが嫌いでも・・・ベオクの作るものを使つただな?」

「いいものは、いい。当然の評価を捻じ曲げてまで、否定論に固執するのは愚か者のやることだ」

そこまで言つて、レテは頭を伏せて続ける。どこか表情が、悲しそうなものになつていてる気がした。

「・・・私だつて・・・ベオクの全てを否定している訳じゃない。  
ベオクが皆、お前のよひに我らと普通に接するなら・・・せつと・・  
・」

「レテ」

アイクの呼びかけに、レテはまつと顔を上げる。そして、恥ずかしそうな表情で必死に叫んだ。

「ぐぐだらない話をしちしまつた!! わ、私はもう行くからな  
ー!」

そして、そのままその場から逃げるよつと去つて行つた。

「・・・」（普通に接するなら、か・・・）

アイクは、レテがわざかにのぞかせた本心を、心中で反芻した。

やがて、団員全員が集まり、出発できる体制が整つた。獅子王カイネギスとその影であるジフカ、さらには数多くの獣牙族に見送られ、アイク達は出発をする。

クロニア王国の最西部の港町“トハ”で、ベグニオン行きの船に乗ることが決定した。港町トハまでは、ライも道案内として同行することになった。

グレイル傭兵団の、新たなる戦いへの旅立ちである。

## 新たなる旅立ちの日（後書き）

ベグニオン帝国を指す船に乗るために、一旦クリミア王国へ戻ることになったグレイル傭兵团。

クリミア再興に向けて、彼らの足は止まらない。

## 10章 ～捕虜解放～ 前編（前書き）

グレイルの後を継ぎ、傭兵団の新団長となつたアイクは、再びクリミア王女の護衛として雇われる。

次に目指す先は、テリウス大陸最長の歴史と、最大の版団を誇る帝国、ベグニオンである。帝国の藩国として誕生した歴史を持つクリミア王国を再興するためには、宗主国ベグニオンの支持は絶対に不可欠なものだつた。

また、ベグニオンが持つ強大な力の後ろ盾なき再興は不可能に近いといつ。

ベグニオンとガリアに国交はなく、険しい山脈により両国は隔てられてゐる。

傭兵团は、やむなく一度クリミアに戻り、船を仕立てて海路をとることになった。

一行は、案内役を買って出たガリアの戦士ライを伴い、ひとまずクリミアに戻るためにガリア王宮を後にした。

グレイル傭兵団は、順調に国境を超えて、無事クリミア入りを果たした。国境付近で警戒をしていたデイン王国軍の待ち伏せ部隊と遭遇することも、とりあえずのところは避けることができた。

暦は、5月の下旬になっていた。ここクリミア王国にも、夏が近づいてきたのだ。

国境を越えてしばらく進むと、唐突に森が開けた。彼らの行く手には、石造りの大きな建造物が建っている。付近にある看板には、「カントウス城」と書かれてあつた。ガリアとの国境付近にあつたメリテネ砦やゲバル城と比べると、まだ比較的新しい建物である。

「止まってくれ。港町への道中だし、せつかだからここに寄り道していいわ」

先頭を進むライが突然立ち止まり、振り返る。アイクは、前方に建っている城・・・カントウス城を見上げつつライに尋ねた。

「この城に、何があるのか？」

するとライは、カントウス城を振り返りつつ話しだした。

「ここにカントウス城は・・・デインに占領されて以降、捕虜収容所になつてゐる。そして、クリミアの遺臣が何人か、ここの中牢に捕らえられてゐるって話だ」

「ほ、本当ですか！？」

ライの言葉に驚きの声を上げるエリンシアに、ライは自信ありげにうなずいて見せた。

「確かな情報です

それを聞いていたティアマトも、腕を組んで考える。

「・・・クリミアの正規兵をうまく助け出し、仲間に加えられれば・  
・心強いわね」

グレイル傭兵団は、深刻な人手不足である。少しでも、仲間は多い方がいい。アイクもティアマトの意見に賛成した。

「そうだな。・・・危険を冒す価値はあるだろ？」

グレイル傭兵団は一旦城から離れ、見つけた小川の近くで小休止をとることにする。ついでに、カントウス城潜入のための作戦を立てていた。

「見たところ城の大きさは、それほど大したことではない・・・正面から突撃しても、大丈夫かもしれないが・・・」

アイクはあぶり肉を口に入れつつ、そつそつとやく。するとボーレも声を上げた。

「おお、だつたら正面から派手にババーンとやつてやるわゼー。『テインの連中を片つ端から、倒してやつてやるー』

だが、オスカーが反論をする。

「アイク、ボーレ。確かに城の大きさはそんなに大きくなはないが、中にどれほどの勢力がいるかは分からないんだ。それに、捕虜たちが人質に取られたりしたら、ますますやつかいことになるわ」

「・・・確かに、それもそうだな。さて、どうしたものか・・・」

オスカーの意見に、アイクは再び考え込む。横に控えていたティアマトが、口をはさんだ。

「とりあえず、ここは偵察に出でているセネリオの帰還を待つてからの方が、いいかもね」

しばらくして、セネリオが偵察から戻ってきた。

「アイク、城の内部について報告します。城の地上部には、かなり大勢のデイン兵が潜んでいる模様です。まともにぶつかりあうのはかなり危険でしょう」

「なるほど、そうか。じゃあ、突撃してやり合つのはやめた方がい

いな

「はい。それから地下部ですが、無数の牢屋が並んでいました。ただ、捕虜の人数は確認しただけでは3、4人ほどしかいません。地上に比べて、地下は見回り以外いよいよです」

「分かった。偵察、ありがとうな

「いえ・・・」

セネリオの報告を聞き、アイクは作戦を立てる。

「・・・このまま突っ込もうにも、かなり分が悪い。ここは、極力少人数で潜入し、無駄な戦闘は避け、捕虜の救出を最優先で行いたいな」

アイクがそう言つと、ライが待つたをかけた。

「アイク、潜入するだけなら少人数でも問題ないが・・・問題は、捕虜が閉じ込められている牢をどうやって破るか、だよな」

「・・・牢にはカギかかってるよな？ それを開ける手段となると・・・」

アイクは、再び考え込む。そんな彼に、セネリオが助言を出した。

「普通は看守が持っています。それを奪うしかありませんね。運が良ければ、見張りが持っているかもしませんが・・・扉を武器で壊すという方法もない訳ではありませんが、大きな音が鳴るから、まず間違いなく気付かれるでしょう。いずれにせよ、秘密裏に行わ

ないと。城中の兵を相手にする訳には、行きませんから

「なら、なるべく壁沿いに、敵を避けながら進むか。まずは、カギを手に入れることが先決……」

そこまでアイクが言った途端、近くの木の上からガサガサという音が聞こえてきた。ライが音がした方に向かつて、声を上げる。

「…………誰だつ！？」

全員が武器を手にとつて待ち構えた。デイン兵が潜んでいるのではないかと、勘ぐつたからだ。

だが、木の上から降りてきたのは、黒い装束に身を包んだ謎の男だった。

鋭い眼光を瞳に宿し、触れただけで怪我をしそうな雰囲気を醸し出す人物である。見た感じ中年の男のようだが、詳しい年齢は分からぬ。

その男は突然アイクに詰め寄ると、見た目の印象通り暗い声で聞いてきた。

「…………グレイル殿に用がある。どこだ？」

アイクの隣にいたセネリオが、そんな彼に対して逆に聞き返す。

「いきなりとは、ぶしつけですね。『用件は？』

「本人に話せば分かる。取り次いでくれ

セネリオの意見に対し、男はそう返す。じつやら、グレイルと関わりのある男のようだ。

その時、ティアマトが絞り出すような声で男に言った。深い悲しみの淵から、絞り出すような声で。

「・・・それは・・・無理な話よ・・・グレイル団長はもう・・・亡くなつたわ・・・」

アイクは、ふと思つた。ティアマトは、グレイルのことを思い出したくなかったようだ。

親父が死んで・・・彼女はかなりやつれたように見える。人一倍、ショックだつたのだろう。時折見せる元気な表情も、痛々しく・・・無理しているように見える。

無理もない。ティアマトはグレイルの思想に共感し、傭兵団と共に立ち上げたのだから。

「グレイル殿が死んだ？・・・そいつは、まいつたな」

謎の男は、そう言つて頭をかく。そんな彼に対しティアマトは、誰もがしたかつた質問を投げかけた。

「あなた、誰なの？」

「・・・フォルカ。グレイル殿に雇われていた

情報屋だ」

「親父に？」

思わずそう聞いたアイクの顔を見て、フォルカと名乗った男は話を続ける。

「・・・グレイル殿の息子か。だつたら、あんたでもいい。グレイル殿に頼まれて調べていたことがある。報告書を渡すから、代金をもらいたい」

「いくらだ?」

「5万ゴールドだ」

「5万・・・ずいぶん高いな」

「それだけの価値はあるぞ」

獅子王カイネギスから、エリンシアの手を経てアイクが受け取った額は、2万ゴールド。それよりもはるかに高い金額を、フォルカは要求しているのだ。

「・・・今はゴールドがない。しばらく時間が欲しい」

そうアイクが答えると、フォルカは少し声の調子を変えて聞いてきた。

「といひことは、払う気はあるんだな?」

「ああ、親父が依頼したことだ。それなりの理由があるんだ」

いつか代金を払うと言ったアイクに、ティアマトは不安な表情になる。

「いいの、アイク？ 本当がどうか分からぬものよ？」

だがアイクは、自信を持つて答えた。

「・・・中身を見れば価値は分かる。確認するまでは、俺たちとともにこいつを捕らえよう」

アイクのその考えに、フォルカはどこか楽しげな表情をした。

「なるほどな、さすがはグレイル殿の息子だ。・・・だが、そいつは金ができるから話だろう？ あいにく、俺はそれほど暇じゃない。この件は、ひとまずお預けだな。金ができたら呼んでくれ。ちよつとした町の酒場ならどこでもいい。主人に『火消しに用がある』と言つてくれれば、1週間以内に姿を現す」

そう言つて、フォルカは踵を返してその場から立ち去りつつある。その時だ。セネリオが彼を呼び止めたのは。

「・・・待つて下さい！ 情報屋、と言いましたね？ あなたが売るのは、情報だけですか？」

するとフォルカは、ほんの少しだけこちらを振り返る。鋭い眼光が、セネリオを捕らえた。

「・・・何が聞きたい？」

「カギ開けは・・・できませんか？」

「・・・一回に付き、50だな」

「50ゴールド・・・」

アイクは、セネリオに聞いた。

「こここの扉を開けさせるのか?」

確かに、カギを看守から奪つて開けるのは、発見される危険が伴う。  
・・彼がカギ開けができるのなら、雇うのも悪くはないと考えた。

だがティアマトは、反対の声を上げる。

「大丈夫なの? たつた今会つたばかりの男よ? こんな状況で・・・  
・ 素性の分からない人間を信用するのは、危険すぎないかしら?  
私は反対」

その意見に対し、セネリオも反論する。

「牢破りを成功させるためには、多少の危険は覚悟すべきです。カ  
ギを奪う手間が省けるだけでも、捕虜を助けだせる可能性は高くな  
る・・・試してみる価値はあると思います」

「・・・」

アイクは、2人の意見をよく聞いて考える。ティアマトもセネリオ  
も、どちらももつともなことを言つている。だが・・・やはり、こ  
こはフォルカの素性が怪しくとも、捕虜救出のためには活用すべき  
だろう。

「・・・フォルカ。こここの牢を破るのを、手伝ってくれないか?」

「金をえもうえるんなら、俺は構わない」

「ああ。扉や・・・もしあるのなら宝箱を開けた数の分だけ、後で必ず支払う。ティアマト、構わないか？」

先ほど反対していたティアマトに、アイクは一応意見を聞く。だがティアマトは、首を縦に振った。

「前にも言ったでしょ？ 団長はアイク、あなたよ。あなたが決断したのなら、私は従うだけだわ」

その後、アイクはフォルカも交えて作戦を再び立てることにする。

セネリオの話をもとに地下牢の見取り図を作り、見張りや捕虜、宝箱の位置を正確に割り出していく。捕虜救出後の逃走ルートも念入りに検討し、作戦は立てられた。

「じゃあみんな、今回の作戦をさう。何度も言つが、今回は捕虜の救出を目的としている。決して、カントウス城を攻め落とすのが目的じゃない。だから、今までとは全く違う戦い方となるだろう」

そこまで言つてからアイクは一呼吸置き、続ける。

「地下牢に潜入するのは、俺とフォルカ、そしてあと一人。その、

3人だけだ

この発言に、団員たちは皆ざわめいた。たった3人で何ができるのだ、といった意見が、多数出たのだ。だが、セネリオがその意見について説明する。

「今日は、戦うことが目的ではありません。敵に気付かれぬようには潜入するには、少人数の方が有利なんです。その方が敵に見つかる可能性も低くなり、行動も迅速に行えます」

団員は、それを聞いて反論を止めた。アイクが話を続ける。

「問題は、残り一人を誰にするか、と言つことだが・・・もしかしたら、歩けない捕虜がいるかもしない。そこで、できたらそう言った捕虜を担ぐことができる、騎馬に乗つた者がいい」

すると、マーシャが手を上げた。

「あ、じゃあ私が行きます！」

「いいえ、あなたはやめた方がいいです」

だがセネリオが、否定してしまつ。

「ええ~ 何で!？」

「天馬では、羽音や色で目立ちすぎてしまうからです。馬ならばゆっくり歩かせれば平氣ですけど・・・それに、アーチャーの姿も多く確認しましたから、いざ戦闘になつたら危険です」

「じゃあ、私も白馬だしやめた方がいいわね

ティアマトも自分の馬を見て、やつづぶやいた。  
残る騎馬系は、オスカーである。

「オスカー、一緒に来てくれるか?」

アイクが聞くと、彼は快く引き受けてくれた。

「もちろんだよ。捕虜解放、絶対成功させよう

「ああ」

アイク、オスカー、フォルカの3人以外の団員は、ひとまず城の外で待機と言つ形になつた。

出撃の準備をしているアイクに、ライが話しかける。

「じゃあ、オレはもう少しふり行つてくる。健闘を祈つてから、がんばれよ」

「何だ、みんなと一緒に待機してんじやないのか?」

「やつしたいのは山々なんだけど、オレも忙しくてね。終わり次第、  
合流するよ」

そつとライは、水色の猫に化身する。

「そりが、気を付けてな

「ああ、お前たちもな！」

ライは、元気に駆けだしていき、やがて森の中に消えていった。

「じゃあ、そろそろ行つてくる。ティアマト、もし城の方が騒がしくなつたら、待機メンバー全員を引き連れて突撃してくれ。そういうように、事を運ぶが

「ええ、分かったわ。そっちもがんばってね」

。ティアマトに留守を任せ、3人はカントウス城に潜入しに行く・・・

## 10章 ～捕虜解放～ 前編（後書き）

たつた3人で、出撃をしたアイク。

無事に彼らは、クリミアの捕虜たちを救出することができるのだろうか？

そして、突如アイク達の前に現れたフォルカとは、一体何者なのだろうか？

次回、「9章 ～捕虜解放～ 後編」

炎の紋章が蒼く輝くとき、戦いは始まる。

## 10章 ～捕虜解放～ 中編（前書き）

デイン軍が占拠してからは、捕虜収容所となつていてるカントウス城。ライの話によると、この城の中にはクリミアの遺臣が、数人とらわれているらしい。

港町トハヘに向かうアイクだが、傭兵团の戦力増強のためにも、ここで捕虜を解放することにした。

今回は、極力戦闘を避けることを目的とした行動である。  
城に潜入するのは、アイク、オスカー、そしてグレイルが雇った  
といふ、自称“情報屋”のフォルカ。

彼らは無事に、捕虜を解放することができるのだろうか・・・

## ～カントウス城～

アイク達3人は、無事にカントウス城に潜入を果たした。見たところ1階は、それほど警戒もされていないようだ。それが返つて、彼らにとつて都合がよかつた。

「セネリオやライの話だと、牢獄は地下にあるらしい。まずは、地下へ降りるための階段を探そう」

アイクが先頭を進み、その後ろをオスカーとフォルカが付いて行くという形で、彼らはカントウス城の1階部分を探索する。

オスカーは馬から降り、引いて歩く。騎馬の足にはめてあつた蹄鉄は音が響いて見つかりやすいため、ここでは外しておいた。

フォルカは、全く足音をさせずに静々と進む。気配もほとんど伝わらないため、アイクは時々はぐれてないか、不安になつて振り返つた。まあ、そんな心配はいらないのだが。

「・・・それにしても、さつきセネリオは兵がものすごく多いとか言つてたが・・・あまりいないな

「そう言えばそうだね。もしかしたら、別の場所にいるのかな？」

アイクとオスカーがそんな話をしていると、足音と鎧の金属音がガ

シャガシャと響いてきた。3人は慌てて、近くの物陰に隠れる。オスカーの馬は気性が穏やかだったため、静かに主人に従つて身をひそめた。

「・・・ん?」

3人が潜隱れている、たくさん積み重なった荷物の目の前で、デイン兵が足を止める。

「誰か・・・いるのか・・・?」

デイン兵は槍を構え、周囲に警戒をした。

(くそつ・・・早くどこか行つてくれ・・・!)

アイクはそう願う。だが、デイン兵のソルジャーは積まれた荷物の方に歩み寄り、調べ始めた。

(ここ)で発見されたら、まずい・・・頼む、あつち行つてくれ

その時だ。別の方から、別のデイン兵の声が聞こえてきたのは。

「おい、どうしたんだ? 何かあつたのか?」

「いや・・・何でもない、気のせいだ」

先ほどアイク達が隠れている場所を調べようとしていた兵士は、同

僚にそつ答える。

「 わつか……。それより、早く2階の講堂に集まれ。もつすべ、漆黒の騎士様の講演が始まるぞ! 」

( 漆黒の騎士! -? )

駆けつけてきたティイン兵が言つたセリフに、アイクは激しく動搖した。

( 漆黒の騎士が……親父の仇が……この城に来ているのか! -? )

その間も、ティイン兵たちの会話は続いた。

「 なに、もつそんな時間か! -? 」

「 ああ、あと3分で講演が始まる。地下牢の看守以外は全員参加つて話、忘れたのか? もつみんな、集まつてゐぞ! 」

「 も、そつだつた……わざわざ教えてくれて助かつたよ」

「 いひつて。それより俺、超楽しみなんだよな! 漆黒の騎士様のお姿見るの、初めてだし! 」

「 俺も初めてなんだよな……」「ひつむやこられん、急いで講堂に行こうぜ! 」

「 ああ! 」

ザツザツザ・・・

デイン兵たちの足音が遠ざかってから、3人は再び表に出た。アイクは漆黒の騎士がこの城にいると言うことに動搖していたが、漆黒の騎士が何者かを知らないオスカーは、そんなアイクに気付かずに口を開く。

「さっきの兵士たちの話だと、地下牢の看守以外の兵士は全員、講堂に集まってるみたいだね。これなら、見つからずに地下牢までは行けるね」

「あ、ああ・・・そうだな・・・」

程なくして、ようやく彼らは階段を発見した。降りた先は案の定、地下牢である。

先ほど作った見取り図を開き、指示を出す。

「フォルカ、ここから先はあんたが先に進んでくれ。看守の動きを見つづ、安全だと判断したら俺たちを呼んでくれ。捕虜がいる牢屋や宝箱を見つけたら、カギ開けを頼む。安心しろ、カギ開けの代金は後で払う

「・・・金さえ払うのなら、任せておぐがいい。“仕事”は、きっとやらせてもらひ

そう言つて、フォルカは先に看守の様子を見るべく、先行をした。それを見送つて、今度はオスカーに話しかける。

「オスカーはさつき言つた通り、俺と一緒に捕虜救出の支援を頼む。敵に見つからないよう、慎重に行つてくれ」

「分かつた」

その頃、地下の奥の方にある牢には、2人の捕虜が相部屋で囚われていた。片方は赤い鎧と兜をした騎士風の青年で、もう片方は茶色い重厚な甲冑を身にまとつた中年の大男である。

大柄の甲冑男は、つらそうな表情で赤い騎士に聞く。その声は、希望がほとんど見えないほどに、悲壮感漂つものだ。

「・・・なあ・・・騎士さん。わしらは、どうなるんでしょうかなあ？ 何人もおつた仲間は・・・デイン兵に連れて行かされたつきり、一人も戻つてくれやあせん・・・はあ・・・恐ろしいのお・・・」

そう言つて、彼は肩をがっくりと落とす。そんな大男に、赤い騎士は毅然とした態度で、激励の言葉を贈つた。

「・・・弱音を吐くな。たとえ、どんな仕打ちを受けようとも、クリミア騎士としての誇りを捨てず、耐えて耐えて、耐え抜くんだ」

だが、甲冑の中年男はその言葉に、ため息をつく。

「無茶言わんでくだせえ。わしゃあ、しがない民兵でさあ。・・・はあ・・・残してきた家族は大丈夫かのぉ・・・」のまま2度と・・・会えんのかのぉ・・・」

大男は、甲冑の中から小さな巾着を取り出し、握りしめる。男の家族が拾つた小さな石を巾着袋に入れただけの代物だが、彼にとつては家族の思いがこもつた、大事なお守りである。

いつしか彼は、目に涙を浮かべていた。

そんな中年男の様子を見て、赤い騎士は悔しそうに歯がみをする。寄りかかっていた壁にこぶしを、ドンと叩きつけた。

「・・・くそつ・・・せめて、武器があれば・・・」

そんな2人とは別の牢屋。そこにも、捕虜が捕らえられていた。

水色の鎧兜をし、明るい緑の髪をストレートに伸ばした、若い女である。

実は、彼女が捕らえられていた牢は、クリミアの女専用の牢なのだ。以前は、彼女以外にも大勢の女性捕虜が囚われていた。だが、この城の看守長であるダノミルに、次々と連れだされていき、今では彼女だけが残った。

ここにいた女性捕虜が、ダノミルに何をされたか・・・そう考える  
と、彼女は恐ろしい気持ちになつた。

・・・あと、1時間。あと1時間で、とうとう彼女の番が来る。ダ

ノミルに呼ばれ、物のよう扱われ……そして最後には、殺される。

だが、彼女は希望を捨てなかつた。

「・・・助けは・・・来る・・・負けない・・・」

目の前に並ぶ鉄格子をにらみつつ、そうつづぶやく。

一方アイク達は、すでに行動を開始させていた。

「フォルカ、近くの牢に一人、捕虜がいるはずだ。看守に気を付けて、牢を開けてくれ」

アイクの指示通り、フォルカは牢を開けに行く。すぐ近くに看守がいるにもかかわらず、フォルカは気付かれぬ。気配を消すのが、相当うまいのだろう。

「開けてきたぞ。これで、あとで500いだぐ

「助かった。あとで必ず払う」

アイクとオスカーは、フォルカが開けた牢屋に入る。

中には、僧服を着た背の高い男がいた。長い黒髪をしており、きれ

いな顔立ちをしている。壁に寄りかかり、眠っているようだ、アイク達に気が付かない。

「おい！ 助けに来たぞ」

アイクは、僧服の男をゆすって起こす。僧服の男は目を開けた。

「…………」

「あんたの、その服装……兵士じゃないな？」

男は自分が置かれている状況を理解したのか、アイクの目を見つめ答えた。

「私は……巡礼僧です。名をセフュランと申します」

セフュランと名乗った巡礼僧は、美しく、張りがある声でそう口に紹介する。

「僧がどうして捕まってるんだ？」

「……近くの村で、傷ついたクリミア兵の治療を行っていたところを連行されました。そして、審判も何もないまま、こうして牢に繋がれている次第です」

セフュランはそこまで言つて、口を開かず。話を聞いたアイクは、どこか疑問に思いつつも理解をした。

「そつか……だいたい事情は分かった。俺たちは、捕虜を解放しつきたんだ。あんたも早く逃げろ」

「助けてくださいのですか？ それは、ありがたいことです。差支えなければ、お名前を・・・」

「グレイル傭兵团のアイクだ。さあ、牢の外へ」

「うう」と、セフュランも立ちあがつた。

「分かりました。では、アイク殿。後ほど・・・」

牢を出たところで、オスカーがやつてきた。

「アイク、まずは一人目だな。この調子でどんどん、解放していく

「う

「ああ、敵に感づかれる前に、何とか終らせよ！」

続いてオスカーは、セフュランに話しかけた。

「司祭殿、その服装では移動に何かと不便でしょう。私の馬に、お乗りしますか？」

セフュランは、ありがたそうな表情でオスカーに礼を言い、馬にまたがる。

「ありがとうございます」

そんな彼らを、フォルカが呼んだ。

「おい、そろそろまた看守が来る。俺が脱獄の偽装工作するから、お前たちは隠してくれ」

そう言って、フォルカはさつきセフェランが入っていた牢のなかに行き、デコイを設置する。設置したデコイには、白い布をかぶせておいた。セフェランが着ている、僧服と誤認させるためだ。最後にもう一度力ギをかけ直し、出てきた。

セフェランがデコイとすり替わっていることに気付かずに看守が通り過ぎたのを確認してから、彼らはさらに奥に進む。

奥にも、無数の牢屋が延々と続いていた。中には、拷問の後が生々しく残つている部屋もあった。

一番奥の牢屋には、2人の捕虜がいた。赤い鎧兜をした者と、茶色い甲冑を着込んだものだ。

看守が来ていなことを確認し、フォルカが力ギを開ける。2人は早速中に入り、捕虜を助けた。

「あんた、クリミア兵だな!? 助けに来ただぞ!」

茶色い甲冑の中年男にアイクが呼びかけると、男は驚いた顔を見上げてきた。

「・・・ほ、本当か? わしゃあ、夢でも見とるんじゃないかな?」

信じられないといった様子の中年男に、アイクは首を横に振った。

「俺は、クリミア王女に雇われた傭兵だ。詳しいことは後で話す。とにかく、逃げてくれ」

「おお！ 王女の！ ありがたいことじや。よつこいしょ・・・う・・・体があちこちなまつてしまつて・・・あたたたた」

男は、自分の名をチャップと言った。起き上るのが辛そうだったため、アイクは手を貸す。ありがとうな、とお礼を言つチャップに、アイクは手招きをする。

「「」ひちだ！ 看守がまた回つてくるから、来る前に隠れろ」

「よ、よし・・・！」

そう言つて、アイクは先に行つてしまつ。自分よりもかなり年若い蒼髪の少年を見て、チャップは歩きだす。だが、歩き始めたところで彼は、疑問に思った。

「・・・はて？ 王様にはお子がおらんかつたような・・・」

「何をしてる！ 急げ！」

チャップの疑問は、アイクの声に吹き飛ばされた。自分が置かれている状況を思い出した彼は、急いでアイクの後に続く。

「はい、はーい！」

一方のオスカーも、赤い鎧の騎士に呼びかけていた。

「クリミアの方ですね？ 私は、あなたがたの味方です。牢のカギを開けましたので、この隙に逃げてください」

そう言って赤い騎士に近付くと、突然彼はオスカーに向けて、驚きの声を上げた。

「お、お前つ！？」

「え？」

オスカーが困惑していると、騎士は兜を脱ぎ捨ててオスカーを指差した。赤い騎士は、髪や瞳まで燃えるような赤い色をしていた。

「忘れもしないぞ、その糸目！ 貴様、クリミア騎士団第12小隊にいたオスカーだろ！？」

そうわめく赤い騎士に、確かにオスカーは見覚えがあった。

「君は、確か・・・ケビン？」

「そうだ！ お前の永遠の好敵手、ケビンだ！』

彼は、オスカーと同期の騎士、ケビンだったのだ。オスカーはかつてクリミア騎士団にいたころを思い出し、旧友との再会を嬉しく思つた。

ちなみに、カイン（FE紋章）やアレン（FE封印）などと同じく、FEシリーズ恒例の「赤い騎士」である。

「やあ、久しぶり。元気そうで何よりだ」

オスカーは、柔らかい表情になつてそう言つ。ケビンはそれを聞いて、腰に手を当てて返す。

「相変わらず、氣の抜けるような返事だ。3年前に除隊したお前が、なんだつてここにいる！？ ハツ、まさか・・・貴様、デイン側に寝返つたんじゃないだろうな！？」

「あ、いや・・・」

一方的に誤解をするケビンに、オスカーは口をはさむ。だが、そんな余裕与えてくれない。オスカーにつかみかかり、前後に激しくゆすりだす始末だ。

「ぐーつ、見下げ果てたやつだ！！ オレの永遠の好敵手としての誇りは、どこへやったんだ！！」

ゆすりれつつも、オスカーが答える。

「・・・私の所属する傭兵团は今、エリンシア姫に雇われているんだ。それで・・・クリミアの捕虜を解放しているところ・・・」

「エリンシア姫だと！？ 王宮騎士でもないお前が、どうして姫のことを知っている！？」

「いや、だから、姫は私たちの雇い主で・・・」

オスカーが説明しようとするが、ケビンは全く話を聞かない。し

かも、やたらと大きな声である。

「ハハーン・・・さては貴様、手柄狙いだな！？ オレより先に聖騎士 パラティン になろうつて、そういう魂胆なんだらう？」

「私は任務で・・・」

「くそう！ 貴様にだけは絶対負けんからなー！ 姫！ すぐにオレがお側に参ります！！」

そう言いつつオスカーを解放するなり、ケビンは猛ダッシュで牢獄の外へ飛び出していった。そんな旧友の後ろ姿を見つつ、オスカーは肩をすくめる。

「・・・騒々しさに磨きがかかったようだな。あれがなければ、いい騎士なのに・・・」

「Hリンシア姫ええ！…」

そう叫びながら牢屋から飛び出したケビンは、出ですぐのところアイクに腕をつかまれた。

「・・・頼むから、もっと静かにしていてくれ。今敵に見つかっては、まずいんだ。ほら・・・」

アイクが目配せした先を見ると、ケビンの声を聞きつけた看守が牢屋の様子を見に来ていた。牢屋の中にはすでに、フォルカがデコイを置いてあり、カギもかけてあつたので平氣だつたが。

その様子を見て、ケビンはアイクに素直に謝る。

「これは失礼致した。ここから脱出するまでは、静かにする。こっちも戦うにしろ、武器がないのでは話にならんからな。敵に背を向けるなどは、オレの骑士道に反するが……姫の大事……やむを得んのだ！」

「ああ、頼むぞ」

その頃残る一つの牢獄の前に、重厚な鎧を着込んだ、スキンヘッドの男がやってきていた。重歩兵よりも更に上位のクラス、ジエネラルの男である。

「ククク……」

この男こそが、こここの牢獄の看守長であるダノミルだ。ダノミルの姿を見て、囚われていた女性捕虜は驚く。

「……」

「さて、ネフニー。時間が来た。出て来い」

牢の鉄格子が開き、ネフニーと呼ばれた女性捕虜は腕をつかまれて立たされる。

「……どうして？　まだ・・・約束の時間じゃない・・・」

「細かいことを気にするな。まあ、いい子にしてるんだぞ。たっぷりと、大勢でかわいがってやるからな」

ネフェニーを連れて、ダノミルは看守長室へと向かう。

そんな様子を、物陰に隠れてアイク達は見ていた。オスカーが、怒りに震えた声を出す。

「くそっ・・・許せない、デインめ・・・！」

この後、ネフェニーと言つ女性がどんな目に遭つかは、容易に予想が付く。一刻も早く助けなければ、彼女が危険だ。

そこで、アイクは方法を考える。

「・・・セフェラン、チャップ、ケビン。あんたたちは、先にここから脱出していい。近くの小川のほとりに俺たちの仲間がいるはずだから、彼らに保護してもらつていってくれ。オスカーは、俺と一緒に行動だ。セネリオが言うには、看守長室には力ギはかかっていないらしいから、そこに突撃をする。フォルカ。あんたはその間、宝の回収をしていてくれ」

だが、その作戦に疑問を指摘したのは、オスカーだ。

「アイク、待つてくれ！ そなことしたら、騒ぎを聞きつけて敵

の増援が来るかもしれないぞ」

「ああ、確かにそうなるかもしれない。だから・・・この作戦はとにかく早く終わらせる。ダノミルを倒し、ネフニーを救出しよう！」

「分かった。アイクがそう言つなら、私も協力するよ

見回りをしている看守の目を避け、彼らは何とか看守長室の前までたどり着いた。

看守長室は牢獄からやや離れているため、見回りの看守はやつてこない。また、すぐ近くに外に出るための非常階段があるため、脱出も楽である。

「よし、じゃあここで行動を分かれる。あとで落ち合おう

捕虜だつた3人は非常階段へ。フォルカは宝の回収へと向かつ。そんな彼らの様子を見て、アイクとオスカーはうなずき合つた。

看守長室のドアノブに手をかけると、しっかりと回つた。やはり、カギはかけていないようだ。

「よし、IJのまま突撃するぞー。」

## 10章 ～捕虜解放～ 中編（後書き）

今回も、実際とはだいぶ異なる話になってしまいました。

実際は、ここまで話は濃くないんですが・・・もし読んでいて不快に感じてしまった方がいましたら、すみませんでした。

あと、この回は「中編」にしましたので、「じつ承くだせー」。

## 10章 ～捕虜解放～ 後編（前書き）

カントウス城に無事潜入したアイクは、驚くべき事実をテイン兵から聞く。

アイクの父グレイルを手にかけた張本人、漆黒の騎士が、カントウス城にやってきているというのだ。詳しい情報が知りたいアイクではあつたが、ひとまずのところはそれは置いておくこととした。

アイク、オスカー、フォルカの3人は、順調に捕虜の解放を進めていた。だが、最後の一人、ネフェニーと言う娘が、看守長のダノミルによつて別室に移されてしまったのだ。

アイクはフォルカに宝の回収を任せ、オスカートともに看守長室に突撃を試みるのだった。

「カントウス城・看守長室」

「・・・」

ネフェニーは、両手足を固く縄で縛られていた。彼女の目の前には、ダノミルと、3人のデインの剣士が、下卑た目線を送っている。

これから何が始まるのか・・・ネフェニーにはおおかた、予想が付いた。

(ここまで・・・か・・・)

そう、心の中でつぶやいた。

・・・その時だ。

ガチャツ・・・

「…？」

突如ダノミルの背後で、扉が開いたのだ。ダノミルと剣士たち、そしてネフェニーが見た先には、蒼髪少年と緑の鎧の騎士の姿。

アイクとオスカーが、入ってきたのだ。

オスカーが扉を閉めるのを横目で見ながら、アイクが剣を抜いて口を開く（ちなみに、この扉は防音素材でできていると、フォルカが言っていたので、中で大騒ぎになつても音は聞かれないので）。

「・・・武器を捨てて降伏しろ。そして、その捕虜をこっちに引き渡せ。それができないなら・・・斬る」

だが、ダノミルは全く動じる気配を見せない。それどころか、かえつて嬉しそうな表情となり、歓迎でもするかのように、両手を広げて話しかけてきたのだ。

「よく来た！ 心から歓迎するぞ。さあ、お前たちも俺の捕虜となり、楽しい獄中生活を送るがいい！」

まるで、気が狂つてるとしか思えない発言だ。オスカーは早速、馬上で鋼の槍を構える。

「ならば、ここで終わらせる。」

鋼の槍を構えたオスカーが、ダノミルに向けて馬を走らせる。だが、その目の前に剣士3人が立ちはだかった。

「おつと、まずは俺たちが相手だぜ」

剣士たちは、鋼の剣を構えてオスカーに斬りかかった。だがさすがは元クリニア騎士、無駄のない動きで、剣士たちをあっさりと屈伏させた。

その間アイクは、ダノミルに相対していた。ダノミルがアイクを見る目は、実に嬉々とした色をしていた。

「いいぞ、お前・・・そのふてぶてしい眼光こそ、俺が囚人に望むものだ。その眼が次第に希望の光をなくし、濁つて行くさまは・・・いつ見てもいいものだからな」

アイクはダノミルのその発言に、頭にきた。

「・・・ふざけるなつ！！」

怒りのあまり、鉄の剣をしまってリガルソードを引き抜くアイク。そしてそのまま、ダノミルに向けて突進をする。

「おやおや、ずいぶんと活きのいい捕虜だ。ならば、少しは大人しくさせないとな」

アイクがダノミルを斬りつける瞬間に、ダノミルはかなり大きな剣鋼の大剣で、攻撃を防ぐ。予想以上に素早いその行動は、漆黒の騎士を思わせた。

・・・もつとも、実際漆黒の騎士と比べたら、天と地の差があるだろうが。

「くつ！」

「その余りある元気は、我が収容所での重労働で使ってほしいものだ」

「冗談じゃない！」

アイクとダノミルは、つばぜり合いを行う。だが剣の大きさの差もあつてか、アイクが徐々に押されていった。

その時である。

「はあつー！」

ヒュン！

何かが風を切るような音がすると、ダノミルの横腹に槍が刺さったのだ。

「ぐつ・・・」

「アイク、私も手伝うー！」

オスカーが、ショートスピアを投げてくれたのだ。痛手を受けたダノミルは体制が崩れる。その瞬間、アイクは一気に有利になつた。

「でやああつー！」

いつたん離れたアイクは、そこからジャンプし、大上段からリガル

ソードをダノミルに向けて振り下ろす。薄暗い場所でもほのかに輝く刀身は、ダノミルのまとう黒い甲冑をやすやすと斬り裂いた。

「これで、終わりだ！」

崩れ落ちたダノミルに、オスカーは鋼の槍を突き出す。だが・・・

「くつ・・・まだだ・・・お前たちを・・・捕虜に・・・！」

「！！」

ダノミルは、傍らに立てかけてあつた鋼の槍を取り出す。それでもスカーラの槍をはじくと、オスカーを槍で突き飛ばしたのだ。なすすべもなく、馬から落ちてしまう。

「オスカー！！」

「くそ、油断した・・・」

あれほどの重傷をおつていながら、ダノミルは立ち上がる。落馬してしまったオスカーに向けて、槍を構えた。

・・・とその瞬間である。扉がわずかに開いた気がしたと思つたその途端、ダノミルが突き出した槍は、見当違いの方向に突き出されたのだ。彼の目の前に立っていたのは、黒い装束の男。

「な、なにい・・・」

愕然とするダノミルの前で、アイクは黒装束の男に声をかけた。

「フォルカ！　ずいぶん早かつたな、もつ宝の回収は済んだのか？」

「ああ。開けたカギは扉と宝箱、合わせて9つだ。あとで450円  
一ドル、きつちりいただく」

「ああ、分かっている」

「それと・・・通常の戦闘ならば、サービスしてやる。金は取らん  
から、安心しろ」

そこまで言つてフォルカは、ダノミルを向く。

「あんたには悪いが、これも“仕事”だ。悪く思わないでくれ」

そして、田にもとまらぬ速さでダノミルに近付く・・・

ザシュー！

ダノミルの首から、血が吹き出る。じつして、看守長は倒れたのだ  
った。

フォルカに「〇ゴーラードで頼んで、ネフニーの縄をほどかせる。やつれた様子の彼女だったが、確かに瞳には希望の光が戻ってきていた。

「その・・・助けていただき・・・ありがとうございます・・・」

そう言つたユニーに、アイクは答える。

「いや、当然のことをしただけだ。それより、他の捕らえられていた捕虜たちも、俺たちの仲間のところにいるはずだ。敵に気付かれないうちにここから脱出し、仲間のところに行こう」

「はい・・・」

こつして、捕虜解放は無事に終わった。

## 10章～捕虜解放～ 後編（後書き）

結局、この章は3回に分けて紹介する」としました。

長くなってしまったかもされませんが、どうかご一承ください。

同志、回し旗の下で（前書き）

カントウス城の地下牢でダノミルを倒したアイク達は、救出した捕虜たちとともに仲間のところへ駆けつけた。

同志、同じ旗の下で

（カントウス城付近）

「捕虜になつていたクリミア兵を連れてきた」

捕虜たちを連れてきたアイクは、仲間たちにそう伝える。みな口々に、アイクたちの無事を賞賛した。

その時エリンシアは、大急ぎでアイクのところへ駆けつけると、捕虜たちの方を見て心配そうな顔で話しかける。

「……あのっ！　きつどく存知ないでしょ？　が・・・実は、私は・  
・・・」

「エリンシア姫っ！」

クリミア王ラモンの娘エリンシアです、と彼女が言おうとしたのを、大きな声がさえぎる。エリンシアはあっけにとられた。

「え・・・あ、はい」

エリンシアを呼んだ大声の主は、真っ赤な鎧を着た騎士、ケビンであつた。

「自分は、ジョフレ将軍のもと、第5小隊隊長を務めておりました、ケビンと申します！　エリンシア姫をお守りするため、王都より街

道までお供したのは、自分の隊であります!」

ケビンが言った言葉に、エリンシアは驚く。

「……そんな……じゃあ、あなたはあの時の……」

「はいっ! レーニング様の命により、我が上官ジヨフレ将軍と自分の隊が、エリンシア姫の身をお守りし、ガリア王国へ落ち延びていてください手はずでした! しかし、我らの力及ばず、姫を見失うという失態を……まさに、まさにふがいなく……」うして、姫君のお姿を田にする機会に恵まれようとは……自分は、感動で、田の前が……ぐつ!」

ケビンは自分がしてきた境遇を語りついでいたのに、だんだんと鼻声になり、最後には泣き出しそうになってしまった。よほど、エリンシアに再び会えたことがうれしかったのだ。

(騎士の気持ちか……)

アイクには『騎士』と云うものがどんなものかは、正直よく分かつていなかつた。

(このケビンと並ぶ男が云ひ)と云うのが本當だとしたら、俺がエリンシア姫を助けた、あの街道にたくさん転がっていたクリミア兵の死体は、みなこの男の部下と言つことになる。エリンシア姫の命は……あの無数の騎士たちの命よりもずっと重い……といふとか?)

それと同時に、王侯貴族と云うものもまだ、正直よく分かつてはない。

(Hリンシア姫と俺は、異なる人間だといふことか？　いいや、同じ人間のはずだ・・・ベオクとラグズも、人間であることに変わりはない。じゃあ、王族、貴族とは何なんだ。そんなの、誰が勝手に決めたんだ・・・)

そんなアイクの考えには気付かず、Hリンシアは、嗚咽を漏らすケビンに質問する。

「ケビン・・・あの・・・他には・・・？」

「えつ！？」

慌ててケビンは顔を上げ、聞き返す。Hリンシアは、言葉が足りなかつたと反省しつつ、もう一度聞く。

「あなたの他にも生き残った兵は・・・いますか・・・？」

少し考えてから、ケビンは胸を張つて答えた。

「・・・もちろんです！　自分はふがいなくも、虜囚の憂き日を見ましたが・・・ジョフレ将軍、そして配下の何名かはディン軍の追撃を辛くもかわし、今もクリミアの地のどこかに潜伏しておられるはずです！」

Hリンシアはケビンの話を聞き、不安そうだった顔を明るくした。

「ジョフレが・・・生きている・・・？　ああ・・・それを聞けただけでも、心が軽くなる思いです。ありがとうケビン・・・生きて

いてくれて・・・本当にありがとうございました！

うれしさで涙するエリンシアに、ケビンはまた胸を張り、大きな声で答える。

「はっ！ もつたいたなきお言葉ー このケビン、これから先、エリンシア様のお側にてこの命果てるまで、お仕えいたしますーー！」

その後ケビンがオスカーのところへ行き、何やら騒いでいるのを見送つてから、アイクとエリンシアの2人は別の捕虜 チヤップとネフェニーのところへ行く。

「とりあえず、ケビンは問題ないとして・・・あんたたちは、どうなんだ？ エリンシア姫がクリミアの王女だと、信じてくれるか？」

アイクが2人に聞くと、茶色い甲冑を着た中年男、チヤップがエリンシアの方を向く。

「わしは、チャップ。このネフェニーつづ娘と同郷の田舎兵士です。わしらには、お偉い貴族さんのことはどう分かりません。でも・・・クリミアがこのままなくなってしまうのは困ります。デインの王さんは、恐ろしい人間らしいじゃないですか。田舎に残してきた家族がどうなるやら・・・わしゃあもう、心配で心配で・・・」

ネフェニーも、兜の下から小声でエリンシアに聞く。

「・・・王女様がデイン王に勝てば・・・この国は元通りになりま

すか？」

「努力します。父のようにはいかないでしょ」が、クロニアをこのままにはできません……」

ネフェニーの質問は单刀直入極まりなかつたが、エリンシアは優しく答えた。それを聞いてチャップとネフェニーは、互いにうなづき合ひ。

「だつたら、なあ、やる」たあ一つじや

「はい」

「わしらも戦います。お姫さんたちと一緒に、デインのやつらをクリミアから追つ払つてやります！」

チャップの力強い一言に、エリンシアは感謝した。

「あ、ありがとうございます!」

「失礼します……」

2人の話がまとまつた時、不意にアイクの背後から声が聞こえた。振り返つたところにいたのは、白い法服に錫杖を手にした、黒髪長髪の長身の男 セフェランだ。

「あなたは……」

アイクがそう言葉を発しようとするのとほぼ同時に、チャップとネ

フェニーが口々に呼びかける。

「聖者様・・・！」

「セフェラン様！ ご無事でしたか！！」

そんな2人に、セフェランは優しく笑いかける。

「チャップさん、ネフェニーさん・・・お2人とも、お怪我はありませんか？」

チャップは、申し訳なさそうな表情になる。

「セフェラン様こそ、わしらのために捕まってしまって・・・ほんまに申し訳ない」

「そんなことはよいのです。みなさんが助かったのならば、それで・・・」

「聖者様・・・」

チャップとネフェニーは、セフェランを尊敬の目で見ていた。

アイクはそんな様子を見て、疑念を抱いていた。そして2人がセフェランから離れたのを見計らって、彼に近づく。

「ちょっと、いいか？」

「はい？　・　・　ああ、あなたは先ほどの　・　・　おかげで助かりました。心よりお礼申し上げます」

アイクに対して深々と頭を下げるセフュランに、アイクは言葉を続ける。

「礼はいい。それよりも、あんたのこと興味がある。どうして、クリミア兵を助けた？」

「・　・　私の素性をお疑いですか？」

そう聞き返すセフュラン。だが、アイクはその通り、セフュランの素性を疑っていた。

「」の状況下で・　・　デインに楯突いてクリミアに味方する巡礼僧だ。疑うなと言つ方が無理だろ？

アイクがそう言つと、セフュランは少し考え、そして逆に聞いてきた。

「あなたなら、田の前にいる怪我人を放つておくことができますか？」

予想外の質問に、アイクは少し考える。そして、正直に答えた。

「・　・　通常なら、できない。だが、この状況下で、命と引き換えにやるとなると・　・　悩むところだな」

「ふふ、正直な方だ。だけど・　・　本当にその場に居合わせれば、あなたのような方は迷いませんよ。怪我をしている者を見れば反射

的に体が動く……そりでしょ？』

そう言われて、アイクは一つ思い出したことがあった。父が漆黒の騎士によつて、刺されたあの晩だ。

あの時、田の前には漆黒の騎士がいた。『ぐら父が重傷を負つていたとしても、その状況で救出に向かつたら、今度は自分の命が危ないことくらい、誰でも分かん。

しかしアイクは・・・それでもグレイルのもとに駆け付けずにいらねなかつた。

セフュランは、人の心の中が読めたりでもするのだろうか・・・？

「・・・あんた、何者だ？　その落ち着いた態度とか・・・やつぱり只者には思えないんだが」

アイクのその言葉に、セフュランは答えない。

「・・・とりあえず、今は失礼します。わよつなら、おも劍士殿。わひと、また・・・お会いする」ともあるでしょ？」

そう言つて、セフュランは錫杖を鳴らしつゝ、その場から立ち去つてゆく。

セフランの後ろ姿を、アイクはただ見送っていた。彼は一体、何者なのだろう？

・・・と、その時だ。アイクの背後から、呼ぶ声が聞こえたのは。

「・・・アイク」

気配は、全く分からなかつた。いつからそこへいたのか、振り返ると、茶髪をバンダナでまとめた黒装束の男が立つていた。

「フォルカか。何だ？」

「俺は当分、お前たちについて行ひたいと思つ。付かず離れずの距離で動くから、用がある時は声をかけるがいい。代価を払えば助けてやるや」

「何ですって！？」

ティアマトが駆け付け、フォルカに『信じられない』といった表情をする。アイクも、フォルカに聞く。

「どうこうことだ？」

「お前たちに興味がわいた・・・とでも言つておつか

だが、ティアマトはあくまでも慎重論である。

「残念だけど、それじゃ理由にならないわ

」「堅苦しく考へるな。別に困に入れると言つぱじやない

「だけど・・・」

「ティアマト」

アイクがティアマトを呼びかけようとした時、今度はセネリオも駆けつけてきた。どうやら話はずつと、離れた場所から聞いていたらしい。

「いい話じゃないですか？これから先、この男の能力は役に立ちます。胡散臭い男ですが、金で片が付くということはある意味、卸しやすいとも言えます」

「おい、本人の目の前だぞ」

アイクはセネリオの、例によつて徹底した現実主義な言動を注意するが、セネリオは静かに返す。

「気にするよつことは見えません」

「それはそうだが・・・」

ティアマトも、アイクに判断を聞いてくる。

「どうするの、アイク？ あなたが決めて」

アイクは、少し考える。

(ティアマトが言つよう)、正直フォルカの真意がどこにあるかは分からん。だから、怪しいといえば怪しい。だが、セネリオが言つていたように、うまく使うことができればこの先の戦いが有利になるだろ(・・・さて、どうしたものか・・・)

しばらくして、結論を出した。

「分かつた、フォルカ。あんたの好きにしろ」

それを聞いてフォルカは、フツと笑う。鋭い眼光が、妙に印象的だ。  
「じゃ、何かあつたら呼んでくれ。代価に合つた“仕事”をしてやるぞ」

「あの盗賊と言ひ、あの聖者様と言ひ、怪しい」との上ないな

また再び、アイクの背後で声がする。アイクが振り返ると、ちょうど水色の猫がピンク色の光を出し、化身を解いて人型に戻るところだった。

「ライ！ 用は済んだのか？」

「バッチリ。で、あの2人だが・・・

「ああ、どうにも胡散臭いな」

ライも、アイクと同じ考え方のようだ。

「まあ、聖者様の方は悪者って感じはしないけど」

ライはやつとたが、アイクはどうにも腑に落ちない。

「相手が敵なのか味方なのか・・・俺には見極める必要があるんだが・・・難しいところだな」

「判断を下すには、まだ材料が少なすぎるわ。ともかく、まずは先进もうぜ」

「ああ」

カントウス城を後にしたアイク達は、さらに歩を進める。速い速度で進まなければ、デイン兵と遭遇する危険も上がってしまうからだ。

行軍途中でアイクは、ふとカントウス城の中で聞いた話を思い出していた。

(漆黒の騎士が・・・あの城の中にいたんだ。親父の仇・・・俺はいつか必ず、お前を倒す。お前を超えて見せる・・・)

漆黒の騎士のことばは、ガリア王カイネギス以外の誰にも話していない。アイクは心の中で、漆黒の騎士に対する決意を新たにした。

「カントウス城へ

一方その頃カントウス城では、大騒ぎになっていた。

「……これは……！」

地下牢の見回りが、変わり果てたダノミルを発見したのが始まりである。なぜか看守長のダノミルの姿を見なかつたため、様子を見に来たのだった。

「てつ……敵襲だ！ 何者かが侵入し、ダノミル様を……！」

ちょうどそのころ、2階の講堂では漆黒の騎士の講演会が終わつた時であつた。

講演会の終了とほぼ同時に、地下牢襲撃の伝令が入つたのだ。みな、大騒ぎとなつた。だが。

「咄の者、鎮まるがよ。」

漆黒の騎士は、さつぱりと騒ぐ兵士たちをあつとこいつ間に落ち着かせる。

「ここの私が、様子を見てこよ。誰か案内してくれ」

「あ、でしたらお任せ下さい。」

漆黒の騎士に真っ先に拳手をしたのは、ソバカスが浮いた顔をし、背中に『』と矢立てを背負つた、スナイパーの青年。

「ノシトヒか。頼むぞ」

「はい、おまけです」

ノシトヒと言ひりしにスナイパーは、漆黒の騎士を連れて地下牢へ案内する。

「おまけです」

看守長室の扉を開けて中に入ると、そこにはダノミルと配下の剣士たちが、無残な姿となっていた。

「・・・なるほど。襲撃者たちは、看守たちの目を盗み、捕虜を解放し、彼らを倒して脱出した・・・と言つことか」

「はい、そのように思われます。また、捕虜たちはヨイとすり替

わっていました」

「ふむ・・・なかなか面白い策を使つ・・・」

感心する漆黒の騎士に、ノシトヒは指示を仰ぐ。

「漆黒の騎士殿。未だにこの地下牢を襲撃したものたちはこの付近にいるはずです。今からこの辺りに非常線を張れば、取り押さえられるかもしません」

漆黒の騎士はそれを聞き、うなずく。

「やうだな。私も、彼らと出合つてみたいものだ。もしかすれば、彼らは・・・」

「え、彼らがどうしましたか?」

漆黒の騎士が言いかけたことを、ノシトヒは聞き返す。だが、漆黒の騎士はそれ以上は言わない。

「いや、何でもない」

(もしかしたら、この城に侵入をした者は・・・)

漆黒の騎士は、ある人物を想像していた。あの夜、傷ついた父親を見て飛び出し、自分に向けて剣を振るつてきた、あの蒼髪少年を。

(・・・アイクよ。お前も、父と同じ懸か者か・・・?)

あの夜彼に言つたことと回りこじを、漆黒の騎士は心の中でつぶやいた・・・。

同志、同じ旗の下で（後書き）

アイク達は船に乗るべく、港町トハを目指す。

デインの包囲網を突破しつつ・・・。

炎の紋章が蒼く輝くとき、戦いは始まる。

## 港町トハ（前書き）

カントウス城からの捕虜救出に無事成功したグレイル傭兵团は一路、クリミア最西の港町、トハを目指す。

ガリアから道案内役を買って出たガリアの戦士ライは、国境警備隊隊長ということもあり、クリミアやデインの情勢に詳しかった。そのおかげでアイク達は、デイン軍と遭遇することなく、無事に進軍することができた。

カントウス城を立つて3日後の朝・・・潮の香りが強くなり、彼らの行く手に、大きな町が見えてきた。

暦は6月。強い日差しと高い気温・・・クリミアにも、本格的な夏が訪れつつあった。

## 港町トハ

（港町トハ）

「着いたぞ。ここがクリニア最西の港町、トハだ」

傭兵団が街門をぐぐつている時、先頭を行くライはそう言った。

ライ、レテ、モウディの3人はこの暑い中、頭からフードをかぶり、コートを着ている。

ラグズの特徴である、耳や尻尾をうまく隠すためだ。

彼ら自身もかなり暑い格好であることは承知だったが、ベオクの、ラグズに対する差別は根強い。ゆえに、仕方がないのだ。

ライの隣を歩くアイクは、何か違和感を感じつつ周囲を見渡す。

市場からは八百屋や魚屋などの威勢のいい声が響き、路地裏では子供たちが楽しそうに、地面に描いた円を跳ぶ。

野良猫がよく焼けた魚をくわえて駆けだすのを、エプロン姿のおばさんがお玉を振り回しつつ追いかける。

「じぐじく平和な町が、広がっていた。とてもじいが、敗戦国とは思えない。

「……どうしてことだ？ 普通に賑わっているように見えるが…」

「じいじにはまだ、デインの手が届いていないからな。ほとんど影響が出てないんだろう。デインは、まず王城を陥落させ、王都を掌握し、そこから着々と侵略の輪を広げている……つまり、確實にな」

やはり、ライは各国の情勢についてはかなり詳しいようだ。アイクはそんなライの説明に納得する。

「やつが、じいの住民も……全く知らないわけでもないのか」

すると2人の話を聞いていたのか、セネリオも一番前までやつてきて話に入ってきた。

「無知であるがゆえの余裕……ですね。じいの住民たちは、敗戦国の民がどんな扱いを受けるものなのか知らない」

セネリオは、目をつぶる。どこか、いつもまして冷たい表情をしつつ、話を続ける。

「……クリミアは、平和で恵まれた国です。王家の気質が穏やかなせいか、領地間の争いもなく、大がかりな 国全土を巻き

込むような 戰はもう何百年も起きていません。デイン王国との確執による戦いは幾度となくありましたが・・・被害を受けるのはいつも、デインと接している地域・・・つまり、王都より東側ばかりでしたから

だがアイクは、それだけの理由では納得できず、セネリオに反論する。

「と言つて、ただじや済まないことくらいは俺でも想像つくぞ？偵察の時、出会ったデインのやつら・・・俺たちがクリミア側つてだけで、即、襲ってきたぐらいなんだし」

その反論にも、セネリオは淡々と答える。心底呆れたような声で。

「人間は団太いものです。自分に身近な不幸以外にはとても鈍感にできている・・・だから、自分には関わりのない悪事には見て見ぬふりをするといふことができる。自分や、自分の家族に起こる不幸でなくてよかつた、と胸をなでおろしてね。だって、所詮は他人事なんですから」

「だが、この国で起きた戦だ。他人じやなく自分のことだらう？」

アイクは、そうセネリオに言つ。セネリオは、街並みを無表情で見渡し、つぶやいた。

「・・・デイン軍がここにたどり着いた時・・・彼らは思い知ることになるでしょう。平和に慣られ、他の不幸を省みなかつた自分たちの末路がどんなものかをね。同情の余地はありません」

「・・・」

セネリオが再び隊列の後ろへ戻つて行ったのを見て、ライがアイクに話しかけてきた。

「なんとまあ、眞実だからこそ言にづらうことをしつけずけど・・・この傭兵团は、ずいぶんおもしろい参謀をお抱えだ」

アイクは、そんなライの声を聞きつつ、セネリオの背中を見送る。

「・・・わりと何に対しても手厳しいといひはあるんだが・・・いつもとは、様子が違つたな」

その隣で、ティアマトも仕方なさそうな表情になる。

「仕方がないでしょ？ この町には、私も少し呆れたわ。もう少し緊張感を持てないのかしら・・・セネリオは敏感な子だからこいつう雰囲気、耐えられないんじやない？」

アイクとティアマトの後ろで、ライは独り言を話しだす。

「知つたといひでビリジョウもならないから、知らぬふりをする・・・つてこともある。ま、生まれに恵まれなかつた者からすれば、恵まれた者がそのことに気付くことに生きていいくことこそが妬ましい、か・・・」

「ライ、どう言つ意味だ？」

「独り言だ、忘れてくれ」

「？ あ、ああ・・・」

ライの意味深な独り言は、何なのだろうか？ アイクは少し疑問に思つた。

まるで空氣を変えるよつて、ライは明るい声で話しだした。

「さて、オレは船の手配を済ませてくる。アイク達はその間に、支度を整えていてくれ。これから旅に備えて、いろいろと入用だからな」

そつまつて、ライはさつと駆けだして行つてしまつた。

ティアマトは、ベオクの町でラグズがたつた一人で行動するのを心配していた。

ガリアとクリミアは確かに同盟を結んでいるがそれは上層部だけで、民衆にはほとんど浸透していない。それを考えての心配であつた。クリミアでも「半獣」という言葉もまかり通つている。

だがライが言つたのは、クリミア国王がラモン（エリンシアの父）の代になつてから、以前よりもだいぶマシになつたらしい。以前はいきなり襲われることも多かつたらしいが、最近ではめつたないのことだ。

そもそもリイ自身、安請け合ひをしたわけではないらしい。ツテがあつてのことだ。

残った傭兵团は、町の中央の広場で時間までに集合とし、それまでは各自、自由行動にまわることにした。

港町トハ（後書き）

どうも、執筆を再開いたしました。

また、よろしくお願ひいたします。

## 11章 ～流れの血の色～ 前編（前書き）

港町トハにたどり着いたアイク達は、ライが船の手配を済ませるまで、自由行動をとることにした。

戦争に負けたところに、この町ではまるで何事もなかつたかのように、安穏とした空気が漂う。

アイクは、ただ呆れるしかなかった。

## 11章 ～流れの血の色は～ 前編

（港町トハ）

アイクは、一人で行動をしていた。自分の装備や持ち物を買いそろえるのももちろんだが、グレイル傭兵团の団長として、各地の情勢や海上での気候といった情報も、集める必要があると考えていたからだ。

「ここに来るまで世話になつたライとは、この町で別れることになる。

「よう、そここの旅人さん！ 何か買い忘れないかい？ おれの店なら、どんなものでも他よりもずっと安く買えるよ。ちよいと覗いていいっちゃあ？」

通りを一人で歩いていると、露天商の青年が手招きをしつつ、呼びかけてきた。アイクは、その青年に近付く。

「ちょっと尋ねたいんだが？」

「はいはい、何だい？」

アイクは周囲を顎でさしつつ、尋ねる。

「この町の人間は、デインのことをどう思つてゐるんだ？ 奴らに支配される前に、クリミアから逃げ出そうとは思はないのか？」

すると、青年は首をすくめた。

「……逃げる？ めつそうもない！」

「だが、クリミアは戦争に負けたんだぞ？」

「ああ、知つてゐるや。だけどおれたち平民には、あんまり関係ないと思うけどなあ。だつてそうだろ？ 誰が上にいたつて、どうせ、おれたちには顔もよく知らない雲の上のお人なんだし。極端に税の額が変わつてなら、悲鳴を上げるけど……デイン王つて言つても、同じ人間だろ？ おれたちが働いているから贅沢ができるんだ。だつたら、おれたちをそう粗末に扱うこともしないだろ？ 今と変わらない生活をさせてくれるなら、おれは、そこまで気にしないけどなあ」

青年は、のんびりした表情でそつ話す。だが、アイクは違つた。

(・・・こいつ、どうしてそこまで落ちつけるんだ？ デインがそんな、甘いことするとでも思つてゐるのか？ あいつらは、敗戦国の人間にはどんなことをしてもいい、そう考へてゐるんだぞ……しかも、大勢のクリミア兵や傭兵がクリミアのために戦つている一方で、どうしてそんなことを言つていられるんだ……)

アイクの目は、明らかに怒つていた。だが露天商の青年は気付かず、今度はのんびりした表情を、まるで小バカにしたような表情に変える。

「・・・あ、でも、ガリアが攻めてきたってんなら話は別だぜ。あの野蛮な半獣どもに國を乗つ取られたら・・・おお、怖っ！ 考えたくないね」

そう言つて、青年は笑い声を上げる。どう見ても、ラグズをバカにしている笑い方だった。

「・・・」（じこつひ・・・・・）

アイクは、青年に怒りを募らせる。無意識に、じぶしに力が入った。

しかし、すんでのところ田の前の青年を殴りつとする自分を抑えた。そして踵を返して、笑う青年を無視し、さっさと通りの雑踏へ歩き出した。

「・・・え、あ、ちょっと！ だんな！ なんだよ、冷やかしならおととこきやがれってんだーー！」

露天商のそんな叫びを背中で受け流して、アイクは歩き続ける。

気が付くとアイクは、港までたどり着いていた。まぶしい日差しがみなもを反射し、水平線の上には入道雲が立ち上る。町中の暑い空気とは対称に、潮風が心地よい。

さつきアイクは頭に血が昇つて、うつかりあの露天商の青年を殴つ

てしまつところだつた。

傭兵団の団長として、もしさんな問題を起こしてしまついたら……

・アイクはそつ思つと、危ないとこりだつた、と反省する。

(少し、ここで頭を冷やすか……)

そう思い、港湾の岸壁に腰を下ろし、すぐ後ろに建つてゐる灯台の壁に、背中を預けた。

そんな時だつた。アイクは、向こうの岸壁にいる人影に氣付いた。茶色い甲冑を着た人物……チャップだ。

「・・・」

チャップは、一人でいた。手のひらに何かを乗せ、じつと見てゐる。

「何を見ているんだ?」

アイクはチャップに近付き、そつ話しかける。するとチャップは、いつの間にか後ろにアイクが來ていたことに驚く。

丸い顔の、人のよさそうな中年だ。彼は手のひらに乗せた古びた巾着袋を見せ、静かに話しだした。

「いやあ・・・これはね、わしが家を出る時・・・家族が持たせてくれた、お守りですわ。うちは貧乏なんで、使い古した小袋にそれが拾つた小石が詰まつてゐる・・・それだけのシロモノなんですがね。わしにとつては・・・大事なものでねえ。毎日、こうやつて

何回も、取り出しへは話しかけとるんですね。『みんな元気かい？』

父ちゃんは、がんばってるぞ。絶対、帰るからな』って。……情けない話なんですがね、いつもせんと、わしゃあ・・・戦うことが恐ろしくて・・・』

そこまで言つて、チャップは巾着袋をしまう。彼が言つとおり、どこか震えていたように見えた。

チャップとネフェニーは、クリミアの片田舎出身の民兵だといふ。国に徴兵されたのか、自ら志願したのかは分からぬが、どちらにせよ、大勢の村人に見送られて、軍に参加したのだろう。

軍に入った以上は、もう命の保証はない。いつ死ぬか分からぬいうな日々を生きるのは、恐ろしくて当然だ。

ましてや彼らは、戦いの経験もなければ、訓練もろくに積んでいないに違ひない。アイクのように、生まれながらの戦士として、厳しい訓練に耐え抜いてきたような人間とは、全く条件が違うのだ。

「・・・無理せんでも、笑つてくれて構わんよ。いい年して、情けない親父じゃってね」

無表情で話を聞いていたアイクに、チャップは作り笑いでそう言つてきた。だが、アイクはそれを否定する。

「情けなくなんかない。あんたは、家族のために戦おうとしている強い人間だ。あんたの家族は・・・きっと、あんたを誇りに思つている」

そつとこいつつ、アイクはチャップにある人物の面影を重ねる。

『命令は一つだけだ、誰も死ぬな！… 血の繋がりがあるとかないとか、そんなことはどうでもいい。俺たちは、一つの家族だと思え。家族を悲しませたくなければ、生き伸びろ！』

そつ、グレイルもまた、家族のために戦った。結果的には家族を悲しませることとなつたが、アイクはそんな父を誇りに思つていた。

「…ズツ、ズズツ…、うん…、ありがとう…、ありがと…、よあ…」

チャップもまた、家に残してきた家族のことを思つ。大家族だった。

畠仕事を終え、自宅に帰ると、たくさんの子供たちが出迎えてくれていたのだ。「父ちゃん、おかえり！」そんな声を、また聞きたい。聞かなければならぬ。

田の前の少年の言葉は、チャップに確かな勇気を与えたのだった。

港でチャップと別れたアイクは、今度は情報を集めるべく、町の酒場に赴く。

酒場には、大勢の船乗りやら「ロシキやらが、昼間から酒を飲んで呑ちゃん騒ぎを起こしていた。客から情報を聞き出すのはひとまずあきらめ、カウンターに向かう。

先客がいた。カウンターに座つてマスターと話しているのは、黒装束をまとう茶髪の男。

アイクは、フォルカの名を呼んだ。

「フォルカ」

「アイクか。済まんが今は取り込み中だ。後にしろ」

「フォルカはこちらを全く向かず、そいつ」

「分かった」

仕方なくアイクは、待つこととした。

酒場のマスターがフォルカの目の前に、真っ赤な液体の入ったグラスを差し出す。

アイクは酒のことは詳しきなかつたが、あの赤い酒は、この酒場の看板に描かれていたものと同じだつた。おそらく、この店で一番高いものなのだろう。

赤い酒を一口飲んでから、フォルカが口を開く。

「依頼の報酬金の残り半額を受け取りに来た。3万だ」

右手を差し出し、そいつ言ひつ。

「なるほど、さすがは“火消し”……では、残額を支払おう」

マスターも、すでに金を用意していたらしい。カウンターの下から、皮袋を取り出してフォルカに渡す。ジャラリと音がした。

フォルカは、その皮袋を持ち上げて、重さを確認する。どいつもやら彼は、重さを見るだけで袋にいくら金が入っているかが、すぐに分かるらしい。

「……確かに、受け取つた。また、俺の力が必要になつたら呼ぶがいい。きつちりと“仕事”させてもらひ」

そう言つて酒を飲みほし、料金を払つて、フォルカはカウンターを後にした。

「アイク、待たせたな。何の用だ？」

アイクに向き直り、そう聞いてくる。

「いや、別に大したことじゃないんだが・・・あんたは、やつぱり俺たちと同じ船にものるのか？」

「当然だ。一緒に行動させてもらひつと申つただひつへ。」

「やはりそつか・・・なら、あんたも集合時間にはちゃんと、広場に来い。遅れたら置いて行くからな」

フォルカはそれを聞いて、フツと笑う。

「たとえ置いていかれようが、問題はない。気にするな」

そして、そのまま酒場を去つてゆくフォルカ。酒場にたむろしていた客たちは、なぜかフォルカを避けて道を作る。そこを悠々と歩いて行き、彼は出ていった。

振り返ると、たらこ層の大男が、アイクをつかんでいた。  
酒場のマスターからも、あまり有益な情報は出なかつた。仕方なく、酒場を出ようとしたアイクは、突然腕をむんずとつかまれた。

「おひ、兄さん。」この町じや見ない顔だな。旅の傭兵か？」

見かけによらず、気さくな感じの男だ。アイクはとりあえずつかまれた腕を振りほどき、答える。

「まあ、そんなところだ」

たら、「唇の男は、アイクの腰に佩いた2本の剣  
ルソードを見て、聞いてきた。

「剣を帯びて・・・なかなか強そうじゃねえか。もし次の仕事にあ  
てがないなら、自警団に入らねえか？」

「自警団?」

たら、「唇は、疑問顔のアイクに得意そうな表情になつて答えた。

「町のために悪漢をぶちのめす集団だ。腕に自信がある奴なら、大  
歓迎だぜ?」

「どうやら、この男はこの町の自警団の団長らしい。アイクは少し考  
え、首を横に振る。

「・・・悪いな、先約がある」

「そりが、残念だぜ。船にでも乗る気かい?」

「まあな」

「だつたら、これをやるぜ」

たら、「唇の自警団長は、一振りの剣を取り出し、アイクに見せる。

「何だ、これは?」

美しい鞄もさることながら、すらりと抜かれた刀身は、まるでさざ波のように波打っている。かなり刀身は長めで、重量もそこそこあります。

りさうだ。

柄と刀身の境には、碧色の玉がはめられてあった。

「とつておきの剣だ。海に出るなり、絶対役立つはずだ

「いいのか？」

田警団長は、快くうなずいた。

「ああ。・・・その代わりと言つちゃあなんだが、もし、用が終わつてこの町に戻ることがあつたらその時は・・・田警団のひともう一度、考えてみてくれ」

「・・・分かった。ありがたくもらつておく

とりあえず、酒場を出て時計台の方を向く。すると、もつすぐ集合の時間だった。

アイクは最後に、装備などの確認を済ませ、集合場所の広場へ急いだ。

## 11章 ～流れの血の色～ 前編（後書き）

話続きですみませんね（汗）

次回は、ちゃんと戦いますので。

あと、みなさんお待ちかねのしつこくハウス、もう間もなく開演です～！

## 11章　～流れる血～ 中編（前書き）

港町トハでの住民感情は、アイクの予想を遥かに超えたものだった。彼らは、愛国心などほとんどなきに等しいだけでなく、かなりラグズに対する差別も強いのだ。

町の中での準備を終えたアイクは、集合予定の広場に到着する。

今回は、かなりアイクが原作以上にひどいことをしてしまいます。  
ご了承ください。

## 11章 ～流れの血の色～ 中編

（港町トハ）

アイクは、集合場所に定めた広場にたどり着き、周囲を見渡してみる。だが、まだほとんど誰も集まつていなかつた。いや、正確に言つと、エリンシアしかいなかつた。ぼんやりと、通りの方を見でいる。

「エリンシア姫」

アイクは、エリンシアに歩み寄る。例によつて姫は、とても驚いた様子で振り返つた。

「あ、アイク様……どうかなさいましたか？」

「いや、ちょっとしたことなんだが……何を見てたんだ？」

すると彼女は再び通りの方に顔を向ける。しばらくして、声が聞こえた。

「……町を、見ていました。私は、自分が暮らしていた離宮との近くの場所しか知りません。こうして人々が暮らしている様子を見るのは初めてで……何もかも、目新しくて。これが……町、なんですね？ 活気があって、みんな楽しそうで……」

無数の人間で、商店街はごつた返していた。

アイク自身、町と言つものはあまり慣れてはいない。だが、エリン

シアはそれ以上に全く知らないのだ。

隠されてきた、王女。世間から隔絶された存在。全く、外の世界を知らなかつた彼女にとつて、今はどのような思いを抱いているのだろう。

デインによる突然のクリミア侵攻。そして、彼女の目の前でアシュナードの手にかかつた両親。戦場で散つた彼女の叔父、王弟レニング。デインの追撃によつて壊滅した、ケビンが率いていたクリミア第五小隊。

・・・そして、謎の存在によつて殺害された、アイクの父グレイル。

彼女の周りで、たくさん悲劇が起つた。おそらく、普通の人間とは比べ物にならないほどの悲劇。しかも、彼女が生きてきた17年間の間は、外の世界を全く知らなかつたのだ。

晴天の霹靂などという、生易しい話ではない。

デインの王都奇襲のその日、彼女の人生全てが変わつてしまつたのだ。

「まるで、何も起きなかつたみたいですね。すぐ近くで、大勢の人間が死んだなんて・・・嘘のよつ・・・」

エリンシアは、商店街の方を向きつつさうつぶやく。

「ああ・・・」

アイクは、どう答えればいいのか分からなかつた。

その時だつた。町の時計から、午前10時を表す鐘の音が響いたのは。集合予定の時間だつた。

だが、周囲を見渡してもまだ、団員は集まつていなかつた。

「もうそろ時間だが・・・みんな、まだかかりそうだな」

「アイク様は、もうよろしいのですか？」

エリンシアは、やう聞いてきた。おそれく、エリンシア自身も用意はもういいのだらうか。

「俺は、剣があればそれでいい」

自信あり氣といふか、至極当然にといふか・・・アイクは、それだけ答える。右手で、リガルソードの柄を軽く触つてみた。

「剣だけ、ですか？」

「ああ。あとは・・・」のマントがあればビニでも歸れるし、食つものも・・・まあ、何とかなるだらう」

それを聞くと、エリンシアはクスクスと笑いだす。ビニがその皿は、うらやましそうな色を宿しながら。

「フフ、それは素敵ですね」

「そうか？」

「はい、とっても」

アイクはマントを正しつつ、肩をすくめた。

「・・・王女様つてのは、よく分からんな」

ところで、この町の診療所でアイクは、負傷していた左腕を診てもらっていた。すると、もう完全に完治だ、と言われたのだった。

長い間彼を不自由にさせていた左腕が、ようやく治ったのだ。

医師の見立てでは、「全く動かない状態から、ここまで早く治るの言つことはめったにない」とのことだった。常日頃から過酷な状況で、鍛えられた人間だからこそその治癒力なのではないか、とも。

何はともあれ、彼はこれでまた、全力で戦うことができるようになつたのだ。

その時である。突然、周囲の空気が変わったのだ。辺りの人々が、騒ぎ出す。

「何だ？ 急に騒がしく・・・」

周囲を見渡すアイク。そんな彼に、エリンシアはある一店の方角を

指差し、注意を向けさせた。

「アイク様！ 町の入り口の方に人が集まつて……」

そちらの方を向いたアイクは、驚きの声を上げる。

「あれは……！」

港町トハの南西にある街門。そこに、大勢の人だかりができていた。人だかりの向こう側に見えるは、黒い鎧の兵隊たち。

デイン王国軍の魔手が、この町にも届いたのだ。

兵隊たちの先頭にいるアクスナイトの「デイン兵」が、手にした斧を振り上げつつ、トハの住民に呼び掛ける。

「聞け！ この町にクリミア軍の残党が紛れ込んだとの報告があつた！ これより、町全体をデイン軍が封鎖する！ 何者も、我が軍の許可なしに町を出入りすることを禁ずる！ よいか！ 船を出航させることもまかりならん！ …」

広場の片隅でその声を聞いていたアイク達のもとへ、ティアマトが駆け付けた。

「・・・アイク。デイン軍が・・・」

「・・・分かっていぬ。このまま、やつらに見つかることない船に近付くしかないだらうな」

「ライは?」

ティアマトがアイクに聞くと、アイクは周囲を見渡してライを探す。

「まだ・・・いや、来たようだ。ライ、こっちだ!」

港の方から走つてくる、フードヒーネットを身に付けたライを見つけ、アイクは手を振つた。

すぐに、アイクのもとこやつてくれる。町の入口の方を顎で指示しつつ、ライは困り顔を浮かべた。

「ヤバいことになつたな・・・

「首尾は?」

「全て完了だ。とにかく、ここをうまく抜け出して港へ向かうんだ。そこに、ナーシルつていう浅黒い肌の男が船を用意して待つていて。ナーシルは、信用できる男だ。お前たちのこともだいたい話しているし・・・船に無事、たどり着きさえすれば、黙つてもベグニオンまで連れてつてくれる手はずだ

どうやら、ライは無事に船の手配を済ませたらしく。アイクは、ライにもう一つ聞きたいことがあった。

「分かった。……なあライ、お前はやつぱり、ガリアに帰るのか?  
? できたら、俺たちと一緒に来てもうえるとうれしいんだが」

「そうしたいのは山々なんだけどな、『トインの動向が気になる。オ  
レはガリアの国境警備隊長だ。戻って、王に報告を・・・』

ライが、そこまで言つた時だつた。

たまたま走ってきたらじー女性が、ライにぶつかってしまったのだ。

ドシーン――

「あやあつー?」

ライにぶつかった女性は倒れてしまつたが、すぐに立ち上がりて頭  
を下げる。

「『』、『めんなさ』ー! あたし、ちよつとよみが見してて・・・

ライもぶつかった女性の方を向く。

「いや、いひひひ・・・」

だが、ライがやつ言いかけた時だつた。頭を上げた女性は、顔を恐  
怖に歪めて固まつていた。信じられないものを見ていくような目で、  
ライを見る。

そして、叫んだ。

• • • !

どうやら、先ほどぶつかった衝撃で、ライがかぶっていたフードが取れてしまつたらしい。彼の、水色の髪を生やした頭には、はつきりと猫耳があつた。

「ほ、本当だ！」

「半獸だ！」

「なんだって、こんなとこにわざわざ来てやがるんだーー。」

野次馬たちは、ライをまるで汚いものを見るかのような目で、そう罵る。対するライは、無表情のままコートを脱ぎ捨て、野次馬たちを見やる。

「トトで隠れていた水色の尻尾が、自然と逆立った。だが、彼は何も動かない。

すると突然野次馬の一人が、ライに殴りかかったのだ。しかしライ

は、それをよけよけともしなかった。

ライの顔面に赤く、じぶしの跡がつく。

それを契機に、一斉に野次馬たちがライに石を投げ始めた。

「くそつ、半獸」ときが、人間様の町に足を踏み入れるんじゃねえよー。」

そう叫びつつ、ライめがけて石を投げつける者がいた。アイクはその人物に、見覚えがあつた。

あの、デインに対しても楽観的で、ガリアを毛嫌いしていた、露天商の青年だった。

そのまま、ライめがけて飛ぶものは石だけではなくなつた。

「ああ、汚らわしいねえ！ あつちにお行きつてばー！」

そう喚くおばさんは、確かに焼き魚を盗んだ猫を追いかけいた人物だ。先ほどの平和そうな様子はどこへやら、彼女は手に文化包丁を持ち、顔を憎々しく歪めていた。明らかに、殺氣を放つている。

そして、その手にした文化包丁を、ライめがけて投げつけたのだ。

包丁は、ライの左足に刺さつた。

「くっ…」

思わず、ライは倒れ込む。刺さった包丁を引き抜く。

そんな彼に対し、集まっていた人々は一斉に、よってたかってライをリンチにかかりた。倒れたライを蹴飛ばし、踏みつける。

「・・・くそっ！－」

気がつくと、アイクは剣を抜いていた。そして、思わずライの方へ駆けだした。

しかし、彼の目の前に大柄の、『一ト姿の男』が立ちふさがる。モウディだった。

「モウディー－？」

「アイク！ 戻ってはいけないと・・・！」

そう言って、アイクの前に仁王立ちになる。

「！？ ライを助けないと・・・」

「・・・」の騒ぎだ。すぐに『イン兵』が集まる

「だからこそ、早く・・・」

すると今度は、背後から左腕をつかまれた。振り返った先には、小

柄なコート姿の人物。レテであった。

レテとモウディは、諭すようにアイクに話しかける。

「あいつならうまくやる……放つておけ」

「ライは強い。モウディたちより、ズつと。だから……」

だが、アイクは彼らの言つことに従わない。

「ライのやつ……化身しないってことは、戦う意思がないってことだろ!? 一方的にやられるのを、見てられるか……」

そして、レテの腕を強引に振りほどき、モウディの横をすり抜け、駆けだして行ってしまった。

「あ、アイク……」

モウディがそう呼びかけたが、彼は立ち止まらない。そんなアイクの後ろ姿を見て、レテはため息をついた。

「……バカめ……」

リンチは、まだ続いていた。野次馬たちが、未だに暴力行為を行っているようだ。

アイクは、そんな野次馬のところに突っ込んでいった。右手には、

鋼の剣が握られている。

頭に血が昇っていたアイクは、野次馬の一人を何のためらいもなく、剣で叩き斬る。続いて、ライを取り囲む他の人を、次々剣で殺していった。

アイクは、自分がしていることを止められなかつたし、止めようと思わなかつた。それほどまでに、頭に来ていたのだ。

「どけつ！！」

強引に、アイクは残りの野次馬を押しのけ、ライのもとに駆け寄る。

「きやあっ！？ 人殺しつ！？」

アイクに気が付いた住民たちは、大急ぎでその場から離れていった。

彼はライを守るような位置で両手を広げる。右手に持った鋼の剣には、まだ鮮血がしたたっていた。ライの周囲には4つほど、野次馬の死体が転がっている。

アイクは、完全にキレイていた。港町トハの住民が、デイン以上に許せなかつた。

「こいつに手出しそる奴は、俺が斬る！！」

「な、何だお前？ 人間のくせに半獣を助けよつてのか？」

恐る恐ると言つた様子で、露天商の青年がアイクに尋ねる。するとその横で先ほどライにぶつかつた女性が、アイクを指差して叫んだ。

「あたし、知つてゐ……」いつも半獣の仲間よ！ もつき話しての見たわ！」

頭に血が昇つてゐるアイクは、怒鳴り返す。

「それがどうした！ ラグズとベオク、何が違つてんだ！ ！」

それを聞いて、露天商は何か思いついたかのように、声を上げた。

「おい、クリミアの王族つて、ガリアの半獣とつるんでたよな？ もしかして、こいつらが……『テインの探してゐる、軍の残党つてやつじやないのか！ ？』

その意見に納得したらしく、近くにいたおじさんが、町の入口の方へ向け、両手を口に当てて叫んだ。

「おーいっ！ テインの兵隊さんよおー……」しかし、怪しい奴らが紛れ込んでくるぞーっ！」

その声は、街門まで聞こえたらしい。先頭のアクスナイトのテイン兵が、指示を出す。

「……む？ あつちだ。急げ！」

周囲の野次馬に加え、デイン兵までもがアイク達を取り囲んだ。

信じられないといった表情で、アイクは住民たちに聞く。その声は、震えているようだ。

「お前たち・・・正気か？ この国の王は、デインに殺されたんだぞ？ そのデインに・・・お前たちは協力するのか・・・？」

「そ、それは・・・」

ここに来て初めて、先ほどデイン兵を呼んだおじさんが返答に詰まる。だが、露天商の青年と包丁を投げつけたおばさんは、こぶしを突き上げつつ声を張り上げた。

「王は、ガリアの半獣どもと同盟を結んだりするから、死ぬことになつたんだ！」

「そうだよ！ どうせ手を組むなら、半獣よりデインの方が、はるかにマシだね！」

「そーだ、そーだ！ 少なくとも、同じ人間だからなあ！！！」

その返事を聞き、アイクは再び怒りが頂点に向かいつつあるのを感じた。

「・・・」

一方騒ぎを聞きつけ、町の酒場から剣士たちが4人ほど出でくる。先頭の男は、たらこ層の大男。

アイクに自警団への勧誘をしたり、剣をくれたりした、あの自警団長だ。

「半獣がいると嘗つのは、どことだ！」

手近な位置にいた老人にそう聞くと、老人は嬉しそうな声を上げた。

「来たか！ 頼もしきトハ自警団よ…… 半獣とその助けをする悪党どもを捕らえてテイン軍に差し出し、この町の恭順の意を示すのじゃ！」

たらこ層の自警団長は、目を輝かせる。

「おお！ 半獣狩りなら我らに任せとおけ！！ よし野郎ども、準備はいいか！」

だが、団長の出撃に対してもつたをかける者がいた。

「ちょっと待つてくれ。敵の戦力も分からぬ状況じゃ、やみくもに戦つたところで無駄死にするだけじゃないのか？」

団長に進言したのは、長い銀髪で長身の男。灰色と紫の間の色の服装をしている。肌の色は透き通るほどに白く、碧色の美しい瞳を持つ切れ長の目は、鋭い眼光を携えていた。

「ああ？ ……まあ、確かにそうだな。けど、それじゃ俺たちの

獲物がなくならまわねえか？

「いや、『半獣』が出たってのは本当だろ？　だったら、近くに来てから叩くだけで十分なはずだ。攻める役はテインの兵隊に任せんべき」と言つてゐるのだが

「やうだな……よし野郎どもー 新入りが言つとおり、俺たちはじまらへ待機だ。向こうからやつてきたら、派手にぶちのめすぜーー！」

「アイク」

その頃ライは目覚め、自分をかばう蒼髪の剣士を呼び掛けっていた。

「ライ、無事か！？」

アイクは包帯を取り出し、ライの怪我した左脚に巻きつける。そんな彼に対し、ライはため息をつく。

「はあ……どうして戻つてくるかなあ、お前は……」

「化身もしないで、無抵抗なままやられるバカがいたからだ」

「……仕方ないだろ。ガリアはクリミアと同盟を結んだ。何があれとも、手出しするわけにはいかないんだ」

「愛国心の欠片もなさうなやつでもか？」

「それでも、ここに住んでる限りはクリミア入ってことや」

アイクはそれを聞くと、自分たちを囲む住民たちを睨みつけた。

「ガリア国民じゃない俺は、あいつらで手加減する気はさらさらない

い

ライは、再び盛大にため息をついた。

「・・・まあ、すでにお前は何人かやつちましたみたいだしな。けどな、頼むから分かつてくれよ。オレたちは、ひとつづらみだつて思われてるって」

「・・・つまり、俺たちは・・・デインの追撃をかわし、この町の住民や自警団には手を出さず、全速力で港まで行つて、ナーシルつて男に会つて、みんなで船に乗れ・・・つてことか?」

「そう! よくできました!」

だが、アイクの答えには続きがあつた。

「努力は、する。だが、向こうから仕掛けてきたら問答無用で叩つ斬るからな」

「・・・つておい! それじゃあ、あんまり意味ないつて!」

そこへ、ティアマトが駆けつけてきた。後ろには、団員全員がしつかりついてきている。ただ、フォルカの姿が見えないのが気がかりではあつたが。

「アイク！ みんなを集めてきたわ」

「助かる。ティアマト、エリンシア姫と行商団、それにあと何人かを連れて、先に港の方へ迂回していくれ。敵は、俺たちが引き連れる。頼むぞ」

「ええ、分かったわ！」

ティアマトは、行商団とエリンシア以外に、マーシャ、キルロイ、ボーレの3人とともに、町の裏路地の方へ消えていった。

続いて、セネリオもアイクのもとに話しかけてきた。偵察に行っていたらしい。

「アイク。どうやらこの騒ぎに乗じて、盗賊が町に入り込んだ模様です。僕としてもこの町の住民のことは好きになれませんが・・・。このまま放置しておくと、盗賊によって町の建物が破壊される恐れがあります」

「どうか・・・どうするべきか・・・」

すると、先日カントウス城から救出された赤い鎧の騎士ケビンが、声を上げた。

「アイク殿！！ 我がクリミアの自国の民が、盗賊に襲われると言ふことは我々クリミア騎士には耐えがたいことなのだ！ どうか、民家の防衛はオレとのオスカーに任せてほしい！」

オスカーも、賛同してくるようだ。

「私も、正直にこの住民の態度は許せないが、だからと言つて盗賊を見過す」せはしない。民家のことは私たちに任せてくれないだらうか？」

アイクは少し考えたが、認める」とする。

「・・・分かつた。盗賊の討伐、あんただちに任せるわ」

セネリオの報告には、続きもあった。

「それから・・・ビツヤア、この町の自警団もテイン軍に協力する意向のようです」

「自警団？」

アイクは、先ほど剣をくれた男を思い出した。

(結構、いいやつに思えたんだが・・・)

腰に佩いた3本目の剣、先ほどもりつた長い刀身の剣を触りながら、そう思つた。

「ええ。ですが彼らは、自分から」ひかりにやつては来ないと思われます。小さな路地裏に陣取つていて、そのような話を先ほど聞きましたので」

「さうか・・・じゃあ、そいつらは無視する方向でいいな

アイクは、団員を見渡して声を張り上げた。

「全員、港へ向かえ！　この町の自警団には、できるだけ手出しうるな！　行くぞ！！」

11章 ～流れる血の色～ 中編（後書き）

デイン軍の包囲する町を抜け、船を用意すアイク。

無事に彼らは、町から抜け出しができるのだろうか・・・。

## 11章 ～流れの血の色は～ 後編（前書き）

港町トハの住民によるマイへの暴力は、アイクにとつて許せないことが  
とだった。

あらうことか、デイン兵の味方さえしだす住民たち。そんな彼らに  
怒りを募らせるアイクを、ライは何とかなだめる。

「港に走って、船に乗れ！」

そんな叫びを聞き、アイク達は港を田指してデイン兵との戦いを始  
める。

## 11章 ～流れる血の色～ 後編

（港町トハ）

デイン軍によつて制圧されたトハの港。その灯台のもとに、この部隊の指揮官と思わしき人物がいた。

彼の名はマッコヤー。緑の髪を芸術的な髪形にした、初老のパラディンである。左利きなのか、左手に持つた剣を頭上に掲げ、馬上から指示を飛ばす。

「歩兵部隊は敵を包囲せよ！ そいを、騎兵隊が斬り込むのじゃ！ よいから、クリミアの残党を1人たりとも逃がしてはならんぞ！ 怪しいものは、端から捕らえて参るのだ！」

マッコヤーの指示通り、デイン兵たちは動きだす。そんな時、一人の兵士が伝令にやつってきた。

「マッコヤー将軍！ この町の自警団が、我が隊への協力を申し出ています。いかがいたしましょう？」

マッコヤーからすると、それはやや予想外のことだった。普通なら、抵抗してこちらへ戦いを挑むだろう。それが、協力するとほー一体どうこうことか。

彼は少し考えたが、理由など分かるはずがない。

「・・・ふーむ・・・、まあ、いいだろ。好きにさせておけ

「はっ！」

伝令役のティエン兵が再び去つていった時、マッコヤーの背後から男の声がした。

「・・・失礼。あなたがこの軍の指揮官か？」

マッコヤーが振り返つた先に立っていた人物は、浅黒い肌をしたかなり大柄の男だ。薄い水色の長い髪を、軽く波がかつた形にしている。どこか異国の雰囲気のある服装をし、顔や体の表面には、入れ墨なのか模様が刻まれていた。

「そうだが、あなたは？」

マッコヤーが馬から降りつつ聞くと、謎の大男はマッコヤーに近付き、港に停泊している船を指し示した。

「私は、あの停泊している船の船長で、ナーシルと言う者だ。この町へは、たまたま商用で立ち寄つただけなのだが・・・あなたの配下の兵士たちに、出航の邪魔をされて迷惑をしている」

妙に淒みのある迫力の男の声に内心怯えつつ、マッコヤーは釈明する。

「それは大変、申し訳ない。だが、クリミア残党の逃亡を阻止するためにも・・・民間船にも協力を願っているのだよ

するとナーシルは、何かの紙を取り出してマッコヤーに見せた。証書のようだ。

「この行商許可証の通り、私の船はベグー・オン帝国の正式な行商許可を受けている。この証書を提示すれば、クリニアとは無関係だと証明できるはずだが……？」

ナーシルが見せた証書には、確かにベグニオンとの行商許可の旨が書かれている。帝国元老院議員の一人、アニムス公の印鑑まで押されてあつた。

だが、マッコヤーはそれでも首を横に振る。

「デインの支配下にあつてはこんな……ベグー・オンの証書など、ただの紙切れでしかない」

「しかし……！」

反論しよつとするナーシルに、マッコヤーは忠告とも警しともされる言ふことを試みた。

「……ナーシルと言つたか？　あまり強硬な態度をとると、もしやクリニアの協力者ではないかと、あらぬ嫌疑をかけられるやもしれんぞ？」

「……」

ナーシルは、それには答えない。これ以上言つても無駄と思つたのか、マッコヤーに背を向けて船の方へ去つていった。

そんな彼の後ろ姿を見て、マジコヤーはテイン兵を呼ぶ。

「誰か、おひぬか！」

「元気だ！」

一人の重歩兵のテイン兵が、マジコヤーに応じる。

「船の見張りを強化せよ。あの男、何か企んでいるような素振りであつた……。何があつても、船を出帆せぬでないぞ！」

「まつー！」

一方アイク達は、広場にてテイン軍との戦闘がすでに始まっていた。行商団もエリンシアも、すでにテイアマト達が船に向けて連れて行つてゐるはずである。

怪我の応急処置を済ませてもらつたライは、アイクに笑いかける。

「・・・頼むぜ、アイク。うまへやつてくれよ？」

「ああ。・・・今まで、ありがとうな」

「ははは。元気だ！ そ、お前に会えてよかったです。・・・さて、オレの方はいちょ、テインのやつらを引っ搔き回してやつか！」

そう言つと、彼は瞬時にピンク色の光に包まれた。光が収まった時、

そこには水色の毛並みの猫が立っていた。

猫に化身したライは、デイン兵の脇を駆け抜けて町の外へ駆けだす。慌ててデイン兵の数人が、ライを追いかけていった。

「ガリアの半獣だ！ 追え！ 逃がすな！！」

そんな様子を眺め、アイクは思つ。

（ライ・・・また、どこかで会えるよな？ いいやつだったよ、お前・・・）

「クリミアの残党を倒せ！ 1人たりとも逃すなあつ！！」

広場に駆けつけてきたソルジャー数人が、グレイル傭兵团に襲いかかる。

「早速きたか・・・！」

アイクは再び剣を抜き、ソルジャーに相対する。そして、瞬時に力をためて居合斬りを放つた。

「でいつ！！」

ズバッ！！

「つ、強こ・・・・・

「ウインドー！」

セネリオはこの町で買ったウインドの魔道書を手に、別のソルジャーに向けて魔法を撃つ。

「ぐ・・・・風魔法か・・・・！」

傷ついたソルジャーは立ち上がり、槍を振りかざしてセネリオを狙う。だが。

「せせなこよ！ 必殺の一撃つ！・！・！」

ザシユツ！・！・！

ワゴが飛び出し、ソルジャーを必殺の一撃で斬り飛ばす。

「ぼ・・・・ぼくも！」

ヨファは、残る1人のソルジャーに向けて弓を引き絞る。幸い、相手はヨファに気付いていないようだ。

シノンからもらつた弓の弦を引き、そして手を離す。

ヒュン・・・グサッ！

「…矢・・・・？」

デイン兵は、矢が飛んできた方を向いて驚愕する。当然だ。ビリ見ても子供のヨファが、弓を構えていたからだ。

「くそつ・・・ガキが！」

手槍を構え、ヨファめがけて投げつける。だが。

ガキイン！

ヨファの田の前に、茶色い甲冑が立ちはだかり、白い盾となつて手槍を落とす。チャップだ。

「チャップさん！　あ、ありがと’’’・・・」

「いやいや、坊やも無理しちゃダメだよ」

そしてチャップは、手槍を投げたソルジャーを見る。

「あんたらなあ、子供相手に大人げないっておもつとらんのかね？」

「黙れ！　敗戦国の愚民が、我らデインに意見するなーー！」

ソルジャーは鋼の槍に持ちかえ、チャップのもとへやつてきて、槍を突き立てる。

しかし、頑丈な鎧の上からはまともにダメージが通らない。

「わしゃあ、本当は戦いたくなんかない。でも、これが戦つづもんなんか・・・」

チヤップはそつそつぶやき、逆に手にした鉄の槍で「ティン兵をつりぬいた。

一方こちらは広場から少し離れた場所にある住宅街。そこに、盗賊が紛れ込んでいた。

「くつくつへ・・・向ひいでワイワイやりてくれていい今こそがチャンスだ。悪事の限りを尽くしてやるぜ」

やつ面つで、田の前の民家に向けて走り出す。しかし・・・。

「そこまでだ!」

「一・?」

盗賊の田の前に、緑の鎧を着た騎士が立ちふさがる。オスカーダ。

そもそもと引き返して逃げ出そうとする盗賊。だが、今度は後ろに赤い鎧の騎士、ケビンが立ちふさがった。

「もう逃げられないぞ! 覚悟しろ!..」

「ち、あくしょう!..」

盗賊は、ナイフを逆手にケビンに襲いかかる。だが、そんな程度の攻撃で、ケビンには打撃は通らない。

「これで終わりだ！ 食らえ、一発屋ーー！」

ケビンは馬上で、斧を振り上げて力をためる。そして、それを盗賊めがけて振り下ろす。その一撃は、必殺の一撃となつて盗賊を真つ二つにかち割つた。

一発屋とは、ケビンが得意な技である。力を思い切り溜めてから攻撃するというものなのだが、当たれば非常に強力な攻撃となるが、反面外すことも多い。

ドラクエで言ひつゝ、まじん斬りみたいなものと思つてくれてい。

「ケビン、さすがだ。私が騎士団を除隊してからかなり時間がたつが・・・腕を上げたようだな」

オスカーがケビンをほめる。

「はつはつは！ 当然だ！！ クリミア騎士として、訓練は常日頃から欠かしていない！ それに今は、王都メリオルに凱旋するまで・・・ひたすら修行あるのみだからなーー！」

「・・・そうだな。絶対に、デイン王を倒さないと」

「ああ！ オスカー、貴様も我が永遠の好敵手であり続けるためにも、常に本気で戦え！」

「あ、ああ・・・そうだな」

盗賊を倒すと、今度はそこにデイン兵たちまで集まつてきた。戦線

はケビンに任せ、オスカーは民家を訪ねる。

民家から出てきた若い女性は、すぐ田の前でケビンが大勢のデイン兵と戦っている様子を目当たりにして、驚く。

「……まさか、あなたたちは……デイン軍と戦っているんですか？」

「はい。我々は、クリミアの傭兵です。デイン軍から逃げる訳には参りません」

オスカーがそう答えると、女性は顔を下に向ける。

「クリミアが負けたという噂が届いてからといふもの……この町は、こんなふうになつてしましました。もう誰も……恐ろしいデインに刃向あうとはしません。逆らわなければ今まで通り、平和に暮らせると……」

「……（この町の住民があんな態度を取つたのは、そんな理由があつたからなのか……）

オスカーは、何も言えなかつた。

強いものには逆らいたくない。その気持ちも、分からぬではない。でも……。

オスカーがそんなことを考えていると、女性は何かの本を取り出した。風属性を表す、緑色の魔道書だ。

「この魔道書……エルウインドの書をお持ちください。デイン軍に殺された……私の兄の形見です。力を持たない私の分まで……」

「どうか……」

「……分かりました、ありがとうございます。必ず、デインを倒すことを約束します」

「やあやあ我こそは、クリニア騎士団第5小隊隊長、ケビンなり！  
！」のオレを……」

ケビンがそこまで言いかけた時、ケビンの腕に矢が刺さる。

「……痛つ！ 」ら、オレの自己紹介を聞かずに攻撃とは、見下  
げ果てたやつだ！！」

「ふん、戦場で自己紹介など言語道断！ 我らテイン軍の力、思  
知るがいい！」

5人ほどの騎兵隊が、ケビンを取り囲む。

……とその時だった。

「サンダー！」

「ピシャアーン！ ！」

「ぐわつ、雷！ ？」

一人のデイン兵が、サンダーに貫かれて槍を取り落とす。サンダーを撃つたのは、イレースだった。

「よかつた・・・間に合つたみたいですね・・・」

イレースはそうつぶやく。そんな彼女の背後からは、水色の鎧のソルジャーが駆けつけてくる。ネフェニーだ。

「デインには負けない・・・！」

右手に持つた鉄の槍で、麻痺したデイン騎兵をつらぬく。その一撃で、騎兵は倒れた。

「ガルアツ！！」

「ひつ、半獣だあつ！！」

レテとモウディもそれぞれ猫と虎に化身し、集まってきたデイン兵に襲いかかる。

「フーーーツ！..」

バリバリバリ！..

「グハツ、こ、これが半獣の力・・・」

またたく間に、付近のデイン兵は倒れた。

「ケビンさん！ 怪我を治しますよ」

ミストはライブの杖を手に、ケビンに駆け寄る。

「む・・・そつ言えれば、先ほどの戦闘で負傷をしていたな。助かる！」

「いえいえ。・・・ライブ！」

杖の先端からあふれた光がケビンを包むと、彼の怪我は瞬時に治った。

「どうもありがとうございます、アイク殿の妹、ミスト殿！ ・・・まあテイ  
ン軍よ、どんどんかかって来るがいい！…！」

そう言って、ケビンはまた馬を走らせていく。当初アイクから言わ  
れていた『民家の防衛』の任務を、忘れてはいないだろうか？

「あ、無理しないでくださいねーー！」

ミストのその声は、聞こえていないうだ。

オスカーは、別の民家も訪れていた。

酒場の隣に建っていた民家から出るのは、先ほどのライブへのコンチに  
加わっていたおじさんだった。

どうやらオスカーはアイクの仲間とは思われていなかったようだった。

とつあえず、今現在町の中に盗賊が入り込んでいることを伝える。

「何！？」この混乱に乘じて、半獣だけじゃなく盗賊までうろついてやがるのか！　すぐに門を閉めなきゃな。教えてくれてたすかってぜ、あんた！」

「いえ・・・」

さつきとはまるで態度が違った。さつきはライがラグズだと知った途端に、暴力をくわえていたのに、だ。

「・・・おっと、礼を忘れるところだつたぜー。こいつを持って行つてくれよ。何でも、必殺の一撃とか言つやつが出やすい、強力な槍だぜ。キラー・ランスつて言つんだ」

「どうも、ありがとうございます」

全身が赤く、先端が非常に鋭い槍を受け取り、オスカーは頭を下げた。

その頃、町の入口の方から、何かが羽ばたくような音が聞こえてきていた。町の外から飛来してきたのは、5頭ほどの飛竜と、それにまたがる騎士。

デイン王国の、竜騎士部隊だった。彼らは街門のすぐ田の前の着陸をする。

この中では最も小さく緑の鱗を持つ飛竜にまたがる、赤くて長い髪

を後ろで縛った少女が、町の方を見て驚きの声を上げる。

「あ、大変！ もう戦いが始まってるー」

そつとて、背中から鋼の槍を取り出して町に向けて飛び立とうとする。だがそんな彼女を、別のデイン兵の竜騎士が止めた。

「ジル殿、隊長の指示なしでは突撃はできません。どうか、しばりお待ちを」

竜騎士は、そつとて隣の男を田で示す。

そこにいるのは、この竜騎士隊の中でもひときわ立派な体躯を誇る黒い飛竜にまたがる男だ。右目が隻眼となつており、デイン兵の象徴である、黒い鎧をまとっている。年は、20代後半くらいだろうか？

おそらく、彼がこの部隊の隊長だ。だが、眼帯が付いていない左目は閉じ、彼は船をこいでいた。どうやら、寝ているようだ。飛竜にまたがりながら、である。

先ほど仲間にジル、と呼ばれていた少女は、隊長格の男を振り返つて呼ぶ。

「ハール隊長！ のんきに寝ている場合じゃありません！ 半獣が出たそうですよ…… 我が部隊も出撃しましょー！」

その声で田が覚めたのか、ハールといつりじい隊長格の竜騎士が、戦場に似合わない大あくびをした。

「ふああああ・・・やめとけ。俺たちがやらなくとも、血脈盛んな  
マツ「ヤー配下の者たちが働いてくれる」

渋い声でジルを諭すハール。だが、ジルは反論する。

「武勲を得る絶好の機会を、他の部隊にみすみす渡していいのです  
かつー?」

「手柄なんぞ、いくらでもくれてやれ。いちいち、くだらないこと  
で俺を起こすな・・・」

そつ言つて、ハールは再び目を閉じる。

「あ、あなたと戯つ人は・・・」

ジルは、かなりがっかりした様子でハールを上田遣いに見たが、ハ  
ールは気にせず、あぐび交じりに話を終わらせる。

「戦いが・・・ふあ・・・終わつたら、起こしてくれ・・・」

「」

「・・・もういいです! 私ひとりでも、出撃しますからーー!」

再び眠つてしまつたらしいハールと、ジルの出撃を止めようとはや  
る他の竜騎士を無視し、彼女は自分の飛竜に鞭をくれようとした。  
だが、その時。彼女の後ろからは眠つたはずのハールの声がした。

「ணணண・・・ジル、ちょっと待て」

呼ばれたジルはすぐにハールを振り返る。その顔は先ほどと違い、

とても嬉しそうだった。

「はい！ 気が変わりましたかつー！？」

だが、ハールの返事は彼女の予想を裏切る。

「この俺、ハール配下の竜騎士隊はここで待機。相手が手を出すまでは動くな。これは、上官命令だ。以上・・・」

「・・・もうつー！」

みたび眠ってしまった隊長に呆れるジル。そんな彼女に、他の竜騎士たちが話しかけてくる。

「ジル殿、ハール隊長はああ見えてしつかりした人ですから、きっと隊長にも考えがあるんだと思いますよ」

でも、ジルは納得できない。

「けど・・・！ 今日は私の初陣なんだ！ 軍人である父上に憧れて、私はやつと、デイン軍人の仲間入りを果たした。なのに・・・父上にいい報告が全くできないまま本国に帰るなど・・・私にはできない」

「ジル殿・・・」

だが、隊長の命令とあらば仕方がないことも事実である。仕方なくジルは、町の入り口から戦いを見ることにした。

所変わつてここは港町トハの路地。化身を解いたレテが物陰に隠れ、何かの様子をうかがつていた。

「あいつらが……この町の自警団か……」

レテの目線の先には、剣で武装した男たちが数人立っていた。

レテとしては、彼らが許せなかつた。ラグズを貶すものは、万死に値する……。そう思つてしまつのだ。

（だが……ガリアとクリミアは同盟を結んだ。決して、クリミア人には手を出してはいけないんだ）

そのジレンマが、レテの心を駆け巡る。

その時だつた。自警団の一人……長い銀髪をした色白の男が、レテに気付いたのは。

「！　しまつた……」

レテは、お急ぎでその場を立ち去りつとする。しかし。

ガシッ！

「……」

即座に、レテは腕をつかまれた。銀髪の剣士が瞬時に近付き、あつ

とこつ間に捕まえたようだ。

レテは、強引にその腕を振りほどく。尻尾が逆立ち、己の中の鬪争心が芽生えるのを感じた。だが、それを強引に抑えつける。

「・・・消える。クリニア人には・・・手を出さん」

殺氣を放ちつつ、レテは剣士にそう叫びげる。だが、剣士からの反応は予想外だった。

「待ってくれ！　・・・俺は、ラグズの敵じゃない」

「・・・なんだと！？」

一瞬、目の前の長髪の剣士の言った言葉が、分からなかつた。だが剣士は、なぜか手にした剣を腰の鞘に納める。  
戦う意思がないことを、表しているのだろうか？

「俺がこの町の自警団に入ったのは、あんただちを逃がすのに都合がいいからだ・・・。町の連中の目は、俺がごまかしておくから・・・。その隙に、君は逃げろ」

鋭い眼光を放つ緑色の瞳を見ると、嘘をついてるよとは聞こえない。だが、レテはそれでも信じられなかつた。  
まさか、アイク以外にラグズをかばうベオクに出来るとは、思つてもみなかつたからである。

「・・・ベオクの言つことなど信用できない・・・」

そうつぶやくと、剣士は再び剣を抜いた。妙に湾曲した形で、赤紫

の色をした剣である。

「……では、この場で白警団のやつらを斬れば……俺を信じてくれるか?」

「なつ……!？」

真剣な表情でそう聞いてくる剣士に、レテは戦慄され覚える。剣士は、さらに問い合わせた。

「1人が、2人か? それとも全員……?」

「や、やめなつ……なぜそこまでして……!」

思わず震えた声で、剣士の言葉を遮られる。無意識のうちに彼女は、剣士の腕にすがりついていた。

剣士は、少しの間返答に困る。だが、答えた。

「……君を救いたい。……それだけだ」

レテはそれを聞くと同時に、剣士の腕をつかんでいたことに気付く。慌てて手を放し、態度を改めた。

「……分かった……とにかく、敵じゃないってことは……信じる……」

「ありがとう。じゃあ、早く町の外へ……」

レテは、首を横に振った。

「だが、逃げる訳にはいかない。仲間……ともかく、船に乗らなくてはならない」

「あきらめられないか？今は、危険が大きすぎる。自警団もテイン兵も、ラグズを目の敵にして襲ってくるぞ」

「だめだ」

すると剣士も、説得をあきらめたりして。

「やうか……やうまで言つなり、仕方ないな」

「……」

だが、次の言葉はまたしても、レテの予想を超えるものだった。

「俺を……君たちの仲間にしてくれ」

「ば、バカを言つくな！」

焦るレテ。だが剣士は、そんな彼女には構っていない。

「君、名前は？」

「……レテだが？」

「いいやだ」

「……じゃなくって、お前な……」

レテの考えとは裏腹に、話がどんどん進んでいく。

「俺は、ツイマーク。見ての通り剣士だ。ゆくぐり自己紹介してい  
る余裕はないぞ。とにかく、總じて

ツイマークところの剣士は、やつぱりかと港の方へ走りだ  
す。

「ま、待て！ 私は許していないぞ！」

レテも追いかけつつ呼ぶが、ツイマークは聞かない。

港では、アイク達がデインの騎兵たちと激しい戦いを繰り広げてい  
た。

だが、すでに勝負は決まったようなのだった。多くのデイン兵は  
倒れ、残るは敵将マックロマーを含めて数人となっていた。

とうとうマックロマーが、先頭に出てくる。

「ふーむ・・・町から逃げもせずにあらに向かってくるとな・・・  
我らテイン軍を、いやとかか甘く見過したのではないかな？」

最も弱そと判断したのか、マックロマーは鉄の弓で、ミスターを狙つ。

ヒュウ・・・

「 もせるかっ！」

ガキーン！

矢を剣で叩き落とすアイク。

「お兄ちゃん、ありがとう」

ミストの感謝を聞きつつ、アイクはマッコヤーに対峙する。

「行くぞ、覚悟しろ」

剣を振り上げる動作の後に、アイクはマッコヤーめがけて突進する。マッコヤーはそんなアイク目がけて矢を撃つが、そうなる前に接近されていた。

「やあっ！－！」

バシュウッ！－！

アイクの握るリガルソードは、マッコヤーの体を斬り裂く。だが、それだけでは倒せなかつた。

「ふーむ、なかなかやるようだな。こちからも行かせてもうひとつするかの」

いつたん距離を置いて、今度は剣を引き抜く。その剣は、アイクは確かに見覚えがあつた。

「！あの剣は！！」

かすかに波打つた長い刀身と、柄にはめられた碧玉。アイクが先ほど自警団の団長に譲り受けられた剣と、全く同じだった。

「ガルルル・・・！」

突撃してくるマッコヤーの目の前に、モウディが立ちふさがる。だがマッコヤーは、しめたどばかりの表情を見せる。

「森を出たのは誤りであったな、半獣よ」

モウディめがけて、剣を振り下ろす。

その瞬間、剣の碧玉が輝き、モウディの周囲で爆発が起こったのだ。思わず重傷を負つたモウディは、化身が解けてしまつ。

「ぐつ・・・ナゼだ？ モウディ、力が入らない・・・」

「モウディ、あんたは下がつてろ！」

アイクはそう呼ぶが、モウディは動けない。そんな彼のもとへ、マッコヤーは再び剣を向けて馬を走らせる。

「この『ラグズソード』は、半獣に対して有効な打撃を下げる」とができる剣。半獣よ、これで終わりじゃ！」

マッコヤーがみるみる駆けよってきて・・・・

バシッ!!

スカツ!

「!?

マッコヤーが振り下ろしたはずの剣は、なぜか消えていた。何も持つていらない右手が、むなしくモウディの前に振り下ろされる。

「ら、ラグズソードが消えた!?」

狼狽するマッコヤー。そんな彼の頭上から、声が聞こえる。

「おっと、あんたの落とした剣は・・・この剣かい?」

「その声は・・・!」

その場にいた全員が、近くの建物の屋根を見上げる。

「フォルカ!」

そう。フォルカが瞬時に駆けつけ、マッコヤーの持つ剣を奪ったのだ。

「アイク。」この剣はあなたの傭兵团にくれてやる。しかも、特別に無料でだ」

「フォルカ、あなたはどこに行つてたんだ？」

「あなたの依頼主のあの王女たちを、船の中へ誘導していた

「そりか・・・助かった、ありがとうな

フォルカのおかげで、無事にエリンシアや行商団たちは船に乗り込めたらしい。

「さて、じゃあ俺も先に船で待つておる」

「ああ、すぐに行く

フォルカは屋根から屋根へと飛び移りつつ、あつといつ間に船の方へ消えていった。

「くつ・・・武器を奪うとは、なかなかやるものであるな。万事休す、か・・・」

近くを攻撃できない鉄の弓だけを持ったマッシュヤーは、周囲を完全に囲まれる。

「これで、終わらせます・・・」

ネフェニーがとどめに槍で貫ぐ。

「甘く見たのはこいつらであったか……そもそもなん……閣下……後は……お任せしましたぞ……」

「マジコマーは、意味深なセリフを吐きつつ倒れた。

その頃、ワコは残る民家を訪ね終えたところだった。住民からもらった「竜の盾」という、防御力を上げる魔道アイテムをポーチにしまい、アイク達本隊のもとへ走っていく。

「ああ～早くしないと大将たち出航しちゃうよ～！ 急がないと…」  
「・

だが、ある民家の前をかけぬけようとした時であった。

ガチャッ・・・

唐突に、民家の戸が開いた。中から出てきた人物が、普通の住民だつたらワコも無視して走つて行つただろう。だが、違つた。

全身に漆黒の鎧と兜をまとい、深紅のマントをたなびかせる者が、出てきたからだ。

ワコは知らないが、彼はグレイルの敵の漆黒の騎士だ。

「えつ・・・・デイン兵の生き残りが、まだいたの？」

ワユは立ち止まる。

漆黒の騎士は、静かににワユを見ていた。そして、腰から白銀に輝く大剣を引き抜く。

「・・・・」

ガシャツ・・・ガシャツ・・・

甲冑の音を鳴らしつつ、ワユに近付く。普通のデイン兵とは比べ物にならないほどに、圧倒的な恐怖感があった。

「え・・・待つて・・・！」

ワユも剣を引き抜いて相対するが、明らかに腰が引けていた。

漆黒の騎士はある程度までワユに近付くと、白銀の大剣をワユに向ける。そして、大きく振りかぶつて・・・

「・・・つー」

振り下ろした。

バリバリガツシャアーン――――――!

「 もやあああつーーー?」

想像を絶するほど痛みが、ワコを襲う。剣から発せられた衝撃波はワコを正確にとらえ、容赦なく斬り裂く。

そして、ワコを襲った奔流は向かいの家屋も直撃し、その民家は一瞬にしてがれきの山となつた。

がれきに、ワコは埋もれる。

「・・・この程度の兵力にてござるとは・・・私の見込み違いだつたか・・・?」

がれきと化した民家・・・いや、そのがれきに埋もれているであろうワコを見て、漆黒の騎士はそつづぶやく。

そのままじい音は、港まで響いた。

「何だ、今の音は…」

「向こうの方から聞こえたよ…」

町の一角から、煙が上がっている。アイクは、その煙のすぐ近くに、  
“仇”を見た。

「・・・・！ あいつは・・・！」

そして、わき田も振らずに駆けだすアイク。

「あ、ちゅうとアイク！ ピリく行くんですー！」

セネリオの問いかけを背中ではじき、アイクは港から飛び出す。

◦ アイクが走るその先には漆黒の騎士が、静かにたたずんでいた…

## 11章 ～流れる血の色は～ 後編（後書き）

突如現れた漆黒の騎士。

ワコは無事なのか？

アイクの運命は？

次回を待て！！

## 正午の月光（前書き）

突然民家から現れた漆黒の騎士に、ワコは倒されてしまつ。

一方、港で漆黒の騎士に気付いたアイクはセネリオの制止を振り切り、漆黒の騎士のもとへ駆け寄る。

父を殺した仇との一騎討ちが、始まつとしていた。

## 正午の月光

（港町トハ）

がれきと化した民家。その前に、漆黒の騎士は立っていた。彼は港の方から聞こえてくる足音に気付き、やけに向く。

「……ほづ、誰かと思えば……」

アイクだった。彼はリガルソードを引き抜き、体の前に両手で構える。

漆黒の騎士は、剣を構えない。右手はだらりと垂らしてまだ。

「漆黒の騎士……会いたかったぞ……」

リガルソードを構えたまま、アイクは言つ。すると漆黒の騎士は再びがれきの山の方を向く。

「……先ほど、私の前を通りかかった少女剣士と、この場で戦つた。ガウェインの残した傭兵团がどれほど強さか……確かめるためにな」

「……？」

ガウェインとは、グレイルの昔の名前である。漆黒の騎士は、グレ

イルの過去を知っているようだが……。

アイクは、漆黒の騎士が何を言っているのか、分からなかつた。そんな彼に、話を続ける。

「まるで、話にならない強さだつた。我がエタルドの一撃……手加減したはずなのだが」

「…………まさか、お前……ワゴを……？」

漆黒の騎士が話す内容が、ようやく理解できた。そういうえばまだ、ワゴは港に集合していない。

アイクは、漆黒の騎士の前にある家屋のがれきに駆けより、がれきをあさる。

「ワゴっ！ しつかりしろ……！」

しばらくして、がれきの中から藍色の髪が、そしてオレンジの皮鎧が出てきた。

「おー、大丈夫か！？」

がれきから出てきたワゴは、全身ひどい傷を無数に負っていた。おびただしい量の出血を起こし、各部の骨折もしているようだつた。

「…………た、大将……」「めん……ね……」

「待つてろ！ 今何とかする……！」

力なくつぶやくワゴン、アイクはきずぐすりを飲ませ、さらに包帯を巻いていく。だがきずぐすりを飲ませても、怪我は全く治らない。

「あたし・・・たぶん、もう・・・助から・・・ない・・・よ・・・」

「バカなことを言つな！ あんたは、絶対に死なせない！！ 誰一人として、死なせはせん！！」

何度もきずぐすりを飲ませても、効果が出ない。それはすなわち、すでに手遅れの状態である、ということだった。

それでも、アイクはあきらめない。

だが、やがて手持ちのきずぐすりは全て使つてしまつた。

「大将・・・あたし・・・ね・・・あんたたちと一緒に・・・戦えて・・・本当に、よかつた・・・よ・・・す、ぐく・いい傭兵团・・・大将に出会えて・・・うれしかった・・・」

ワゴンの皿から、一筋の涙が流れ落ちる。

「だめだ・・・頼むから、そんなこと言つなー！ 絶対に死ぬな！  
これは、団長命令だつ！」

その時だった。アイクのもとに、羽音が聞こえてきたのは。

音がする方を向くと、港の方から天馬が飛来してきていた。マーシヤだ。

「アイクさん～！！ ワコさん、私が船まで運びますから、まかせてください～！」

手を振りつつそのままマーシャ。すぐに近くに着地し、ワコのもとへ駆けより、天馬に体をくぐりつける。

「マーシャ、分かった。ワコを頼んだぞ。・・・俺も、すぐ行くますね！」

「港の方の制圧も完了しました。じゃあ、先に船で出航の準備してますね！」

マーシャは、再び船の方へ飛んで行った。

「・・・ワゴ、と言つたか。先ほどの剣士は」

ずっと静かに事を見守っていた漆黒の騎士が、口を開く。それを聞いてアイクは、がれきの山から下りて、騎士のもとへゆっくり歩いていく。

手には、父親がアイクのために打つた剣、リガルソードが握られていた。

「・・・ぐじろ・・・」

歩きつつ、アイクが何かをつぶやく。頭がやや下向きになつていてるせいか、彼の目は前髪に隠れていて影となり、よく分からない。

「・・・？」

漆黒の騎士は、アイクの声が聞き取れなかつたため、わずかに首をかしげる。すると今度は、アイクはもう少し声を大きくする。

「・・・覚悟しろ・・・」

わずかに震えたような声で、彼は確かにしゃべつた。

「・・・覚悟しろ・・・漆黒の騎士・・・覚悟しろ・・・ツー・・・」

次第に、声の調子を上げていく。そして・・・。

「漆黒の騎士・・・覚悟しろおひつ・・・・・・」

ある地点まで近づいて、唐突にアイクは頭を上げて叫ぶ。蒼い炎の如き髪は振り乱れ、深緑色のハチマキは激しくなびき、手にしたりガルソードは曇り一つない刀身に漆黒の騎士を映し出す。

そして、猪突の如き勢いで駆けだし、高く飛びかかりつつリガルソードを振り降ろす。剣は、確かに漆黒の騎士を捕らえていた。

だが、何の手ごたえもなくアイクは着地する。すぐに周囲をうかがうと、漆黒の騎士はアイクのすぐ背後、時計台の田の前に、何事もなかつたかのように立っていた。

「くつ・・・

「・・・なぜ、手向かう？ 今のお前に、この私が倒せるとでも思つてゐるのか？」

挑発めいた発言。当然、アイクは再び漆黒の騎士めがけて駆けだす。

「お前は・・・」Jの俺が倒す！――

リガルソードを横に構えて力をため、渾身の居合斬りを放つ。この攻撃も、明らかに騎士を捕らえていたはずだった。

だがまたしても、騎士はアイクの背後を取つた。がれきの前に、静かにたたずんでいる。

「速すぎる・・・あの鎧を着て、じりじりして・・・」

それを聞いてか、漆黒の騎士は少し笑つたような声になつた。

「フッ、まだまだだな。その程度の実力では、この私の相手は務まらない。・・・もつとも、務まつたとしても勝つことは不可能だ」

「何だとつ！」

いきり立つアイク。そんな彼に、漆黒の騎士は聞いてくる。

「・・・それでも、私と殺り合いつもりか？」

アイクは、迷わない。

「ああ。お前を倒すのは、この俺だ！」

「フツ、そうか。ならば、」どちらも本気で行かせてもりおづ。手加減をするつもりは、ない」

ジャンプ斬りや居合斬りは、隙が大きくてすぐに見切られる。かといって、隙の小さな足払いや殴打、振り抜きと言った技では、あの装甲相手には満足なダメージは与えられない。

カウンターで反撃を狙うのも考えたが、漆黒の騎士が持つ白銀の大剣 エタルド、と言つらしい 相手では受け止められる自信はない。

アイクは、自分が編み出した新技を試してみようと思いつた。

(装甲の硬い敵に有効な突き技・・・漆黒の騎士に対しても、効果があるはずだ)

アイクは瞬時に間合いを詰め、漆黒の騎士の目の前まで接近する。そして、その場で瞬時にリガルソードを持つ右手を手前に引き、刀身を横向きにする。

そして漆黒の騎士の左胸の辺りを狙い、一気にリガルソードを突き出した。

盾砕き・・・堅い守りの敵に対して、高い効果を誇る剣技である。頑丈な鎧の前でも、正確に鎧の継ぎ目などの弱点を突いて攻撃することが可能だ。

いや、可能なはずだつた・・・。

だが、漆黒の騎士はそれほどまでにアイクに接近されていたにもかかわらず、エタルドを瞬時に田の前に持ってきてアイクの盾砕きをはじいて見せたのだ。

「！」「

リガルソードとエタルドがぶつかり、火花を散らす。そのまま、つばぜり合いとなつた・・・が。

「弱すぎる」

シャキイン！

あまりにもあっけなく吹っ飛ばされるアイク。背後にそびえる時計台のレンガの壁に、思い切り叩きつけられた。

そして・・・アイクの持つリガルソードは・・・無残にも木つ端みじんに刀身が砕け散つていた。

手元に、刃のない剣の柄のみが残る。

「つ、強すぎる・・・」

柄を投げ捨て、アイクは何とか立ち直る。少しだけ後ろを振り返ると、アイクがぶつかった時計台のレンガ壁が、ちょうどビアイクがいたあたりだけひびが入っていた。  
相当な衝撃があったのだろう。

アイクでは手も足も出ないほどに、恐ろしい強さの相手だ。到底、かないっこない。

「やはりお前は、父と同じ愚か者だな、アイクよ」

漆黒の騎士は、アイクにそう話しかける。

「くそつ・・・」  
「うなとこんで・・・」

「せめて、最後は楽に終わらせよう」

漆黒の騎士はくそつと、エタルドをゆっくりと振り上げ・・・それを振り下ろした。

「オオオツ！－！」

すさまじいといつ言葉ではもはや言い表せないほどの衝撃波が、アイク田がけて襲いかかる。刀身から発せられた、紫のオーラをまとった衝撃波は、一気にアイクに殺到した。

「つーーー！」

間一髪で、アイクは横に身を投げる。衝撃波を何とかよけることができたようだ。

体の前面を着地の衝撃が駆け巡る、そんなアイクのすぐ近くで、巨  
大な轟音が鳴り響いた。

ドドドーン！！ バリバリバリバリ・・・ガラガラガラ！！

時計台のレンガ壁にぶつかった衝撃波は、時計台を一気に揺るがしてらしい。時計台の建材が、雨のように降り注ぐ。

その時だつた。

ゴーン・ゴーン・ゴーン・ゴーン・ゴーン・ゴーン

台の最上部の鐘が鳴り響く。時計は、12時を指していた。正午だ。

時計台の最下層から、まるで押し潰されるかのように崩れ落ちていく。その間も、鐘は鳴り続けていた。

「ゴーン・・・ゴーン・・・

最後の12回目の鐘が鳴る。それと同時に、時計台は完全に崩れ去つた。鐘と、時計だけが残る。

時計の針は12時キッカリを指したまま、完全に止まった・・・。

「・・・」

アイクは、何も言えなかつた。まさかエタルドの衝撃が、これほど  
の破壊力を誇るとは思つていなかつたからだ。  
とんでもない人物を相手にしてしまつたことに、正直後悔もしてい  
た。

アイクはそもそも、漆黒の騎士と戦うのは、もつと自分の力をつけてからだと誓つたはずだった。にもかかわらず、まだ力不足だと言うのに勝負を挑んでしまつた。

先ほど漆黒の騎士が言つていた言葉の意味を、ようやく理解した。

(今の俺には・・・勝ち目がない・・・)

立ち上がつた彼のもとへ、漆黒の騎士が歩み寄る。手にしたエタル  
ドは、不気味なほどに美しい銀色に輝いていた。

「あの衝撃をよけるとは……なかなか、やる。だが……これまでだ。次は、外さん」

漆黒の騎士はエタルドを天に掲げる。すると、漆黒の騎士自身の体が、まばゆいほどの光に包まれたのだ。

「奥義……月光。安らかに逝くがよい」

光は真円を描き、騎士と重なる。それはまさに、闇夜の空に浮かぶ満円をながらだ。

光は漆黒の騎士を中心に再び集まり、凝縮され……エタルドに集まる。

全ての光が剣に収束された瞬間、漆黒の騎士はアイクに一気に近付いて……。

バシュウッ！！ ザシュウッ！！ スパーン！！ シャキーン！！

田にもとまらぬ速さで、光り輝くエタルドでアイクを切り刻んだ。

「ば……バカな……みんな……済まない……」

アイクの全身から血が噴き出し、彼は倒れる。その周囲はあつとう間に、血だまりとなつた。

「ガウェインの息子の最期、か・・・」

つぶやく漆黒の騎士が持つエタルドの光は、いつの間にかおさまつていた。

正午の月光（後書き）

港町トハで、漆黒の騎士に敗れたアイク。

ワユ、そしてアイク。彼らは・・・。

失った仲間には、もつねえ（前書き）

アイクと漆黒の騎士の一騎討ちの直前、マーシャによつて救助されたワゴ。

彼女は・・・。

失った仲間に、もづくえない

（港町トハ・トハ港）

トハの港に、立派な帆船が停泊している。帆の柄を見ると、商船のようだ。

ナーシルという男の持ち物である。先ほどまでは、マックヤーを始めとするデイン軍が、船の監視に当たっていた。

だが、現在はトハの町を占拠していたデイン兵は、ほぼ全員が討死、あるいは逃走した。もつ、すぐにでも出航できる状態だった、

デイン軍の増援が来る前に出航をしたい・・・そう考えている団員達の元へ、天馬が舞い戻ってきた。マーシャだ。

「マーシャ、戻りましたっ！！」

血相を変えて船の甲板に降り立つベガサスナイト。甲板で出航準備を手伝っていたボーレが駆け付ける。

「あ、戻ってきたか。ワコとアイクのやつ、すぐに来れそうだったか？」

少し考えて、マーシャは答える。

「・・・アイクさんは・・・たぶん戻つてくると思います。でも、それより・・・」

「でも？」

切羽詰まつた様子のマーシャを見て、ボーレも不安になる。そんな彼に、マーシャは堰を切つたように話しだした。

「ワコさんが・・・ワコさんが大変なんです!! す、すぐに誰か、杖を使える人を呼んで!! このままだと・・・!」

「・・・なんだとっ! オイ、ワコは連れてきたのか!?」

「は、はい! イハチに!」

腕を引かれてボーレが付いていくと、天馬にワコはくへりつけられていた。

ひどい怪我だつた。全身をかまいたちで斬り刻まれたかのような無数の切り傷。まるで、身に付けていた皮鎧など何の意味もなしていない。申し訳程度に包帯が巻かれていたが、全て大量の血で真っ赤に染まつていた。

そして・・・ワコの大きく見開いた両目は焦点を合わせておらず、胸は全く動いていない・・・回復魔法や医学の知識がからつきしないボーレでも、危険な状態であることは疑いようがなかつた。

「なんだこりや・・・! オイ、ちょっと待つてろ! すぐミストとキルロイを呼んでくるから、ワコについててやつてくれ!...」

・おーい、ミストーーー！ キルロイーーー！」

ボーレは船室に駆け込む。後に残されたマーシャは、ワゴの方をもう一度見た。

(・・・これが・・・戦争・・・?)

元ベグニオン聖天馬騎士団の団員だとはいえ、マーシャは実戦経験はまだ薄い。死の淵に瀕した味方を田の前に見たなどといつては、今までなかつたことだ。

だが今彼女の田の前で倒れている、自分とさして年代の変わらない少女は・・・生死の境をさまよっている。マーシャは、自分の田で見ていく光景が本当のことだとは思えなかつた。

思わず、ワゴの手を握る。

まだ、暖かい。だが、血の通つている様子はない。

「・・・ワゴさん・・・どうか、死なないで・・・女神アスタルテよ、彼女にお慈悲を・・・」

「連れてきたぜーーー！」

しばらくして、船室の中からミストとキルロイを連れたボーレが出てきた。さらにそれに続いて、船に到着していたグレイル傭兵团と

行商団メンバー、ヒリンシア、さらにはナーシルも集まってきた。

「ワコさん…？ しつかりして・・・ライブ！」

ミストはライブの杖を。

「早く治なことまずい・・・リライブ！」

キルロイはリライブの杖をワコの近くに向け、集中をする。

一つの杖の先端の、赤と青の玉から、水色の光があふれだす。

心配そうに団員たちが見守る中、水色の光はワコを優しく包み・・・  
体に漫透していく。

だが・・・。

「・・・どうして？ ライブの魔法が・・・効かない・・・？」

ミストがそつそつとやく。見ると、光が漫透したにもかかわらず、ワ  
コの傷は全く癒えない。そればかりか、意識も回復する様子はない。

「もう一度、やってみよう。今度こそ・・・」

キルロイがリライブを使うのを見て、ミストもそれに従う。

しかし、結果は同じだった。光は漫透しても、容態は変わらない。

「ミストちゃん、キルロイ様、私も協力させていただけますか？」

「エリンシア様？」

キルロイが振り返ると、エリンシアもリライブの杖を持っていた。

「先ほどこの町で・・・買ったものです。あまり私には魔力はありませんが、杖の使い方も少しば心得ていますので・・・」

「・・・分かりました。すみませんが、お願ひします」

「ライブ！」

「リライブ！」

「リリライブ！」

三つの杖の先端の宝玉から水色の光があふれ、まばゆいほどの光にワユは包まれる。包んだ光はワユの体に少しづつ吸収されていき・・・。

そして・・・何の変化もないワユの体が現れた。

「そんな・・・3人でもダメだなんて・・・」

ミストが、絶望感に落ち込む。一度に多くの魔力を使つたため、息切れも起こしていた。

「一体……どうしてでしょう……」

エリンシアも、肩を落としていた。やり切れない気持ちになる。

少しして、キルロイが口を開いた。

「……ライブやリライブの杖を使えば……普通は怪我が治る。どんな生き物に対しても、命さえ残つていれば……その生命力を再燃させて怪我を治せる。それが……僕たち杖使いたちが使える回復魔法なんです……」

「命さえ……残つていれば……？」

目のあたりが前髪の影になつたまま、ミストが聞く。

「キルロイ……それは、どう言つ意味……？」

「……命が無いもの……つまり、死んでしまつた生き物の生命力は……回復魔法ではもう……」

「……」

沈黙が流れた。

今いるメンバーの中では、おそらくキルロイが最も杖を使ったこと

が多いだろう。それだけに・・・彼の口から出た言葉は、重くのしかかつた。

「・・・ワコさん・・・」

キルロイは、ワコに呼びかける。

『秘技、待ち伏せ！！』

『細かいことは気にしない』

『あたし、役に立つから・・・だから、ビコにでもいけ、だなんて言わないでね？』

『いつか、宿命のライバルと出会うんだ！ そして、あたしはその人と剣で勝負することになるの！』

『「これぞ男の生き様！ ついていくしかない』って感じで！ グ

『レイルさんってすごい人なんだね～！』

「…………ルロ…………？」

「…………？」

いつしか涙を流していたキルロイは、何かの音・・・いや、声を聞いた。

「…………キルロ…………さん…………？」

「…………ワユ…………さん…………？」

すぐに、ワユの方を向く。

ワユは・・・顔をこちらに向けていた。確かに、焦点は合っている。

「ワゴさん… 気が付いた！？」

奇跡だった。あの状態から意識が回復するとは……。

「キルロイ……さん……ありがと……つ……あたしの……ために……」

「いや……いいんだよ。それより、意識が戻ったなら早く治療を……」

「…」

キルロイはミストとエリンシアにも、また杖を使いつぶやく。そして、自分自身もリライブの杖を構える。

だが……。

「……ううん……もう……いいの……。……あたし……もう……ダメだか……ら……」

「え……待って！ でも、今やれば治る……」

「……じめん……ね……何か……分かるの……。ああ、あたし……もう、死ぬんだな……つて……うまく言えない……けど……不思議な……気持ち……」

「…・・・」

キルロイが何も言えないと、ワゴンが重ねて口を開いた。

「…………あたし…………ごめんね…………もう…………お別れ…………みたい…………」

どこか、眠そうな様子でそつと口を開いた。そんな彼女に、キルロイが

「…………ダメだ…………ワゴンさん、行っちゃダメだ…………！」

思わず、手をつかむ。ほんのかすかに、握り返される感覚が伝わった。

「…………あはは…………しっかり…………して…………よ…………」

「行っちゃダメだ…………ワゴンさん、お願ひだ…………」

泣きながら、懇願するキルロイ。少しでも長く……ワゴンが命を保つていてほしい…………そう願いつつ。

しかし……。

「…………キルロイさん…………それに…………みんな…………今まで…………ありがとう…………あた…………しつ…………この…………よ…………うへ…………いだん…………入れて…………すごく…………うれしかった…………」

・・・・・

キルロイの手から、ワゴの手が滑り落ちる。

ワゴは、静かに田を閉じていた。眠つてこむよつな・・・それほどに、安らかな顔だった。

「・・・ワゴさん・・・?」

返事は・・・なかつた。

失った仲間には、もう会えない（後書き）

復活はない。

それが、ファイアーエムブレムの世界・・・そして、この世界である。

懸しのの塙田（懸垂也）

ヒヒの死・・・・そして・・・・

## 悲しみの船出

（港町トハ）

一つの命が、終わりを迎えた。

ともに戦つてきた仲間だった。寝食を共にして、深い絆で結ばれていた、かけがえのない仲間だった。

もう、彼女は何もしゃべらない。明るい笑顔も、卓越した剣技も、もう見ることはできない。

宿命のライバルに出会つ「」とも、ついに叶わぬものとなつた。

命の終わりは、切ないほどに・・・ビームでも、あつけない。

「・・・つ・・・つ・・・」

誰かが、嗚咽を漏らす。声は、だんだんと増えていく。

「・・・ワコさん・・・つ・・・ビームして・・・」

泣きながら、キルロイが問いかけるが、返事はない。

みんな、ただ悲しかつた。それ以外に、感情がはつきりと出ない。ワコを手にかけた相手が憎いといった思いは、不思議と湧き上がらなかつた。

誰が殺しただなど、どうでもよかつた。分かつてることとは、ワコがもう、この世にはいないということ。  
でもみんな、その事実を受け入れたくはなかつた。

その時だつた。

ドードー——ン——！

町の中心のほうから、すさまじい音が鳴り響いたのは。

全員が音の鳴つた方角を向くと、町の中心にそびえる時計台が目に映つた。ちょうど、時計の針が正午を指す瞬間だ。

「ゴーン……ゴーン……ゴーン……

時計台の鐘が、町中に響き渡る。つい、その音に聞き入つていた傭兵団員。だが、突然時計台の倒壊が始まつた。

ガラガラガラ！！

白煙を上げ、まるで下層部が押しつぶされるかのように崩れていく時計台。その間にも、鐘の音は鳴り続けた。

ゴーン・・・ゴーン・・・

最後の1-2回田の音がなると同時に、時計台は完全に崩れ去った。それっきりまでそびえていたのが、まるで嘘のよつに。

「何だったの、今のは・・・」

ティアマトが、茫然とした様子でつぶやく。誰もが同じことを考えていた。

その時だった。彼女が、甲板に団員の一人がいなくなっていることに気付いたのは。

「ね、ねえみんな！ ミストがいなくなっているわー！」

「なにつー？」

甲板には、もうすでに全員が集まっていたはずだった。船の中に入つていったのだろうか？

ワコの死、時計台の崩壊と、さもやまなことが一度に起つて、いたため、団員はみな、事態の把握などできていなかった。

「……ひとまず、船の中を手分けして探しよ。見つかればよいのですが……」

セネリオのその言葉に、一同は賛成した。

漆黒の騎士は、勝利を確信していた。目の前の血溜まりに倒れた、蒼い髪の剣士を見つつ。

「早すぎた死闘、若さゆえの過ち、か。いずれにせよ、愚かで……残念だ。少しは私を楽しませてくれると考えていたのだが」

そう言い捨てて、漆黒の騎士は踵を返し、立ち去りつゝすると……彼の視界に、一人の少女が入った。

「……」

茶髪のおかっぱ頭の少女……アイクの妹、ミストは、信じられないような目で、崩れた時計台と漆黒の騎士、続いて倒れた兄を見る。

「……その髪、その顔……お前は、ガウェインの娘か?」

そう問い合わせる声には耳を貸さず、ミストはアイクに駆け寄つた。

「……お兄ちゃんっ……!」

うつぶせに倒れているアイクを抱き起し、ゆする。自分の服が血で汚れることも気にせずに。

グレイルの墓と先ほどワコの様子が、彼女の脳裏に浮かぶ。

「目を開けて！ お願い・・・もう、人が死ぬのはいや！ お兄ちゃんまで、いなくならないで・・・！」

必死にゆするが、アイクの様子に変化はない。ミストは、持ってきたライブの杖を使つことにする。

「・・・ライブ！」

優しい光がアイクを包むが、やはり治る様子はない。一いちらも手遅れなのだろうか。

「ライブ！ ライブ！..」

何度もやつても、治らない。そのつ・・・

「ライブ・・・つー？」

パリーン・・・

ライブの杖の先端の宝玉が、音を立てて砕け散ってしまった。杖の耐久度の限度に至り、壊れてしまったようだ。もう、この杖は使えない。

「・・・おにい・・・ちゃん・・・」

こみ上げる絶望感。ミストはそれでも、あきらめなかつた。両手を組み、祈る。

「死なないで、お兄ちゃん……女神様、じつかお兄ちゃんを救つて……！」

その時。

ピカアア――――――

「・・・?」

アイクの体が、緑色に輝いたのだ。光はまるで柱のじとく、天の果てまで伸びている。

「え・・・これはいつたい・・・!？」

光はあるみる強まり、まばゆいほどに輝き、そして・・・

光が収まつたのと同時に、アイクはゆっくりと立ち上がつたのだ。

「お・・・お兄ちゃん、どうして・・・?」

ミストは、目の前で何が起こったのか分からなかつた。だが、アイクはしつかりと生きていた。傷だらけではあるが、立ち上がつていた。

困惑する妹に、彼は話しかける。

「……どうやら、あの時に読んだ本が俺を助けてくれたみたいだ。心配せてしまない」

「え……ほ、本つて？ どうしてそれで……」

「ミスト、話はあとだ。船に戻つて出航するぞー！」

「ちよ、ちよっと待つてよー！」

アイクが言うことがまるで理解ができていないミスト。でも、それでもうれしかつた。自分が慕つてゐる兄が、こうして生きていることが。

だが、いざ駆け出さうとしていた2人の前に、漆黒の騎士が立ちふさがる。

「なるほど、『祈り』のスキルか。女神の慈悲で、致命傷を負つても運が良ければ命が救われるというスキル……だが」

漆黒の騎士は、ふたたびエタルドを引き抜く。

「幸運は、一度も続くようなことはない。次こそ、安らかに逝くがいい」

「へやつ・・・セイをビケーー！」

アイクはミストを背中にかばい、鋼の剣を引き抜く。

「お兄ちやんつー。」

「ミスト、絶対にこの手を離すな！ 何とか切り抜けてみせるー。」

ミストの右手を左手でつなぎ、右手には鋼の剣を携え、駆け出す。そんな彼らに向けて、漆黒の騎士はエタルドを振りかねす。

「逃げるつもりか？ 先ほどならば見逃したのだが・・・戦いたいと言つたのはお前だろ？ 受けた勝負は最後までやるべきだ」

振りかざしたエタルドを振り下ろそうとした・・・その刹那だった。

ドカッ！！

「？」

何かが鎧にぶつかったのを感じた漆黒の騎士は、後ろを振り返る。

そこに立っていたのは、水色の毛並みの猫。

「ライー！」

「ライさんー。」

ほぼ同時に、兄妹は声を発する。それに応えるよつし、ライは化身を解いた。

「よつし、アイクとミスト！ オレを追いかけてた『テイン』の連中なら、適当にあしらっておいたぜ。こいつもオレが何とかしようとから、お前たちにはさつあと船に行つてろつて！」

「ライ……すまないな。じゃあ、頼んだぞ……死ぬなよ」

「また、ライさん！ 絶対……また会いましょうね！」

アイクとミストは、やつて船の方へ駆け出す。

そんな彼らの後を、漆黒の騎士は追おつとする。だが、そんな彼をライの声が引き留めた。

「おい待て！ アイクたちには、手出しませせない」

「……ガリアの戦士か。なぜ、彼らをかばう？」

振り返らないままに、漆黒の騎士は問う。

「あいつらは、オレの大変なダチだ」

「ほつ？ 半獣とけなされているラグズのお前が……」

「……オレの勝手だ。ともかく、出航の邪魔はさせないぜ」

2人が睨み合つているうちに、港からは船が出航した。グレイル傭兵団を乗せた船は、大海原へと繰り出していった。

そんな船の様子を横目で見てから、漆黒の騎士は再び口を開く。

「ガリアの獣戦士・・・貴公には一度、会つてゐるな。確か、樹海の古城だつたと記憶している」

すると、ライもそれに応えた。

「オレの側からでは、二度だな」

「まつ?」

「月の晩にも見た。お前は、あの時・・・グレイル殿を手にかけた」

漆黒の騎士はそれを聞いて、思い出したように言つ。

「フッ、師子王の傍らにいたのは貴公だつたのか。おもしろい。側近の力を測ればおのずと王の実力も知れよう」

そして、エタルドをライに向ける。ライはそれに対し真剣な表情で、首を横に振つた。

「あいにくだが・・・我が王は、オレ」ときで測れるような小さい器じゃない

「やう願いたいといふだ。では、参る」

「・・・

ライも化身し、戦闘態勢を整える。

「ど」からでもかかつてくるがよい

「・・・やうせてもらつ！」

ライは尻尾を逆立て、小さな唸り声をあげてから、漆黒の騎士に飛び掛かった。鎧に取り付き、猛スピードで爪で切り裂こうとする。獸牙族の爪や牙は、ベオクのまとう鎧すらも切り裂くほどに発達している。重厚な鎧だろうと、攻撃は通じているはずだった。

・・・だが、攻撃が通じた様子はない。

(つ・・・どうして・・・)

ライは離れた位置に着地し、再び漆黒の騎士に向き合ひ。

「次はこちからいかせてもらつ

漆黒の騎士は鎧姿とは思えない速さで瞬時にライに接近すると、そのままエタルドの一閃でライを切り裂く。

「ぐはつ・・・

明らかに手を抜いたであろう一撃だったが後ろまで飛ばされ、ライの化身は解けてしまった。

「…………なぜだ……オレの攻撃が……きかない……？」

ふりつき膝をついてライに、漆黒の騎士は独り言をこいつ。

「かなり、やる。だが、私の敵ではないな」

その時、ライの頭上で光が現れる。光はライの体を包み、傷ついた体をいやす。

「！？」

驚いたライは、漆黒の騎士の背後から現れた長身の男に目を丸くする。

「お行きなさい。」には、私が……」

その人物に、ライは見覚えがあった。黒い長髪に法服、そして手にした錫杖。セフュランだった。

「……あなたは、確か捕虜収容所にいた……」

ライの疑問に、セフュランは軽くうなずき、騎士を見やる。

「……」の騎士は、私には手出しえませんから……

「……」

「さあ、早く……」

漆黒の騎士も、セフ・ランの血のことを認めているようだ。ライはその様子を見て安心する。

「……じゃ、遠慮なく！ 次に会つたら禮はするよ

そしてその場から逃げるなり、港町トーハを後にした。

ライが立ち去つてすぐに、一人のティン兵が漆黒の騎士の元にやってくる。

ソバカスを顔に浮かべた青年スナイパーであり、漆黒の騎士の配下の將軍である、ノシトヒだ。

「し、漆黒の騎士殿！ 船が出航しました！ いかにも船を仕立て、すぐに後を追えれば海上にて追いつきます！」

「・・・」

だが、漆黒の騎士は一言も話さない。代わりになぜか隣にいたセフ・ランが、ノシトヒに対して命じる。

「……ティンの将よ。こゝはお退きなぞ。彼らの後を追つことは、私が許しません」

それに対し、ノシトヒは当然逆上する。

「なつ・・・貴様、何者だ！？ 誰に口をきいていると・・・」

「兵を集めろ。・・・撤退する」

ノシトヒの反論を遮りてそのまま命じたのは、蒼黒の騎士。ノシトヒは混乱した様子で声を上げる。

「し、しかし……」

「・・・一度は言わん。すぐに実行するのだ」

「せり、せせめうつ……。」

漆黒の騎士の、言葉には言い表せない絶望のようなオーラに、ノシトヒは恐れた返事をして、すぐに作業に取り掛かりに行つた。

港町の入り口にて待機していたデインの竜騎士部隊のところにも、漆黒の騎士の命令が伝わってきた。

だが、手柄を立てたくて仕方がない新米竜騎士ジルは、隊長のハールを呼び起こしにかかる。

「ハール隊長！ 敵の船を追いましょう！ 半獣の仲間を逃がすわけにはいきません！」

しばらくして、飛竜の背中で寝ていたハールが起き上がるが・・・

「ふああ・・・よく寝たぜ。さて、戦いも終わったようだし、ハール隊、帰還するぞ」

「隊長！」

非難の声でジルが声を上げるが、ハールは部下を諭す。

「いいか、ジル。俺たちは明日には本国へ戻るんだ。」  
「んなとこりで怪我でもしたら、お前の親父殿は喜ばんぞ」

「父が待つているからこそ、私が手ぶらで帰るなんて……絶対、  
できないのです！ ですから……！」

懇願するジルに、ハールは静かに説得する。

「……そつ、熱くなるな。漆黒の騎士殿、直々の帰還命令を無視  
する気か？」

「そ、それは……」

ジルが反論に詰めたのを確認して、黒い飛竜にまたがる。

「ああ、分かつたら行くぞ」

ハールと、続いて他の竜騎士たちが飛び立つていくを見て、仕方  
なくジルも続く。

「……」

だが彼女の心の中では、ハールの言つことが納得できていなかつた。

(どうにか……手柄を立てて父上を喜ばせたい……！)

ワコが死んだことは、さつきキルロイに伝えられた。

「そうか……助からなかつた、か……」

「じめん、アイク……手は死んでしたんだけど……ワコさんせ・・・」

「・

「キルロイたちのせいじゃない。俺の責任だ。誰も犠牲者は出さないって、決めたのに・・・」

ワコの遺体は、木でできた手作りの棺桶に収められてあつた。血が拭き取られ、傷も目立たないようになにかが施されてある。安らかな表情で組んだ手には、ワコの使っていた剣が握られている。

「ワコ・・・」

眠っているようにしか見えない。死んだとは信じられない。実感がわからない。

「ワコさん・・・」の団に入つてよかつたつて・・・そつと云つてた。アイクに出合えて、本当に良かつたつて・・・

「 セ、カ・・・」

ワコもグレイルと同じく、漆黒の騎士の手によって命を落としたのだ。

「 ワコさん・・・もう、あの人の笑顔は見られない。そう思うと、す」  
「

涙を流すキルロイに、アイクは声がかけられなかつた。

その後、ワコの葬儀を行なつた。葬儀と言つても、たいそつなことはできなかつたが・・・。

「 ・・・」

棺の中に花と、団員全員の手紙を入れる。ふたを閉めたとき、団員たちからはすり泣く声が漏れた。

ゆつくりと、甲板からせり出される棺。ある限度を超えたとき、棺は重力に従いつつ海へと落ちた。

静かに沈んでいく。ワコには、もう会えない。

「 さよなら、ワコ・・・」

誰かが、やつづぶやいた・・・。

アイクは、船尾に立っていた。どんどん遠ざかっていく港町トハ。  
そして陸地。

もう、この旅は引き返せないとここまで来ていた。

(・・・だつたら・・・進むしかない。そして・・・)

港町での、屈辱的な敗北。そして、逃走。

(・・・俺は・・・強くなる。今度会つときは・・・負けない。お  
前を倒す!)

決意を新たにするアイク。

もう、陸地は水平線の彼方へ消えつつあった。

## 悲しみの船出（後書き）

悲しみを乗り越える決意。

デイン軍の猛攻を振り切ったグレイル傭兵团は、大海原へと進みだす。

彼らは、何を見るのだろう。

そして、多くの悲しみを超えた末に、彼らを待つ運命は・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8955q/>

ファイアーエムブレム ~テリウス動乱記~

2011年12月31日21時48分発行